

浦尻貝塚 1

序 文

温暖な気候と緑豊かな自然環境に恵まれた小高町は、建武3（1336）年に相馬光胤らが小高城（現相馬小高神社）を築いて以来、封建制度の終了する明治時代に至るまでの長い間、奥州相馬氏の支配を受け、周辺地域の政治・経済・文化の中心として栄えた町であります。このことから、町内には奥州相馬氏との関わりが深い文化財が数多くあり、特に「相馬野馬追『野馬懸』」は国指定の重要無形民俗文化財に指定されております。また、国指定史跡「薬師堂石仏」をはじめ、県、町指定の文化財は、現在48件を数え、歴史の深さを実感させる町でもあります。

浦尻貝塚は、平成12年に町道工事計画に伴い試掘調査を行ったところ、良好な貝塚を確認し、遺跡としての重要性が裏付けられ、遺跡の将来にわたる保存を図る必要があることから、文化庁、福島県の協力を得て、浦尻貝塚の取扱いについて協議をするともに、浦尻貝塚調査指導委員会を設置し、範囲内容を確認する調査を開始したものであります。

調査は、平成13年度から4か年の国庫補助事業として行われ、ここに報告書を刊行することとなったものであります。

これまでの調査結果により、浦尻貝塚の遺跡範囲が明らかになるとともに、縄文時代の前期後半から晩期までの集落と貝塚が確認され、長期間にわたる縄文人の生活の場であったことが明らかになったものであります。

これまで11回にわたり開催して参りました浦尻貝塚調査指導委員会では、調査により確認された浦尻貝塚の縄文時代の遺跡としての重要性、さらに、極めて良好な遺跡の保存状態は、全国的に見ても大変貴重な遺跡であるとの御意見をいただいたところであります。

今後は、浦尻貝塚の国史跡指定に向けた手続きを進めるとともに、積極的に遺跡の保護に努めて参る考えであります。

本報告書が文化財保護の推進と地域における歴史解明のための一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施と本報告書の作成にあたり多大なる御指導、御協力をいただきました浦尻貝塚調査指導委員会の先生方、文化庁記念物課、福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ等の関係機関の皆様、さらには、調査にあたり御理解、御協力をいただきました地権者各位並びに浦尻行政区の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

福島県相馬郡小高町教育委員会

教育長 荒 川 登



目 次

序 文	
目 次	
例 言	
凡 例	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	4
第2章 遺跡及び調査の概要	8
第1節 調査歴	8
第2節 遺跡の概要	9
第3節 遺跡名について	9
第4節 調査に至る経緯	9
第5節 調査地区について	10
第6節 調査の経過	10
第7節 浦尻貝塚調査指導委員会	15
第8節 日 誌	17
第3章 調査内容(縄文時代)	23
第1節 基本土層	23
第2節 調査方法	25
第3節 南台・西向・台ノ前地区の概要	29
第4節 南台地区の調査	30
第5節 台ノ前地区の調査	125
第6節 西向地区の調査	160
第7節 小迫北・南地区の調査	176
第8節 出土遺物	247
第4章 浦尻貝塚における動物遺体群の概要	259
第5章 縄文時代の調査成果について	275
第1節 南台・台ノ前・西向地区の調査について	275
第2節 小迫北・南地区、南台地区台地南部の調査について	298
第3節 ま と め	307
第6章 浦尻貝塚の歴史的意義	309
第1節 浦尻貝塚と福島県内の貝塚	309
第2節 浦尻貝塚の調査の成果	312
第3節 浦尻貝塚と周辺遺跡との関連	317
引用・参考文献	320
附 編 浦尻貝塚出土資料自然科学分析	322

例 言

1. 本書は福島県相馬郡小高町大字浦尻字南台他に所在する浦尻貝塚の発掘調査報告書である。
2. 報告する調査は、平成12年度町道建設計画に伴う試掘調査及び平成13～16年度にかけて実施した保存目的範囲確認調査である。いずれの調査も国庫補助対象事業として小高町教育委員会が主体となって実施した。
3. 平成13年度からの保存目的範囲確認調査を実施するにあたり、学識経験者からなる浦尻貝塚調査指導委員会（以下、「調査指導委員会」という。）を組織し、調査の指導をお願いした。調査指導委員会には下記の方々を引き受けていただき、4年間にわたるご尽力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略）

委員長：藤沼邦彦（弘前大学）

副委員長：玉川一郎（福島県文化振興事業団）

委員：山田昌久（東京都立大学）

委員：樋泉岳二（早稲田大学）

指導機関：文化庁記念物課、福島県教育庁生涯学習・文化スポーツ領域文化財グループ

4. 発掘調査ならびに整理調査は、調査指導委員会、文化庁ならびに福島県教育庁文化財グループの指導のもと、小高町教育委員会が実施した。調査参加者は次のとおりである。

担当職員：川田強（平成12～16年度）

調査員：佐川久（平成13～16年度）

調査補助員

平成12年度：馬場祐子、武沢洋子

平成13～16年度：松本経子、渡部定子

平成15・16年度：牛渡由起子、松崎孝子

事務局：小高町教育委員会事務局教育総務課

作業員：小高町シルバー人材センター委託（佐々木真太郎、発田清、田中忠男他）

5. 遺構の現地測量、人工遺物の実測、遺構・遺物の図版作成、写真撮影は各調査参加者が行った。また、写真1の航空写真は東北電力物産江・小高原子力準備本部に提供いただいた。
6. 動物遺存体の分析については、樋泉岳二氏（早稲田大学）、植月学氏（山梨県教育委員会）に指導をいただき、調査参加者が基礎的な分類を行なった後、両氏に全資料を同定していただいた。
7. 附編として掲載した自然科学分析については、次の機関に委託し実施した。
種実同定・年代測定：バリノ・サーヴェイ株式会社

8. 本書の編集は川田強・佐川久が担当した。執筆の分担は下記のとおりである。

川田強：第1章、第2章第1節～第7節、第3章第1～6節・第8節、第5章第1節・第3節

佐川久：第2章第8節、第3章第7節、第5章第2節

樋泉岳二・植月学：第4章

玉川一郎：第6章

バリノ・サーヴェイ株式会社：附編

9. 本報告は、上記調査のうち、縄文時代の遺構、遺物についてまとめたものである。弥生時代以降の遺構、遺物も確認しているが、本報告での掲載は見送る形にしている。また、調査資料が、極めて多量にのぼったため、整理調査の状況にあわせ、概略を把握できるもののみ掲載し、出土遺物は一部のみ掲載している。これら未掲載の資料については、今後、整理調査を実施し、改めて報告する予定である。

10. 調査および報告書作成にあたり、下記の方々に多大なご協力いただいた。記して感謝の意を示したい。(敬称略、五十音順)

青山博樹、阿部健太郎、新井達哉、新井陽子、荒瀬人、猪狩みち子、石川功、石川日出志、石田典子、磯村幸男、市川金丸、植木真吾、宇佐美雅夫、大塚初重、大平好一、大平理恵、岡田康博、岡村道雄、小川勝和、小川卓也、小川長専、奥山誠義、忍澤成視、香川慎一、梶原圭介、梶原文子、加藤真二、菊池芳朗、木島勉、黒住耐二、小林三郎、小林雄一、今野徹、齋藤直之、坂口隆、佐藤悦男、佐藤耕三、佐藤啓、坂井秀弥、嶋村一志、穴戸弘治、新海和広、菅原弘樹、鈴鹿良一、鈴木啓、関口満、相馬胤道、高木和夫、高橋満、丹野隆明、富田孝彦、中島広顕、長島雄一、西徹雄、西本豊弘、丹羽茂、欄宜田佳男、長谷川真、藤木海、古谷渉、保坂太一、堀耕平、堀江格、松嶋直美、松田哲、松本茂、村田六郎太、村本周三、森幸彦、山崎京美、山崎充浩、山本出、山谷文人、横田正美、吉田秀亨、吉田陽一

11. 調査にあたっては、下記の地権者ならびに浦尻行政区に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を示したい。(敬称略、五十音順)

阿部典明、阿部義明、安部克己、安部完治、安部信一、安部千正、梅村俊男、大原富男、小野田諭、小野田聖一、小野田武久、小野田弘明、小野田義昭、叶茂、叶ハル子、亀田直記、菅野好彦、相浦光一、相浦吉治、佐々木廣志、佐藤巧記、佐藤孝治、佐藤静枝、佐藤智昭、佐藤秀雄、佐藤芳言、佐藤芳秀、佐藤ヤス子、志賀丈彦、志賀常雄、志賀義雄、清野利行、竹野平、船柳定光、松平毅、松平儀良、松原功典、松原松衛、横山邦彦、三浦運芳

凡 例

1. 本書で掲載した挿図の縮尺は各挿図に記した。
2. 遺構等の平面図のトーン等による表現は各図にその内容を記した。
3. 遺物実測図の表現は次のとおりである。
断面▲：繊維土器
□：赤彩
4. 掲載した出土遺物は、実測しているものと写真で掲載したものがある。
5. 掲載した動物遺体の写真の縮尺は各挿図に記してある。その他の遺物の写真の縮尺は不同である。
6. 本文中に表記した縄文時代各時期に概ね相当する土器型式は下記のとおりである。

前期初頭	花積下層式
前期前葉	大木1式(宮田Ⅲ群)
前期中葉	大木2a・2b式
前期後葉	大木3・4式
前期末葉	大木5・6式
中期初頭	大木7a式
中期前葉	大木7a・7b式
期中葉	大木8a・8b式
中期後葉	大木9・10式
中期末葉	大木10式
後期前葉	綱取式
後期中葉	加曾利B式
後期後葉(末葉)	新地式
晩期初頭	大洞B式
晩期前葉	大洞B・BC式
晩期中葉	大洞C1・C2式
晩期後葉	大洞A式
晩期末葉	大洞A'式

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

浦尻貝塚が所在する相馬郡小高町は福島県浜通り地方のほぼ中央にあたる。浦尻貝塚は、この小高町の南端、浪江町に隣接した大字浦尻に位置する。小高町、浪江町周辺の地形は双葉断層を境にして大別でき、西に標高500m以上の阿武隈山地、東に相双丘陵及び段丘が樹枝状に存在する。東側は、小高川・宮田川・請戸川等小河川により形成された沖積地、海成・河成段丘、それを取り巻く丘陵地と大きく区分できる。

地質は、双葉断層より西側に基盤の花崗岩が、東側に第三紀以降の堆積層が分布している。東側の丘陵地は第三紀に堆積した泥岩砂岩層である。この周囲に第四紀以降に形成された段丘があり、高位・中位・低位に分別された6つの段丘面が認められる。これらの段丘堆積層は砂・レキ・砂レキ・シルト層であり、高位・中位段丘では上部に風化火山灰層（ローム層）をのせている。このうち中位段丘は、平坦面が広いことなどから、旧石器時代以降の遺跡が多く確認されている。

この中位段丘は、特に小高川・請戸川兩岸に発達しているが、浦尻貝塚が位置する宮田川流域では、多く認められず、浦尻貝塚周辺に限られている。浦尻貝塚及び北原貝塚遺跡群は、このうちの東縁にあたる海成の中位第1段丘上とされている。

段丘周囲には沖積層が堆積しており、請戸川兩岸では自然堤防が形成されている。宮田川河口は、かつては井田川浦という東西約1.8km、南北約1kmという大きな潟湖があり、大正末期～昭和初期にかけて干拓されている。潟湖を形成した浜堤は、浦尻貝塚の東側にある北原貝塚遺跡群東側の堤状の段丘から北に約1.7kmに渡って存在する。北に位置する小高川河口でも、同様に浜堤が形成され、規模は小さいものの前川浦という潟湖が現在も残っている。

浦尻貝塚は、現海岸線から約700m離れている。明治時代まであった井田川浦の汀線は、遺跡の北側崖下にあたる。遺跡がある段丘平坦面は標高25～28m、幅は70～100mを測る。遺跡は、南から北、西から東へ延びる舌状段丘を中心として存在している。

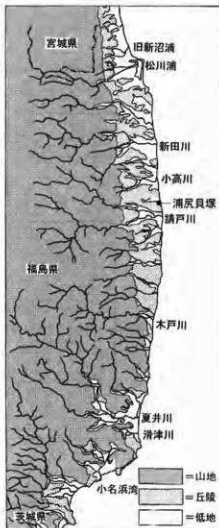
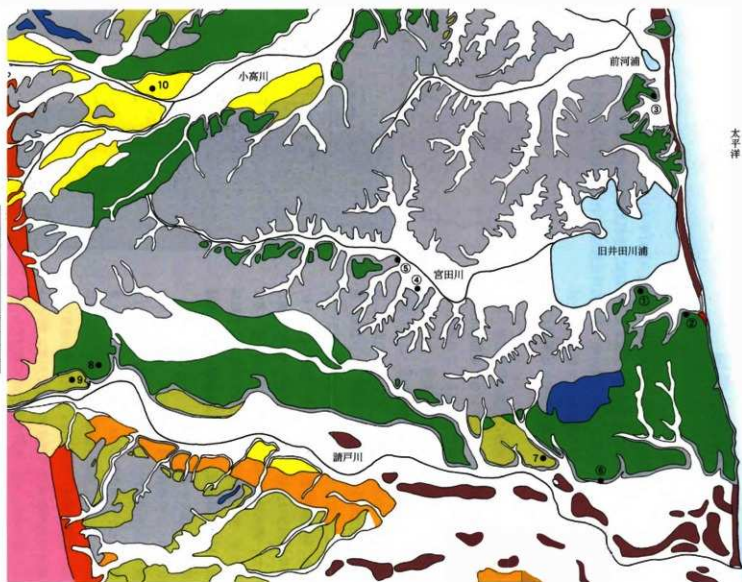


図1 浦尻貝塚の位置（100万分の1）



谷底平野	完新世
浜地・自然堤防	(沖積層)
扇状地	
低位第Ⅱ段丘	後期更新世
低位第Ⅰ段丘	
中位第Ⅱ段丘	
中位第Ⅰ段丘	
塚原層	
高位第Ⅰ・Ⅱ段丘	中期更新世
大年寺層	後期鮮新世
溝長谷層群	前期中新世
花崗閃緑岩	中生代

主な周辺の縄文遺跡

- ① 浦尻貝塚
 - ② 北原貝塚遺跡群
 - ③ 角部内南台遺跡
 - ④ 加賀後遺跡
 - ⑤ 宮田貝塚
 - ⑥ 植畑貝塚
 - ⑦ 百間沢遺跡
 - ⑧ 願礼堂遺跡
 - ⑨ 七社宮遺跡
 - ⑩ 大田和広畑遺跡
- ※○数字は貝塚あり。

図2 周辺の地質図 (S = 1/50,000)



写真1 浦尻貝塚を南方から望む。

第2節 歴史的環境

浦尻貝塚は、縄文時代の貝塚・集落跡のほか、古墳時代後期の古墳群、平安時代の集落跡、中世前跡の推定地でもある複合遺跡である。本報告では、このうち縄文時代についてまとめているので、ここでは、周辺の縄文時代の遺跡を確認しておきたい。

縄文時代の遺跡は、小高川、宮田川、請戸川によって形成された沖積地を見下ろす段丘上に多く確認されている。周辺の縄文遺跡の特徴として、浜通り地方の北側にあたる相双地域の中では、特に貝塚が集中して確認されていることが挙げられる。

まず前期前半になると宮田川流域で、宮田Ⅲ群期に宮田貝塚(33)(竹島1975a)、隣接して加賀後貝塚(34)(川田・山崎2001)、海岸部に北原貝塚遺跡群(37)(川田・植月・樋泉2004)においてイボキサゴを中心とした貝層が形成される。宮田貝塚、加賀後貝塚は現海岸線より内陸約4kmの位置にあり、縄文海進に伴い形成されたものと考えられる。北原貝塚遺跡群は、この内陸の貝塚に比べ、貝層規模が大きい。また、北原貝塚遺跡群の貝層は、魚種の多様さに加え、極めて高い魚骨包含率を示し、積極的な内湾漁労が明らかにされている(植月・樋泉2004)。

同様に、詳細は不明だが、小高川流域では大木2a期の片草貝塚(6)があり(竹島1975b)、請戸川流域でも植畑貝塚(81)が前期前半に相当するものとされている(吉野1991)。このように宮田川流域を中心として、前期前半の貝塚が多く認められることが、このフィールドの大きな特徴である。

次の前期後半以降になると、これらの前期貝塚は取束し、前期末以降に本報告の浦尻貝塚(36)、中期中葉に角部内南台貝塚(30)で貝塚の形成が認められる(玉川・吉田1988)。角部内南台貝塚は、中期中葉以降に形成された可能性がある。浦尻貝塚では、断続的ながら晩期中葉まで貝塚の形成が認められており、前期段階に比較し、海岸部のみ貝塚の形成が認められることが指摘されよう。

また、浦尻貝塚に隣接した海崖上の磯坂遺跡では、貝塚は確認していないものの、晩期末の製塩土器が出土する遺物包含層が確認されている(玉川1986、玉川・吉田1987)。

このように浦尻貝塚周辺では、1km四方の範囲で北原貝塚遺跡群、浦尻貝塚、磯坂遺跡と、通時的に縄文遺跡が確認され、各時期にわたる貝塚があることが特筆できる。

小谷津貝塚(29)(竹島1975b、橋本1991)、大平山貝塚(90)(吉野1991)の貝塚については、小規模なものと考えられ、時期等詳細は不明である。

相双地区の貝塚は、この他に北方に新地町新地貝塚(山内1923ほか)、三貫地貝塚(福島県立博物館1988ほか)の後晩期貝塚、南に前期貝塚の双葉町郡山貝塚(大竹ほか1990)が認められる程度であり、いわき地方に比較し、貝塚の確認数は極めて少ない。

貝塚以外の縄文遺跡については、調査数も少なく、不明な点も多いが、表面調査の成果もあわせてみると、主に早期末からの遺跡数の増加が認められる。

早期末には、山間部に萩原遺跡(1)があり、合計22軒の竪穴住居が確認されている(玉川1993、藤谷1995)。また萩原遺跡に隣接し、原町市南端にあたる図3(42)～(52)のやや北方にある八重米坂A遺跡では、早期末～前期の竪穴住居が重複して多数確認されている(吉田1990)。

中期以後では、中期後半に確認数が増え、大富西畑遺跡(16)(吉田1991)、順礼堂遺跡(53)(木元・根本1977)、中平遺跡(65)(山内ほか1989)、百間沢遺跡(80)で竪穴住居が確認されており、後期前半まで継続して営まれることが多い。

他に、中平遺跡(65)では、後期中葉の竪穴住居の確認されている。七社宮遺跡(54)(大竹1998)では、後期後半～晩期末の埋設土器群及び祭祀遺構が確認されており注目される。

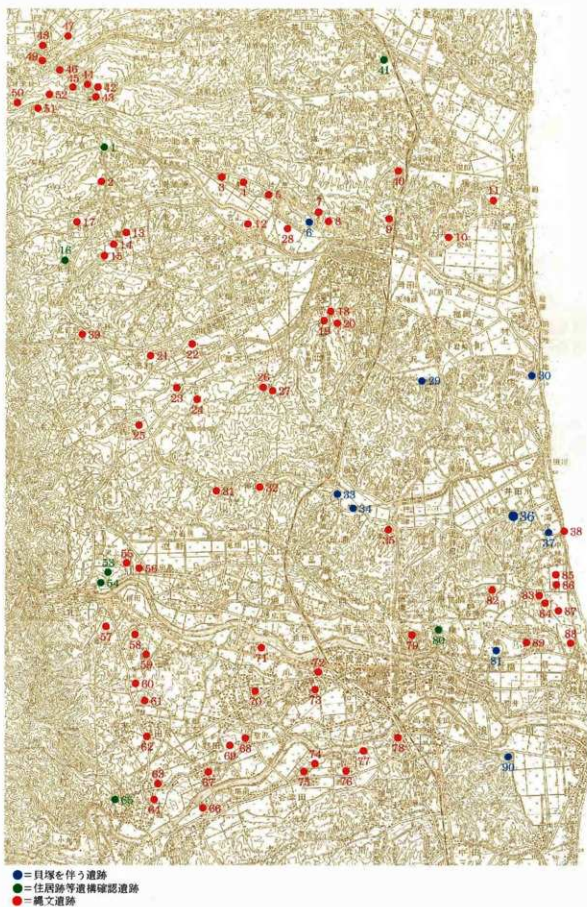


図3 周辺の遺跡① (S = 1/50,000)

表1 周辺の遺跡(縄文)一覽

No.	遺跡名	所在村名	所在地	時期	遺物の有無	貝塚の有無
1	長原遺跡	小高町	新倉字長原・南沢・川久保	早期～前期	早期末の竈穴住居	
2	大穴遺跡	小高町	新倉字大穴・田分	早期～前期		
3	北鳩原花輪遺跡	小高町	北鳩原字花輪	早期中葉・前期		
4	関下遺跡	小高町	北鳩原字関下			
5	草津原遺跡	小高町	片草字南原・一里遺			
6	片草貝塚	小高町	片草金台遺	前期		前期前半
7	上原遺跡	小高町	小高字上原・上法畑			
8	草花畑遺跡	小高町	小高字草花畑	早期～		
9	藤山遺跡	小高町	大井字岩道			
10	大井花輪遺跡	小高町	大井字花輪・車平・松崎			
11	藤原原遺跡	小高町	藤原字藤原			
12	元塚敷遺跡	小高町	小高字元塚敷	後期		
13	大塚B遺跡	小高町	大塚字大塚	早期		
14	大塚C遺跡	小高町	大塚字大塚	早期末		
15	大塚A遺跡	小高町	大塚字大塚	早期末		
16	大宮西遺跡	小高町	大宮字西原・車塚・犬塚	早期末～後期初	中間後半～末の竈穴住居	
17	板木沢遺跡	小高町	大宮字板木沢	早期末～後期初		
18	玉ノ木平A遺跡	小高町	宮名字玉ノ木平	早期		
19	玉ノ木平B遺跡	小高町	宮名字玉ノ木平			
20	玉ノ木平C遺跡	小高町	宮名字玉ノ木平	早期		
21	大田和広遺跡	小高町	大田和字広畑	早期末～後期初		
22	飯崎南原遺跡	小高町	飯崎字南原	早期末～中期		
23	一ノ沢遺跡	小高町	大字小塚字一ノ沢	前期～中期		
24	藤原沢遺跡	小高町	上根沢字藤原沢	早期末～後期初		
25	四ノツ葉遺跡	小高町	川原字四ノ葉	前期		
26	森沢C遺跡	小高町	大字上根沢字森沢			
27	仏供田遺跡	小高町	上根沢字仏供田			
28	草神前遺跡	小高町	片草字草神前			
29	小高貝塚	小高町	藤原字小高	前期		時期不明(弥生?)
30	寺殿北谷遺跡	小高町	寺殿北谷字寺殿	前期～中期		中期中葉?
31	藤右衛門敷遺跡	小高町	相山字藤右衛門敷	早期末		
32	長原遺跡	小高町	神山字長原	前期		
33	宮田遺跡(貝塚)	小高町	上浦字宮田	前期～後期		前期後半
34	加賀後遺跡(貝塚)	小高町	上浦字加賀		前期前半	
35	鹿島遺跡	小高町	上浦字鹿島			
36	藤原C遺跡	小高町	藤原字藤原	早期～中期	前期末～中期前半の竈穴住居、特殊の柱穴	前期末～中期中葉
37	北原貝塚遺跡群	小高町	藤原字北原	早期～前期	前期前半遺跡	前期前半
38	磯坂遺跡	小高町	湖原字磯坂	中期末～晚期		晚期後半の遺物(弥生)
39	北野野遺跡	小高町	兼得字北野			
40	堤田遺跡	原町市	小木遺字堤田			
41	大久保遺跡	原町市	新倉字大久保			
42	藤原C遺跡	原町市	片倉字藤原	中期中葉住居跡		
43	藤原B遺跡	原町市	片倉字藤原			
44	藤原A遺跡	原町市	片倉字藤原			
45	藤原D遺跡	原町市	片倉字時盛	早期末	土坑有。	
46	目下遺跡	原町市	片倉字目下			
47	原E遺跡	原町市	風船字原			
48	原遺跡	原町市	風船字原			
49	石井遺跡	原町市	馬場字石井			
50	青井遺跡	原町市	上北高平字青井谷地・貝塚			
51	中水戸遺跡	小高町	前倉字中水戸			
52	観音寺遺跡	原町市	片倉字観音	前期		
53	東乳岩遺跡	浪江町	大字立野字乳岩	中期	中間竈穴住居	
54	七杉宮遺跡	浪江町	大字家原字七杉宮	後～晚期	晚期埋没土器・祭祀遺構等	
55	駒場遺跡	浪江町	大字立野字駒場			
56	武重(武重戸)遺跡	浪江町	大字立野字武重			
57	宮ノ上遺跡	浪江町	大字家原字宮ノ上			
58	田子平遺跡	浪江町	大字家原字田子平			
59	林道B遺跡	浪江町	大字家原字林道			
60	林道A遺跡	浪江町	大字家原字林道・字柳田			
61	八合田遺跡	浪江町	大字家原字八合田・柳田			
62	東原朝遺跡	浪江町	大字末高字高前田住分			
63	清水遺跡	浪江町	大字小野田字清水			
64	藤原遺跡	浪江町	大字太田字藤原			
65	中平遺跡	浪江町	大字太田字中平	早期～後期	早期末・中期末・後期前半の竈穴住居	
66	反畑遺跡	浪江町	大字井平字反畑			
67	仲神寺遺跡	浪江町	大字小野田字小野田・仲神寺			
68	北相田遺跡	浪江町	大字小野田字北相田・下原			
69	下原遺跡	浪江町	大字小野田字下原			
70	上ノ原遺跡	浪江町	大字北上ノ原			
71	下加倉遺跡	浪江町	大字加倉字下加倉			
72	新田遺跡	浪江町	大字川添字新田			
73	南大塚遺跡	浪江町	大字川添字南大塚			
74	東院寺遺跡	浪江町	大字藤井字東院			
75	宮ノ林遺跡	浪江町	大字立野字宮ノ林			
76	塚ノ前遺跡	浪江町	大字藤井字塚ノ前			
77	三反畑遺跡	浪江町	大字藤井字三反畑			
78	小山道遺跡	浪江町	大字藤井字小山道			
79	本原敷遺跡	浪江町	大字藤井字本原敷			
80	百間沢遺跡	浪江町	大字藤井字百間沢			
81	城廻遺跡(貝塚)	浪江町	大字北郷遺字城廻	前期	中間後半～末の竈穴住居?	前期前半
82	金ヶ森遺跡	浪江町	大字北郷遺字金ヶ森			
83	赤坂遺跡	浪江町	大字藤井字赤坂			
84	赤坂C遺跡	浪江町	大字藤井字赤坂			
85	赤坂A遺跡	浪江町	大字藤井字赤坂			
86	大塚遺跡	浪江町	大字藤井字大塚			
87	城廻遺跡	浪江町	大字藤井字城廻			
88	張子遺跡	浪江町	大字藤井字張子遺			
89	藤原敷遺跡	浪江町	大字藤井字藤原敷			
90	大平山遺跡(貝塚)	浪江町	大字藤井字大平山内	前期・中期		前期前半・中期

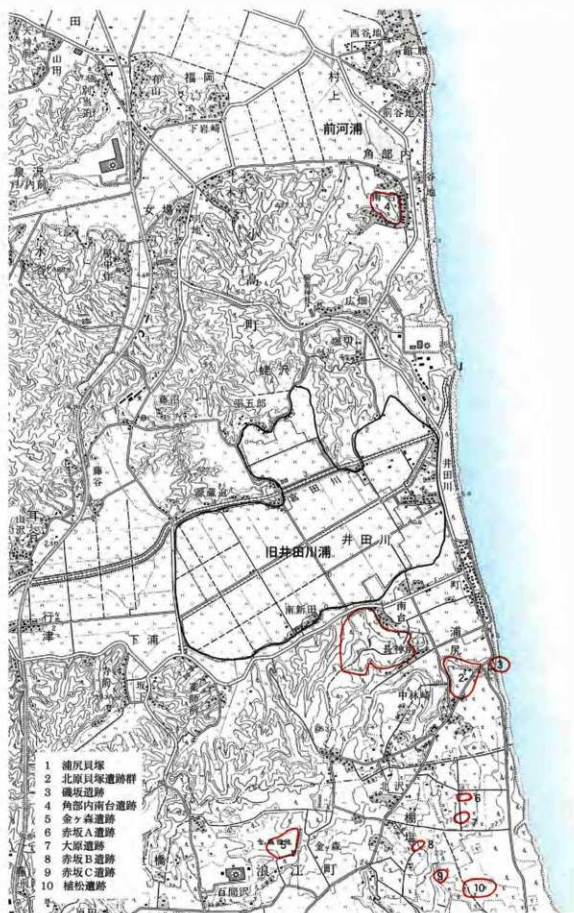


図4 周辺の遺跡② (S=1/25,000)

第2章 遺跡及び調査の概要

第1節 調査歴

浦尻貝塚の発見は古く、1901（明治34）年に大野延太郎が東京人類学雑誌に「浦尻台前貝塚」「浦尻西向貝塚」を新たに発見したことを報告している（大野1901）。調査としては、1951（昭和25）年の福島県学生考古学会によるものが初めてのものであるが、詳細は不明である。

1965（昭和40）年、農道工事の際、浦尻古墳群1号墳の主体部を破壊し剝抜石棺が露出した。出土した石棺は移転保存され、1966年（昭和41）年には小高町指定有形文化財に指定されている。

1970（昭和45）年には、福島大学学生考古学会の学術調査が行われ、複式炉を伴う竪穴住居を確認するなど多大な成果を挙げている（福島大学考古学研究会1971）。また、貝塚の範囲確認及び地形測量を併せて行い、浦尻貝塚の概要をはじめ確認したことも重要であった。この報告で、これまで東側斜面にあたる「浦尻台ノ前貝塚（台ノ前貝塚）」、西側斜面にあたる「浦尻西向貝塚（西向貝塚）」とそれぞれ別に呼称してきた貝塚を「浦尻貝塚」と総合して呼称した。

小高町教育委員会では、この調査結果が契機となり、小高町で確認していた貝塚12箇所全てを1971（昭和46）年、小高町指定史跡に指定し、保存を図ることとなった（注1）。浦尻貝塚に相当する部分としては、「浦尻の台ノ前貝塚」「浦尻の西向貝塚」として貝層部分のみそれぞれ別に指定されている。

1981年（昭和56）年には、「台ノ前貝塚」・「西向貝塚」と谷を隔てた北向き緩斜面において、玉川一郎により、貝層が露出していることが発見され、新たに「小迫貝塚」と命名された（玉川1986）。

1989～90（平成元～2）年、福島県教育委員会が実施した福島県内貝塚詳細分布調査では、それぞれ「浦尻台ノ前貝塚」・「浦尻西向貝塚」・「浦尻小迫貝塚」として報告されている（森1991）。

その他、別表に示すように数度にわたる表面調査が実施されたほか（石川1983・1984・1988等）、1997（平成9）年には、ほ場整備にともなう試掘調査が西側の台地下端において実施され、縄文時代の遺物包含層が確認されたことにより、盛土施工の保存処置が実施されている。

注1：町史跡の指定は、主に貝層部分に限られ、それぞれの貝層部分の呼称によって指定されている。よって、角部内南台貝塚で2箇所、北原貝塚遺跡群で3箇所、浦尻貝塚で2箇所、宮田貝塚で2箇所、加賀後貝塚、小谷津貝塚がそれぞれ1箇所の指定となっており、まとめると6遺跡の貝塚が指定されている。

表2 浦尻貝塚の調査歴

調査年	調査担当	地区等	内容	調査原因
1951	S25	目黒吉明 西向		学術調査
1965	S40	浦尻古墳群1号墳		農道工事
1970	S45	目黒吉明 西向・南台	発掘調査	学術調査
1971	S46	竹島国基 西向・台ノ前	表面調査	埋蔵文化財包蔵地調査
1981・82	S56・57	伊藤玄三 台ノ前	表面調査	現状調査
1981	S56	玉川一郎 小迫	表面調査	貝塚現状変更調査
1985	S60	玉川一郎 西向・台ノ前・小迫	表面調査	県内重要遺跡調査
1986	S61	玉川一郎 台ノ前・小迫		現状変更調査
1989・90	H1・2	森 幸彦 西向・台ノ前・小迫	表面調査	県内貝塚詳細分布調査
1997	H9	玉川一郎 西向	試掘調査	ほ場整備
2000	H12	川田 強 南台・台ノ前・小迫	試掘調査	町道工事
2001～04	H13～16	川田 強 南台・西向・台ノ前・小迫	発掘調査	保存目的範囲確認調査

第2節 遺跡の概要

浦尻貝塚はこれまでの調査により、段丘の東西斜面に「台ノ前貝塚」「西向貝塚」という斜面貝層とこれと谷を隔てた南側に「小迫貝塚」が存在することが明らかとなっていた。「台ノ前貝塚」「西向貝塚」については、中期初頭～末にかけたアサリ中心の貝層、「小迫貝塚」は晩期前葉～中葉にかけてヤマトシジミ中心の貝層と考えられていた。

また、「台ノ前貝塚」「西向貝塚」については、貝層の広がりも斜面全体に及ぶものと予測されており、規模も大きいものとされていたが、現在確認した貝層範囲は当初の規模に比べ縮小したものとなっている。

「台ノ前貝塚」「西向貝塚」に挟まれた段丘上には、1970年の福島大学学生考古学会の調査により、複式炉を伴う大木10式の竪穴住居が確認されており、住居跡等の遺構が分布するものと推定されていた。また、これらに伴い縄文早期から後期中葉までの土器が採集されており、存続期間も長いものと考えられていた。

「小迫貝塚」では、これに引き続き後期後葉から晩期中葉までの土器が採集されており、「台ノ前貝塚」「西向貝塚」に引き続き、集落が形成されるものと想定されていた。

縄文時代以外では、「台ノ前貝塚」「西向貝塚」に挟まれた段丘上に4基の古墳からなる浦尻古墳群が存在する。さらに、江戸時代末～明治時代初期に編さんされた『奥相志』の記述から中世遺跡の推定地でもある。その他、弥生土器や土師器片も採集されており、浦尻貝塚は長期間にわたる複合遺跡として理解されてきていた。

第3節 遺跡名について

平成13年度から保存目的の範囲確認調査を実施するにあたり、遺跡名を「浦尻貝塚」に統一した。前述したとおり、これまではそれぞれの貝層の呼称が遺跡名として多く用いられてきた。しかし、「台ノ前貝塚」「西向貝塚」は、段丘を取り巻く一連の遺跡であることは疑いようがなく、またこれらの各貝塚の名称は、両者に挟まれた段丘面上の遺構分布について適切ではない。「小迫貝塚」についても、遺跡範囲を区切る際、同時期の遺構が両者に広がり、また継続的に営まれる可能性があること、さらに地形上に明確に分割することができないことから一連の遺跡としてまとめた。

名称については、浦尻南台貝塚遺跡群とも呼称されたこともあるが、福島大学学生考古学会調査の学史上の重要性も考慮して決定した。これまで用いられてきた「台ノ前貝塚」等の呼称は、今回確認した貝層の名称として用いることとする。

第4節 調査に至る経緯

平成12年、浦尻貝塚内にある町道の拡幅工事計画が立ち上がり、この計画に伴う事前協議資料を得るため、小高町教育委員会が試掘調査を実施した。調査の結果、町道工事計画の一部において、縄文及び平安時代の遺構が存在すること、そして縄文中期の貝塚が良好な状態で保存されていることが確認された。

小高町教育委員会では、町担当部局及び県教育庁文化課と事前協議を行い、遺跡が存在する範囲については、計画を中止し、遺跡の保存を図ることとなった。

また、試掘調査の成果から、予想以上に貝塚が良好な状態で保存されていること、これに伴う遺構についても大部分が破壊を免れていると考えられることなどから、当地域における浦尻貝塚の重要性

が指摘されるようになった。

平成12年12月には、岡村道雄文化庁主任文化財調査官（当時）が現地視察を行い、貝塚が良好な保存状態であることや地形等も良く保全されていることから、貴重な遺跡であり、今後の調査・保存に努めるべきとの指導があった。

小高町では、町道工事計画を中止して保存したことや多くの方面から遺跡の重要性の評価を受けたことから、浦尻貝塚を将来にわたり保存することを計画し、平成13年度から範囲確認調査を実施することとした。調査にあたっては、浦尻貝塚調査指導委員会を組織し、指導を得ることとした。

第5節 調査地区について

浦尻貝塚の調査地区は大きく4区分して調査を進めてきた。これら調査地区の名称についてはこれまでの貝塚の呼称及び現小字名を基に設定したが、各地点を説明するにあたり、地形等の条件が異なることから、改めて調査地区を設定し、大区分で5区分し、さらにそれを細分する形に整理した。大区分については、これまでの報告してきたものと大きく変更点はないが、より区別しやすいように道路等を境界にしている。また現在の小字名とは一致しないことを指摘しておく。

大区分した地区は主に南北に舌状に延びる段丘平坦面を主とする南台地区、その段丘東側斜面の台ノ前地区、西側斜面の西向地区、南側の東西に舌状にのびる段丘平坦面北側及び北斜面の小迫北地区、同じ段丘平坦面南側及び東から入る谷部の小迫南地区である。

細別については、地形及び確認された遺構の分布状況等を基に図5に示したように整理している。

また、確認した貝層については、これまでの貝塚の呼称を基とし、それぞれ台ノ前北貝層、台ノ前南貝層、西向貝層、小迫貝層としている。

第6節 調査の経過

(1) 平成12年度の調査

- ① 調査期間 平成12年8月31日～平成12年12月20日
- ② 調査面積 約1500㎡
- ③ 調査目的
 - ・町道拡幅工事予定地の遺構、貝層等分布状況の確認
- ④ 調査内容
 - ・町道拡幅予定地を中心にトレンチを50箇所設定した後、重機及び人力にて表土掘削し、調査を実施した。(1～50T)
 - ・検出した遺構のうち、その内容を把握するため、一部の遺構を掘り下げて調査を実施した。
 - ・貝塚及び遺物包含層についてもその内容を把握するために、一部を掘り下げて調査を行っている。それぞれコラムサンプルを設定して、資料を採取した。またその他のサンプルについても、悉皆ブロックサンプルとして全てを取り上げた。(31・38・39T)
 - ・貝層分布範囲を確認するため全体の表面調査を実施した。

(2) 平成13年度の調査

- ① 調査期間 平成13年6月19日～平成14年3月29日（発掘調査132日）
- ② 調査面積 約2000㎡
- ③ 調査目的

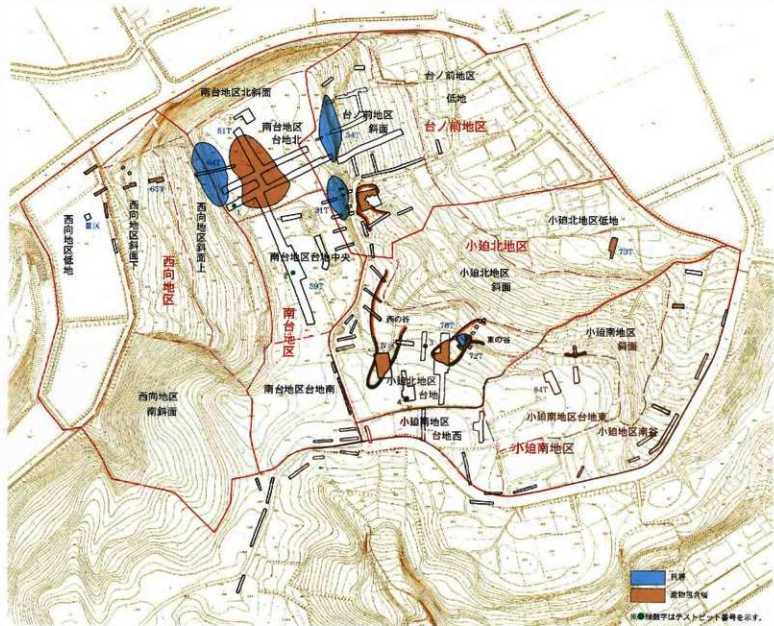


図5 浦尻貝塚調査地区割図 (S=1/2,500)

- ・南台地区遺構の確認調査
- ・台ノ前地区貝層範囲内容の確認
- ・台ノ前地区水場遺構内容の確認
- ・出土遺物等の整理分析

④ 調査内容

- ・調査前に10000㎡を対象に伐採を行った後、表面調査を実施し、調査地区全体にわたる基準杭を設置した。
- ・調査対象範囲を中心に1/500の現況平面図を作成した。
- ・南台地区は重機により表土掘削し、調査を実施した。トレンチの設定は、座標を基に段丘を縦断、横断する形で設定した(51~53・59T)。また、古墳の周溝の確認のため、60・61Tを設定し実施した。
- ・遺構は一部を発掘し、内容を把握した。遺物包含層についても、一部を掘り下げて調査を行った。
- ・台ノ前地区貝層の確認は重機及び人力による表土掘削し、調査を実施した。貝層の本格的な発掘は一箇所に留め(54T)、トレンチによる確認調査(54~58T・63T)及びボーリング(1m検土杖による手動ボーリング)による確認調査を実施した。
- ・貝層は層位毎にわけて全てサンプリングした。(54・63T)
- ・平成12年度に確認した水場遺構の内容を確認するため、平成12年度調査トレンチを拡張して調査区を設定し、調査を実施した。(1区)

(3) 平成14年度調査

① 調査期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日(発掘調査110日)

② 調査面積 約550㎡

③ 調査目的

- ・西向地区貝層等範囲内容の確認
- ・南台地区遺構等の内容追加確認
- ・小鉾北・南地区の本調査前の資料収集
- ・補尻貝塚現況平面図(S=1/500)の作成
- ・出土遺物等の整理分析

④ 西向地区貝層範囲確認調査内容

- ・13000㎡を対象に、10mグリットを設定し、表面調査並びにボーリング調査(1m検土杖による手動ボーリング)を行った。
- ・表面調査実施後、貝層の範囲内容確認調査を人力によるトレンチを設定して行った。(64・65・68~71T)
- ・貝層は、50cmグリットを4箇所設定し、コラムサンプルを採取した。(64T)
- ・確認された遺物包含層ならびに遺構は、一部を掘り下げて調査を実施した。
- ・各トレンチ内で、基本土層を確認するため、深堀を行った。

⑤ 南台地区追加確認調査内容

- ・調査区を拡張して前年度の調査で不明確であった道路状遺構のプランを確認した。(59T拡張)

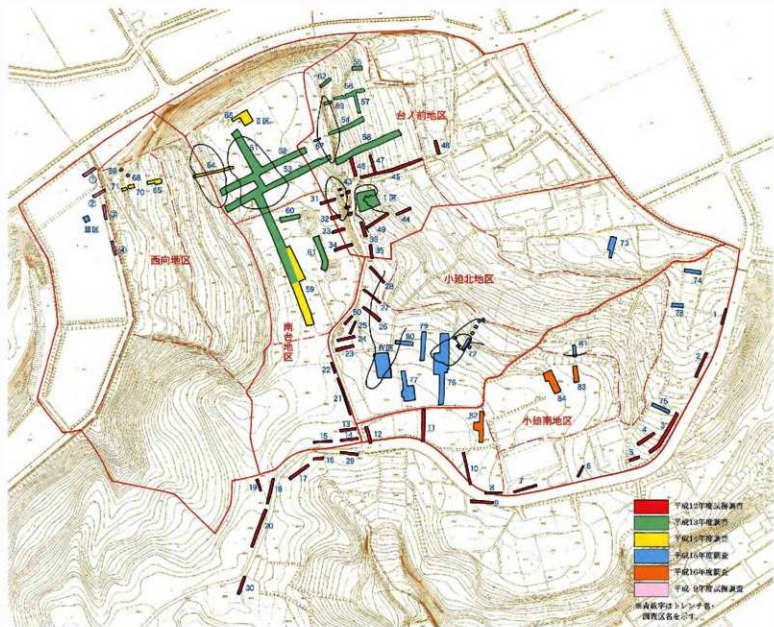


図6 浦尻貝塚調査状況図〔調査年度別〕(S=1/2,500)

- ・南台地区段丘北端部（台地北）の遺構の有無等を確認するために、未調査部分の追加調査を実施した。（Ⅱ区・66T）
- ・台ノ前北貝層の西側範囲を確認するため、トレンチを設定して調査を実施した。（67T）

⑥ 小迫地区表面調査内容

- ・表面調査、現況平面図作成のため、約8800㎡を対象に雑木等の伐採を実施した。
- ・20mグリットを基準とした表面調査並びにボーリング調査（1m検土杖による手動ボーリング）を行った。
- ・重機による掘削が困難である箇所及び平成15年度の範囲確認調査の基礎資料を得るため、小迫地区全体で、1mグリットの調査区を設定し、30箇所の表土掘削を人力で実施した。

⑦ 現況平面図作成

- ・浦尻貝塚全体（200,000㎡）を対象とした事業の基礎となる現況平面図を1/500の縮尺で作成した。

(4) 平成15年度の調査

① 調査期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日（発掘調査131日）

② 調査面積 約890㎡

③ 調査目的

- ・小迫北地区貝層内容の確認
- ・小迫北地区台地部遺構等の確認
- ・小迫北地区低地部堆積層の確認
- ・小迫南地区南谷部堆積層の確認
- ・西向地区低地部堆積層の確認
- ・出土遺物等の整理分析

④ 調査内容

- ・平成14年度表面調査に基づき、小迫北・南地区にトレンチを10箇所、グリットを7箇所設定し、重機及び人力による表土掘削し、調査を実施した。（72～81T・1～7G）
- ・西向地区低地部では調査区を設定し、第三紀層直上までの土層を確認した。（Ⅲ区）
- ・貝層は、50cmグリットを5箇所設定し、コラムサンプルを採取した。（72T・1G・3G）
- ・確認された遺構、遺物包含層の一部を掘り下げて調査を実施した。

(5) 平成16年度の調査

① 調査期間 平成14年4月1日～平成15年3月31日（発掘調査18日間）

② 調査面積 約200㎡

③ 調査目的

- ・小迫南地区台地東・西部の遺構等の確認
- ・出土遺物等の整理分析
- ・調査報告書の作成

④ 調査内容

- ・小迫南地区台地部において、遺構の分布状況が不明であったことから、トレンチを3箇所設定し、調査を実施した。（82～84T）

第7節 浦尻貝塚調査指導委員会

1. 設置目的

範囲内容確認調査において継続的な調査指導を得るとともに、遺跡範囲及び内容の学術的な検討を行うため。

2. 委員名（敬称略）

- 委員長 藤沼邦彦（弘前大学）
- 副委員長 玉川一郎（福島県文化振興事業団）
- 委員 山田昌久（東京都立大学）
- 委員 樋東岳二（早稲田大学）

3. 設置期間

- 第1期 平成13年5月28日～平成15年3月31日
- 第2期 平成15年4月1日～平成17年3月31日

4. 調査指導委員会の内容

(1) 第1回の内容【平成13年5月28・29日】

- ・委嘱状交付
- ・議題
 - ① 浦尻貝塚の概要について
 - ② 浦尻貝塚調査事業の概要について
 - ③ 平成13年度浦尻貝塚調査計画
- ・現地視察
- ・指導 文化庁記念物課 加藤真二氏、県文化課 大平好一氏・丹野隆明氏

(2) 第2回の内容【平成13年9月12・13日】

- ・現地視察
- ・議題
 - ① 浦尻貝塚調査指導委員会について
 - ② 平成13年度浦尻貝塚調査について
- ・指導 文化庁記念物課 岡村道雄氏、県文化課 大平好一氏

(3) 第3回の内容【平成13年12月4日】

- ・現地視察
- ・議題
 - ① 浦尻貝塚範囲確認調査対象範囲について
 - ② 平成13年度浦尻貝塚発掘調査成果について
 - ③ 平成14年度発掘調査計画について

- ・指 導 文化庁記念物課 榎宜田佳男 氏、県文化課 小林雄一 氏

(4) 第4回の内容〔平成14年6月8日〕

- ・議 題
 - ① 平成13年度調査成果について
 - ② 平成14年度発掘調査計画について
 - ③ 平成14年度整理調査について
- ・現地視察
- ・指 導 県文化課 長島雄一 氏

(5) 第5回の内容〔平成14年9月5・6日〕

- ・議 題
 - ① 平成13年度までの調査について
 - ② 平成14年度の調査について
- ・現地視察
- ・指 導 文化庁記念物課 岡田康博 氏、県文化課 長島雄一 氏

(6) 第6回の内容〔平成14年11月18日〕

- ・現地視察
- ・議 題
 - ① 平成14年度の調査について
 - ② 平成15年度の調査計画について
- ・指 導 県文化課文化財主査 長島雄一 氏
- ・事前指導 文化庁記念物課 岡田康博 氏〔11月15日〕

(7) 第7回の内容〔平成15年6月9日〕

- ・議 題
 - ① 平成14年度までの調査について
 - ② 平成15年度の調査計画について
- ・現地視察
- ・指 導 県文化財グループ 大平好一 氏・山崎充浩 氏

(8) 第8回の内容〔平成15年9月2・3日〕

- ・議 題
 - ① 平成15年度の調査について
 - ② 平成12～14年度の調査について
- ・現地視察
- ・指 導 文化庁記念物課 岡田康博 氏、県文化財グループ 大平好一 氏・山崎充浩 氏

(9) 第9回の内容〔平成15年11月6日〕

- ・現地視察
- ・議 題
 - ① 平成15年度の調査について
 - ② 南台・台ノ前・西向地区の調査について
 - ③ 平成16年度の調査計画について
 - ④ 史跡指定について
- ・指 導 文化庁記念物課 岡田康博 氏、県文化財グループ 大平好一 氏・山崎充浩 氏

(10) 第10回の内容〔平成16年7月5日〕

- ・現地視察
- ・議 題
 - ① 小迫地区発掘調査について
 - ② 保存計画ならびに指定範囲について
 - ③ 調査報告書ならびに整理調査について
- ・指 導 県文化財グループ 山崎充浩 氏
- ・事前指導 文化庁記念物課 岡田康博 氏、県文化財グループ 山崎充浩 氏〔6月25日〕

(11) 第11回の内容〔平成17年1月16日〕

- ・議 題
 - ① 発掘調査報告書の刊行及び史跡指定計画について
 - ② 発掘調査成果について
- ・指 導 県文化財グループ 山崎充浩 氏

第8節 日 誌

平成12年度

- | | |
|--------|---|
| 5月 | 浦尻字南台・小迫・台ノ前地内における町道建設計画に係わる埋蔵文化財の取り扱いについて、町建設課と町教育委員会事務局で事前協議。 |
| 8月31日 | 町道建設計画に伴う試掘調査開始。(南台・台ノ前・小迫地区) |
| 9月9日 | 37・38Tで貝層確認。 |
| 10月6日 | 県文化課、町建設課、町教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて協議。その後、現状保存することに決定。 |
| 11月3日 | 現地説明会開催。 |
| 12月1日 | 岡村道雄氏(文化庁記念物課〔当時〕)来跡。現地視察ならびに指導。 |
| 12月 | 平成13年度より4年間にわたり、範囲確認調査を実施していくことを計画。 |
| 12月20日 | 試掘調査終了。 |

平成13年度

- 5月28・29日 第1回調査指導委員会。(会議・現地視察)
7月4日 範囲内容確認調査開始。(南台・台ノ前地区)
7月10・11日 小高工業高校生徒、就業体験(インターンシップ)による発掘参加。
9月4～7日 福島県文化財センター白河館(まほろん)の発掘研修。
9月10・11日 教職員ボランティアによる発掘体験。
9月12・13日 第2回調査指導委員会。(12日現地視察、13日会議)
9月17・18日 教職員ボランティアによる発掘体験。
9月22日 生涯学習課主催事業による小学生の発掘体験活動。
10月23日 地権者説明会。
12月4日 第3回調査指導委員会。(現地視察・会議)
12月8日 現地説明会開催。
12月11日 小高町文化財調査員視察。
2月25日 小高町社会教育委員視察。
3月25日 範囲内容確認調査終了。(南台・台ノ前地区)

平成14年度

- 4月22日 範囲内容確認調査開始。(南台・西向地区)
4月25日 地権者説明会
6月8日 第4回調査指導委員会。(会議・現地視察)
7月16～18日 小高工業高校生徒、職場体験(インターンシップ)による発掘参加。
7月29日 小学生～成人まで対象とした発掘体験活動開始。(～8月4日まで)
9月2日 教職員ボランティアによる発掘体験。
9月5・6日 第5回調査指導委員会。(5日会議、6日現地視察)
9月6日 浦尻貝塚発掘調査事業記念講演会。
講師：榎泉岳二氏(浦尻貝塚調査指導委員)。
演題：『貝塚からみた縄文時代の自然と人びとの暮らし』。
9月26日 教職員ボランティアによる発掘体験。
10月18日 小高町文化財保護審議会視察。
10月26日 現地説明会開催。
11月7・8日 54・64T貝層断面剥ぎ取り実施。
11月15日 岡田康弘氏〔文化庁記念物課〕来跡。現地調査ならびに指導。
11月18日 第6回調査指導委員会(会議、現地視察)
12月24日 範囲内容確認調査終了。(南台・西向地区)
3月14日 小迫北地区表面調査開始。
3月31日 小迫北地区表面調査終了。

平成15年度

- 4月18日 地権者説明会
5月6日 範囲内容確認調査開始。(西向・小迫地区)
6月9日 第7回調査指導委員会(現地視察、会議)

- 7月3日 坂井秀弥氏（文化庁記念物課）来跡。現地調査ならびに指導
- 7月8～11日 福島県文化財センター白河館（まほろん）研修。
- 7月15～17日 小高工業高校生徒、就業体験（インターンシップ）による発掘参加。
- 8月30日 生涯学習課主催事業による発掘体験活動。
- 9月2・3日 第8回調査指導委員会。（2日現地視察、3日会議）
- 9月7日 現地説明会。
- 11月3日 浦尻貝塚発掘調査事業記念講演会開催。
講師：山田昌久氏（浦尻貝塚調査指導委員）
演題：『縄文時代の土木技術』
- 11月6日 第9回調査指導委員会。（会議、現地視察）
- 12月24日 範囲確認調査終了。（西向・小迫地区）
- 2月16日 地権者説明会。
- 3月4日 小迫北地区範囲内容確認調査開始（事前調査）。
- 3月17日 小迫北地区範囲内容確認調査終了。
- 3月31日 小中学生向けパンフレット『おだかの縄文時代』作成。

平成16年度

- 5月11日 範囲内容確認調査開始（小迫北・南地区）
- 6月25日 岡田康弘氏〔文化庁記念物課〕来跡。現地調査ならびに指導。
- 7月5日 第10回調査指導委員会（会議、現地視察）
- 7月27・28日 「サバイバル IN 浦尻貝塚」と題し、浦尻貝塚現地にて小中学生対象のキャンプ（縄文生活体験）実施。
- 8月27日 範囲内容確認調査終了
- 10月26日 地権者説明会
- 1月16日 第11回調査指導委員会（会議）



写真2 調査指導委員会現地視察 (54T)



写真3 貝層断面剥ぎ取り作業 (54T)



写真4 調査指導委員会現地視察 (西向地区)



写真5 坂井秀弥氏(文化庁記念物課)現地視察
(小船北地区)



写真6 貝層発掘作業(台ノ前北貝層・54T)



写真7 発掘作業風景(小船北地区76T)



写真8
発掘作業風景
(小船北地区・IV区)



写真9 貝層範囲確認調査(小船北地区)



写真10 貝層サンプル洗浄作業



写真11 貝層断面剥ぎ取り洗浄作業



写真12 浦尻貝塚からみた太平洋

写真13 発掘体験 (西向地区)



写真14 発掘体験 (西向地区)



写真15 小高工業生徒就業体験 (西向地区)



写真16
縄文生活体験風景

写真17
縄文生活体験風景



写真18
平成13年度現地説明会

写真19
平成14年度現地説明会



第3章 調査内容 (縄文時代)

第1節 基本土層 (図7)

南台地区及び小迫北地区にて、それぞれ2箇所のテストピットを設定し、段丘上の基本土層の確認を行っている。この確認した土層について、次のように大別した。

I層 表土。近代の耕作土と考えられる。

II層 黒色～黒褐色土 (砂質の場合有)。主に弥生時代以後の堆積層と考えられる。

III層 縄文時代の堆積層。縄文遺物包含層 (貝層を含む) 及びIV・V層上に堆積するII層以下の堆積土である。III層については、各調査地点でさらに細別して示している。

IV層 ローム層。次の3類に分別される。

IV-1層 軟質ローム (ソフトローム)。IV-2層に比較し、粘性、締りがやや弱い。

IV-2層 硬質ローム (ハードローム)。粘質が高く、クラックが発達している。

IV-3層 砂質ローム。下位に行くに従い、やや粗く、砂・径数センチの小石を含むかシルト質になるなど、V層の影響が認められる。

V層 第四紀の段丘堆積物であり、IV層下に堆積するもの。砂・砂レキ・レキ・シルトから構成される。谷部を中心に縄文時代以前と考えられるローム質シルト等の無遺物層も含めた。さらに次のように分別した。

V-1層 褐色砂質土。IV-3層とV-2層の漸移層。IV-3層に比較し粗粒で粘性がなく、V-2層に比較しややローム質である。V-2層との違いはIV層の影響の有無である。

V-2層 砂・レキ・砂レキ。南台地区を中心に分布する。さらに細別して示している。

V-2a層 砂レキ

V-2b層 砂

V-2c層 レキ

V-3層 シルト及び砂質シルト。

VI層 凝灰岩質シルト。第三紀の堆積層と考えられる。

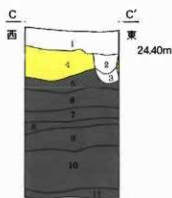
これらの細別や詳細な点については、各調査地区の報告にて記す。ここでは、南台地区及び小迫北地区の層序について概要を確認しておく (図7)。

南台地区台地中央部にあたるテストピット2 (59T) では、表土下にIV-1～3層が堆積する。IV層は約80～90cmの厚さであり、IV-1層が10～15cm、IV-2層が20～30cm、IV-3層が約30cmを測る。V-2層上面は標高約26.5mで確認した。

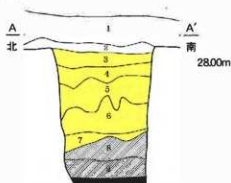
南台地区台地北部に位置するテストピット1 (53T) では、IV-1・2層がなく、IV-3層のみ確認されている。層厚は約30cmを測る。V-2層上面は標高約24mで確認される。南台地区台地北部では大部分で、IV層が確認されていない。この事については後に検討し、詳述する。

小迫北地区台地部では、テストピット4 (77T) で、IV-2層の約40cmの堆積を確認した。IV-2下層からIV-3層については、南台地区に比較すると、砂・レキの含有が少なく、ややシルト質となっている。このことは、小迫北地区にIV層下にV-2層 (砂等) ではなく、V-3層 (砂質シルト等) が堆積していることによる影響と考えられる。このような状況は、南台地区台地南部でも同様と推定され、遺跡の南側にあたる東西方向の舌状段丘 (小迫北・南地区) と北側にあたる南北方向の舌

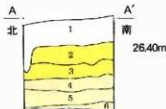
テストピット1
(53T東)



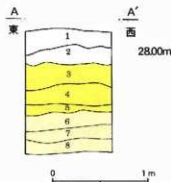
テストピット2
(59T)



テストピット3
(79T)



テストピット4
(77T)



テストピット1 (53T東側)

I	1	表土(黒色土)	
	2	暗褐色土	粘性中、締り弱。ローム粒・ロームブロック少量。
	3	暗褐色土	粘性中、締り弱。ローム粒・白色砂粒少量。
IV-3	4	明褐色砂質土	粘性弱、締り中。小石(径1ミリ以下)少量。
V-2a	5	灰白色砂	粘性弱、締り中。小石(径1ミリ以下)・砂質ロームブロック少量。
	6	灰白色砂	粘性弱、締り中。小石(径2ミリ以下)少量。
	7	緑灰色砂	粘性弱、締り中。小石(径5ミリ以下)少量。
V-2a	8	緑灰色砂	粘性弱、締り弱。小石(径2ミリ以下)少量。
	9	赤褐色砂レキ	粘性弱、締り強。レキ(径5センチ以下)・小石(径5ミリ以下)主体。
	10	赤褐色砂レキ	粘性弱、締り強。レキ(径10センチ以下、5センチ中心)主体。
V-2a	11	赤褐色砂	粘性弱、締り強。小石(径3ミリ以下)少量。

テストピット2 (59T)

I	1	表土(黒灰色土)	
	2	黄褐色土	粘性弱、締り弱。ロームをブロック状に含む。
IV-1	3	黄褐色土	粘性強、締り中。
	4	にじみ黄褐色土	粘性強、締り中。
IV-2	5	にじみ黄褐色土	粘性極強、締り強。クラックが入る。
IV-3	6	暗黄褐色土	粘性強、締り強。(やや砂質)
	7	暗黄褐色砂質土	粘性中、締り中。
V-1	8	褐色砂質土	粘性弱、締り中。小石少量。
	9	暗褐色砂質土	粘性弱、締り強。小石少量。
V-3	10	黄白色砂レキ	粘性弱、締り強。

テストピット3 (79T)

I	1	表土(黒褐色土)	
IV-3	2	黄褐色土	粘性強、締り強。(やや砂質)
	3	黄褐色砂質土	粘性中、締り中。
V-3	4	黄白色砂質シルト	粘性中、締り中。
	5	灰白色砂質シルト	粘性中、締り中。
	6	灰白色シルト	粘性極強、締り極強。(やや砂質)

テストピット4 (77T)

I	1	表土(灰褐色土)	ローム粒・ロームブロック少量。
	2	表土(灰褐色土)	ローム粒・ロームブロック少量。
IV-2	3	黄褐色土	粘性強、締り強。クラックが入る。
	4	黄褐色土	粘性極強、締り強。(ややシルト質)
IV-3	5	にじみ黄褐色砂質土	粘性中、締り中。(ややシルト質)
V-3	6	黄白色砂質シルト	粘性中、締り中。
	7	黄褐色シルト	粘性中、締り中。(やや砂質)
	8	黄白色シルト	粘性極強、締り極強。

大別土層説明

I	表土
IV-1	軟質ローム(ソフトローム)
IV-2	硬質ローム(ハードローム)
IV-3	砂質ローム
V-1	褐色砂質土(砂質ローム・砂質砂層)
V-2a	砂レキ
V-2b	砂
V-2c	レキ
V-3	砂質シルト・シルト

図7 基本土層断面図 (S=1/40)

状段丘(南台地区台地中央～北部)はIV層下の段丘構築層が異なることが認められる。

小迫北地区台地部におけるV層上面の標高は北側にあたるテストピット3(79T)で約25.8m、テストピット4(77T)では約27.0mであり、小迫北地区台地部は南から北に下がる緩斜面であることが確認できる。

また、小迫北・南地区の台地上では、一部耕作等により削平を受けた部分を除き、IV層がほぼ検出される。確認される層位はIV-2層が中心であり、IV-1層は確認できない。

各地区における段丘斜面及び谷部は、IV層およびV-2層は認められず、シルト質のV-3層が基盤となっている。

第2節 調査方法

1. 遺構の確認及び調査

段丘上の調査は、IV層及びV層を縄文時代の遺構確認面とした。南台地区台地北部及び小迫北地区の一部では、縄文包含層であるIII層上面を確認面としている。また、III層上面までの調査で留め、縄文時代の遺構調査を実施していない部分もある。遺構は主に5～10cm程度掘り下げて平面プランを確認している。確認した遺構のうち、時期内容を確認するため、一部を半載し、遺構底面までの調査を行っている。原則として、全掘をせず住居跡等も半分だけの調査に留めている。

2. 貝層・遺物包含層の確認及び調査

遺物包含層については、平面で確認した後、時期等を把握するため適宜トレンチ及びグリットを設け、調査を実施した。

貝層の範囲確認については、トレンチを設定前に、これまでの表面調査成果を基に改めて表面調査を行っている。西向地区では、全面的に表面調査及び1mの検土杖でボーリングを行った。小迫北・南地区ではこれにあわせて、全体的な表土下の状況を確認するため、1m角のグリットを設定し、人力で坪掘りを行っている。



写真20 テストピット1



写真21 テストピット4

各貝層範囲は、トレンチによる確認のほか、上記ボーリング等の調査成果を基に推定している。

貝層の発掘については、貝層確認後、平面的な層位確認を行い、それぞれトレンチ及びサンプル採取用グリットを設け、調査を実施した。発掘は最低限に留めるものとし、面的に掘り下げる調査は実施していない。

貝層土壌は原則として全て採取した。貝層サンプルには、①平面観察により分層した層毎に採取したもの(54T・56T・63T)、②採取用グリットを設定し、上から深さ5cm毎に採取したもの(31・38T・64T・72T・1G・3G)〔コラムサンプル〕、③大別した層位で一括して採取したもの(31・38T)がある。採取した貝層・遺物包含層サンプルは全て5mm、2.5mm、1mmメッシュの篩を3段に重ねたウォーターセパレーションで水洗洗浄した。一部の貝層直上土壌についても、現地にて5mmメッシュの篩をかけるか、持ち帰って水洗洗浄を行い、資料を取り上げている。

3. 基本土層の確認について

各調査地点では、適宜グリット及びトレンチを設定し、基本土層の確認を行っている。また、西向地区低地部の調査(Ⅲ区)では、縄文時代の堆積層を確認するため、VI層(第三紀層)の検出に努めた。標高約0mで確認したが、明確な縄文時代の堆積層を確認することができなかった。

4. 縄文時代の遺構種別

今回の調査で確認した縄文時代の遺構は竪穴住居、土坑、小土坑、掘立柱建物、道路状遺構である。最も多く検出した土坑については、機能として柱穴、貯蔵穴、墓壇等が推察される。本調査では、全てを掘り下げて確認した調査ではないが、次のような基準に基づき、遺構を分類した。

竪穴住居（遺構略称SJ）

掘り込みがあり、床面が構築されているもの。本調査では、明確な掘り込みが確認できないものが多くを占めるが、貼床面、壁周溝、炉の構築のいずれかが確認できるものを竪穴住居とした。掘り下げていないものでは、平面プランや堆積土の観察から、一部推定している。

土 坑（遺構略称SK）

土坑は次のように分類した。

土坑Ⅰ類

柱痕跡が確認できる土坑で、「柱穴」と推定されるものを本類とした。また柱痕跡が確認できない土坑でも、掘り方が比較的大きく、深さがあり、竪穴住居主柱穴の断面形及び堆積状況と類似するものも本類に含めた。分類したものの中には、竪穴住居に伴う床面等が削られ、柱穴だけ残存したものも多数あると考えられる。

また、本来、柱穴であっても掘り方が小さいものや柱痕跡の識別が困難なものなどは含まれていない可能性がある。よって土坑Ⅰ類に分類した以上に多くの「柱穴」が存在するものと考えている。

土坑Ⅱ類

いわゆる「貯蔵穴」とされるものを本類とした。本調査では、円筒状及びフラスコ状の断面形をもち、径が大きく1m以上あるものが多い。深さは上面が削平を受けている箇所が多いが、本来は1m以上あったものと推察される。一部、掘り下げて調査していないものでも、分布状況及び平面形等から推定した。

土坑Ⅲ類

Ⅱ類以外の大型の土坑である。調査したものでは、壁が緩やかに立ち上がり、覆土に大型のレキを持つものや大型土器片を出土するもの、さらにⅡ類に比較し深さがないものが多い。調査していないものでは、

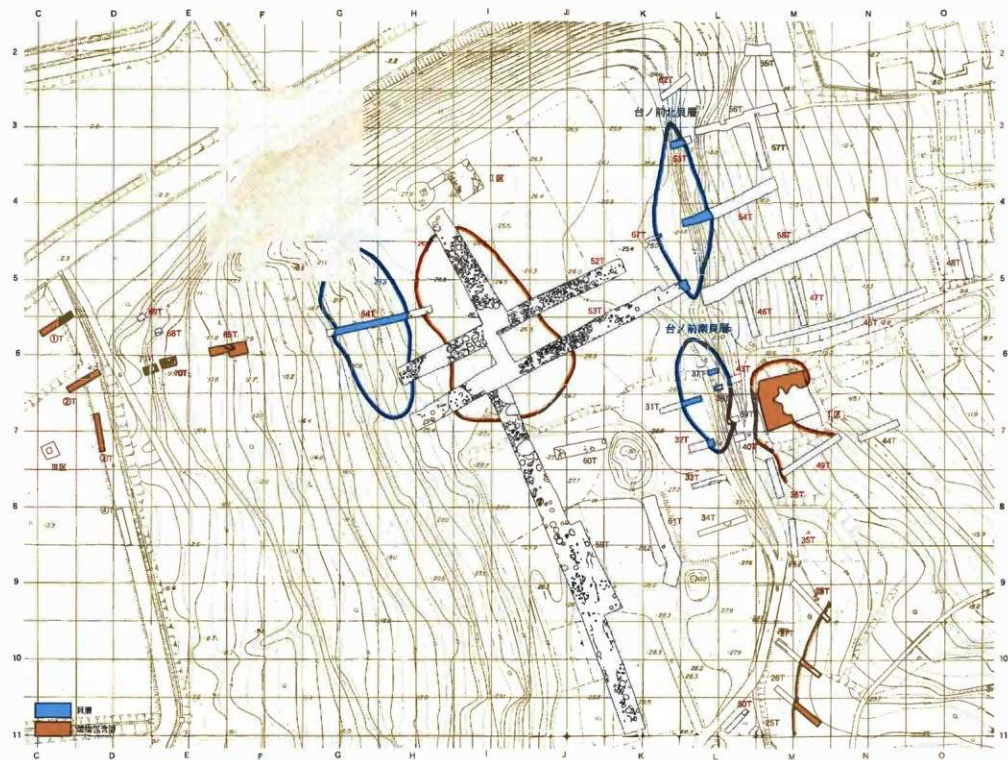


図8 南台・台ノ前・西向地区調査全体図 (S = 1/1,000)

Ⅱ類との分別が困難であるが、分布状況等からⅡ類と判断しがたい大形の土坑も推定して本類に含めた。

土坑Ⅳ類

その他のもので、概ね径が約50cm以上あるものを本類に含めた。多くの土坑が本類に含まれる。前述のとおり本来「柱穴」であったものも含まれている可能性がある。

小土坑(遺構略称P)

概ね径が約50cm以下のものを小土坑とした。土坑Ⅳ類と同じく本来「柱穴」であったものも含まれる。

埋設土器

土坑・小土坑にはいわゆる埋設土器を伴うものが存在する。多くが土坑Ⅳ類に含まれるが、一部土坑Ⅱ類を転用したもの、貝層中に形成されたものもある。

掘立柱建物(遺構略称SB)

柱穴の組み合わせが想定されたものを掘立柱建物とし、遺構番号をつけた。ただし、平地式建物である確証はなく、本来は竪穴住居であった可能性もある。

道路状遺構

南台地区台地中央部で確認されたもので、最大長約40m、幅3～4m、深さ10～20cmの掘り込みを持つものである。検出状況及び遺構の分布状況から道路状遺構としている。意識的に形成されたのか道路として機能していたか検討を要する。

性格不明遺構(遺構略称SX)

遺構か否か判断しがたいものを本類に含めた。

5. 遺 構 番 号

本報告では、浦尻貝塚全体で遺構番号を通し番号でつけている。『小高町埋蔵文化財調査報告1』(川田2000)にて、報告されていた遺構についても新しい遺構番号をつけ直し、整理している。

また、平成14年度までの南台・西向・台ノ前地区の調査で遺構数が多数に及び、整理調査時の煩雑さをさけるため、南台・西向・台ノ前地区と小迫北・南地区の調査ではそれぞれ異なる遺構通し番号をつけている。

これに従い、本報告では、大きく南台・西向・台ノ前地区と小迫北・小迫南地区の調査と分けて報告することとする。

第3節 南台・西向・台ノ前地区の概要

1. 調査区について(図8)

南台・西向・台ノ前地区の調査は平成12～14年度に実施されたものである。複数の地区にまたがる調査区も存在するが、次のように整理される。

南台地区台地北部	51～53T・59T北端・64T東・66T・Ⅱ区
南台地区台地中央部	59～61T
台ノ前地区斜面部	31～47T・49T・53T東・54～58T・62～63T・67T
台ノ前地区低地部	48T
西向地区斜面上部	52T西・53T西・64T
西向地区斜面下部	65T・68～69T・70～71T
西向地区低地部	①～④T・Ⅲ区

この中で、41～42Tは平成12年度調査として実施されたものであるが、平成13年度にこれを拡張してI区を設定し、調査を実施している。よって図8には位置を示していない。また①～④Tは平成9年度試掘調査で実施したものである。

2. 調査地区の概略

南台地区では主に縄文時代の遺構・遺物包含層を確認した。他に古墳時代後期の古墳周溝、平安時代の竪穴住居跡、その他時期不明の溝・土坑が存在する。

台ノ前地区では貝層を2箇所確認した。北側を台ノ前北貝層、南側を台ノ前南貝層と名付けた。また、台ノ前南貝層下の緩斜面には縄文時代の遺物包含層を確認している。その遺物包含層を掘削して中近世水場遺構が確認されている。水場遺構については、過去に縄文時代の所産と報道されたことがあるが、追加調査によって中世以降の所産と考えられたので、訂正しておく。その他、平安時代の竪穴住居及び近世の溝跡を検出している。

西向地区では、貝層を1箇所確認した。西向貝層と称する。西向地区斜面下部には遺構及び遺物包含層を確認し、遺物包含層については低地部まで広がっているものと考えられる。

これらの遺構等を厳密な地区別に報告すると、内容が重複する部分もあり複雑となるので、次の内容を主とし、各地区の調査内容について報告する。

南台地区の調査報告は南台地区台地北部・中央部における台地上の遺構及び遺物包含層について行う。台ノ前地区の調査報告は、斜面部の台ノ前北・南貝層について行う。西向地区の調査報告は、斜面上部の西向貝層、斜面下部の遺構及び遺物包含層について行う。

第4節 南台地区の調査

1. 基本土層

第1節に加え、南台地区等の堆積土を確認しておく。

各土層は次のように大別した。

I層 表土。

II層 黒色～黒褐色土。南台地区台地北部では、砂質土であることが多い。III層上の黒色系統の堆積土を一括した。

III層 縄文時代の堆積層。これらの各層を、南台・西向・台ノ前地区では次のように大別した。

III-1層 暗褐色系統の砂質土。粘質がない堆積土である。南台地区台地北部を中心に堆積する。同地区では、遺構覆土の多くが含まれる。

III-2層 台地上に堆積するもので、暗褐色・褐色を基調とする。III-1層に比較し、粘質がある。

III-3層 縄文時代の貝層。貝の含有率は極めて低いが、獣魚骨を含み、調査状況からみて一連の堆積と考えられる層も含めた。各調査地点では、さらに各層を分けて示している。

III-4層 西向・台ノ前地区の斜面部のIII-4・5層下にあり、ほとんど縄文時代の遺物を含まない層である。

III-5層 西向・台ノ前地区の斜面部の堆積層のうちIII-3層以外のもので一定量の遺物が含まれるものをまとめた。

IV層(ローム層)・V層・VI層は、第3章第1節に述べたとおりである。

ここでは、南台地区台地北・中央部の土層を確認しておく。テストピット1・2の他、貯蔵穴及び溝跡等の遺構断面、各調査区断面から図9を作成した。

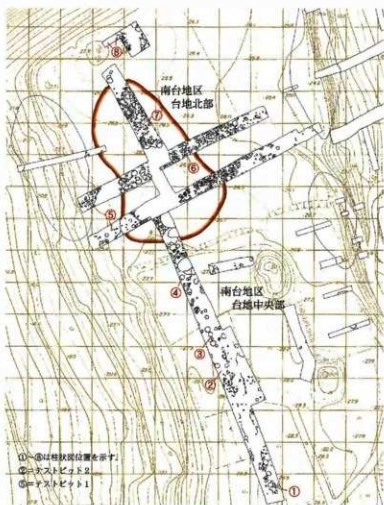
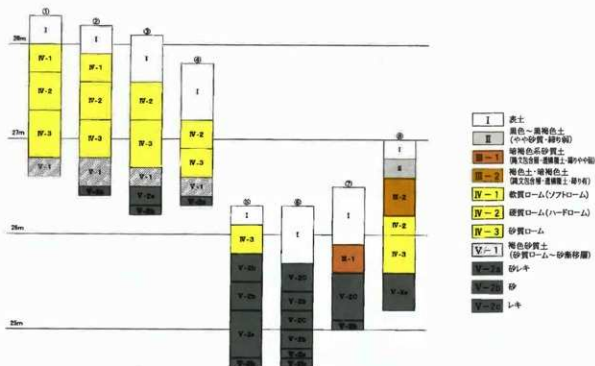


図9 基本土層柱状図 (S=1/40・1/1,200)

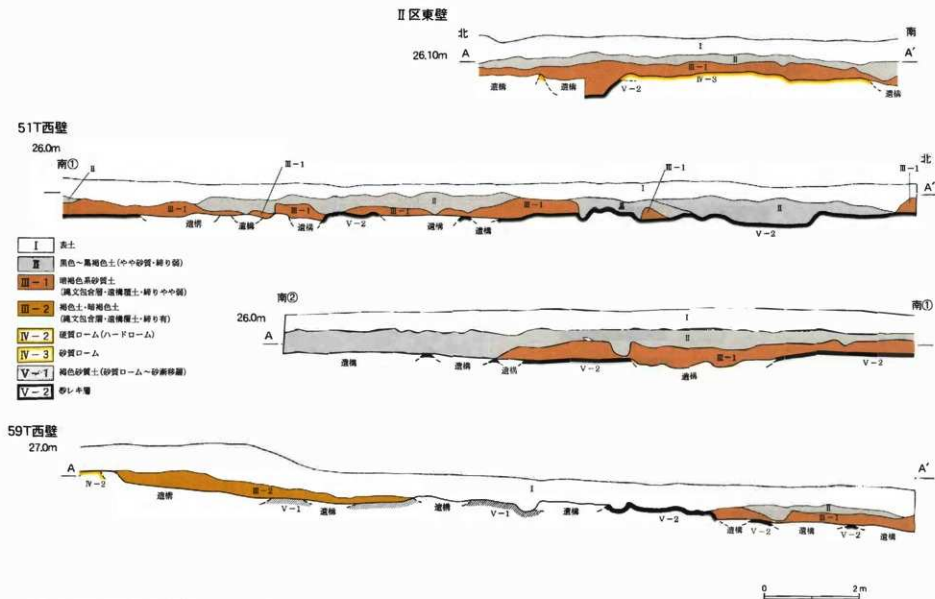


図10 南台地区土層断面図① ((S=1/80))



写真23 II区東壁



写真24 59T西壁



写真22 51T西壁

まず、表土下のⅡ層は浦尻貝塚全体に断片的に認められる。南台地区台地北部では砂質系統のものが認められる。古墳時代の周溝、平安時代の竪穴住居、近世以降の遺構、時期不明の溝などの覆土も大別するとⅡ層に含められる。

Ⅲ-1層（暗褐色系砂質土）は南台地区台地北部の中央に広く分布する（図11）。Ⅲ-1層はⅣ-1・2層上にはほとんど堆積せず、Ⅳ-3層以下、特にⅤ-2層（砂層等）上に堆積している。Ⅲ-1層は、遺構覆土との識別が困難であり（写真25・26）、Ⅲ-1層中では遺構掘り込み開始面を捉えることがほとんどできない。また、Ⅲ-1層除去後にⅤ-2層を掘り込み、Ⅲ-1層の覆土をもつ遺構が多数確認できる。これらのことからⅢ-1層は平面的な切りあい関係を容易に識別できないほど重複している遺構の集合が包含層として認識されたものと考えている。

Ⅲ-2層（暗褐色土・褐色土）は、確認面上では、台地中央部の図9①・②、台地北端の同図⑧で認められるだけである。南台地区台地中央部以南の縄文遺構の大部分の覆土が類似する。南台地区台地北部にもⅢ-1層に類似する遺構覆土だけではなく、Ⅲ-2層に類似する遺構覆土が存在する。

Ⅲ-3～5層は各調査地区の報告で詳述する。

Ⅳ-1層（軟質ローム）は南台地区台地中央部（図9①・②）だけで確認できる。Ⅳ-2層（硬質ローム）は南台地区台地中央部には確認できるが、南台地区台地北部ではほとんど確認できず、Ⅱ区等台地北端（同図⑧）のみで確認できる。南台地区台地北部では、Ⅳ-3層（砂質ローム）も分布範囲が限られており、台地縁辺部（同図⑤・⑧）及び南側の台地中央部に認められるだけである。このように、南台地区台地北部では、Ⅳ層の分布がほとんど見られない。また、Ⅳ-2層とⅢ-1層の分布は相対的な関係にあることが確認できる。

南台地区台地北・中央部ではⅣ層下にⅤ-1・2層が分布する。Ⅴ-2層は、各確認箇所により、砂・レキ・砂レキの層順が異なる。Ⅴ-2層上面は図9②で標高26.5m、同図⑧で25.5mであり、約100mの距離に対し高度1m下がっており、南から順に高度を下げ、北に向かってゆるやかな傾斜を示している。

2. 遺構の分布状況

ここでは、遺構の分布について各調査地点ごとに概観しておく。

51T（南台地区台地北部）

南北方向のトレンチである。SD01以南のほぼ全面に渡ってⅢ-1層が堆積している。南端を除き、Ⅲ-1層を除去して調査を行っている。多くの遺構の確認面はⅤ-2層である。

多数の土坑が存在し、土坑Ⅰ類の確認も多い。北端の台地縁辺部には土坑Ⅱ類が存在する。土坑Ⅲ類は全体に渡って分布する。SK119は、Ⅲ-1層上面からの掘削による構築された土坑Ⅲ類である。北側に古墳の周溝の可能性のあるSD01があり、Ⅱ区で確認された溝と同一遺構と考えられる。SD01はⅢ-1層を掘削して作られている。

52T西（南台地区台地北部）

東西方向のトレンチである。中央に時期不明の溝であるSD02が南北方向に構築されている。このSD02を境に東西で遺構の分布状況が異なっている。まず西側ではⅢ-1層の堆積がある。調査はⅢ-1層を除去して実施した。土坑Ⅰ類が確認されている他、土坑Ⅲ類が集中して検出されている。これらは重複して形成されており、複数の時期にまたがるものと推定される。遺構確認面はⅤ-2層である。

また51Tとの交差部では、Ⅲ-1層を除去しておらず、52T東側にサブトレンチを設定し、Ⅲ-1

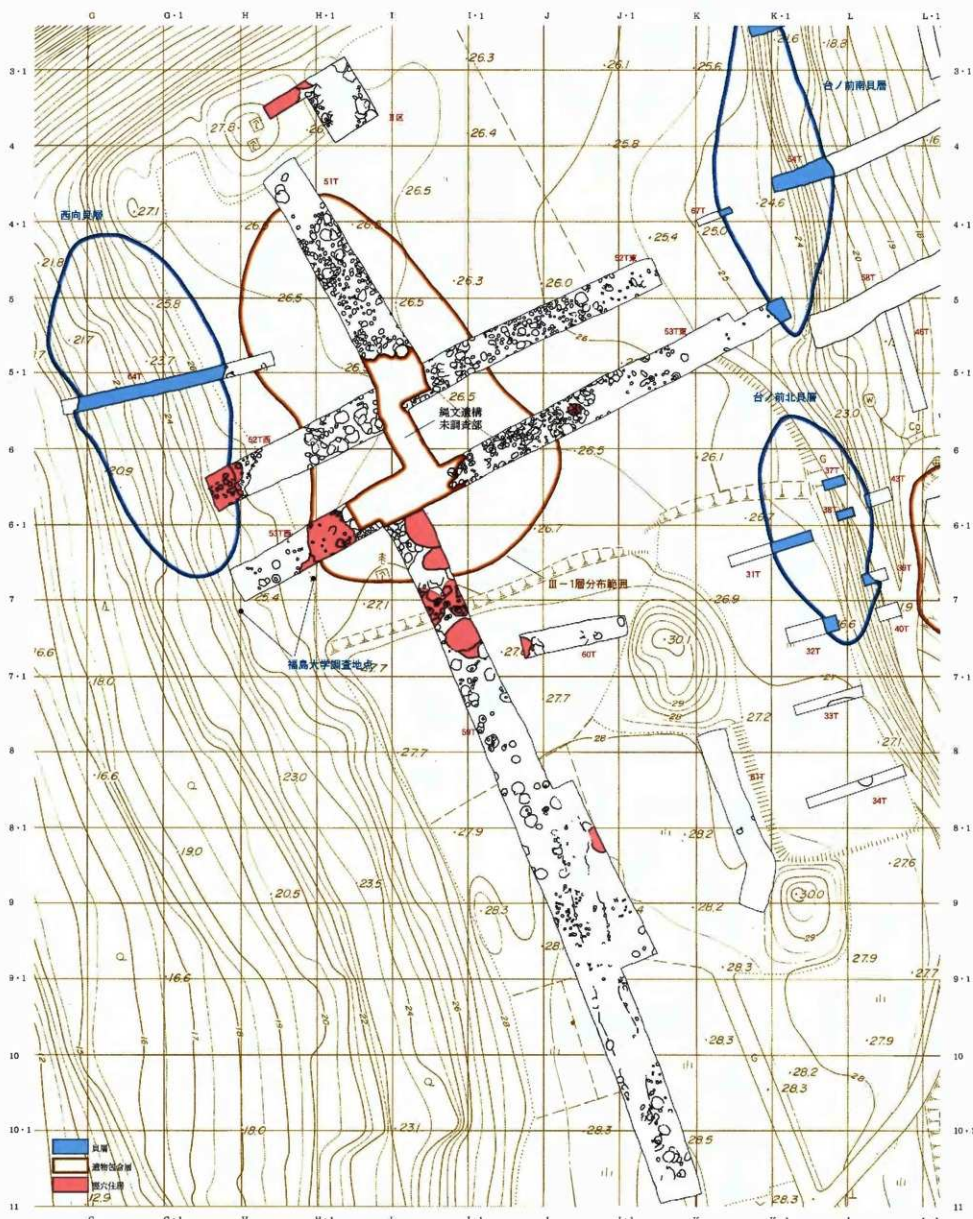
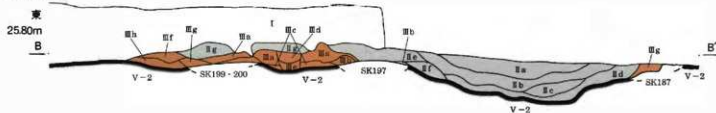
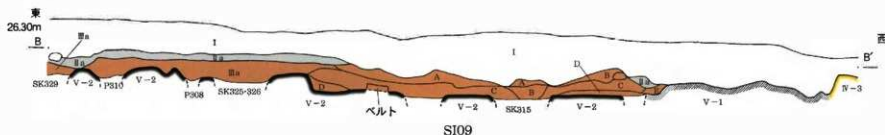


图 11 南台地区全体图 (S = 1/500)

52T東側南壁



53T西側南壁



52T東側南壁

- I 表土
- IIa 黒色土 粘性弱、締り中、小石・小レキ少量。(やや砂質)
- IIb 黒褐色土 粘性弱、締り中、小石・小レキ多量。(やや砂質)
- IIc 黒褐色土 粘性弱、締り中、小石・多量、黄灰色砂少量。(やや砂質)
- IIe 黒褐色土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ多量、黄灰色砂多量。(やや砂質)
- IIg 暗褐色土 粘性弱、締り中、小石・小レキ極微量。(やや砂質)
- IIh 暗褐色土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ極微量。(やや砂質)
- IIIa 暗褐色土 粘性弱、締り中、小石・小レキ微量、褐色土ブロック微量。(やや砂質)
- IIIb 褐色土 粘性弱、締り中、小石・小レキ極微量、褐色土ブロック微量。(やや砂質)
- IIIc 褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石・小レキ多量。
- IIId 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ少量。
- IIIe 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石・小レキ多量。
- IIIf 暗褐色砂質土 粘性弱、締り強、小石・小レキ・ローム粒微量。
- IIIg 暗褐色土 粘性弱、締り中、小石・小レキ多量。
- IIIh 褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石・小レキ多量。

53T西側南壁

- I 表土
 - IIa 黒褐色土 粘性弱、締り弱、焼土粒微量。
 - IIa 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ微量。
 - A 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、ローム粒微量、褐色砂質土ブロック少量。
 - B 黒褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・ローム粒微量、褐色砂質土ブロック微量。
 - C 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石微量、ローム粒少量、炭化粒微量。
 - D 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、ローム粒微量。
 - E 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、ロームブロック・白色砂ブロック少量。
- A~EはS109覆土

大別土層説明

- I 表土
- II 黒色～黒褐色土(やや砂質・締り弱)
- III-1 暗褐色系砂質土(縄文包含層・濃横瀬土・締りやや弱)
- III-3 砂質ローム
- III-3 褐色砂質土(砂質ローム～砂漸移層)
- V-2 砂レキ層



図12 南台地区土層断面図② (S=1/60)



写真25 52T東側南壁



写真26 53T西側南壁

層の堆積状況を確認している。SK197は埋設土器を伴うが、竪穴住居の炉である可能性がある。他にⅢ-1層上に平安時代の住居(SI05)が確認され、それを切って時期不明の溝(SD03)が構築されている。

SD02の東側では、縁辺部に向かって、Ⅲ-2層の堆積を確認した。この層はこの下面に貼床を確認したため、竪穴住居の覆土と考えられる。竪穴住居は全て壁面が失われた状況で確認した。竪穴住居は重複して検出されており、時期も複数にまたがるものと推定される。また貼床面下にはⅢ-3層(貝層)の堆積があり、これら竪穴住居はⅢ-3層上に構築したことが確認された。

52T東(南台地区台地北部)

交差部側にⅢ-1層の堆積が認められるだけであり、SK232・233・235より東側の大部分は表土直下にV-2層を検出した。遺構は中央部より多く認められ、東側は削平が著しいものと考えられる。土坑I類が台地中央部より多く確認されている。東側には土坑II類が確実に存在する。土坑III類は推定されるものだけで明確ではない。

53T西(南台地区台地北部)

台地中央部側と西側で状況が異なる。西側は縁辺部に向かって傾斜し、西端に破砕貝混じりのII層(西ab層)が堆積している。これについては締まりがなく、貝の混入状況もまだらであることから、後世の影響を受けているものと判断した。西端の基盤はV-1層(褐色砂質土)であるが、東側に高度をあげてゆき、緩やかな高まりにIV-3層(砂質ローム層)が堆積している。高まり部分には土坑II類が構築されている。このIV-3層を掘り込むように中央部側にⅢ-1層が堆積している。この地点については、Ⅲ-1層上面からできるだけ層位の確認を行い、遺構確認を行った。図18のSI09上の表現は、Ⅲ-1層上面の遺構確認時状況を示したが、これらは結果的に明確な遺構と認められなかったものとSK320のように埋設土器を伴うⅢ-1層上からの掘り込みが確実な遺構、またはⅢ-1層下に確認されたSI09に伴う柱穴及び炉などでⅢ-1層上からプランが認められたものが存在する。SI09についてもⅢ-1層中で平面プランの確認を行うことができなかった。

壁際にはサブトレンチを設定し、Ⅲ-1層を掘り下げ、遺構の分布状況を確認している。

また、53TのSI08は床面までI層が堆積しており、福島大学考古学研究会の調査によって確認された竪穴住居と推定される。

53T東(南台地区台地北部)

西側にはⅢ-1層の堆積が認められるが、SK372・380より西側では表土下にV-2層が確認される。52T東と同様、東側は後世の削平が激しいことが推定される。遺構は多数認められおり、土坑I類及び土坑III類の他、SK404で石囲炉を確認したことから竪穴住居も存在する。本調査地点で確認される土坑III類は掘り下げて調査を実施していないため詳細は不明だが、土坑I類・III類と重複して検出されている。このような状況は、SK404の確認から推定したSI10の検出状況に類似しており、本調査地点の土坑III類は竪穴住居の粗掘りに伴う可能性があるかと推定している。

また台地縁辺の東端部にはⅢ-3層(貝層)がわずかに確認され、台ノ前北貝層の南端にあたるものと考えられる。

59T(南台地区台地北部)

SI15より北側が南台地区台地北部にあたる。Ⅲ-1層はSX01・SK478より北側まで堆積している。南側に向かいSI13・14付近でⅢ-2層の堆積があり、確認面がV-2層からV-1層・IV-3層へ漸移的にかわり、さらにSI15はIV-2層が遺構確認面である。

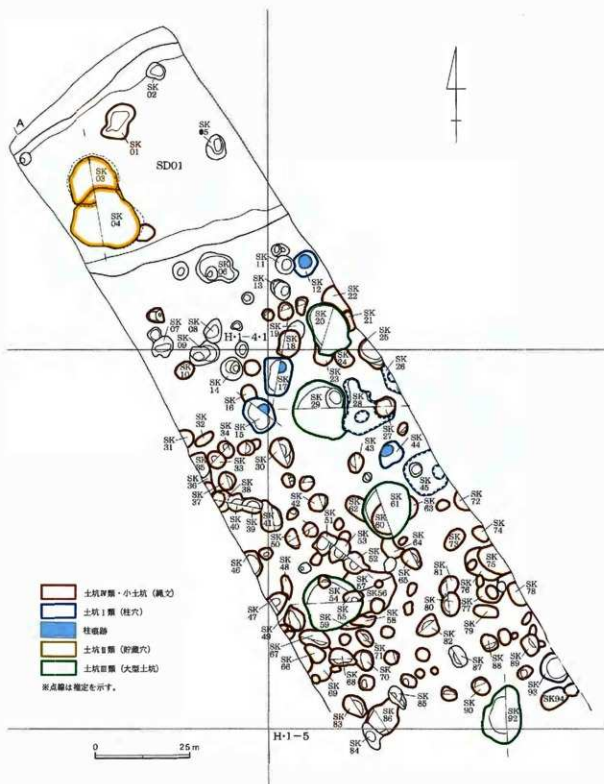


図13 51T平面図 (S=1/100)

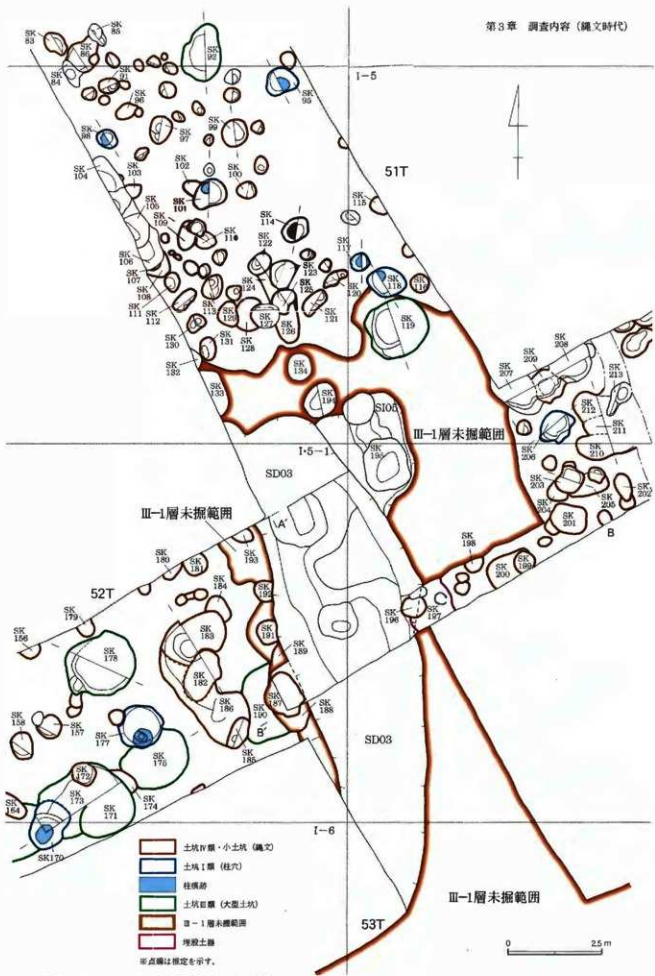


図14 51・52・53T平面図 (S=1/100)

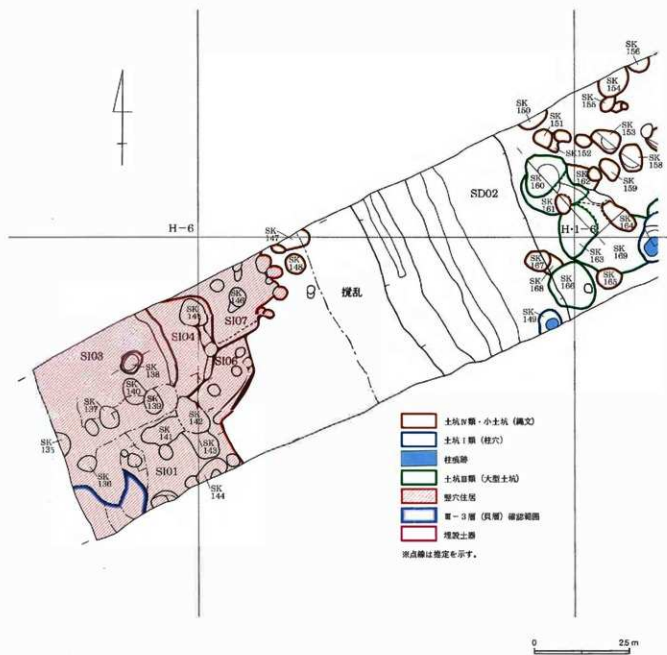


図15 52T西平面図 (S=1/100)



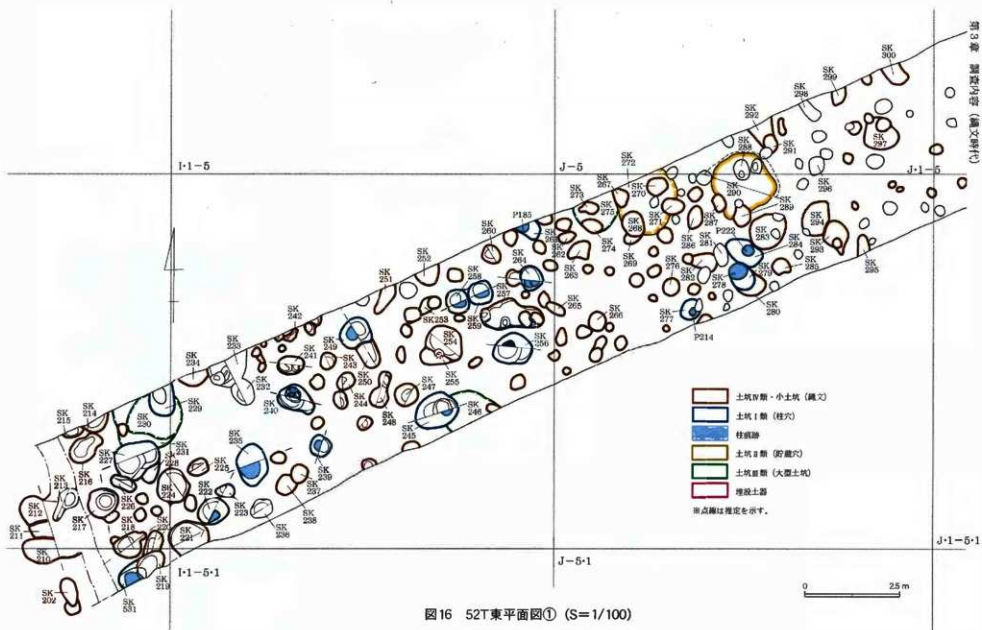
写真27
51T遺構確認状況 (南から北を望む。)
手前に堆積しているのがⅢ-1層である。



写真28
51T遺構調査後状況 (南から北を望む。)



写真29 52T西遺構調査後状況 (東から西を望む。)



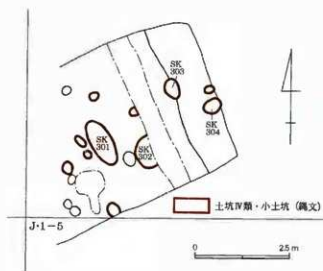


図17 52T東平面図② (S=1/100)



写真30 52T東遺構確認状況
(南西から北東を望む。)



写真31
52T東遺構調査後状況 (西から東を望む。)



写真32
52T東遺構確認状況 (東から西を望む。)

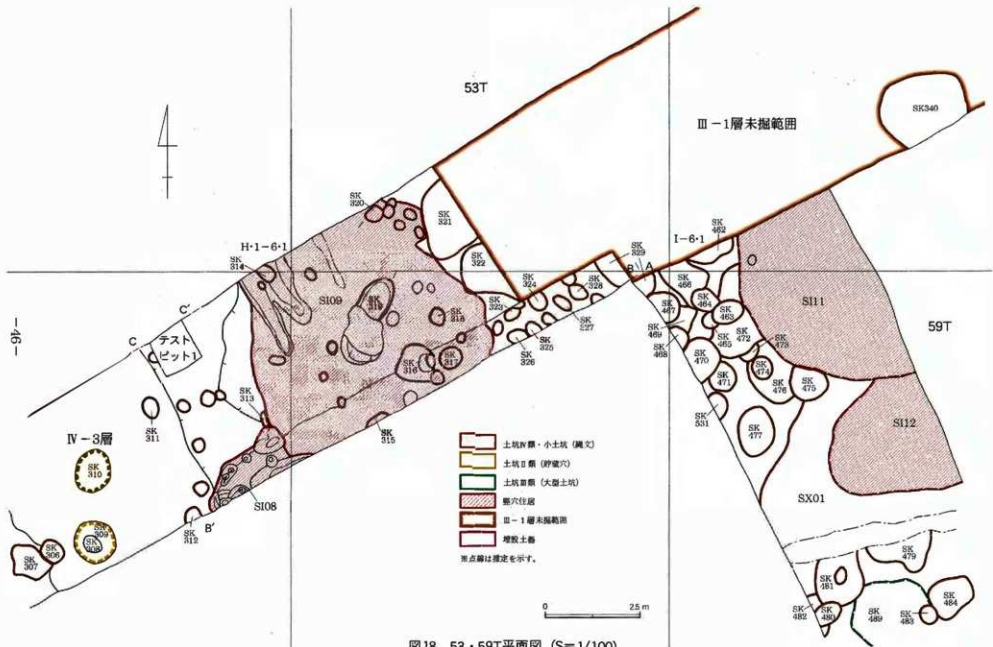


図 18 53・59T平面図 (S=1/100)



写真33

53T西遺構確認状況

(東から西を望む。)

手前に堆積しているのが、Ⅲ-1層である。Ⅲ-1層を掘り下げ、V-2層面まで下げると遺構が確認できる。奥に見えるのがⅣ-3層である。この地点のⅢ-2層下にS109が確認された。



写真34

53T西遺構確認状況

(西から東を望む。)

手前に堆積しているのがⅣ-3層、奥に見えるのがⅢ-1層である。



写真35

53T西遺構確認状況

(S109確認状況)

Ⅲ-1層を掘り下げ、V-2層を掘り込む竪穴住居のプランを確認した状況である。

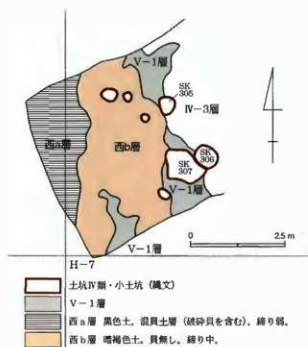


図19 53T西平面図（S=1/100）



写真36
53T東遺構確認状況（西から東を望む。）



写真37
53T東遺構確認状況（東から西を望む。）

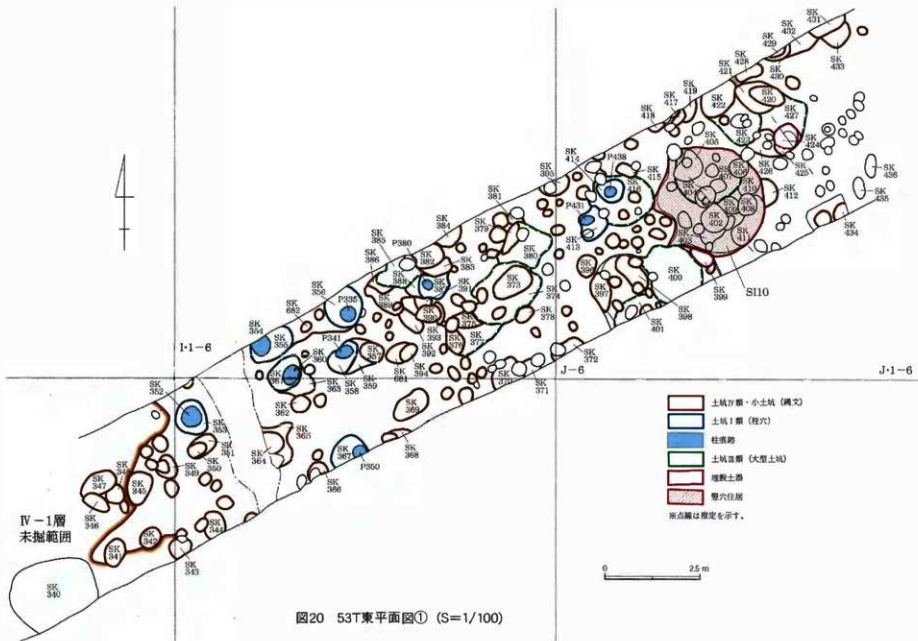


図20 53T東平面図① (S=1/100)

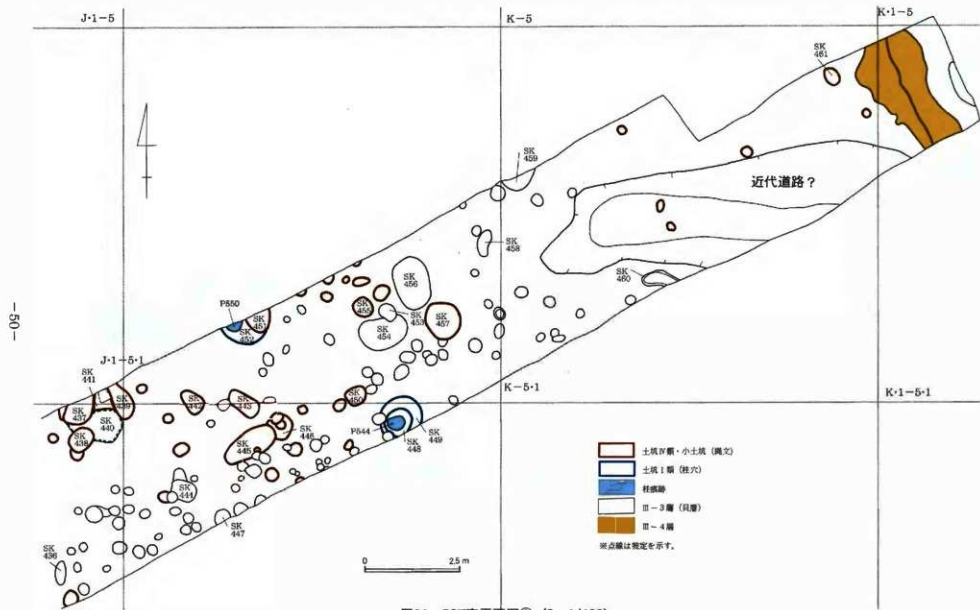


図21 53T東平面図② (S=1/100)



図22 59T平面図① (S=1/100)

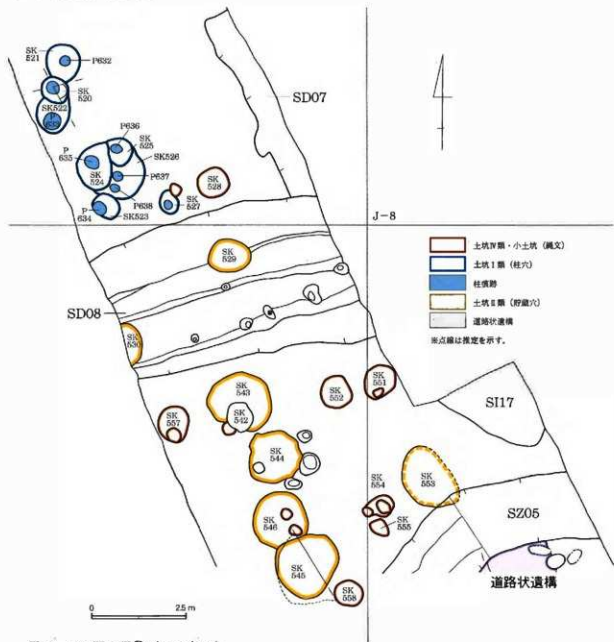


図23 59T平面図② (S=1/100)

竪穴住居が多く確認されている。SI11・12は平面プランがSI09の検出状況と類似していることから推定した。SX01もプランは明確ではないが、竪穴住居の可能性が高い。SI13はSK494が複式炉であることから推定している。またSK480が埋設土器を伴い、複式炉となる可能性があることからSI14を推定した。SK489・SK497等の土坑Ⅲ類はこれら竪穴住居に伴う可能性が高い。

59T (南台地区台地中央部)

SI15以南が台地南部に相当する。遺構確認面はⅣ-1・2層であり、Ⅲ-1層の分布は認められない。北側にはSI15・16の竪穴住居が存在するほか、ここより南側で土坑Ⅱ類(貯蔵穴)の分布が顕著に認められるようになる。土坑Ⅱ類は、南台地区台地南部及び小迫北地区まで途切れることなく広い分布範囲を示している。土坑Ⅰ類(柱穴)は、SI15のやや南側で集中して確認されており、これらは周囲に貼床面や炉跡の痕跡が認められないことから、竪穴住居に伴わないものと推定している。SI18は覆土の観察と古墳の主体部(SZ05)に切られることから縄文時代の所産と考えられ、平面プランか



写真38

59T遺構調査状況

(SD08付近より南から北を望む。〔平成13年度調査〕)

59Tではほぼ全面にわたってⅣ-2層が確認される。手前に見えるのが土坑Ⅰ類（柱穴）である。



写真39

59T遺構調査状況

(SD08付近より北から南を望む。〔平成13年度調査〕)

土坑Ⅱ類（貯蔵穴）が集中している状況が認められる。半円形プランの溝がSZ06である。



写真40

59T遺構調査状況（SZ06北側周溝付近より北から南を望む。〔平成14年度調査〕）

中央に暗く見えるのが道路状遺構、それを切る黒い覆土がSZ06南側周溝及びSI20である。



写真41

59T遺構調査状況

(調査区南端から北を望む。〔平成14年度調査〕)

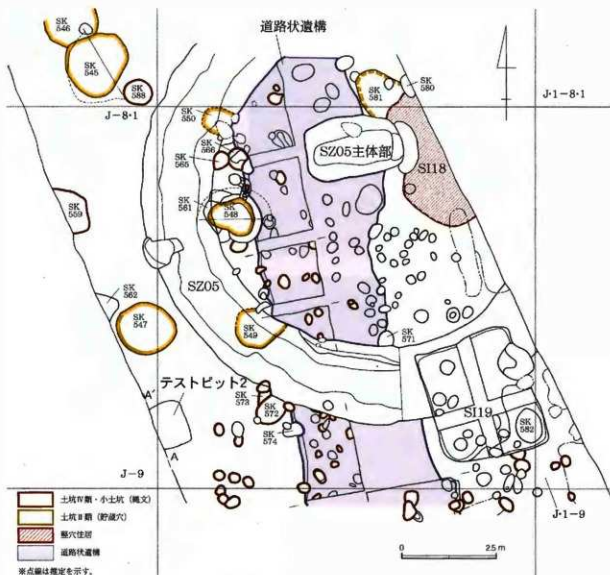


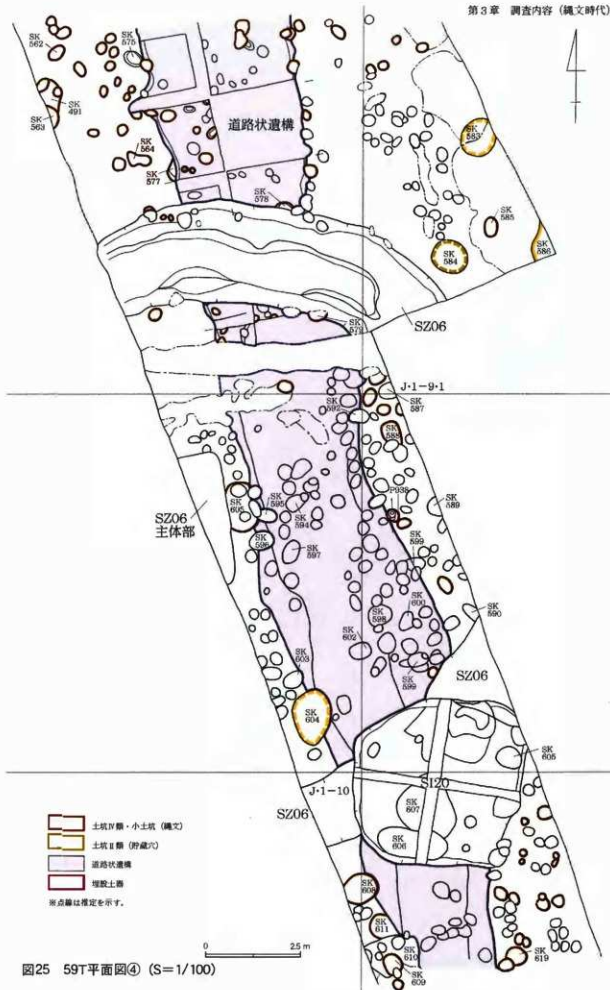
図24 59T平面図③ (S=1/100)



写真42

59T遺構調査状況

(SZ06北側周溝付近より南から北を望む。〔平成13年度調査〕)
中央にやや暗く見えるのが道路状遺構である。SZ05に切られている状況が確認できる。



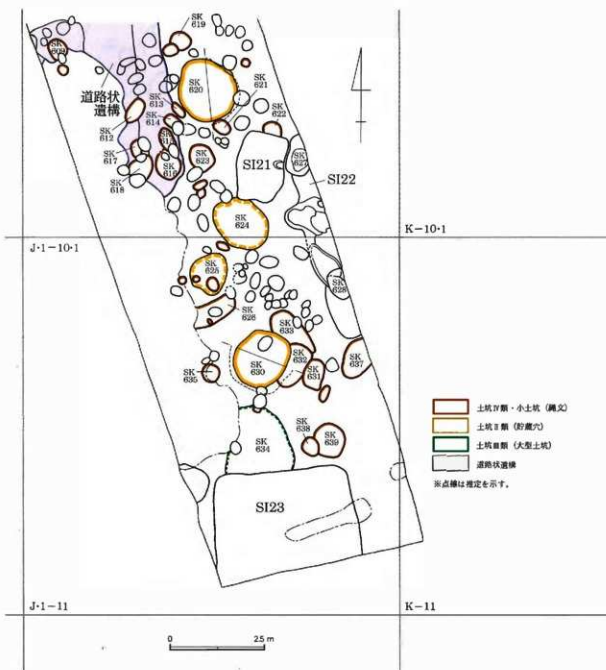


図26 59T平面図⑤ (S=1/100)

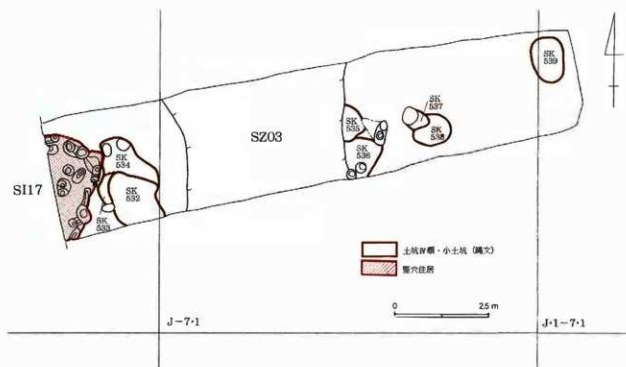


図27 60T平面図 (S=1/100)



写真43 60T調査状況 (西から東を望む.)
中央の溝がSZ03周溝である。



写真44 61T調査状況 (南から北を望む.)
中央の溝がSZ02周溝である。

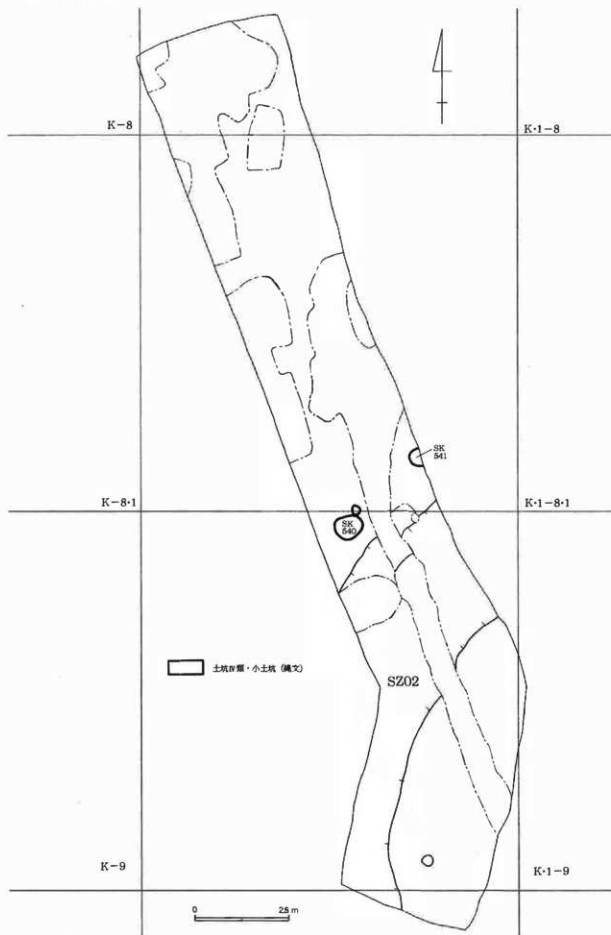


図28 61T平面図 (S=1/100)

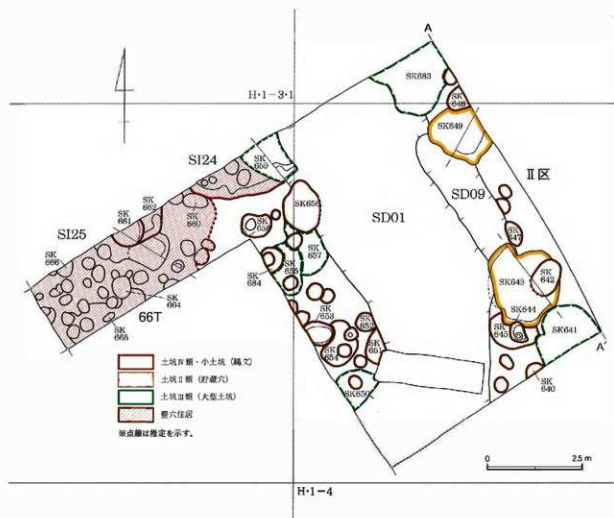


図29 66T・II区平面図 (S=1/100)

ら竪穴住居と推定した。また最大長約40m、幅3~4m、深さ10~20cmの掘り込みを持つ遺構が確認され、道路状遺構とした。土坑IV類の遺構数は台地北部に比較し、極めて少なくなっており、全体的な遺構数も少ない。

この他、墳丘は失われているが2基の古墳が主体部を伴って新たに確認された (SZ05・06)。また、平安時代の竪穴住居が6軒確認されている (SI17・19~23)。時期不明の溝も2条確認されている (SD07・08)。

60T (南台地区台地中央部)

土坑IV類・小土坑の他、竪穴住居が確認されている。確認面はIV-2層である。また、これまで3号墳とされていた古墳の周溝が確認されている (SZ03)。

61T (南台地区台地中央部)

削平が著しく、縄文時代の遺構としては、土坑IV類・小土坑がわずかに確認されているだけである。遺構確認面はIV-2層である。また、これまで2号墳と称されてきた古墳の周溝が確認されている (SZ02)。

66T・II区 (南台地区台地北部)

南台地区の北端にあたる調査区である。66TではIV-2層が確認された。IV-2層上位には、遺構



写真45

Ⅱ区調査前状況 (南から北を望む。)Ⅲ-1層を切ってSD01が確認される。



写真46

Ⅱ区調査前状況

覆土と考えられるが、Ⅲ-2層が堆積している。

Ⅱ区ではⅢ-1層下にⅣ-3層が確認された。遺構確認面はⅣ-3層である。当地点のⅢ-1層はやや粘質があり、Ⅲ-2層との漸移的な状況であることから、図11等で示すⅢ-1層分布範囲からは除外している。しかし、66TのⅢ-2層と比較すると砂質系統であり、大別するとⅢ-1層に含めて考えている。

66Tでは、竪穴住居が2軒確認されている。Ⅱ区では中央に古墳の周溝の可能性のあるSD01があり、その両側にⅢ-1層の堆積が認められる。Ⅲ-1層下には土坑Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類が多く確認された。SD01は51Tで確認された溝と同一遺構と考えられ、4号墳とされる塚状の高まりを区画するものと考えられる。しかし、4号墳については、分布状況及び高まりの形態から古墳では無い可能性もあり、今後の検討を要する。その他、SD01を切って時期不明のSD09が存在する。

3. 竪穴住居

南台地区における縄文時代の竪穴住居は、51T西で推定を含めて6軒、53T西で2軒、53T東で1軒、59Tで推定を含めて7軒、60Tで1軒、Ⅱ区で2軒の合計19軒確認した。炉・周溝等を確認し、確実なものとしては14軒である。Ⅲ-1層分布範囲周縁部に多く分布し、台地縁辺部及び南側の台地北部、中央部の境付近に分布している。

SI01~04・06・07 (52T西・図30)

52T東端に重複して検出された住居群である。確認当初は、斜面部に向かって縄文包含層(Ⅲ-1・2層相当)が堆積している状況が認められ、Ⅲ-3層(貝層)上層と考えていたが、調査を実施したところ、貼床・周溝が確認され竪穴住居が重複しているものと考えられた。

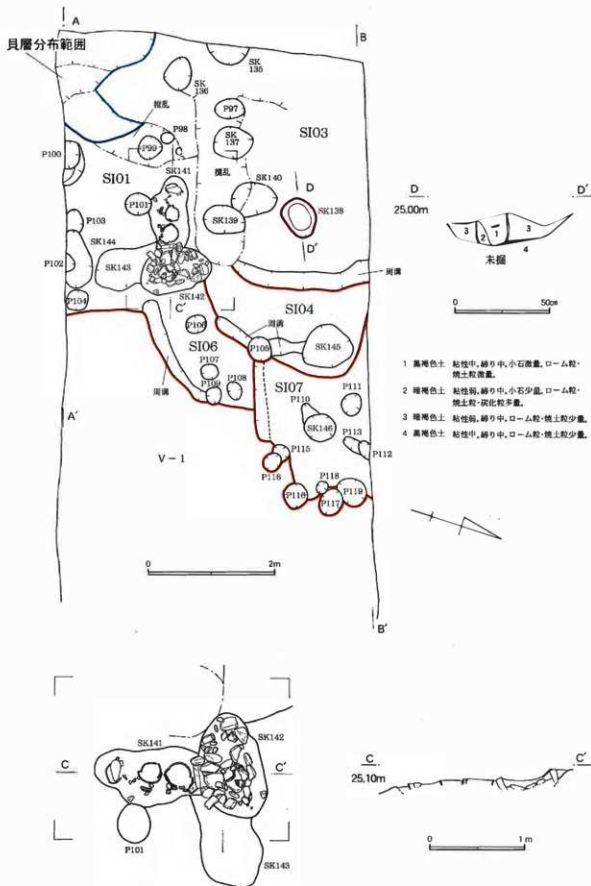
これらは後世の耕作等による掘削も入り、遺存状況は良くない。各竪穴住居の壁の立ち上がりを確認することができず、周溝等によってその範囲を推定している。よって、各竪穴住居の平面プランも定かではない。各遺構に伴う確実な覆土も不明確であり、Ⅲ層上からの切りあい関係を確認することはできなかった。貼床も土間状に硬化している状況ではなく、やや締まりがあり、ロームブロックを多く含むような状況を確認して貼床と判断している。貼床及び周溝確認範囲の東側に堆積する遺構確認面はⅤ-1層である。また、ここで確認されている土坑及び小土坑については、どの竪穴住居に伴うものか即断できなかったため、個々に遺構番号を付けている。

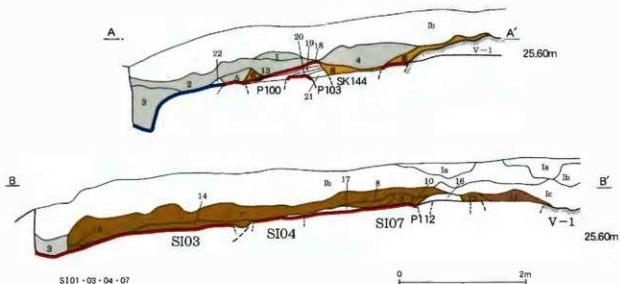
本住居群で最も新しい段階と考えられるのが、SI01である。SI01は複式炉であるSK141・142の存在から竪穴住居と考えた。西端の範囲は貼床残存範囲を示したもので、本来の竪穴住居範囲ではないと考えられる。AA'断面では、P100・103付近のみ貼床面が上下に2面確認されている。SK144が上位貼床面、P100・103は下位貼床面からの掘り込みである。SK141・142の複式炉は上位が削平されているが、本住居群の中で最も新しいものと考えられることから、SI01に伴う貼床は上位貼床面と考えられる。よって本住居跡の貼床上面は、大部分が削平を受けているものと判断される。さらに本住居地の東側は、上位から後世の掘削が入り、貼床が破壊されていた。貼床が確認できなかった部分にはⅢ-3層(貝層)が確認でき、SI01及びSI03は貝層上面に構築された竪穴住居であると考えられる。

SK141・142の複式炉は、土器埋設部(SK141)・石組部(SK142)から構成され、前庭部を確認することができなかった。これについては、前述の理由により既に破壊されている可能性が高い。石組部(SK142)の平面形は横楕円形を呈し、土器埋設部(SK141)と明瞭なくびれを有する。土器埋設部には3個体の土器が縦列して埋設されている。図42-1~4はSK141・142から出土した土器である。1・3は埋設土器の上部破片である。これらの出土遺物からSI01は大木10式期の所産と考えられる。

SI01に伴う土坑としては上位貼床面上から構築されるSK144が該当する。SK144はP102が柱痕跡の可能性があり、主柱穴とも推定される。SK140(SK139)との確実な重複関係は不明、SK136等がこれに対応した柱穴の可能性はある。SK138は大木9式の埋設土器があり、本住居はこれより新しい大木10式期と考えられるため、本住居の範囲としてSK138までは広がらないものと想定される。

下位貼床面に伴う遺構としてP100・P103があげられる。P100では、上面より大形土器片が出土している。図41-1は口縁部に無文帯を有し、重層した結節文が施されていることから大木4~5式の粗製土器と考えられる。同図2は大木7a式である。P103では大木8a式の胴部破片(図42-7)と変形爪形文を有する浮島・興津式(同図8)が出土している。また、上位貼床面に伴うSK144から





S101-03-04-07

- 1a 明黄灰色土 粘性弱, 締り弱。(森林作土)
 1b 黄灰色土 粘性弱, 締り弱。
 1c 黄褐色土 粘性弱, 締り弱, 砂・小レキ少量。
 1 黄褐色土 粘性弱, 締り弱, ローム粒微量。
 2 明黄褐色土 粘性中, 締り弱, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量。
 3 黄褐色土 粘性弱, 締り弱, ローム粒少量。
 4 黄褐色土 粘性中, 締り弱, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量。
 5 黄褐色土 粘性弱, 締り中, ローム粒少量。
 6 暗黄褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・炭化粒少量。
 7 暗黄褐色土 粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量, ローム粒微量。
 8 暗黄褐色土 粘性中, 締り中, 小レキ少量, ローム粒微量。(今少砂質)
 9 暗黄褐色土 粘性中, 締り強, 小レキ少量, ローム粒少量。
 10 黄褐色土 粘性中, 締り中, 小レキ微量, ローム粒微量。
 11 暗黄褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石・小レキ少量。
 12 暗黄褐色土 粘性中, 締り強, 小レキ微量, ローム粒微量。
 13 黄褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック・炭化粒少量。
 14 黄褐色土 粘性中, 締り中, 小レキ微量, ローム粒少量。
 15 黄褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒少量。
 16 褐色土 粘性強, 締り強, 小レキ少量, ローム粒少量。
 17 褐色土 粘性強, 締り強, 小レキ微量, ローム粒微量。
 18 暗黄褐色土 粘性強, 締り中, ロームブロック主体。
 19 黄褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒少量。
 20 暗黄褐色土 粘性強, 締り中, ロームブロック主体。
 21 黄褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
 22 褐色土 粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒微量。

大別土層説明

- I 表土
 II 黒色～黄褐色土
 III-1 縄文包含層遺構層土
 III-2 遺構層土
 住居跡床構築層
 貝層
 V-1 砂質ローム～砂質砂層
 住居跡床面

図31 S101-04-07断面図 (S=1/60)



写真47

52T西住居群(西から東を望む。)周囲によって重畳して住居が存在することを確認した。



写真48 52T西住居群調査前情况（東から西を望む。）
縁辺部に包含層が確認されている。この下層から住居群が検出された。



写真49 S101様式炉（SK141・142）



写真50 52T西住居群（北東から南西を望む。）



写真51 52T西調査区断面（図31断面AA）
右側に上位粘床が確認され、それを掘り込んでSK144が認められる。



写真52 S107検出状況（東から西を望む。）
V-1層上面に構築されている。P119から大形土器片が出土している。



写真53 52T南西隅調査状況（西から）
住居を壊す擾乱下から、貝層が確認される。



写真54 SK138半截状況（東から）
S103を切って埋設土器が確認される。

も底部に網代痕をもつ土器が出土している(図41-3)。SK144はP103を切っていることから、これに伴う遺物と考えられる。これらの出土遺物は下位に存在するⅢ-3層(貝層)に伴う可能性があり、下位貼床面の時期を示すものではないが、下位貼床面は大木8a式期以降、SI01(大木10)以前の所産と推定される。この下位貼床面をSI01とは別遺構とし、推定ではあるがSI02と遺構番号を付けておく。

SI03は、SI01の北側に位置し、周溝及び貼床面を離脱したことから竪穴住居と考えた。SI01とは周溝から想定されるプランが異なるため別住居と考えられる。SI01と重複する可能性が高いが、重複関係は明らかではなかった。BB'断面の14・15層がSI03の覆土と考えられるが、極めて薄い堆積でSI03に離実に伴う遺物はほとんど認められなかった。

SI03は、SK135、P97付近の東側では攪乱により、貼床が破壊されている。この部分で貼床面下層が確認され、少量の出土遺物が得られている。図42-5は大木9式の口縁部、同図6は大木7b式と考えられる。また、本住居に伴う土坑は明確ではないが、SK139は貼床面上から構築されており、埋設土器を伴う。出土土器は写真112-3であり、大木9式に相当する。このことからSI03は大木9式に構築されたものと考えられる。また、本住居床面からは緑色凝灰岩製の垂飾(図152-2)が出土している。

SI04は周溝及び貼床面を離脱したことから竪穴住居とした。SI03の周溝に切られており、SI06・07とは貼床面の色調が異なることから、これらを切って構築されたものと判断した。周溝から少量の出土遺物が認められる。図42-9は大木6式、同図10は大木7a式と考えられる。

SI04に伴う遺構としてP105・SK145、さらに攪乱下から確認したSK139が推定される。これらの上面からではあるが、少量の土器が出土している。図42-11は大木7a式、同図12は大木7式と考えられる。これらの出土遺物から、SI04は大木7a式期の所産と考えられる。

SI07は周溝及び貼床面を離脱したことから竪穴住居とした。SI04に切れ、SI06を切る。覆土はBB'断面の8~10層が該当するが、極めて薄い堆積で本住居に伴う遺物はほとんどない。本住居に伴う遺構としてはP110~119が想定され、P119上面からは大木5式の大形土器片が出土している(図42-16)。この検出状況から、本住居は大木5式期の所産と考えられる。

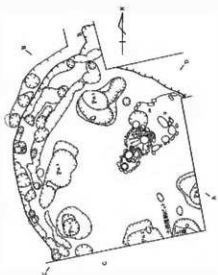


図32 福島大学考古学研究会調査
第1号住居跡

溝尻貝塚(福島大学学生考古学会1971)より
転載

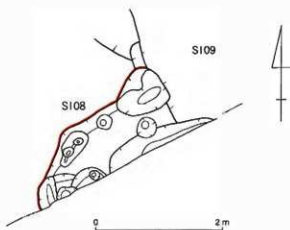


図33 SI08実測図(S=1/60)

SI06は周溝及び貼床面を確認したことから竪穴住居とした。SI01・04・07に切られる。本住居に伴う遺物はほとんどないが、本住居に伴う遺構としてP106～109があり、P109からは大木5式の土器片が出土している。SI07に切られる重複関係及び出土遺物から、SI06は大木5式期の所産と考えられる。

SI08 (53T東・図32・33)

本住居は一部が確認されただけである。床面まで表土が入っている状況が確認されたことや検出位置から、福島大学学生考古学会調査（以下、「福大調査」とする。）で検出された「第1号住居跡」の一部と考えられる（福島大学学生考古学会1971）。今回の調査成果と報告書図面との重ねあわせを試みたが、埋め戻し後の変容もあると思われ、整合しなかった。福大調査では、径8.5mを測り、5本主柱で土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉が確認されている。所属時期は大木10式期である。遺構確認面は本調査・福大調査ともに砂質ローム（IV-3層）である。貼床面は軟弱である。SI09との重複関係は不明である。

SI09 (53T西・図34)

本住居跡は、Ⅲ-1層の堆積状況を確認するため、南壁にサブトレンチを設定し、調査を実施したところ確認されたものである。調査は、全体的な平面プランを確認するため、調査区全体でⅢ-1層を掘り下げ、V-2層を遺構確認面として調査を行った。南東側のみ掘り下げて調査を行っている。掘りこみの深さは約30cmあり、覆土は暗褐色砂質土（Ⅲ-1層）を基調としている。床面底面はV-2層（砂層）であり、他のV-2層上面に比較するとやや締まってはいるが、硬化した状況は認められなかった。

住居の平面形は径6.5m前後の不整形円形を呈する。東側のみ周溝が確認され、二重になる箇所が認められることから、住居の拡張等も想定される。

複式炉は住居の中心よりやや壁際に構築されている。土器埋設部（石組）・石組部・前庭部から構築されている。前庭部は逆U字形の平面形を呈し、周溝を切るように検出されている。また、前庭部を掘り込み、深さ約60cmのP315が伴う。石組部と土器埋設部は、ほとんどぐびれを持っていない。石組部は上面が被熱している状況が確認された。土器埋設部は、横に3個体、直交して1個体と4個体の土器が埋設されており、西側の先端は攪乱されていたが、平面形は三角形を呈していたものと考えられる。

柱穴はSK335・SK330が相当するものと考えられ、半裁して調査を行っている。いずれも明瞭な柱痕跡を認めることができなかったが、SK335が径70cm、床面からの深さ90cm、SK330が径110cm、深さ90cmと大きな掘り込みを持ち、主柱穴と考えられる。これらの配置から本住居跡は3本あるいは5本主柱の竪穴住居であることが推定できる。

出土遺物は比較的多くあり、大木9～10式が出土している（図43-1～8）。特に大木10式の土器が多いことから、本住居は大木10式期の所産と考えられる。

本住居跡を掘り込んで、SK320がある。SK320は埋設土器を伴っており、縄文が施されているだけではあるが、中期末～後期前半の所産と考えられる（写真112-4）。

SI10 (53T東・図36)

SK404が石囲炉であることから竪穴住居と考え、SI10とした。貼床及び周溝、壁は確認されていない。SK404周辺は土坑Ⅰ類とⅢ類が重複して検出されている。これらの重複の結果として全体的に掘り込まれたような状況を呈していることから、これをSI10に伴うものと考えた。これら各土坑は、住

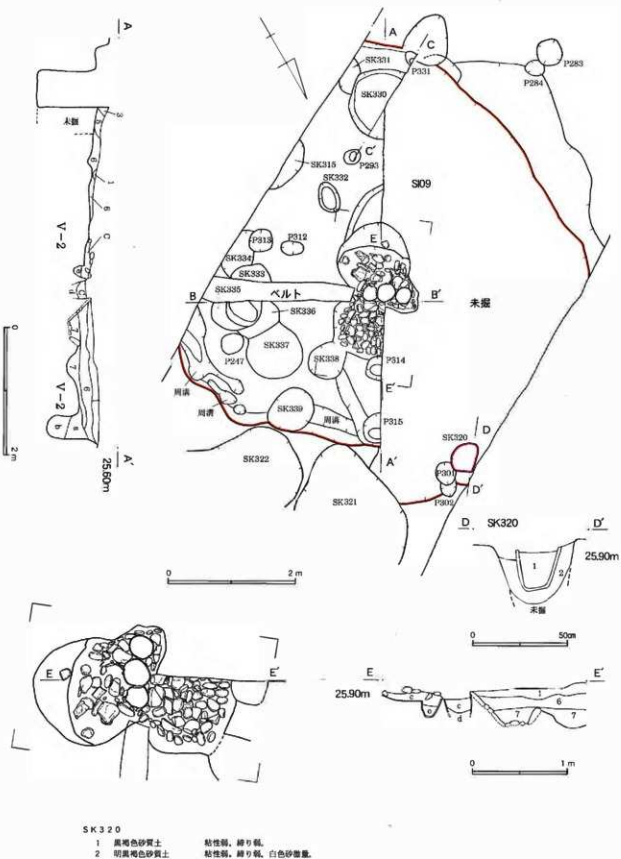


図34 SIO9実測図 (S=1/60・1/40・1/20)



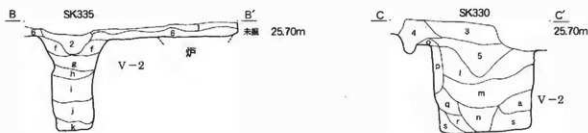
写真55
SI09全景
(東から西を望む。)床面はV-2
層、覆土はIII-1層である。



写真56
SI09複式炉 (東から)



写真57
SI09複式炉 (西から)



S109

- | | | |
|---|--------|---|
| 1 | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, ローム粒微量, 褐色砂質土ブロック少量 (図12A層) |
| 2 | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, 小石・ローム粒微量, 褐色砂質土ブロック微量, (図12B層) |
| 3 | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, |
| 4 | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り強, ローム粒微量, |
| 5 | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, ローム粒・炭化粒微量, |
| 6 | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小石微量, ローム粒少量, 炭化粒微量 (図12C層) |
| 7 | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小石微量, 白色砂ブロック微量, |
| a | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, 小石微量, 白色砂ブロック少量, |
| b | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, 小石微量, 白色砂ブロック微量, |
| c | 黒色土 | 粘性弱, 締り弱, |
| d | 暗褐色土 | 粘性弱, 締り弱, ローム粒・焼土粒微量, |
| e | 黄褐色土 | 粘性弱, 締り弱, 焼土粒微量, |
| f | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小石微量, ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量, |
| g | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小石微量, ローム粒・ロームブロック・微量, |
| h | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, ローム粒微量, |
| i | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, ローム粒微量, |
| j | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 白色砂微量, |
| k | 褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, 小レキ微量, 白色砂ブロック少量, |
| l | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小石少量, ローム粒少量, |
| m | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小石多量, ローム粒多量, |
| n | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ微量, |
| o | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, 白色砂ブロック少量, |
| p | 褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック多量, |
| q | 暗褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小石・ローム粒・白色砂ブロック少量, |
| r | 黄褐色砂質土 | 粘性弱, 締り弱, 白色砂ブロック微量, |
| s | 褐色砂質土 | 粘性弱, 締り中, 小レキ少量, |

図35 SK330・335断面図 (S=1/40)



写真58 SK335断面



写真59 SK330断面

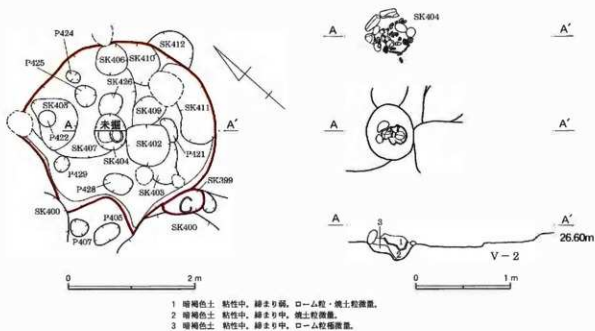


図36 S10実測図 (S=1/60・1/40)



写真60 S10全景 (南から北を望む。) 中央に石囲炉 (SK404) が認められる。



写真61 SK404確認状況
V-2層及びSK407を掘り込んで構築している。



写真62 SK404半截状況

居構築時の粗掘りや住居の柱穴である可能性が高い。同様の状況は53T東では土坑Ⅲ類を伴って多く認められる。

SK404は、遺存状況は良くないが、壁面に石を並べ、埋設土器を伴っている。出土土器(図41-5)は網取式と考えられ、SI10の所属時期は網取式期に位置づけられる。

また、隣接して埋設土器を伴うSK399がある。これも文様の特徴から網取式に相当する。SK399はSI10と同時併存かこれに伴うものと考えられる。

SI11・12 (59T・図18)

SI11・12は平面プランを確認しただけで、掘り込んで調査を実施していない。平面プランから竪穴住居と推定している。覆土はSI11が暗褐色砂質土、SI12が黒色砂質土である。いずれもV-2層を掘り込んで、構築されている。重複関係はSI11がSI12を切っている。出土遺物は上面からの出土ではあるが、図41-6が出土している。後期前半の網取式と考えられる。その他大木9式以降の遺物が出土していることから、いずれの竪穴住居も中期後半～後期前半の所産と推定される。

SI13・14 (59T・図37)

SI13・14は、いずれも貼床、周溝を確認しておらず、正確な平面プランは不明である。これらは貼床等が破壊されており、粗掘りや柱穴が残存して検出されていると考えられる。また、両遺構付近は遺構確認面が北から南にかけてV-2層からIV-2・3層に漸移的になってくる箇所にあたる。

SI13は、SK494で複式炉を確認したことから、竪穴住居とした。SK494は石組部・土器埋設部のみ確認したものである。土器埋設部には石組は認められない。図43-9が埋設土器の上部破片であり、大木9～10式に相当する。また、本住居に伴う遺構として、SK497が想定される。SK497は上層から大木10式の大形土器片(図41-7)が出土しており、SI13は大木10式期と考えられる。

SK502～504は、重複して弧状に確認され、竪穴住居の粗掘りまたは周溝に類似した検出状況であった。またSK480で埋設土器が確認され、複式炉または竪穴住居に伴う可能性が高いことから、SI14を推定した。明確な出土遺物はないが、SI13と重複して構築されているものと考えられる。

SK482～SK500については、SI13・14に伴う遺構である可能性が高い。



写真63 SI15・16確認状況
(南から北を望む。)



写真64 SI13確認状況 (北から南を望む。)
壁際に複式炉 (SK494) が確認され、周囲に
土坑が分布している。

SI15・16 (59T・図38)

SI15・16はⅣ-2層 (硬質ローム) 検出範囲で確認された竪穴住居である。SI16は床面が検出されただけであるが、SI15は深さ約30cm をもって確認されている。SI15は半分だけ掘り下げ調査を実施している。

SI15の平面プランは横長の楕円形を呈している。長軸4.5m以上、短軸4.0mを測る。SI16を切るが、SK506との確実な重複関係は不明である。

堆積状況は黒色・暗褐色土の1～6層と褐色土の7層以下で大きく異なり、特に東側に当たる1～5層については自然堆積ではなく、住居廃絶後再掘削したような状況を呈している。1～5層は土器の出土量も多く、住居廃絶後、土器捨て場として利用された可能性が指摘できる。

周溝は調査した範囲では全周しており、壁柱穴も認められる。貼床は硬く締まっている。主柱穴は2箇所認められ (柱1・2)、周囲が複数のテラスを持ち段々掘りになっている。柱痕跡は柱1で径約30cm、柱2で40～50cmを測る。この柱の配置関係から、本住居は3本または5本主柱の竪穴住居と考えられる。

複式炉は土器埋設部 (石組)・石組部・前庭部からなる。前庭部の平面形は長方形で、極めて貧弱であり、壁面から独立している。石組部と土器埋設部には明瞭なくびれを持ち、いずれも円形の平面形を示している。土器埋設部には1個体の土器が埋設されている。埋設土器の下層～中層には遺構覆土とは異なる黒色土の堆積が認められる。

出土遺物は多くあり、図44に一部を掲載した。1・2は大木9式、その他は大木10式と考えられる。7は埋設土器の上部破片である。4・5、8・9、10・11がそれぞれ同一個体と考えられる。これらの出土遺物から、本住居は大木10式の所産と考えられる。

SI16は床面と周溝を確認しただけであり、表土直下に検出されたものである。平面形は円形あるいは不整形円形を呈すると推定される。SK505及びSI15に切られる。周溝は確認した範囲では全周しており、壁柱穴も認められる。周溝からわずかに出土遺物があり、小破片であり図示できないが大木9～10式の土器を確認している。またSI16-P1からは上面から剥片が集中して出土している。SI16は重複関係と出土遺物から大木9～10式期に構築された可能性が高いと考えられる。

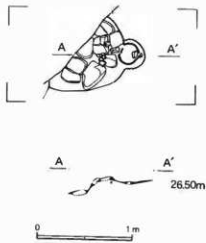
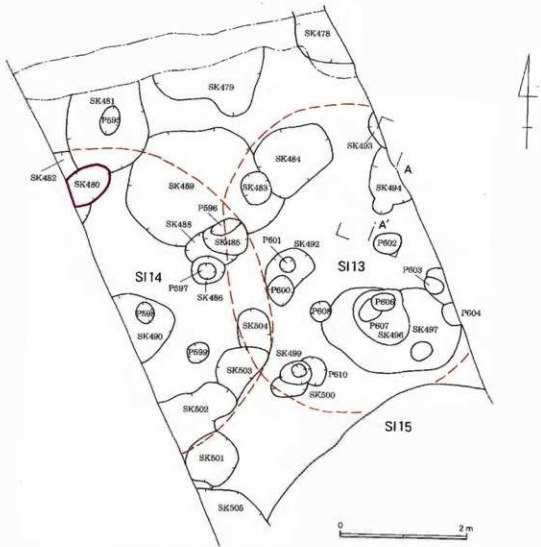


図37 SI13・14実測図 (S=1/60・1/40)

写真65 SK494 (SI13模式炉確認状況)

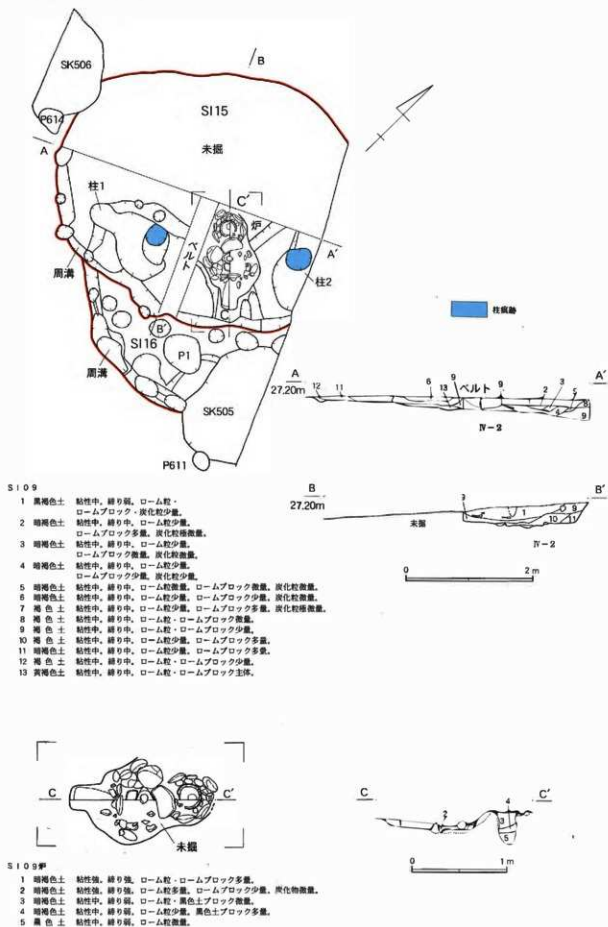


図38 SI15・16実測図 (S=1/60・1/40)



写真66 SI13全景 (南から北を望む。) IV-2層 (硬質ローム) を掘り込んで構築される。



写真67 SI13土器出土状況 (東から)
上層から多くの土器が出土している。



写真68 SI13複式炉検出状況



写真69 SI16全景 (南から)

SI17 (60T・図39)

住居の北東隅が検出されたものである。IV-2層を掘り下げて構築されている。平面形はコーナーがやや鋭角的であることから方形に近い形態を取るものと推定される。掘りこみは非常に浅く、上面は削平を受けているものと判断される。堆積土は暗褐色土を基調とする。貼床はやや硬く締まっている。周溝が途切れながらも確認され、多くの壁柱穴が確認される。明瞭な柱穴及び炉は確認できなかった。少量の出土遺物があり、図43-11~13が該当する。いずれも網取式に相当する。この出土遺物から、本住居は、網取式期の所産と考えられる。

SI18 (59T図24)

他の竪穴住居と異なり、南台地区台地中央部の土坑Ⅱ類（貯蔵穴）が多く分布する中に確認されたものである。平面プランを確認しただけで、掘り込んで調査を実施していない。平面プランから竪穴住居と推定している。覆土は暗褐色土を基調としており、隣接する縄文時代の遺構覆土に類似する。また、古墳の主体部（SZ01主体部）に切られており、他の土坑に比較し大形であることから縄文時代の竪穴住居と推定した。平面形は不整円形か隅丸方形と考えられる。出土遺物は認められなかったため、時期は不明である。

SI24・25 (66TⅡ区・図40)

南台地区台地北部の北端で確認されたものである。SI25は貼床面と炉を確認したことから、SI24は貼床面と周溝を確認したことから竪穴住居とした。SI24より南側ではIV-3層（砂質ローム）が遺構確認面であり、西側にあたるSI25ではIV-2層（硬質ローム）が確認される。確認面は西から東へ、SI25からSI24へやや傾斜していることが認められる。

SI24は部分的に確認されただけであるが、周溝を伴う竪穴住居である。SK659に切られており、SI25を切って構築されている。覆土は8層が相当し、暗褐色土である。層厚は15~20cmである。平面形は定かではないが、円形及び不整円形と推定される。貼床はやや硬化している。住居に伴う明瞭な柱穴及び炉は確認されなかった。出土遺物はわずかにあり、図45-7・8が該当する。7は大木8b式、8は大木10式である。

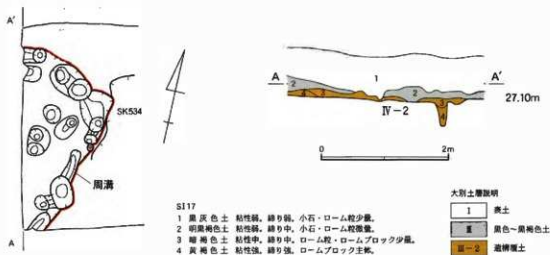
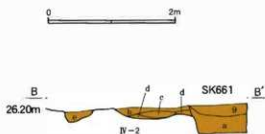
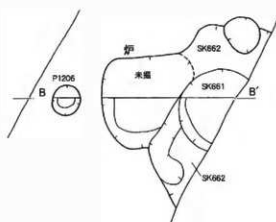
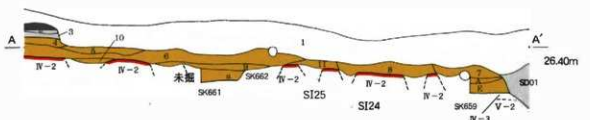


図39 SI17実測図 (S=1/60)



大別土層説明

I	表土
II	縄文色含層・遺構覆土
III-2	縄文色含層・遺構覆土
IV-2	硬質ローム (貼床面)

SI24・25

- 1 灰黒褐色土 粘性弱、緑り弱、小石・小レキ少量。
- 2 暗褐色土 粘性弱、緑り弱、小石少量、ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒微量。(≡≡砂質) 古墳墳丘構造層?
- 3 黒色土 粘性弱、緑り弱、ローム粒少量、炭化粒微量、古墳下、旧表土?
- 4 暗褐色土 粘性中、緑り中、ローム粒・ロームブロック少量、炭化粒微量。
- 5 暗褐色土 粘性中、緑り中、ローム粒少量。
- 6 暗褐色土 粘性中、緑り中、ローム粒・ロームブロック少量、焼土粒・炭化粒微量。
- 7 暗褐色土 粘性中、緑り中、ローム粒・炭化粒少量、ロームブロック・焼土粒微量。
- 8 暗褐色土 粘性中、緑り中、ローム粒多量、ロームブロック少量、焼土粒・炭化粒微量。
- 9 暗褐色土 粘性中、緑り中、ローム粒多量、ロームブロック・炭化粒少量、焼土粒微量。
- 10 青褐色土 粘性強、緑り強、ロームブロック主体。
- 11 暗褐色土 粘性強、緑り強、ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒少量。
- a 暗褐色土 粘性中、緑り強、ローム粒多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。
- b 暗褐色土 粘性強、緑り弱、ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒・焼土ブロック・炭化粒少量。
- c 赤褐色土 粘性弱、緑り強、焼土主体。
- d 青褐色土 粘性強、緑り中、硬質ロームブロック主体、焼土粒・焼土ブロック少量。
- e 暗褐色土 粘性強、緑り中、ローム粒多量、ロームブロック少量、炭化粒微量。
- A 暗褐色土 粘性強、緑り弱、ローム粒少量、炭化物微量。
- E 暗褐色土 粘性強、緑り強、ローム粒・ロームブロック少量、炭化物微量。

図40 SI24・25実測図 (S=1/60・1/40)



写真70 SI25（南から）IV-2層上に貼床が構築されている。



写真71 SI24（西から）
SK659に切られているが、周溝が確認できる。



写真72 SI25石囲炉半截状況
SK661に切られている。

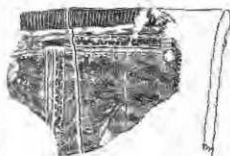


写真73 SI17調査状況（南西から）
標柱穴が多く確認される。

52T P100



1



2

52T SK144



3

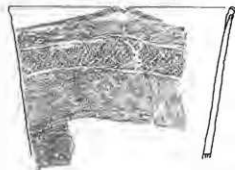


53T SK399



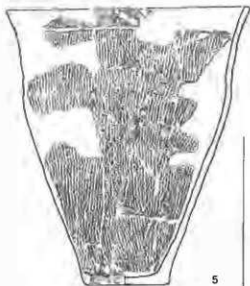
4

59T S111



6

53T SK404



5

59T SK497

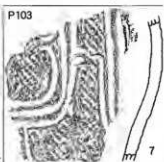
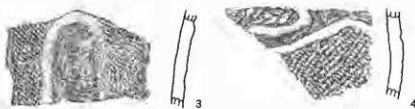


7

0 10cm

図41 竪穴住居・土坑出土土器① (S=1/4)

SK141・142



SI03床下



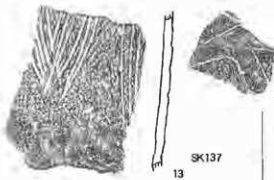
SI04周溝



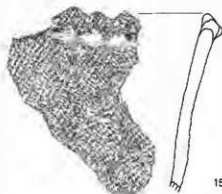
SK139



SK145



P109



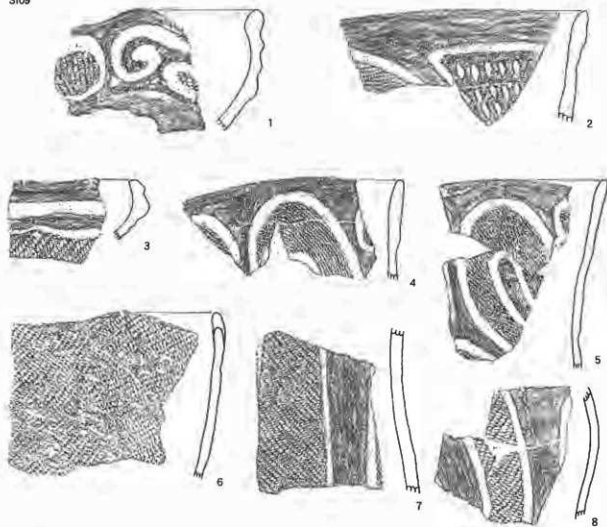
P119



図42 竪穴住居・土坑出土土器② (S=1/3)

0 10cm

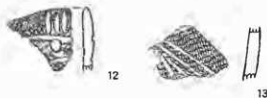
SI09



SK494



SI17



0 10cm

図43 竪穴住居・土坑出土土器③ (S=1/3)

SI15

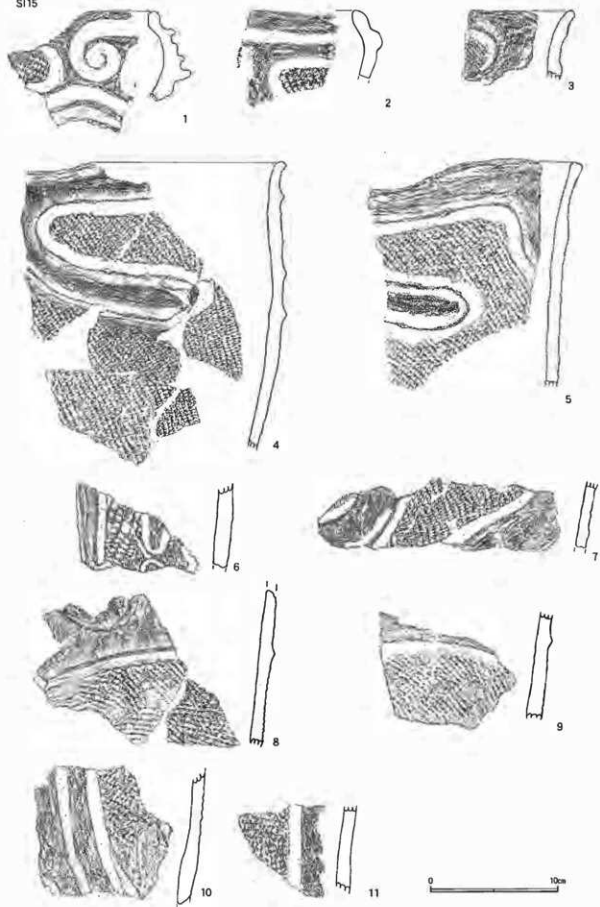


図44 竪穴住居出土土器④ (S=1/3)

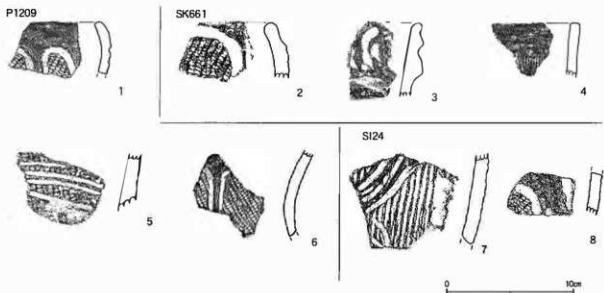


図45 竪穴住居・土坑出土土器⑤ (S=1/3)

SI25は貼床と石囲炉が確認されただけである。壁・周溝は確認できず、平面プランも不明である。貼床は比較的硬くしまっている。床面上から多数の遺構が確認されているが、本住居に伴うものかどうか不明である。よって柱穴も不明である。SK661・662は石囲炉を壊していることから、本住居に伴わず、別遺構と考えられる。石囲炉は半截して調査を実施した。深さは約15cmあり、中層に明瞭な焼土層が存在する。底面は被熱している状況が観察される。

本住居の覆土は、4～6・11層が相当する。暗褐色土を基調とし、10～30cmの層厚がある。本住居を切るSK661も住居覆土上からの掘り込みではなく、床面上からの掘り込みであり、これらはほぼ同時に埋設した可能性が高い。

本住居覆土中からはわずかな遺物が出土したが、各遺構が本住居に伴うものかどうか確定できないため、多くの混入が予測される。時期としては大木9～綱取式の時期が多い。床面上に確認したP1209では、大木9式(図45-1・6)と綱取式(同図5)が出土している。また、本住居を切るSK661からは大木9式(同図2)と綱取式(同図3・4)が出土している。先述したとおりSK661は本住居とほぼ同時に埋設したものと考えられるため、SI25は下限をとって綱取式の所産と推定されるが、さらに遡る可能性は残る。また、本住居が綱取式とすると、それを切るSI24も綱取式以後に比定される。ただ、わずかな出土遺物で判断しているため、ここではこの両住居跡を綱取式期の可能性が高いが、大木9～綱取式期までとしておく。

また、西端にはⅡ層とした2・3層が、本住居の上層に堆積している。2層はロームブロックが多く認められ、埋土の可能性がある。2層下の3層は、逆にロームブロックを全く含まない層で対照的な堆積状況であった。本住居の西側には4号墳とされる塚状の高まりがあり、2層がこの墳丘構築層、3層が墳丘下の旧表土とも考えられる。ただし、わずかな調査範囲であり、現在のところ推定の域を出ない。

4. 土坑Ⅰ類

土坑Ⅰ類は柱痕跡を確認したものやSI09の主柱穴に類似した径が大きく掘り方が深いものを分類したものである。南台地区台地北部に集中しており、一部台地中央部にも存在する。遺構数としては、南台地区全体で推定も含め58基検出している。これらは径50cm程度の小型のものから、1m近くある大型のものが存在する。平均すると80cm前後のものが多く、深さも30～100cmまでの幅があるが、これについては各遺構の遺存状況もあるので、一概に傾向を指摘することができない。柱痕跡の径は30cm前後が多く、最大で約50cmである。平面形は円形及び不整形円形を呈するものが大部分である。

この土坑Ⅰ類のうち、半裁して調査したものだけを図46～49に掲載した(注1)。なお、当初の調査では、半裁前に柱痕跡の確認を行わなかったものまたは見落としたものが多くあるため、柱痕跡の平面プランを半分確認できていないものが多数ある(注2)。また、土坑Ⅰ類と重複及び隣接した土坑Ⅳ類等についてもあわせて掲載している。

SK15 (51T・図46)

長軸100cm、短軸70cmを測り、不整形円形の平面形である。深さは約20cmと浅く、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は少量あり、加曽利B式が出土している(図50-1～3)。これらの出土遺物から加曽利B式期の所産と考えられる。

SK17 (51T・図46)

長軸100cm、短軸70cmを測り、隅丸長方形の平面形である。深さは約30cmと浅く、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は上面確認時に隣接するSK17・18と一括してあげたものだけであるが、大木10～綱取式の遺物が出土している(図50-4・5)。所属時期は中期後半～後期前半に位置づけられる。

SK93 (51T・図46)

径約80cmを測り、円形の平面形である。深さは約75cmある。上面では柱痕跡として認識できず、断面で柱痕跡を確認したものである。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は少量あり、綱取式が出土している(図50-6～8)。これらの出土遺物から所属時期は、綱取式期の可能性が高い。

SK95 (51T・図46)

長軸90cm、短軸70cmを測り、不整形円形の平面形である。深さは約50cm、柱痕跡の径は約35cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

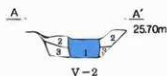
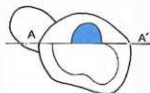
出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。

SK98 (51T・図46)

径約60cmを測り、円形の平面形である。深さは約35cmと浅く、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は少量あり、綱取式が出土している(図50-9)。この出土遺物から所属時期は綱取式期の可能性が高いが、小破片であるので時期を決定するものとは言えず、覆土の特徴から中期後半～後期前半と推定しておく。

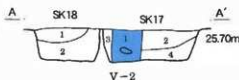
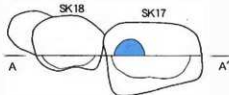
51T SK15



SK15

- 1 黒褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石・小レキ少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石・小レキ少量。

51T S17・18



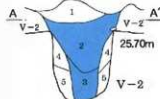
SK17

- 1 黒褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ・ローム粒少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ・ロームブロック少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ少量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ少量。

SK18

- 1 暗褐色砂質土 粘性中、締り弱、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性中、締り弱、小レキ・ローム粒少量。

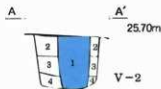
51T SK93



SK93

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石・小レキ・ローム粒・ロームブロック・炭土粒少量。
- 2 黒褐色砂質土 粘性中、締り弱、小レキ少量、炭化粒少量。
- 3 黒褐色砂質土 粘性中、締り弱、小レキ少量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- 5 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。

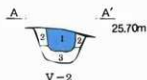
51T SK95



SK95

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性中、締り弱、小レキ少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。

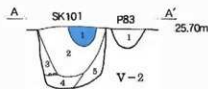
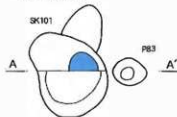
51T SK98



SK98

- 1 黒褐色砂質土 粘性中、締り中、ローム粒・炭化粒少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り強、小レキ少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り強、小レキ少量。

51T SK101



SK101

- 1 黒褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性中、締り弱、黒褐色土ブロック少量、小レキ少量。
- 4 黒褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- 5 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。

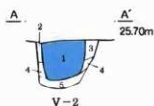
PB3

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。



図46 土坑I類実測図① (S=1/40)

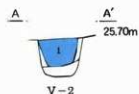
51T SK114



SK114

- 1 黄褐色砂質土 粘性中, 締り弱, 小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性中, 締り弱, ローム状少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性中, 締り弱, 小レキ多量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性中, 締り弱, 小レキ微量。
- 5 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ多量。

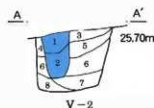
51T SK117



SK117

- 1 黄褐色砂質土 粘性中, 締り弱, 小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ多量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ少量。

51T SK118



SK118

- 1 黄褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石微量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ多量。
- 5 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ・ロームブロック微量。
- 6 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ・黒色土ブロック微量。
- 7 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱。
- 8 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ少量。

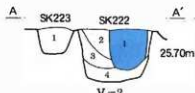
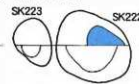
52T SK206



SK206

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 黄白色砂多量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ・黄白色砂少量。
- 5 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ少量。

52T SK222・223



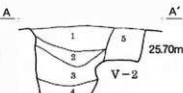
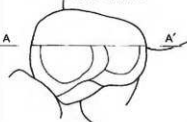
SK222

- 1 黄褐色土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 3 褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ少量。

SK223

- 1 褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ微量。

52T SK227



SK227

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 2 褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ多量。
- 5 黄褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。



図47 土坑I類実測図② (S=1/40)

SK101 (51T・図46)

長軸100cm、短軸80cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約65cm、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。

SK114 (51T・図47)

長軸80cm、短軸65cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約50cm、柱痕跡の径は約40cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。

SK117 (51T・図47)

径50cmを測り、円形の平面形である。深さは約40cm、柱痕跡の径は約40cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。

SK118 (51T・図47)

長軸90cm、短軸80cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約60cm、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。

SK206 (52T東・図47)

長軸100cm、短軸80cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約60cmあり、明確な柱痕跡は認められなかったが、堆積状況から本類に含めた。2層が柱痕跡と関係するものと推定される。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。

SK223 (52T東・図47)

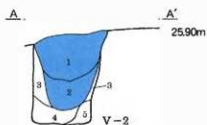
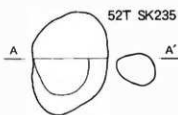
長軸80cm、短軸60cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約50cm、柱痕跡の径は約40cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は少量あり、小破片であるので時期を決定するものとは言えず、覆土の特徴から中期後半～後期前半と推定しておく。

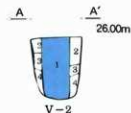
SK227 (52T東・図47)

長軸120cm、短軸100cmを測り、隅丸方形の平面形である。深さは約80cm、明確な柱痕跡は認められなかったが、断面形から本類に含めた。中段にテラスを持つが、別遺構が重複している可能性もある。V-2層を掘り込んでいる。

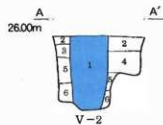
出土遺物は少量あるが(図50-10)、小破片で時期を決定するものとは言えず、覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。



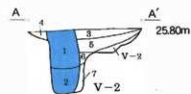
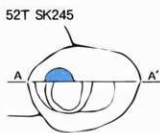
- SK235
- 1 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ多量、ローム粒微量。
 - 2 黒褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
 - 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
 - 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
 - 5 褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。



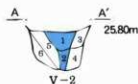
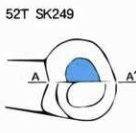
- SK239
- 1 黒褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ少量、黄白色砂微量。
 - 2 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
 - 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ多量。
 - 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ・黒褐色砂質土少量。



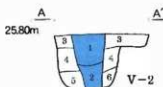
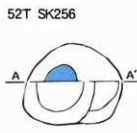
- SK240
- 1 黒褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ少量、黄白色砂少量。
 - 2 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ多量。
 - 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
 - 4 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ・黄白色砂少量。
 - 5 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ多量。
 - 6 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ・黒褐色砂質土少量。



- SK245
- 1 黒褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ・ローム粒少量。
 - 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
 - 3 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ多量。
 - 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、ロームブロック微量。
 - 5 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ多量、黄白色砂少量。
 - 6 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ多量、黄白色砂少量。
 - 7 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ多量、黄白色砂微量。



- SK249
- 1 黒褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ微量。
 - 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ微量。
 - 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ少量。
 - 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ多量、褐色砂少量。
 - 5 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石少量。
 - 6 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小石・小レキ少量、褐色砂少量。



- SK256
- 1 暗褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ少量、ローム粒微量。
 - 2 暗褐色砂質土 粘性中、締り中、小レキ少量、黄白色砂微量。
 - 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
 - 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、少レキ多量。
 - 5 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、少レキ・黄白色砂少量。
 - 6 黒褐色砂質土 粘性弱、締り弱、少レキ少量、黄白色砂多量。



図48 土坑I類実測図③ (S=1/40)



写真74 SK98半截状況



写真75 SK117半截状況



写真76 SK118半截状況



写真77 SK222半截状況



写真78 SK235半截状況



写真79 SK239半截状況

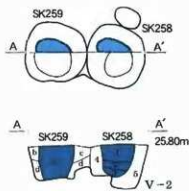


写真80 SK240半截状況



写真81 SK258・259半截状況

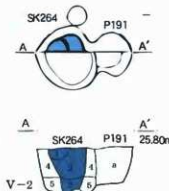
52T SK258・259



- SK258
- 1 黒色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
 - 2 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
 - 3 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
 - 4 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
 - 5 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ多量。

- SK259
- a 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。
 - b 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ多量。
 - c 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ少量。
 - d 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ少量。
小レキ・黄白色砂少量。

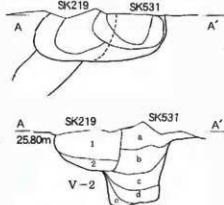
52T SK264



- SK264
- 1 黒色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ微量。
 - 2 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ少量。
ローム殻微量。
 - 3 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ少量。
 - 4 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱。
 - 5 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ少量。
黄白色砂多量。

- P191
- a 黒色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量。

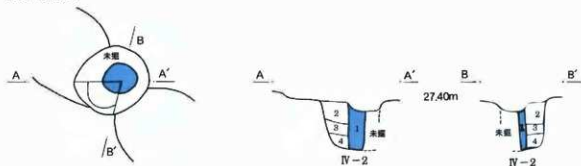
52T SK219・531



- SK219
- 1 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石少量。
 - 2 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石微量。
黄白色砂少量。

- SK531
- a 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石少量。
黒褐色砂質土少量。
 - b 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石少量。
小レキ微量, 黒褐色砂質土微量。
 - c 暗褐色砂質土 黄白色砂微量。
 - d 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小石少量。
黄白色砂少量。
 - e 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小石多量。
黄白色砂少量。

59T SK520



- SK520
- 1 黒褐色土 粘性中, 締り弱, ローム殻・ロームブロック微量, 炭化殻少量。
 - 2 暗褐色土 粘性中, 締り強, ローム殻・ロームブロック少量, 炭化殻微量。
 - 3 暗褐色土 粘性中, 締り強, ローム殻少量, ロームブロック・炭化殻微量。
 - 4 暗褐色土 粘性中, 締り強, ローム殻・ロームブロック少量, 炭化殻微量。

図49 土坑 I 類実測図④ (S=1/40)



写真82 SK264, P191半截状況



写真83 SK219・531半截状況

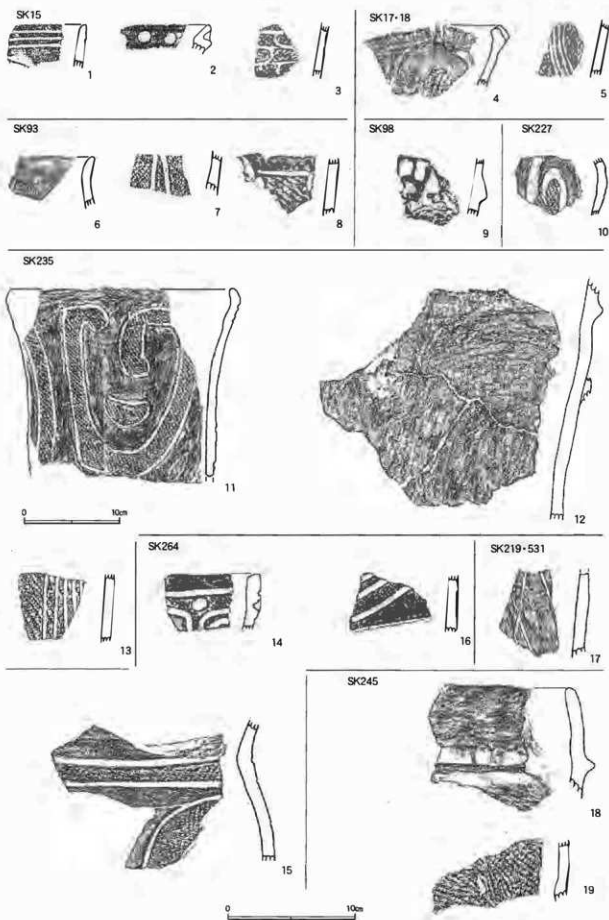
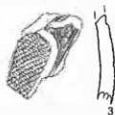
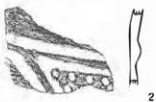


図50 土坑Ⅰ類出土土器① (S=1/4・1/3)

SK520



SK229

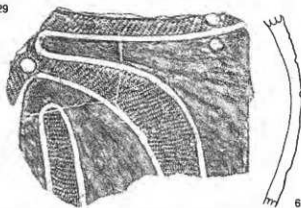


図51 土坑Ⅰ類出土土器② (S=1/3)



写真84 51T土坑Ⅰ類分布状況
(南から北を望む。)



写真85 51T SK17等土坑Ⅰ類分布状況
(西から東を望む。)



写真86 51T掘立柱建物復元例 (北西から)
SK95・99・101・114・118の土坑から柱列
を復元した。

SK235 (52T東・図48)

長軸110cm、短軸80cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約100cmあり、1・2層が柱痕跡及び抜き取り痕と考えられ、平面プランは遺構プランとはほぼ一致する状況であった。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は大型土器片等が出土している(図50-11~13)。この出土遺物から所属時期は、縄取式期と考えられる。

SK239 (52T東・図48)

径55cmを測り、円形の平面形である。深さは約60cm、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半~後期前半の可能性が高い。

SK240 (52T東・図48)

長軸100cm、短軸65cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約80cm、柱痕跡の径は約40cmを測る。中段にテラスが認められる。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半~後期前半の可能性が高い。

SK245 (52T東・図48)

長軸120cm、短軸90cmを測り、楕円形の平面形である。深さは約65cm、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は少量あり、縄取式が出土している(図50-18・19)。この出土遺物から所属時期は縄取式期の可能性が高いが、小破片であるので時期を決定するものとは言えず、覆土の特徴から中期後半~後期前半と推定しておく。

SK249 (52T東・図48)

長軸85cm、短軸70cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約45cm、柱痕跡の径は約30cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半~後期前半の可能性が高い。

SK256 (52T東・図48)

長軸100cm、短軸85cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約60cm、柱痕跡の径は約35cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半~後期前半の可能性が高い。

SK258 (52T東・図49)

径60cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約45cm、柱痕跡の径は約35cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半~後期前半の可能性が高い。



写真87 59TSK520等土坑Ⅰ類
分布状況（北から）



写真88 SK520半截状況

SK259（52T東・図49）

径60cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約35cm、柱痕跡の径は約35cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は図示できるものは認められなかった。覆土の特徴から、所属時期は中期後半～後期前半の可能性が高い。

SK264（52T東・図49）

径60cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約45cm、柱痕跡の径は約40cmを測る。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は少量あり、網取式が出土している（図50-14～16）。これらの出土遺物から、所属時期は網取式期と考えられる。

SK531（52T東・図49）

径約70cmの不整形円の平面形と推定される。SK219に切られている。深さは約85cm、明確な柱痕跡は認められなかったが、断面形から本類に含めた。V-2層を掘り込んでいる。

出土遺物はSK219と一括して取り上げたものであり、網取式に相当する（図50-17）。この出土遺物から所属時期は網取式期の可能性が高いが、一括資料であり、小破片でもあるので時期を決定するものとは言えず、覆土の特徴から中期後半～後期前半と推定しておく。

SK520（59T・図49）

他の土坑Ⅰ類と異なり、南台地区台地中央部で確認されたものである。長軸75cm、短軸85cmを測り、楕円形の平面形である。深さは約50cm、柱痕跡の径は約35cmを測る。IV-2層を掘り込んでいる。

出土遺物は少量あり、大木9～10式の土器が出土している（図51-1～5）。下限をとり、所属時期としては大木10式期と考えられる。

この他、半截はしていないが、SK229（図51-6）では網取式の大形土器片が上面から出土している。SK229の所属時期は、網取式期の所産と考えられる。また、SK27・28はたまたま別遺構が重複

しているものと判断したが、組み合わせさせて土坑Ⅰ類に含められる可能性がある(図57)。

これら土坑Ⅰ類の組み合わせを検討し、当初は建物の復元案を策定していたが、竪穴住居でもある可能性から多様な組み合わせが想定されるので、現段階では柱穴の組みあわせから建物を復元し、遺構番号をつけることを行わなかった。ただし、可能性としては次のようなものがある。

- ・51T南側のSK95・101・114・118で、長方形の6本主柱の建物の可能性がある(図14参照)。この場合、土坑Ⅳ類に含めたが、SK99はSK95・101の中央にあたり、棟持柱となる。柱間は梁間が3.5m、桁間が5m(2.5m・2.5m)となる。また、この復元範囲において遺構数が少ないことも指摘できる。
- ・52T西のSK170・177は、平面形は不明だが、柱の平面形、断面形等が類似し、有機的な関係にあると考えられる(図14参照)柱間は3.5mを測る。
- ・52T東のSK222・227・229・235・239・240が6本柱の建物の可能性がある(図16参照)。この場合、土坑Ⅳ類に含めたが、SK224が棟持柱と推定される。柱間は梁間が約2.7m、桁間が3.8m(1.5m・2.3m)を測る。SK229・235は綱取式期であると考えている。
- ・59TのSK520付近は柱穴が多く認められる。SK520付近はSI15等竪穴住居が確認されているが、SK520周辺には周溝・炉・粗掘り・壁柱穴等が確認できない。このことから、SK520等は、竪穴住居に伴うものではなく、掘立柱建物を構成するものと考えられる。構造は不明だが、切り合い関係から最も新しいSK520・SK524は有機的な関係にあると考えられる(図23参照)。柱間は2.3mを計る。SK520は大木10式期と考えている。

(注1) SK170・177は土坑Ⅲ類と重複して検出されているため、土坑Ⅲ類とあわせて図58に掲載し、記述も土坑Ⅲ類の章にまとめておく。

(注2) 柱痕跡の確認を怠ったことについては、特に範囲確認調査としては不適切であった。このほかの土坑についても、当初明確な調査目的に基づいて半載したのではない部分がある。このことについては調査指導委員会でも指摘があり、その後の調査では、半載するものについては、目的を持って調査するように努めた。

5. 土坑Ⅱ類

土坑Ⅱ類はいわゆる「貯蔵穴」とされるものである。円筒状及びフラスコ状の断面形をもち、径が1m以上あるものが多い。深さは調査地点によって差があるが、削平されていなければ1m以上あるものが多いと推定される。平面形は円形及び不整形円形を呈するものが大部分である。土坑Ⅱ類の分布は南台地区南部、小迫北・南地区まで分布が認められるが、本節では南台地区台地北部・中央部をまとめて報告する。南台地区台地北部・中央部で確認した土坑Ⅱ類は、推定も含め35基である。うち南台地区台地北部は8基、南台地区台地中央部が27基である。南台地区台地北部では台地縁辺部に分布がみられ、南台地区台地中央部～南部では広がりをもって多数存在している。Ⅲ-1層分布範囲には少ないものと考えられる。

この土坑Ⅱ類のうち、半裁して調査したものを図52～55に掲載した。

SK03 (51T・図52)

径130cmを測り、円形の平面形である。深さは約35cmをあり、断面形はフラスコ状を呈する。V-2層を掘り込んでおり、褐色土・暗褐色土の粘性のある堆積土である。A層はSD01の堆積土であり、上面はSD01に削平を受けていると判断される。SK04を切って構築されている。底面には完形の土器が掘え置かれたように出土しており、埋設土器と考えられる。覆土中からの掘り込みはなく、廃絶時に転用されたものと推定される。

出土遺物は埋設土器の写真94-1があり、大木9式に相当する。よって本土坑は大木9式期の所産と考えられる。この他、図56-1～4の土器が出土している。大木8a～8b式に相当し、本土坑より古いことから重複関係にあるSK04からの流れ込みと考えられる。

SK04 (51T・図52)

長軸190cm、短軸150cmを測り、不整形円形の平面形である。深さは約35cmあり、断面形は円筒状と推定される。V-2層を掘り込んでおり、褐色土・暗褐色土の粘性のある堆積土である。SK03に切られており、SK03同様上面はSD01に削平を受けていると判断される。

出土遺物はわずかにあり、図56-5が該当する。この他、SK03出土土器も本土坑からの流れ込みのものがあると考えられるので、本土坑は大木8式期の所産と考えられる。

SK290 (52T東・図52)

径150cmを測り、不整形円形の平面形である。深さは約70cmあり、断面形はフラスコ状を呈する。V-2層を掘り込んでおり、褐色土・黒褐色土の粘性のある堆積土である。

出土遺物はわずかにあり、図56-6・7の土器破片の他、底面に網代痕を残す底部破片（図53-1・2）が出土している。これらの遺物から本土坑は大木7a式期の所産と考えられる。

SK507 (59T・図52)

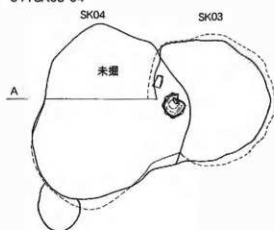
径140cmを測り、円形の平面形である。深さは約80cmあり、断面形は円筒状を呈する。IV-2層を掘り込んでおり、底面にはV-2層が確認できる。暗褐色土・黒褐色土を基調としている。

出土遺物はわずかにあり、底面に網代痕を残す底部破片（図53-3）が出土している。この出土遺物から、本土坑は前期後半～中期前半の所産と考えられる。

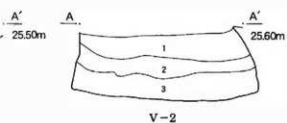
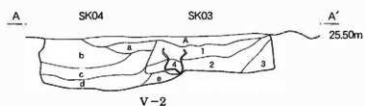
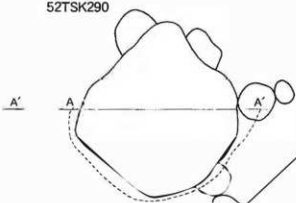
SK545 (59T・図52)

長軸170cm、短軸150cmを測り、不整形円形の平面形である。深さは約160cmあり、断面形はフラスコ状を呈する。IV-1層を掘り込んでおり、底面にはV-2層が確認できる。暗褐色土・褐色土を基調とするが、中層にあたる3層で炭化粒の集中が認められた。SK546（土坑Ⅱ類）を切って構築されている。

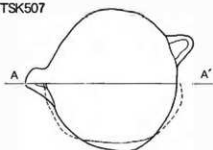
51TSK03-04



52TSK290



59TSK507



59TSK545

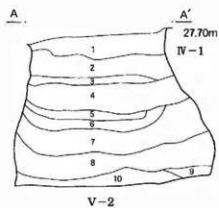
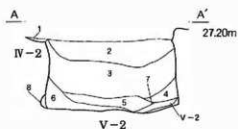
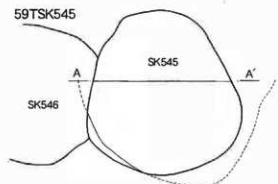


図52-1 土坑Ⅱ類実測図① (S=1/40)

第3章 調査内容 (縄文時代)

SK03	
A 黒褐色土	粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・ローム粒・ロームブロック少量,
1 褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ・ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒微量,
2 暗褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ・ローム粒・ロームブロック少量,
3 暗褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量,
4 暗褐色土	粘性中, 締り弱, ローム粒・ロームブロック微量,
SK04	
a にぶい褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量,
b にぶい褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ・ローム粒・ロームブロック多量,
c にぶい暗褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ・ローム粒・ロームブロック多量,
d 暗褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量, ローム粒・ロームブロック微量,
e 暗褐色土	粘性中, 締り中, 小石・小レキ・ローム粒・ロームブロック少量,
SK290	
1 にぶい褐色土	粘性中, 締り強, 小石・ローム粒少量, ロームブロック・炭土粒・炭化粒微量,
2 にぶい黒褐色土	粘性弱, 締り中, 小石・ローム粒・炭化粒少量, 炭土粒微量, (中々砂質)
3 黒褐色土	粘性弱, 締り弱, 小石・ローム粒・ロームブロック少量,
SK507	
1 暗褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック少量,
2 明褐色土	粘性弱, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量,
3 暗褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量,
4 にぶい暗褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量,
5 黒褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒微量,
6 黒褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック微量,
7 黒褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量,
8 褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒多量, ロームブロック極多量,
SK545	
1 暗褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック微量, 炭化粒少量,
2 暗褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量,
3 にぶい暗褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック微量, 炭化粒多量,
4 暗褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック多量, 炭化粒微量,
5 褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック極多量,
6 褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒微量, ロームブロック少量, 炭化粒微量,
7 暗褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック少量, (中々砂質)
8 暗褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック微量, (中々砂質)
9 にぶい暗褐色土	粘性弱, 締り弱, 小石・ローム粒少量
10 暗褐色土	粘性弱, 締り弱, 小石・ローム粒少量

図52-2 土坑Ⅱ類実測図①



写真89 SK03・04半截状況



写真90 SK03土器出土状況



写真91 SK290半截状況



写真92 SK507半截状況



写真93 SK545半截状況

出土遺物は少量あり(図56-8~12)、これらは大木7b~8a式に相当する。本土坑は大形土器片の12が下限であることから、大木8a式期の所産と考えた。よって、重複関係にあるSK546は、掘り下げて調査は実施していないが、大木8a式期以前の構築と考えられる。また、SK546は、SK545出土遺物から大木7b式期の可能性が高いと推定される。

SK548 (59T・図54)

長軸120cm、短軸80cmを測り、楕円形の平面形である。深さは約100cmあり、断面形はフラスコ状を呈する。Ⅳ-2層を掘り込んでおり、底面にはⅤ-2層が確認できる。褐色土を基調とするが、中層に当たる7層で炭化粒の集中がある黒褐色土が認められた。道路状遺構覆土上に確認できなかったことから、道路状遺構に切られていると考えられる。

出土遺物はわずかにあり(図56-13・14)、13は大木7b式と考えられる。しかし、小破片であり、これを持って確実な時期決定をすることはできない。重複関係にある道路状遺構が大木10式とされるので、本土坑の所属時期は大木7b式期の可能性が高く、下限は大木10式期とすること考えられる。

SK620 (59T・図54)

径150cmを測り、円形の平面形である。深さは約120cmあり、断面形はフラスコ状を呈する。Ⅳ-1層を掘り込んでおり、底面にはⅤ-1層が確認できる。褐色土・暗褐色土を基調とする。

出土遺物はほとんどなく、図示できるものは認められなかった。よって、所属時期は不明である。

SK630 (59T・図54)

長軸160cm、短軸130cmを測り、楕円形の平面形である。深さは約150cmあり、断面形はフラスコ状を呈する。Ⅳ-1層を掘り込んでおり、底面にはⅤ-1層が確認できる。褐色土・暗褐色土を基調とする。

出土遺物は中層から底部を欠いた半円形の土器が出土している(写真94-2)。その他、わずかな土器片が出土している(図56-15)。写真94-2の土器から大木8a式期の所産と考えられる。

SK643 (Ⅱ区・図54)

径180~190cmを測り、不整形形の平面形である。深さは約55cmあり、断面形はフラスコ状を呈すると考えられる。上面にⅢ-1層が堆積しており、それを除去し検出されたものである。SK642(土坑Ⅳ類)に切られる。Ⅳ-3層を掘り込んでおり、底面はⅤ-2層が確認できる。暗褐色土を基調とした粘性のある堆積土である。

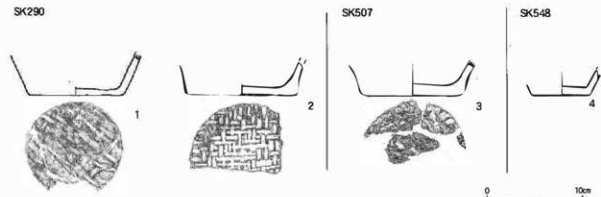
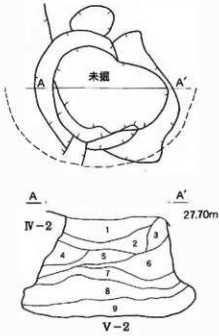
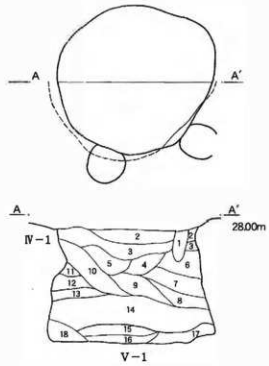


図53 土坑Ⅱ類出土土器①(S=1/4)

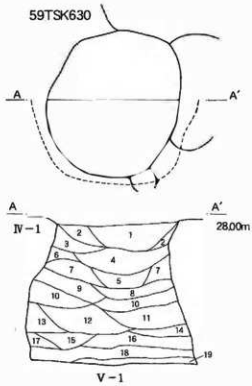
59TSK548



59TSK620



59TSK630



Ⅱ区SK642-643

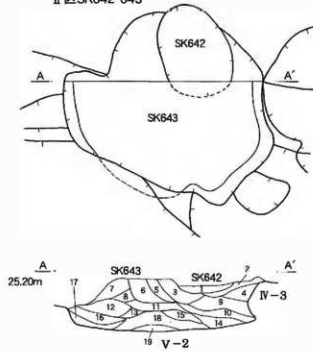
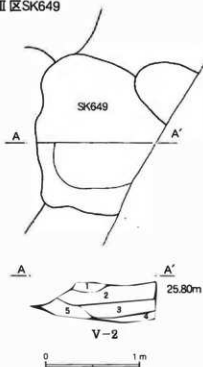


図54 土坑Ⅱ類実測図② (S=1/40)

II区SK649



SK 630	1 珸褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒少量, ロームブロック微量。
	2 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック微量。
	3 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
	4 にぶい珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック多量。
	5 にぶい珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量。
	6 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック微量, 炭化粒微量。
	7 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒微量。
	8 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	9 褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒多量。
	10 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, 小石少量, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒多量。
	11 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	12 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒微量。
	13 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	14 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量, 赤褐色砂少量。
	15 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	16 にぶい褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒少量, ロームブロック・炭化粒微量, 赤褐色砂少量。
	17 珸褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック・赤褐色砂少量, (やや砂質)
	18 にぶい珸褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒微量, 赤褐色砂多量, (やや砂質)
	19 珸褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・赤褐色砂少量, (やや砂質)

SK 642	1 珸褐色土	粘性中, 締り強, ローム粒・ロームブロック・炭化粒微量。
	4 珸褐色土	粘性弱, 締り強, 炭化粒微量。
	5 珸褐色土	黄白色砂ブロック多量, (やや砂質)

SK 548	1 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック・炭化粒微量。
	2 にぶい褐色土	粘性中, 締り弱, ローム粒・炭化粒微量。
	3 にぶい褐色土	粘性中, 締り強, ローム粒・ロームブロック少量。
	4 にぶい褐色土	粘性中, 締り強, ローム粒微量。
	5 にぶい褐色土	ロームブロック少量。
	6 珸褐色土	粘性強, 締り強, ローム粒・炭化粒微量, ロームブロック少量。
	7 珸褐色土	粘性強, 締り弱, ローム粒・炭化粒微量, ロームブロック多量。
	8 にぶい褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック・炭化粒微量, (やや砂質)
	9 にぶい珸褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック・炭化粒微量, (やや砂質)

SK 620	1 珸褐色土	粘性弱, 締り弱, ローム粒・ロームブロック少量。
	2 褐色土	粘性中, 締り中, ローム・ロームブロック少量。
	3 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	4 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	5 褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	6 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量, 炭化粒極微量。
	7 褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量, 炭化粒極微量。
	8 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック極多量, 炭化粒極微量。
	9 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	10 にぶい珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック多量, 炭化粒少量。
	11 にぶい褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック微量。
	12 にぶい珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック微量。
	13 褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	14 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック少量, 炭化粒少量。
	15 褐色土	粘性強, 締り強, ローム粒・ロームブロック少量。
	16 にぶい珸褐色土	粘性強, 締り強, ローム粒・ロームブロック少量。
	17 にぶい珸褐色土	粘性強, 締り強, ローム粒・ロームブロック・赤褐色砂微量。

SK 643	2 珸褐色土	粘性中, 締り弱, ローム粒・ロームブロック少量。
	3 珸褐色土	粘性強, 締り強, ローム粒少量, ロームブロック・炭化粒・焼土粒微量。
	4 珸褐色土	粘性弱, 締り強, ロームブロック少量, 焼土粒・黄白色砂ブロック微量, (やや砂質)
	5 珸褐色土	粘性中, 締り強, ローム粒少量, 焼土粒・炭化粒微量。
	6 珸褐色土	粘性中, 締り強, ローム粒少量, 炭化粒微量。
	7 珸褐色土	粘性中, 締り強, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒・焼土粒微量。
	8 珸褐色土	粘性中, 締り弱, ローム粒・炭化粒少量。
	9 珸褐色土	粘性強, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒・焼土粒微量。
	10 珸褐色土	粘性強, 締り弱, ローム粒少量。
	11 珸褐色土	粘性中, 締り弱, ローム粒少量, ロームブロック・炭化粒・焼土粒微量。
	12 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒少量, 炭化粒・焼土粒微量。
	13 珸褐色土	粘性強, 締り弱, ローム粒多量, ロームブロック少量, 炭化粒微量。
	14 珸褐色土	粘性強, 締り中, ローム粒少量, 炭化粒・焼土粒微量。
	15 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック・炭化粒少量。
	16 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック・炭化粒少量。
	17 珸褐色土	粘性中, 締り強, ローム粒・炭化粒少量。
	18 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒・焼土粒微量。
	19 珸褐色土	粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量, 炭化粒微量。

SK 649	1 珸褐色土	粘性中, 締り弱, ローム粒・炭化粒微量。
	2 珸褐色土	粘性弱, 締り強, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒微量, (やや砂質)
	3 珸褐色土	粘性弱, 締り強, ローム粒・炭化粒・黄白色砂ブロック微量, (やや砂質)
	4 珸褐色土	粘性弱, 締り強, 炭化粒微量。
	5 珸褐色土	黄白色砂ブロック多量, (やや砂質)

図55 土坑II類実測図③ (S=1/40)

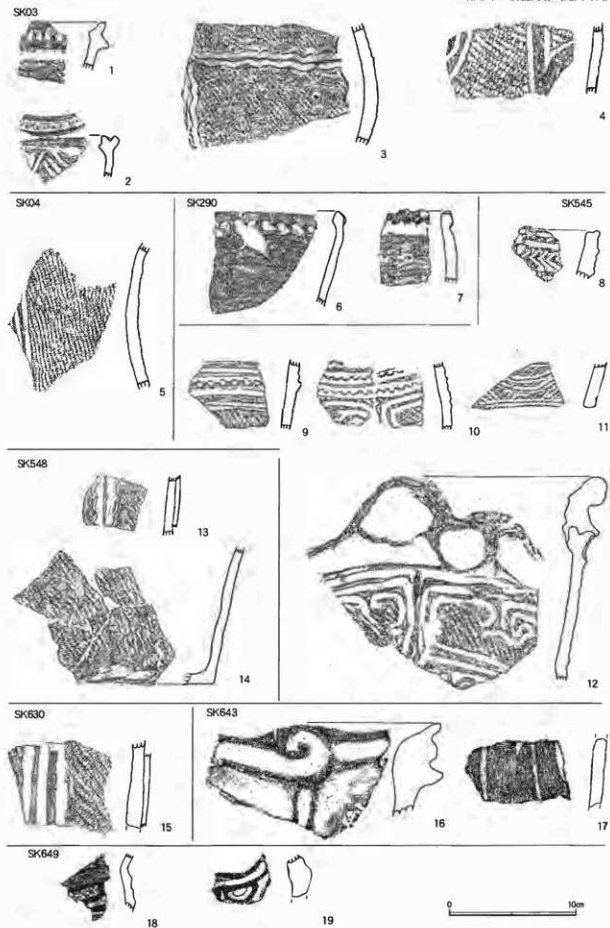


図56 土坑Ⅱ類出土土器② (S=1/3)



1 (SK03)



2 (SK630)



写真95 SK630半截状況



写真96 SK630土器出土状況



写真97 SK630土器出土状況



写真98 SK643半截状況

出土遺物はわずかにあり（図56-16・17）、大木9式と考えられる。よって、本土坑は大木9式期の所産と考えられる。

SK649（Ⅱ区・図55）

径160cmを測り、不整円形の平面形と推定される。深さは約40cmあり、断面形はフラスコ状を呈すると考えられる。上面にⅢ-1層が堆積しており、それを除去し検出されたものである。Ⅳ-3層を掘り込んでおり、底面はⅤ-2層が確認できる。暗褐色土を基調としているが、やや粘性がなく砂質系統の堆積土である。

出土遺物はわずかにあり（図56-18・19）、大木8a式と考えられる。しかし、小破片であり、これを持って確実な時期決定をすることはできない。よって、本土坑は大木8a式期以後の所産と考えられる。

6. 土坑Ⅲ類

Ⅱ類以外の大型土坑を本類とした。これらは掘り下げて調査を実施しないものも多く含めた。断ち割って調査を行ったものの中に特徴的な類型があったことから、これを下記のとおり細別した。いずれもⅡ類に比べて浅いものが多い。

土坑Ⅲa類

南台地区台地北部の52T西以外に分布し、黒色及び黒褐色砂質土の覆土を持つもので、後述する土坑Ⅲb類に該当しないものである。覆土中及び遺構底面に大形のレキを含むことが多い。SK92を典型とし覆土がレンズ状ではなく、いずれかの壁際に傾斜する傾向がある。加曾利B式期に相当するものがほとんどで、土器の出土量は比較的多い。断ち割ったものではSK20・54・61・92・119が該当する。

土坑Ⅲb類

52T西のSD02より東側に集中して分布するものである。覆土中及び遺構底面に大形のレキを含むことが多く、土坑Ⅰ・Ⅳ類に比較し、土器の出土もやや多い。SK178を典型とし、覆土がレンズ状ではなく、いずれかの壁際に傾斜する傾向がある。壁は緩やかな立ち上がりを示すものが多い。時期的には中期に相当するものが主体と考えられる。SK161・163・166・169・171・173・175・178・190が該当する。

土坑Ⅲc類

掘り下げて調査を行ったが、土坑Ⅲa・b類に該当しないものである。SK29・659が該当する。SK659は大形のレキが確認されている。土坑Ⅲb類との違いは検出箇所と堆積状況である。

土坑Ⅲd類

掘り下げて調査をしていないもののうち、土坑Ⅲa・b類以外のものである。SI10で見たように竪穴住居に伴うと考えられるものや土坑Ⅲc類または土坑Ⅱ類となるものが含まれている。これらのうち、褐色砂質土が基調となる覆土のものは暗褐色砂質土を覆土にもつ遺構に切られることが多い。

以下では代表的なもののみ掲載する。

SK29 (51T・図57)

土坑Ⅲc類に分類した。長軸160cm、短軸140cmを測り、不整形形の平面形である。深さは約10cmと非常に浅いものである。SK28に切られる。V-2層を掘り込んでおり、褐色砂質土を基調とした堆積土である。出土遺物は図示できるものがなく、所属時期は不明である。

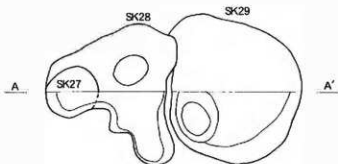
SK54 (51T・図57)

土坑Ⅲa類に分類した。径140cmを測り、不整形形の平面形である。深さは約20cmあり、V-2層を掘り込んでいる。黒色・黒褐色砂質土を基調としており、断面右側が深い傾斜した堆積を呈する。また、覆土上層に大形のレキが検出された。出土遺物は1層中から比較的多くみられ、大形土器破片も出土している(図60-1~6)。これらは加曾利B式に相当することから、本土坑は加曾利B式期の所産と考えられる。

SK92 (51T・図57)

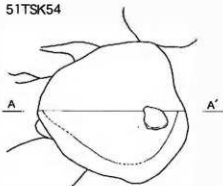
土坑Ⅲa類に分類した。長軸150cm、短軸100cmを測り、楕円形の平面形である。深さは約45cmあり、V-2層を掘り込んでいる。黒褐色砂質土を基調としており、断面右側が深い傾斜した堆積を呈する。出土遺物は少量あり、加曾利B式期と考えられる。(図60-7・8)。よって、本土坑は加曾利B式期の所産と考えられる。

51TSK27・28・29



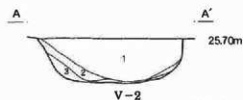
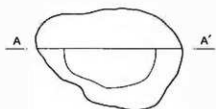
- SK 27
a 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ少量。
- SK 28
1 暗褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ・ローム粒・ロームブロック少量。
2 暗褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ少量。
- SK 29
1 褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ微量。
2 褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ微量, 黄白色砂多量。

51TSK54



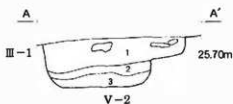
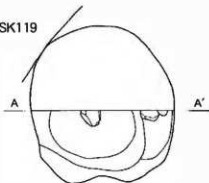
- SK 54
1 黒色砂質土 粘性中, 締り中, レキ, 小レキ少量, ローム粒・炭化粒微量。
2 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ少量, 黄白色砂多量。
3 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ・ローム粒・炭化粒微量。
4 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ少量, ローム粒微量。

51TSK92



- SK 92
1 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ少量, ローム粒・炭化粒微量。
2 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ少量。
3 黒褐色砂質土 粘性中, 締り中, 小レキ多量。
4 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小レキ・黄白色砂多量。

51TSK119



- SK 119
1 黒色砂質土 粘性弱, 締り中, レキ, 小レキ・ローム粒微量, 黄白色砂少量。
2 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ微量, 黄白色砂少量。
3 黒褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小レキ微量, 黄白色砂多量。



図57 土坑Ⅲ類実測図① (S=1/40)



写真99 SK54半裁状況



写真100 SK92半裁状況



写真101 SK119半裁状況
Ⅲ-1層を掘り込んで構築される。



写真102 SK160・169半裁状況



写真103
52T西土坑Ⅲb類調査状況
(西から東を望む。)



写真104
52T西土坑Ⅲb類調査状況
(南西から北東を望む。)

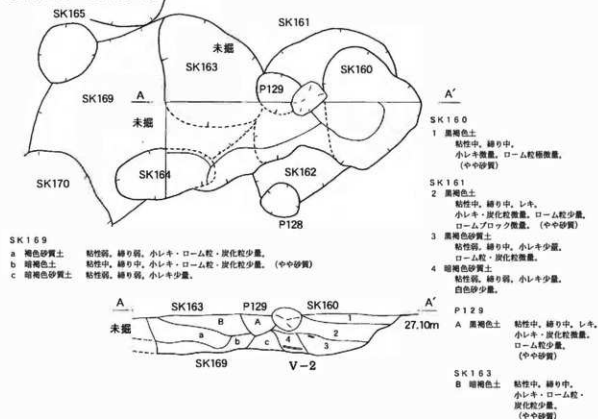


写真105
SK170・171・173半截状況



写真106 SK178半截状況

52TSK160~165・169・170



52T135-170~174・177

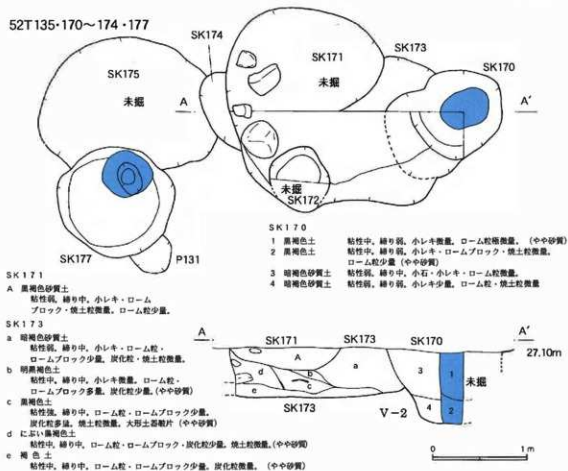
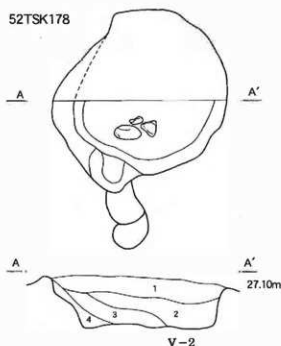


図58 土坑Ⅲ類実測図② (S=1/40)

52TSK178



SK178

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 1 暗褐色砂質土 | 粘性弱、締り中、小レキ少量、ローム粒微量。 |
| 2 褐色砂質土 | 粘性弱、締り中、小レキ少量、ローム粒・ロームブロック微量。 |
| 3 黒褐色砂質土 | 粘性弱、締り中、レキ、小レキ少量、ローム粒微量。 |
| 4 褐色砂質土 | 粘性弱、締り弱、小レキ微量、白色砂多量。 |

SK659

- | | |
|---------|-----------------------------------|
| A 暗褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒少量、炭化粒微量。 |
| B 明暗褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒少量、ロームブロック・炭化粒・焼土粒微量。 |
| C 暗褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒・ロームブロック・炭化粒・焼土粒微量。 |
| D 暗褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒少量、ロームブロック・炭化粒微量。 |
| E 暗褐色土 | 粘性強、締り強、ローム粒・ロームブロック少量、炭化粒微量。 |

Ⅱ区SK659

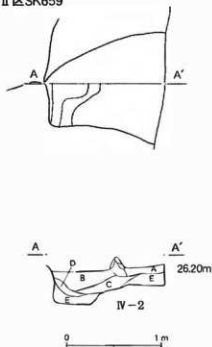


図59 土坑Ⅲ類実測図③ (S=1/40)

SK119 (51T・図57)

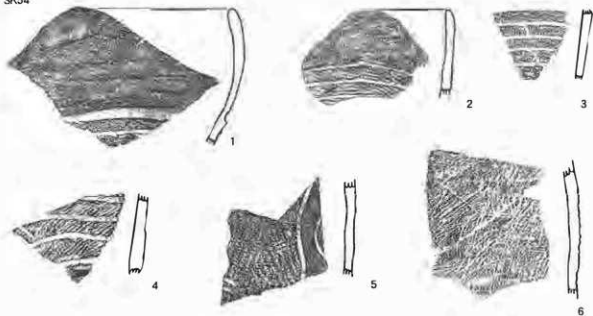
土坑Ⅲa類に分類した。長軸160cm、短軸150cmを測り、ほぼ円形の平面形である。深さは約50cmあり、Ⅲ-1層から掘り込んでおり、底面にV-2層を確認した。黒色・黒褐色砂質土を基調としており、中位にテラスをもつ断面形である。覆土上層に大形のレキを含む。出土遺物は少量あり、網取式(図60-9・10)と加曾利B式(同図11~13)が出土している。よって、本土坑は加曾利B式期の所産と考えられ、9・10はⅢ-1層からの流れ込みと考えられる。

SK160・161 (52T西・図58)

これらは当初、同一遺構として考えていたが、調査途中平面プランの再確認を行い、別遺構と判断し、それぞれ遺構番号をつけたものである。しかし、SK160は遺構かどうか明確ではなく、ここではSK161の上層部分として理解し、まとめて報告しておく。

SK161は土坑Ⅲb類に分類した。V-2層を掘り込んで構築されている。長軸は約150cmを測り、不整形円形を呈する。深さは約40cmある。SK169・SK162を切って構築される。覆土は上層部分が黒褐色土であり、下層は砂質土となっている。断面右側が深い傾斜した堆積を呈する。覆土上層に大形のレキを含む。出土遺物は少量あり、大木9~10式(図60-14~17)が出土している。よって、本土坑は大木9~10式の所産と考えられる。

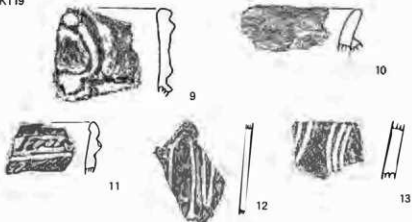
SK54



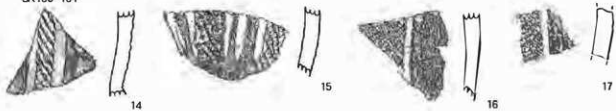
SK92



SK119



SK160・161



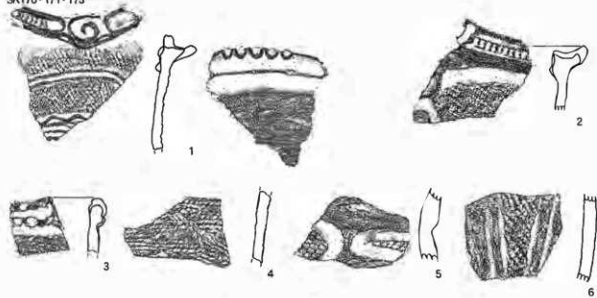
SK163・164・169



図60 土坑Ⅲ類出土土器① (S=1/3)

0 10cm

SK170・171・173



SK178

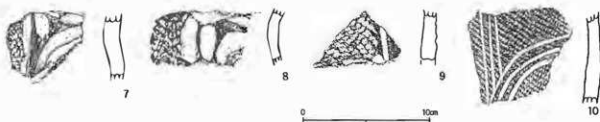


図61 土坑Ⅲ類出土土器② (S=1/3)

SK163・164・169 (52T西・図58)

これらも当初、同一遺構として考えていたが、調査途中平面プランの再確認を行い、別遺構と判断し、それぞれ遺構番号をつけたものである。しかし、SK163・164は遺構かどうか明確ではなく、ここではSK169の上層部分として理解し、まとめて報告しておく。

SK169は土坑Ⅲb類に分類した。長軸は210cm以上、短軸は約160cmを測り、楕円形を呈すると推定される。深さは約40cmある。SK161・SK170を切って構築される。覆土は上層が暗褐色土(SK163)であり、下層は褐色砂質土、暗褐色土が互層となっている。断面右側が深い傾斜した堆積を呈する。出土遺物は少量あり、大木8a式(図60-19・20)、大木8b式(同図21)、大木9~10式(同図18)が出土している。SK163・164が別遺構である可能性があり、所属時期は確定できない。しかし、18は上層からの混入の可能性があり、SK161・SK170との重複関係も基に考えると大木8~9式期にあたり、大木8式期の可能性が高いと推定した。

SK170~173 (52T西・図58)

これらも当初、同一遺構として考えていたが、調査途中平面プランの再確認を行い、別遺構と判断し、それぞれ遺構番号をつけたものである。SK170は柱痕跡を確認し、土坑Ⅰ類と判断した。SK171は遺構かどうか明確ではなく、ここではSK173の上層部分として理解し、まとめて報告しておく。また、SK172はSK173の底面まで到達して確認されたもので、SK173以前の遺構と考えられる。

SK170は土坑Ⅰ類に含められる。長軸130cm、短軸90cmを測り、楕円形の平面形である。深さは約75cmあり、柱痕跡の径は40～50cmを測る。V-2層を掘り込んでおり、SK169・173を切っている。覆土は暗褐色砂質土である。

SK170の出土遺物はSK173と一括して取り上げたため、確実に伴う土器が不明である。しかし、本土坑はSK173を切って構築しているため、下限である大木9式(図61-5・6)が伴う可能性が高く、暫定的ではあるが大木9式の所産と判断しておく。

SK173は土坑Ⅲb類に分類した。長軸240cmと推定され、短軸は180cmを測る。不整形の平面形と考えられる。深さは約50cmある。覆土は下層に粘質のある黒褐色土・褐色土があり、上層に暗褐色砂質土、黒褐色砂質土(SK171)と砂質系統の堆積土が認められる。断面右側が深い傾斜した堆積を呈する。覆土中及び上層からレキの出土が認められる。V-2層を掘り込んでおり、SK174を切り、SK170に切られる。

出土遺物は少量あるが、前述したとおりSK170と一括して取り上げているため、確実に伴う土器が不明である。また、SK171が別遺構の可能性があり、確定はできないが、上限が大木8a式(図61-1～3)であるため、大木8a式期の所産の可能性が高いと推定される。

SK177 (52T西・図58) (注1)

土坑Ⅰ類に含められる。径110cmを測り、円形の平面形である。深さは約70cmあり、柱痕跡の径は約50cmである。V-2層を掘り込んでおり、SK175を切る。覆土は暗褐色砂質土である。図示できる出土遺物は認められなかった。よって所属時期は不明である。

SK178 (52T西・図59)

土坑Ⅲb類に分類した。長軸190cm、短軸170cmを測り、ほぼ円形の平面形である。深さは約50cmあり、V-2層を掘り込んでいる。覆土は上層に暗褐色・褐色砂質土があり、下層底面近くで黒褐色砂質土が堆積している。断面右側が深い傾斜した堆積を呈し、中位にテラスをもつ断面形である。底面に大形のレキを確認した。出土遺物は少量あり、大木8b式(図61-10)と大木9式(同図7～9)が出土している。よって、本土坑は大木9式の所産と考えられる。

なお、土坑Ⅲb類が分布する範囲には、土坑Ⅳ類も少量あり、SK158では大木10式の遺物が出土している(図63-4・5)。

SK659 (Ⅱ区・図59)

土坑Ⅲc類に分類した。SD01に切られ、規模及び平面形は不明であるが、大型の土坑であったと推定される。SI24を切る。深さは35cm、Ⅳ-2層を掘り込んでおり暗褐色土、黒褐色土を基調とした堆積土であり、上層に大形のレキを含む。出土遺物は図示できるものがないが、重複関係から中期後半以後の所産と考えられる。

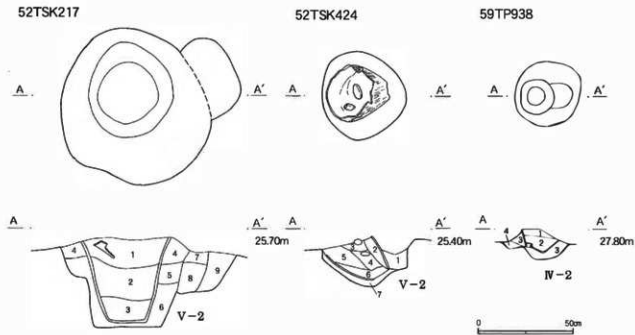
(注1) SK177は当初、柱痕跡部分を別遺構と認識し、調査を行ったが、調査途中で平面形を確認し、柱痕跡を伴う土坑(土坑Ⅰ類)と確認されたものである。

7. 埋設土器

これまでに述べなかった埋設土器を伴うものについて報告しておく。

SK217 (52T東・図62)

径80cmを測り、ほぼ円形の平面形である。深さは約45cmあり、埋設された土器の形状に合わせたような掘り込みを持つ。V-2層を掘り込んでおり、土器外側の堆積土は暗褐色砂質土、土器内面は黒色系統の砂質土である。土器は縄文施文の大形のもの(写真112-1)と入れ子状に図63-1が出土している。これらの出土遺物から、本土坑は縄取式期の所産と考えられる。



SK203

- | | |
|----------|---------------------|
| 1 黒褐色砂質土 | 粘性弱、締り中、小石微量。 |
| 2 暗褐色砂質土 | 粘性強、締り中、小石少量。 |
| 3 黒色砂質土 | 粘性強、締り中、小石少量。 |
| 4 暗褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石微量。 |
| 5 暗褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石・白色砂少量。 |
| 6 暗褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石微量、白色砂少量。 |
| 7 暗褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石微量。 |
| 8 暗褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石微量、白色砂微量。 |
| 9 黒褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石微量、白色砂微量。 |

SK424

- | | |
|----------|-------------------------|
| 1 黒褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石微量。 |
| 2 黒褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒微量。 |
| 3 暗褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒微量。 |
| 4 褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒・ロームブロック少量。 |
| 5 暗褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒少量。 |
| 6 暗褐色土 | 粘性強、締り弱、小石・小レキ・ローム粒少量。 |
| 7 暗褐色砂質土 | 粘性強、締り弱、小石・小レキ微量。 |

P938

- | | |
|----------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 | 粘性中、締り弱、ローム粒・炭化粒少量。 |
| 2 暗褐色土 | 粘性中、締り中、ローム粒・ロームブロック・炭化粒少量。 |
| 3 暗褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒、ロームブロック・炭化粒少量。 |
| 4 にじみ褐色土 | 粘性強、締り弱、ローム粒少量、ロームブロック微量。 |

図62 埋設土器遺構実測図 (S=1/20)



写真107 SK214調査状況



写真108 SK424調査状況



写真109
SK214調査状況



写真110
P938調査状況



写真111 SK197検出状況 (東から)

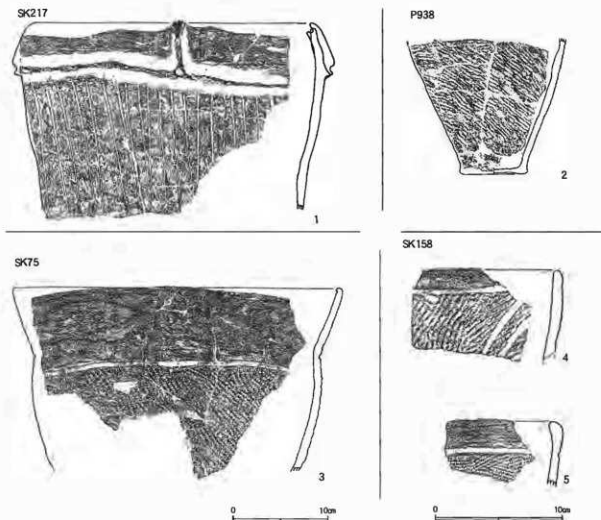


図63 埋設土器遺構・土坑IV類出土土器 (S=1/4・1/3)

SK424 (53T東・図62)

径45cmを測り、不整形円の平面形である。深さは約25cmであり、V-2層を掘り込んでいる。埋設土器は底部を欠き、横倒しの状況で確認されている。土器内部にはレキが認められた。埋設土器底面が褐色砂質土、上面が黒褐色砂質土であり、土器内部は黒褐色土等ローム粒を含む層が確認された。埋設土器(写真112-2)は網取式である。

P938 (59T・図62)

径35cmを測り、円形の平面形である。深さは15cmを測り、IV-2層を掘り込んでいる。覆土は暗褐色土を基調としている。埋設土器は胴部下半から底部にかけてのもので、縄文が施文される粗製土器である。中期～後期の所産と考えられる。

この他、SK197(図14参照)で埋設土器を確認しているが、掘り下げて調査を実施していないため、詳細は不明である。



1 (SK217)



2 (SK424)



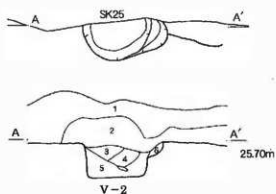
3 (SK138)



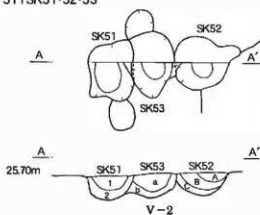
4 (SK320)

写真112 埋設土器遺構出土土器

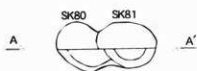
51TSK25



51TSK51・52・53



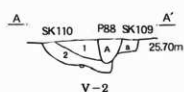
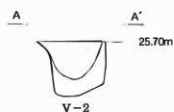
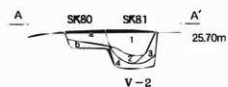
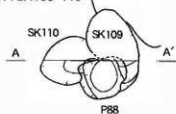
51TSK80・81



51TSK99



51TSK109・110



52TSK182~186

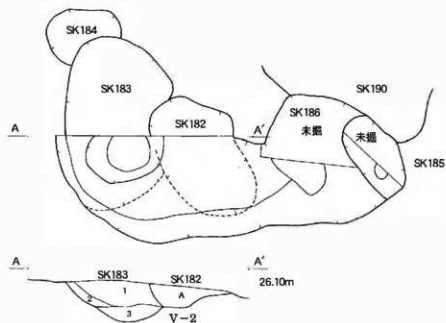
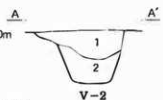
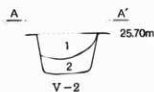
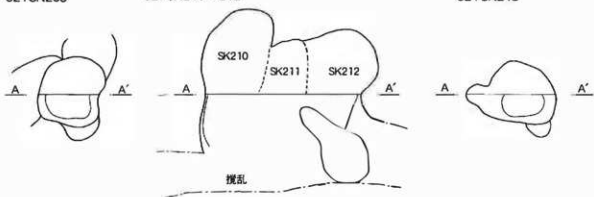


図64 土坑IV類実測図① (S=1/40)

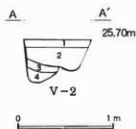
52TSK203

52TSK210~212

52TSK218



52TSK241



SK25

- 1 深黒色土 粘性弱、締り中、小石・小レキ少量。
(中中砂質) 【大別1層】
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小石・小レキ・ローム粒・ローム
ブロック・焼土粒少量。【大別2-1層】
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ・ローム粒微量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、ローム粒微量。
- 5 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量、ローム粒微量。
- 6 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK51

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK52

- A 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- B 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- C 明褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK53

- a 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- b 褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK80

- a 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、黄白色砂微量。
- b 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、黄白色砂少量。

SK81

- 1 黒褐色土 粘性弱、締り中、小レキ少量。(中中砂質)
- 2 黒褐色土 粘性弱、締り中、小レキ少量、黄白色砂微量。(中中砂質)
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量、黄白色砂微量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量、黄白色砂少量。

SK203

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK210

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、黄白色砂微量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ・黄白色砂少量。

SK211

- a 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- b 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ・黄白色砂少量。

SK212

- A 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- B 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ・黄白色砂少量。

SK218

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK241

- 1 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 2 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 3 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量、黄白色砂少量。
- 4 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、黄白色砂少量。

SK99

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。

P88

- A 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、
ローム粒・炭化粒微量。

SK109

- a 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK110

- 1 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、
黄白色砂微量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量、
黄白色砂少量。

SK182

- A 暗褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。

SK183

- 1 黒褐色砂質土 粘性弱、締り中、小レキ少量。
- 2 暗褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。
- 3 褐色砂質土 粘性弱、締り弱、小レキ少量。

図65 土坑Ⅳ類実測図② (S=1/40)

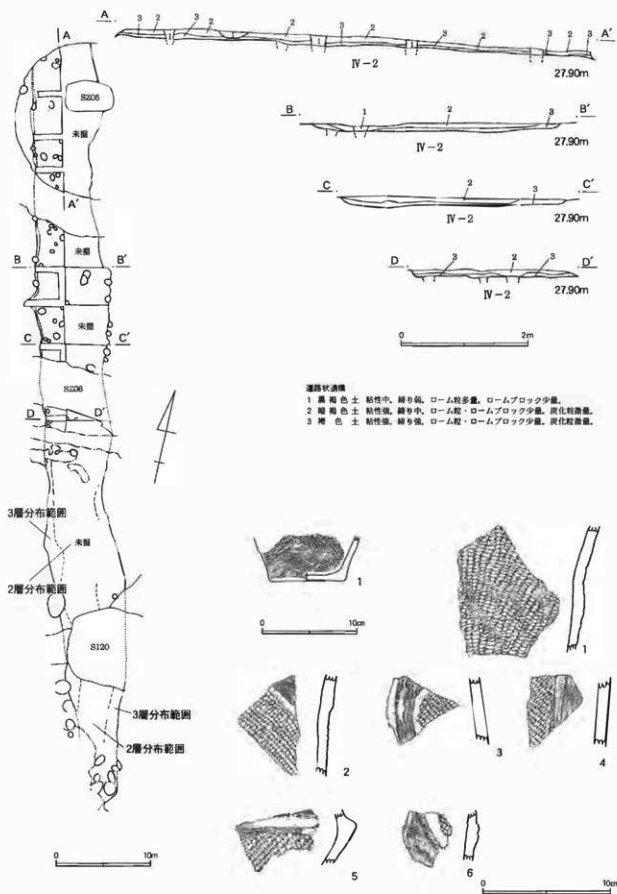


図66 道路状遺構実測図・出土土器 (S=1/200・1/60・1/4・1/3)



写真113 道路状遺構調査状況（北から南を望む。）平成14年度調査



写真114 道路状遺構北側調査状況
（南から北を望む。）平成14年度調査



写真115 道路状遺構南側調査状況
（北から南を望む。）平成14年度調査

8. 土坑Ⅳ類・小土坑

南台地区台地北・中央部全体では、土坑Ⅳ類は437基確認している。小土坑は498基確認された。これらの多くは掘り下げて調査を実施しておらず、一段掘り下げ平面形を確認しただけであるが、縄文土器を伴うかまたは覆土の特徴から縄文時代の所産と推定されたものである。南台地区台地北部、特にⅢ-1層分布範囲周辺に多く認められ、南にゆくに従い減少している。所属時期は前期後半～後期中葉までと考えられるが、出土遺物と覆土の特徴から、多くは大木9式～綱取式の所産と推定される。

平面形は円形・不整形を呈し、径50～100cmのものが多数を占める。南台地区台地北部では半裁して調査したのこともあり、深さは比較的浅く70cm未満のものが多く（図64・65）。なお、SK75（51T）では加曾利B式期の大形土器片が出土している（図63-3）。



写真116 道路状遺構断面
覆土は薄く、暗褐色土を基調としている。

9. 道路状遺構（図66）

南台地区台地中央部で確認された最大長約40m、幅3～4m、深さ10～20cmの遺構である。SI20、SZ05・06に切られ、SK548を切っている。Ⅳ-1・2層を掘り込んでおり、覆土は上層が暗褐色土（2層）、下層が褐色土（3層）である。壁の立ち上がりは極めて緩やかで明確な掘り込みを呈さず、遺構の立ち上がりとしたⅣ-1・2層と覆土3層の境界は不明瞭な点も認められる。全体的な検出状況は、幅3～4mの広い範囲でくぼみが確認できるというものである。底面は特に硬化した面は確認できなかった。また遺構内には小土坑が存在するが、建物を構築するような組み合わせは確認できず、本遺構に伴うものか定かではない。

本遺構は南端が破壊されているが、南の延長線上には西向地区から入り込む谷の谷頭が位置する。また、周辺の遺構としては土坑Ⅱ類が比較的多く分布しており、その他は時期不明の推定竪穴住居（SI18）・埋設土器（P938）があげられる程度である。これらのことから、本遺構は土坑Ⅱ類分布範囲（貯蔵穴群内）に位置し、遺跡の中心である南台地区台地北部と西向地区から入り込む谷の谷頭を結ぶ道路の可能性があると、道路状遺構とした。ただし、本遺構は意識的に構築されたものであるかどうかは明らかではなく、結果的な状況がくぼみを呈したとも考えられる。

出土遺物はわずかにあり（図66-1～6）、大木10式と考えられる。3～5は同一個体である。これらの出土遺物から、本遺構は大木10式期に埋没したのと考えられる。

第5節 台ノ前地区の調査

1. 貝層・遺物包含層の概要

南台地区から台ノ前地区にかけての東斜面に、貝層が2箇所確認された。これらはこれまでに「台ノ前貝塚」とされてきたものである。今回のトレンチによる調査・検土杖によるボーリング調査・表面調査の結果、図67に示す範囲が推定され、北側に存在するものを「台ノ前北貝層」、南側を「台ノ前南貝層」と称することとした。

図67に示す貝層(Ⅲ-3層)に含めた層位には、貝があまり含まれないものがある。通常「遺物包含層」とも言えるような検出状況であるが、本遺跡では、貝以外の動物遺存体の包含状況や堆積過程から、貝を多く含む層と一連のものと考えられるので、これらを一括して貝層(Ⅲ-3層)とした。台ノ前地区・西向地区では、この貝層(Ⅲ-3層)を貝の混入率(=混貝率)等を基に、下記のように大別して示している。

混貝土層 層中の貝の混入率が比較的高いもの。計測混貝率で概ね10%以上のものである。

土主体層 層中の貝の混入率が低いもの。計測混貝率で概ね10%以下である。褐色系統の明るい色調のものが多い。また、貝層最下層にあたり、比較的獣骨土器の出土多い層も含めた。

土層 層中に肉眼で貝の混入がほとんど認められなかったものであるが、混貝土層及び土主体層同様、動物遺存体が含まれるなど、一連のものと考えられるもの。土主体層と同様に褐色を基調とするものが多い。

本調査で示している混貝率は現地でも肉眼観察により判断し示したものである。貝の混入率については他に「計測混貝率」で表記している。計測混貝率の具体的な算出方法は次のとおりである。

貝体積は、土壌サンプルを水洗洗浄した後、5mmメッシュで採取された貝の体積を測ったものである。よって2.5mm以下の貝破片は含まれておらず、実際量より低く見積もられている。

土量体積(層体積)は次に掲げるいずれかの方法で算出している。

- ① 採取した洗浄前の土量体積を計測。
- ② 平均厚さ法によって算出。25cmグリットの交点の層厚の総計を交点数で割り、各層の平均厚さを求め、それに面積をかけて体積を算出したもの。
- ③ 50cm角等の一定面積のコラムサンプルで、サンプル採取した面積と厚さをかけて体積を算出。

このように計測混貝率は計測した貝体積と計測及び算出した土量体積を基に算出したものである。また、計測混貝率は混貝率に対し、概ね低い数値を示す。同様の方法で算出した北原貝塚遺跡群の北原西貝塚はイボキサゴを主体とし、肉眼観察による貝の混入率は極めて高いものであったが、全体の計測混貝率は29%であった(川田・植月・樋泉2004)。

台ノ前南貝層は、東西最大約14m、南北約31mを測る。31・32Tで上端が、39・43Tで下端が確認されている。確認された最大厚は約1.0m(31T)を測る。下端の標高は39Tで21.0m、43Tで20.8m、上端の標高は31Tで25.2m、32Tで26.0mを測り、43T下端と31T上端の比高差は約4.4mである。

斜面上位にある31・32Tでは土層・土主体層が多く、斜面下位の37~39Tでは混貝土層が中心である。

斜面下位にあたるⅠ区ではⅡ層中に破砕貝層が確認されたが、二次堆積と考えられる。Ⅰ区ではⅢ-3層とは異なり、貝は含まないが土器が多く出土する遺物包含層(Ⅲ-5層)が確認されている。台ノ前南貝層はⅠ区より斜面上位に存在しているものと推定される。

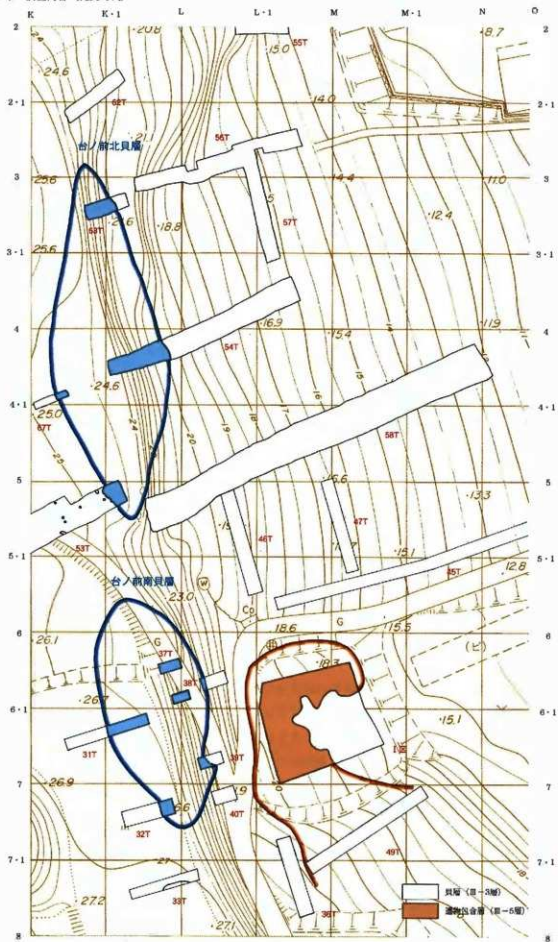


図67 台ノ前地区調査状況図 (S=1/500)

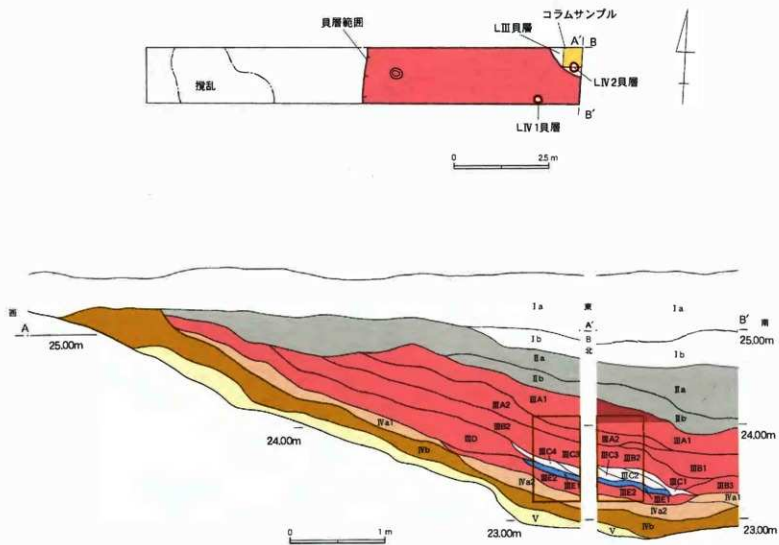


図68-1 31T実測図 (S=1/100・1/40)

大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	炭化粒	焼土粒	炭貝率	備考
I	I a	相灰色	土	弱	弱	少量	—	—	表土		
	I b	黄灰色	土	弱	弱	—	—	—	表土		
	I c	黒褐色	土	弱	弱	—	—	—			
II	II a	黒褐色	土	中	中	多量	散見	—			破砕貝
	II b	黒褐色	土	中	中	微量	—	—			
III-3	III A 1	褐色	土	強	強	少量	—	微量	散見		遺物少量。
	III A 2	褐色	土	強	強	少量	—	少量	少量		遺物少量。A 1よりやや中強い。
	III B 1	によい褐色	土	強	強	多量	—	多量	多量		遺物多量。獣骨少量。
	III B 2	褐色	土	中	中	少量	—	少量	少量		遺物少量。
	III B 3	によい褐色	土	強	強	少量	—	少量	少量	5%	遺物多量。獣骨少量。
	III C 1	褐色	土主体	中	中	多量	極多量	—	—	10%	遺物少量。獣骨少量。
	III C 2	黒褐色	土主体	中	中	多量	—	多量	多量	5%	遺物少量。獣骨少量。
	III C 3	褐色	土主体	中	中	多量	—	多量	—	5%	遺物少量。獣骨少量。
	III C 4	黒褐色	土主体	中	中	少量	—	少量	—	5%	遺物少量。獣骨少量。
	III D	褐色	土	強	強	多量	—	多量	多量		遺物少量。獣骨少量。
	III E 1	褐色	混貝土	中	中	少量	—	少量	—	30%	遺物少量。獣骨少量。
	III E 2	暗褐色	土主体	中	中	少量	—	表土	—	5%	中砂質。遺物少量。獣骨少量。
	III a 1	黒褐色	土	中	中	多量	—	多量	—		遺物少量。貝ブロック含む。
	III a 2	黒褐色	土	中	中	多量	—	少量	—		遺物少量。貝ブロック含む。
	III-4	IV b	黒褐色	土	中	中	散見	—	—		遺物微量。
V-3	V	暗褐色	土	中	中	微量	多量	—	—		

※炭貝率は青磁観察によるもの

図68-2 31T実測図

台ノ前北貝層は、東西最大約15m、南北約47mを測る。54・63Tで下端が、53・67Tで上端が確認されている。確認された最大厚は約1.8m（54T）を測る。下端の標高は54Tで19.6m、63Tで21.5m、上端の標高は53Tで25.0m、67Tで24.5mを測り、54T下端と67T上端の比高差は約4.9mである。

確認された層は土主体層が多く、平面的な検出状況では、54・63Tで混貝土層と土主体層が互層となっており、53Tでは混貝土層、67Tでは土層が中心である。

46T、54T東側、56～58Tでは貝層は確認されなかったが、二次体積と考えられる混貝土層が確認されており、下端部は破壊された部分が多いと推定される。特に46T、56T、58TではII層中に多量の貝及び動物遺存体が確認されている。また、56～58T以東においても過去に貝層が確認されたとの情報もあり、部分的に坪掘りを行ったが、現時点では確認することができなかった。

2. 台ノ前南貝層

(1) 31Tの調査状況（図68）

31Tでは、II層（黒褐色土）下に褐色土を基調とする大別III-3層（貝層）が確認されている。貝層範囲外はIV-2層が認められる。大別III-3層はIII A・B・D層を土層、III C・E 2層を土主体層、III E 1層を混貝土層と分別した。本調査区の大別III-3層では、土層・土主体層が大部分をしめており、斜面下位の最下層に混貝土層が認められる。IV a層はほとんど貝・動物遺存体を含まないが、ブロック状に貝が分布する状況を確認できたため、大別III-3層に含めた。土層・土主体層としたものは褐色系統の色調を呈する。

III A・B・D層に比較的多くの大形土器片が出土しており、IV b層以下の出土量は極めて少量である。III A層には獣骨等動物遺存体がほとんど含まない。III B層で獣骨の出土が少量認められるようにな



写真117
31T調査状況
31TⅢ-3層は土・土主
体層を中心の堆積であ
る。奥に白く見えるのがL
Ⅲ貝層である。



写真118
31TLⅢ貝層
調査状況



写真119
31TLⅢ貝層
調査状況



写真120
31T土器出土状況
(西南から)
柱状サンプル下にLIII貝層
が確認できる。



写真121
31TLIII貝層
調査状況



写真122
31TLIII貝層・
LIIIV貝層調査状況
LIII貝層下に貝ブロック
(LIIIV 2貝層)が確認さ
れる。



写真123
31T貝層下部断面
Ⅲ層の最下層にLⅢ貝層
が認められる。その上下に
は貝の混入は極めて少な
いことが認められる。

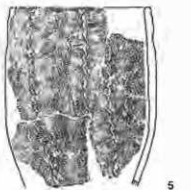
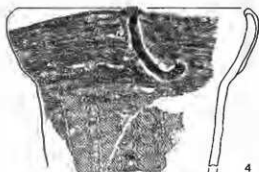
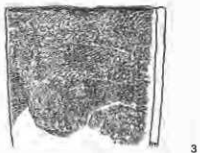
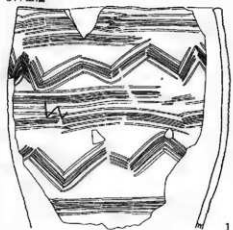


写真124
31TLIV 1 貝層検出状況
IV層中から貝ブロックが確認できる。



写真125
31TⅢ層中土器出土状況

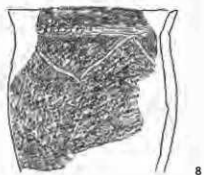
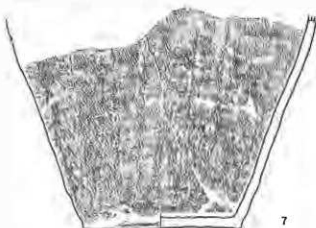
31TⅢ層



54T22層



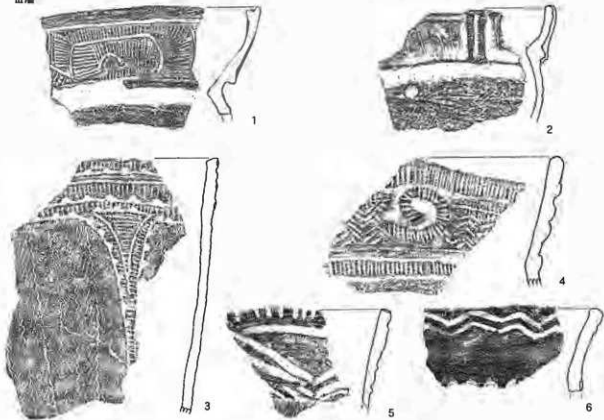
54T28層



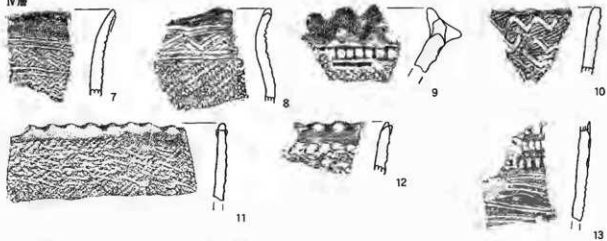
0 10cm

図69 31・54T出土土器 (S=1/4)

III層



IV層



コラムサンプルS11~12

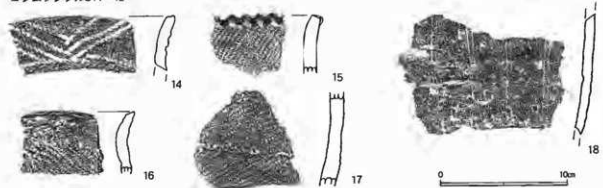


図70 31T出土土器 (S=1/3)



写真126 31T出土土器

り、極少量の貝が含まれる。東側斜面下位に認められるⅢC層は比較的多くの貝を含み、ⅢE層と連続して薄い堆積の混貝土層を形成する。これをLⅢ貝層と称する。特にⅢE層は貝の混入率が高い。

Ⅳ層は黒褐色土を基調とし、基本的には貝・獣骨等をほとんど含まないが、2箇所において貝ブロックを確認した。それぞれ、LⅣ1・2貝層と番号を付けた。なお、LⅣ1・2貝層はⅣa層中から確認されている。いずれも極めて限られた範囲で確認されたもので、土壌ごと一括してサンプリングを行っている。31TⅢ層(LⅢ貝層)とは明確な間層をもって下位に堆積する。

50cm角のコラムサンプルを北東隅に設定し、厚さ5cm毎に18サンプルを採取している。コラムサンプル中にはLⅢ貝層、LⅣ2貝層が含まれている。コラムサンプル全体の計測混貝率は1.3%であり、極めて低い数値を示す。LⅢ貝層に相当するコラムサンプルS11の計測混貝率は15.6%であり、31T中のコラムサンプルでは最も高い数値である。

出土土器の一部を図-69~70、写真126に示した。31TⅢ層中からは大木7a式古段階の土器が多く出土している(図69-2・4、図70-1~4、写真126-1・2)。大木6式に相当するものも少量認められており(図70-5・6)、Ⅲ層最下層にあたるLⅢ貝層中(コラムサンプルS11~12)からも大木6式(同図14)が出土していることから、31TⅢ層は大木6式に形成が始まり、7a式期までの所産と考えられる。

31TⅣa層からは主に大木4~5式と考えられるもの(図70-9~12)の他、大木6式(同図7・8)が出土している。Ⅳ層中のLⅣ1・2貝層は、明確な共存遺物がながい、Ⅳa層出土遺物に併せ、LⅢ貝層と明確な間層を持って確認された状況を考慮し、大木6式以前、大木5式に近い段階の可能性が高いと推定される。LⅣ2貝層中にあたるコラムサンプルS17については、サンプル中の種実の放射性炭素年代測定を行い、¹⁴C年代で4950±40BPの測定結果が得られている(附編参照)。

その他、出土土器には、浮島・興津式系統のものが散見される(図69-1・図70-13)。

(2) 32~34T・37Tの調査状況(図71)

32Tでは、Ⅱ層下に貝層(Ⅲ-3層)が確認されているが、掘り下げて調査を実施していない。上面確認状況では貝の散布が少量認められるだけではあるが、31TⅢ-3層上面と同様であることから、Ⅲ-3層(土層・土主体層)に相当すると考えられる。

33・34Tで確認した遺構は、覆土の特徴から縄文時代の所産と考えられる。貝層(Ⅲ-3層)は検

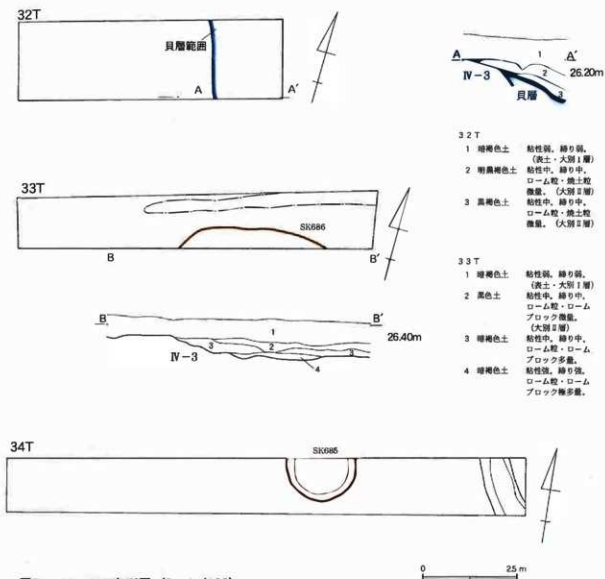


図71 32~34T実測図 (S=1/100)



写真127 32T調査状況 (南から)



写真128 37T調査状況 (東から)

出できなかった。

37Tでは、表土下トレンチ全体で貝層(Ⅲ-3層)が確認されている。平面的な観察からは土主体層及び混貝土層が主体となり、31Tと比較すると混貝率は高い。掘り下げて調査を行っておらず、時期等は不明であるが、隣接する38Tと同様と推定される。

(3) 38Tの調査状況(図72)

38TではI層(表土)及びII層下にトレンチ全体で貝層(Ⅲ-3層)が確認された。西側及び北側にサブトレンチを設定し、掘り下げて調査を行った。またサブトレンチ内にコラムサンプル(40×50cm)を設定し、厚さ5cm毎の21サンプルを採取している。また、西側に設定したサブトレンチでは層毎に一括してサンプルを採取している。北側に設定したサブトレンチでは、現地調査時で混貝土層を中心とする概ねⅢD層までを上層、土主体層が多いⅢE~Gまでを概ね下層とを大別し、一括して資料を採取している(ブロックサンプル)。コラムサンプル中には、IVa~b層まで少量の貝を認めたが、現地調査時はほとんど確認できなかったが、土器の出土量などからIVa層を大別Ⅲ-3層(貝層)最下層とした。

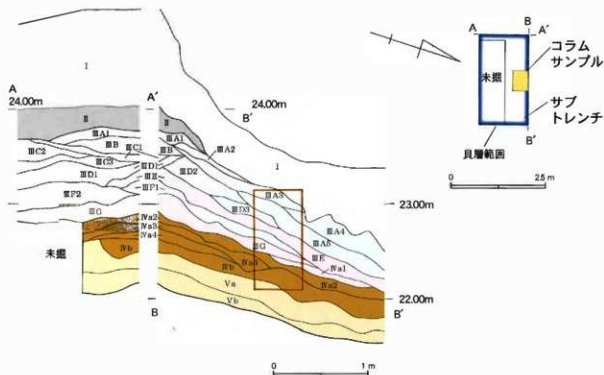
主となる大別Ⅲ-3層は混貝土層であり、ⅢA2~5・C1・D・F層が該当する。土主体層はⅢA1・ⅢB・C2~3・E・Gが相当する。これらは互層となって堆積している。38T土主体層は、31T土主体層と比較すると褐色を基調とする点は類似するが、全体的に混貝率は高く、層厚は薄いことが認められる。層毎の計測混貝率は不明だが、コラムサンプル中では各サンプル13~23%の計測混貝率であり、38TⅢ層全体では24.6%と浦尻貝塚の貝層の中では、高い比率を示している。

出土遺物の一部を図73に示した。ⅢA1・C層には大木9式が含まれ(1・4~6)、ⅢG層以下は大木6~7a式が主体となる(11・12・14~17)。その他、大木5式(13)、大木7a式新段階~7b式と考えられるもの(2・7・8)も散見される。大木8式の土器は極めて少ない。

これらはサブトレンチ内で得られた資料であることなどから、各層の時期決定は困難である。一定



写真129 38T貝層断面(北壁)



大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	小石	炭化粒	混貝率	備考	
I	I	灰褐色	土	弱	弱	少量	少量	少量	-			
II	II	黒褐色	土	弱	弱	少量	-	少量	-		人糞大シキ含む	
	II A 1	暗褐色	土	弱	弱	多量	-	微量	-	0%	希砂層	
	II A 2	黒褐色	混貝土	中	中	微量	微量	-	多量	80%	耕作の影響ややあり	
	II A 3	暗褐色	混貝土	中	中	少量	-	少量	-	30%	希砂層	
	II A 4	暗褐色	混貝土	中	中	微量	-	微量	40%	40%	上位耕作の影響あり	
	II A 5	暗褐色	混貝土	中	中	微量	-	微量	50%	50%	貝主体層	
	II B	黒褐色	土	中	中	少量	-	少量	-	0%		
	II C 1	褐色	混貝土	中	中	多量	多量	-	微量	10%		
	II C 2	暗褐色	土主体	中	中	多量	多量	-	微量	5%	土層層？	
	II C 3	暗褐色	土主体	中	中	少量	少量	-	多量	5%	土層層？	
	III-3	III D 1	明黒褐色	混貝土	中	中	多量	多量	-	多量	80%	貝主体層
		III D 2	暗褐色	混貝土	中	中	少量	少量	-	微量	60%	貝主体層
III D 3		暗褐色	混貝土	中	中	少量	少量	-	炭粒	40%	貝主体層	
III E		褐色	土主体	強	強	極多量	微量	-	多量	10%	土層層？ ドングリ出土	
III F 1		暗褐色	混貝土	中	中	微量	-	-	微量	70%	貝主体層	
III F 2		褐色	混貝土	強	強	少量	少量	-	多量	40%	貝主体層	
III G		褐色	土主体	弱	弱	極多量	微量	-	多量	10%	土層多い。土層層？	
III-4	IV a 1	明黒褐色	土主体	弱	弱	少量	-	-	少量	3%	やや砂質、鉄屑多い。最下層	
	IV a 2	明黒褐色	土	中	中	少量	-	-	少量			
	IV a 3	黒褐色	土	中	中	少量	-	-	少量			
	IV a 4	黒褐色	土	中	中	微量	-	-	-			
V-3	IV b	暗褐色	土	中	中	少量	-	-	-		ややシルト質	
	V a	褐色	シルト	中	中	少量	-	-	-			
	V b	褐色	シルト	強	強	微量	-	-	-			

※混貝率は肉眼観察によるもの

図72 3BT実測図 (S=1/100・1/40)



写真130 38T貝層断面(北側)



写真131 38T土器出土状況



写真132 39T貝層検出状況

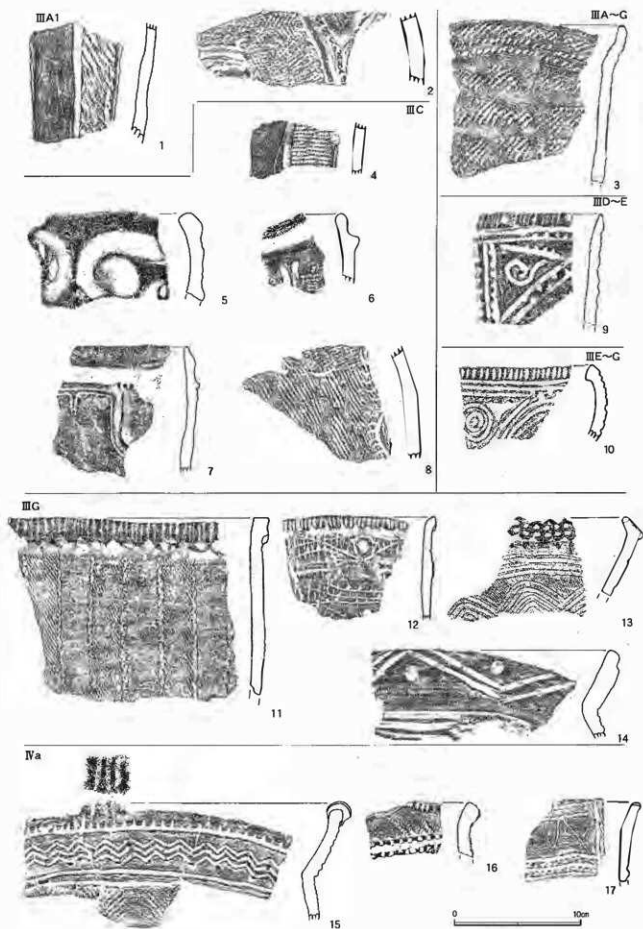
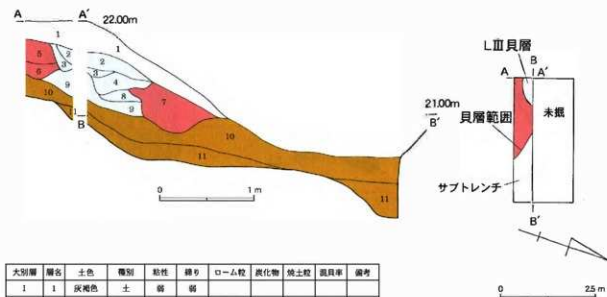


図73 38T出土土器 (S=1/3)



大別層	層名	土色	礫別	粘性	練り	ローム粒	炭化物	焼土粒	混貝率	備考	
Ⅲ-3	1	灰褐色	土	弱	弱	—	—	—	—	—	
	2	黒褐色	混貝土	弱	弱	微量	微量	微量	20%	—	
	3	暗褐色	混貝土	弱	弱	微量	—	微量	20%	—	
	4	暗褐色	混貝土	中	中	微量	少量	微量	5%	破砕貝	
	5	暗褐色	土	中	中	微量	微量	微量	—	—	
	6	黒褐色	土	中	中	微量	微量	微量	—	—	
	7	暗褐色	土	中	中	多量	多量	多量	—	—	
	8	黒褐色	混貝土	弱	弱	微量	—	—	20%	—	
	9	暗褐色	混貝土	弱	弱	少量	少量	少量	30%	—	
	Ⅲ-4	10	黒褐色	土	中	中	少量	微量	—	—	—
		11	明黒褐色	土	中	中	極微量	多量	—	—	—

※混貝率は肉眼観察によるもの

図74 39T実測図 (S=1/100・1/40)

の出土量があるⅢC層以下は大木7a式期と考えられるが、その上位層は明瞭な間層が認められるわけではなく、各層厚も厚い状況ではないことから、大きく取って大木7a～9式の所産とすることができ。ただし、ⅢC層が大木9式であり、上層部分は大木9式に含まれる部分が多いと推定される。

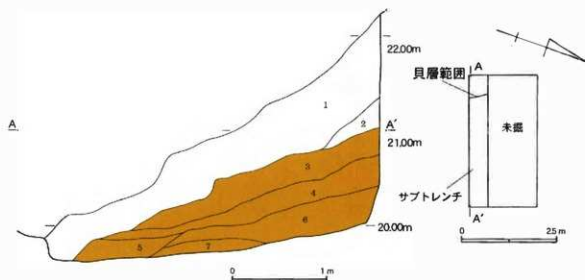
これらのことを鑑み、暫定的ではあるがⅣ層以下を大木6～7a式古段階、大木9式が含まれないⅢE～G層を大木7式期、ⅢC層以上を大木9式期と推定している。ⅢD層を漸移層としたが、第4章の動物遺存体の分析では大木9式期に含めた。この見解については今後変更する可能性がある。

なお、ⅢA3・5層にあたるコラムサンプルA4及びⅢA5・E・F1層にあたるコラムサンプルA11のサンプル中の種実の放射性炭素年代測定を行っている。いずれも¹⁴C年代で、A4が4400±40BP、A11が4490±40BPの測定結果が得られている (附編参照)

(4) 39Tの調査状況 (図74)

39TはサブトレンチにてⅢ-3層 (貝層) を確認したものである。サブトレンチ幅は約50cmである。斜面上位に混貝土層 (1～4層) を確認し、土層 (5～7層) と互層になることが認められた。混貝土層も比較的混貝率は低いものであった。層毎に一括してサンプルを採取している (ブロックサンプル)。厚さは約50cmを測り、上位が削平されている可能性が高い。

貝層中から少量の遺物が出土しており、概ね大木6～7a式に相当する。狭い調査面積であるため、時期の確定はできないが、大木6～7a式期の所産である可能性が高い。



大別層	層名	土色	強弱	粘性	締り	ローム状	小石	混貝率	備考
I	1	黒褐色	土	弱	弱	少量	-		
Ⅲ-3	2	暗褐色	土主体	弱	弱	少量	-	5%	遺物多量。
Ⅲ-4	3	黒褐色	土	中	中	微量	-		遺物微量。
	4	黒褐色	土	中	弱	少量	微量		
	5	暗褐色	土	中	中	少量	-		遺物微量。
	6	褐色	土	中	中	少量	-		
	7	黒褐色	土	中	弱	微量	少量		

※混貝率は肉眼観察によるもの

図75 43T実測図 (S=1/100・1/40)

(5) 43Tの調査状況 (図75)

43Tは表土を除去し、サブトレンチにてⅢ-3層(貝層)を確認したものである。サブトレンチ幅は約50cmで、斜面上位に混貝土層(2層)を確認したが、部分的であり、詳細は不明である。混貝率は低く、貝が少量混じる程度であった。多くが後世に削平を受けたか、急斜面にあたるため崩落したと考えられる。所属時期は不明だが、斜面上位にあたる38TⅢ-3層と一連の層位と考えられる。

3. 台ノ前北貝層

(1) 54Tの調査状況 (図76~78)

54Tでは、西側の段丘法面部分の約8mにわたって、表土下にⅢ-3層(貝層)が確認されている。東側は削平を受けており、Ⅲ-3層はより東に広がっている可能性が高い。貝層確認時は、平面的に混貝土層と土主体層が互層となっている状況が確認された。平面観察では、斜面下位に混貝土層、斜面上位に土主体層が多く堆積している。

北側壁際にサブトレンチを設定し、貝層下までの調査を実施している。サブトレンチ幅は60cmである。調査は平面的な観察により層位を分別し、層毎に全土壌のサンプリングを実施した。整理調査では、これを30層にまとめ、さらにa~l層に大別整理した。このうち、1・3~6層は上層からの影響が認められ、漸移層と認識し、サンプリングを行わなかった。堆積状況は上層に比較的貝の混入率が高い混貝土層(大別b層)があり、以下混貝土層と土主体層が互層となっている。断面から観察した堆積状況から見ると、斜面上位及び下層に土主体層が多く、斜面下位及び上層に混貝土層が多い傾向

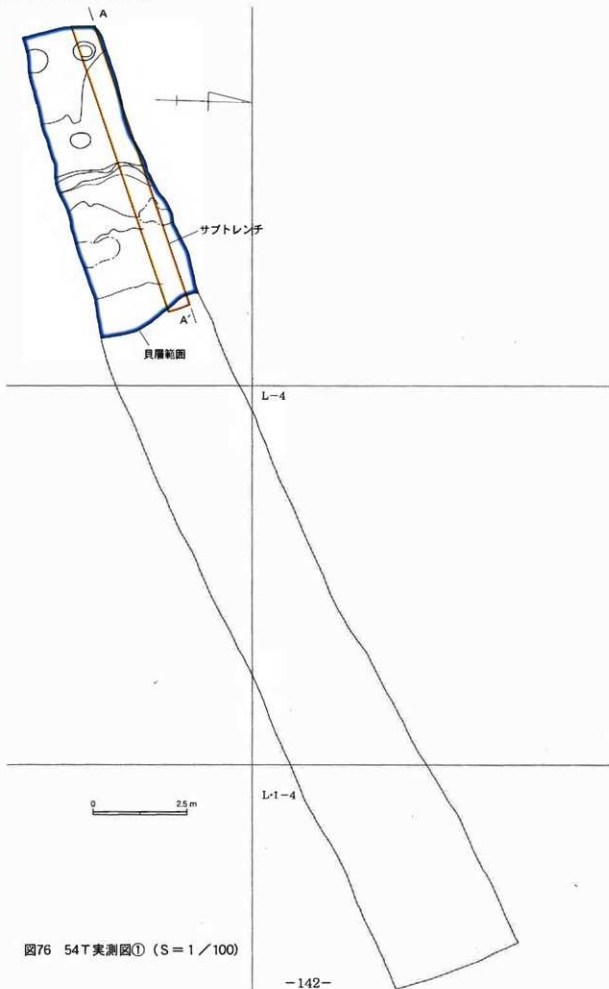


図76 54T実測図① (S = 1/100)

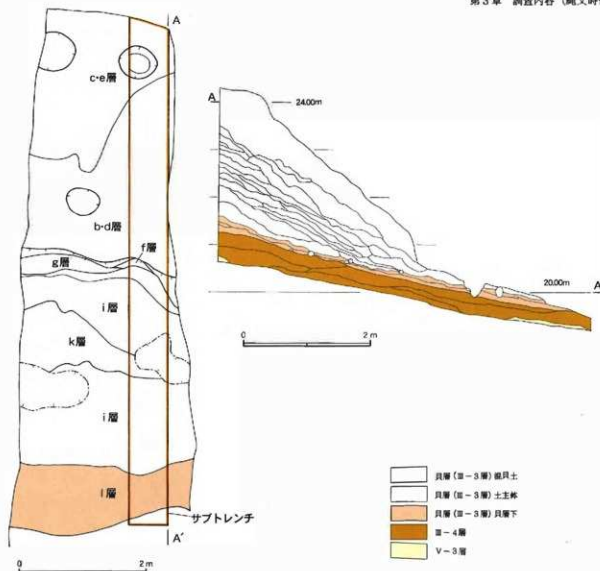


図77 54T実測図② (S=1/60・1/80)

が認められる。最下層は獣魚骨・土器の出土量が多いが混貝率の低い大別1層 (計測混貝率2%以下) が堆積している。確認されたII-3層の最大厚は1.8mを測る。

混貝土層は計測混貝率でみると2層 (b層) で16.7%、12層 (f層) で22.0%、23層 (i層) で35.6%等であり、15%以上を示すものが多い。土主体層は、11層 (e層) で2.5%、18層 (g層) で0.5%、25層 (j層) で1.7%等、極少量の貝しか含まれておらず、その差異は明確である。また、54T全体の計測混貝率は6.3%、最下層の大別1層を除いても7.5%と低い数値を示し、土主体層が中心であることが確認できる。

混貝土層と土主体層の土器の出土量は差が認められず、土器は22層以下の下層に多い傾向が認められる。また、獣魚骨の出土量も詳細な検討は未終了であるが、現地採集及び5mmメッシュの水洗洗浄資料では、混貝土層と土主体層では大きな差異は無く、土器の出土と同じく27・28・30層等の下層部分に多く認められる。これらのことから、貝の廃棄と土器、獣魚骨の廃棄は必ずしも一致しないことが認められる。土主体層は、貝の廃棄は少ないが混貝土層と同じく獣魚骨・土器の廃棄があり、活動の停止時期を示すものではないとすることができる。土主体層は、貝以上に土の堆積が顕著な層とすることができ、土の廃棄が行われたものと推定される。

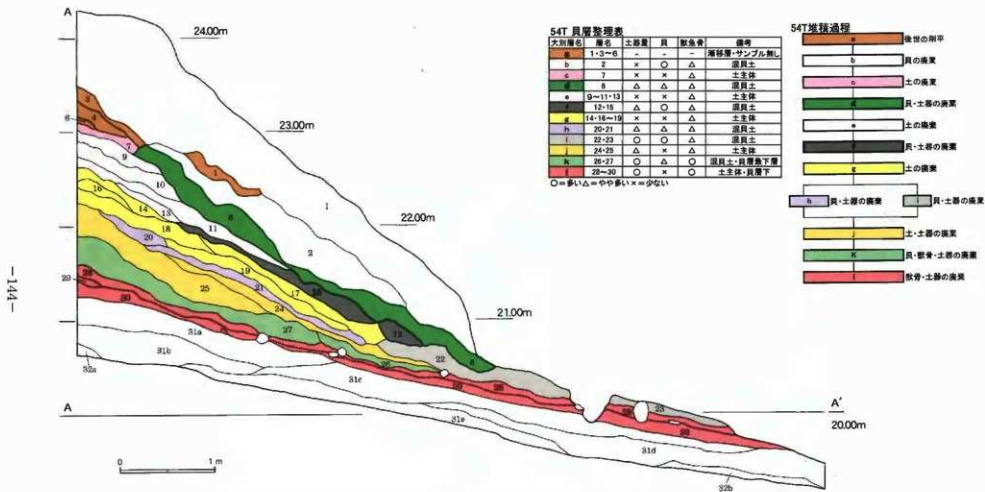


図78-1 54T断面図 (S=1/40)

大別層	種別	層名	土色	粘性	締り	賦存	ローム 土	ローム ブロック	炭化粒	炭質率	備 考
I	表土	1	黒灰褐色	中	中	—	少量	少量	—	—	表土
		3	黄褐色	中	中	少量	少量	少量	少量	10%	
		4	黄褐色	中	中	少量	微量	少量	少量	40%	
		5	にぶい褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	5%	灰ブロックを含む。
		6	にぶい褐色	中	中	少量	微量	少量	少量	10%	
		7	黒褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	70%	
a	腐植層	2	にぶい褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	5%	
		8	にぶい褐色	中	中	少量	微量	少量	少量	40%	
b	混貝土	9	にぶい褐色	中	中	少量	少量	少量	少量	10%	
		10	にぶい褐色	中	中	少量	少量	少量	少量	15%	
c	土主体	11	にぶい褐色	中	中	少量	少量	微量	少量	20%	
		12	にぶい褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	50%	
d	混貝土	13	にぶい褐色	強	強	少量	少量	微量	少量	10%	
		14	灰褐色	強	強	少量	微量	少量	少量	5%	
e	土主体	15	にぶい褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	50%	
		16	灰褐色	強	中	少量	微量	微量	少量	5%	
f	混貝土	17	にぶい褐色	中	強	少量	少量	微量	少量	30%	
		18	にぶい褐色	強	中	微量	少量	少量	少量	10%	
g	土主体	19	黄褐色	中	中	微量	少量	少量	少量	10%	
		20	にぶい褐色	強	中	少量	少量	少量	少量	40%	
h	混貝土	21	にぶい褐色	強	強	微量	少量	少量	少量	40%	
		22	黒褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	80%	
i	土主体	23	黒褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	80%	
		24	黄褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	20%	
j	混貝土	25	にぶい褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	15%	
		26	黒褐色	強	中	少量	少量	少量	少量	70%	
k	土主体	27	緑褐色	強	中	少量	少量	少量	少量	10%	
		28	黒褐色	強	中	少量	少量	少量	少量	5%	貝層下。
l	混貝土	29	黒褐色	強	強	少量	微量	少量	少量	30%	貝層下。
		30	黒褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	5%	貝層下。(ややシルト質)
Ⅱ-4	シルト	31 a	黒色	強	強	稀散状	少量	少量	少量	—	
		31 b	黒色	強	強	稀散状	少量	微量	少量	—	
		31 c	黒色	強	強	稀散状	少量	少量	少量	—	小レキ少量。
		31 d	黒色	強	強	—	少量	少量	—	—	小レキ少量。
		31 e	黒褐色	強	強	—	少量	—	—	—	小レキ少量。
Ⅱ-3	シルト	32 a	黒色	強	強	—	少量	—	—	—	小レキ・黄褐色シルト少量。
		32 b	黒色	強	強	—	少量	—	—	—	小レキ少量。黄褐色シルト少量。

※ a ~ l はⅡ-3 (貝層に相当) ※ 炭質率は肉眼観察によるもの

図78-2 54T断面図

層名	土量体積 (m ³)	体積比率 (層厚/全 貝層総体積)	貝体積 (m ³)	計測炭質率	土器数	土器出現率 (10 m ² 当り 出土数)
2層	397,941	11.1%	66,335	16.7%	107	0.3
7層	59,800	1.7%	70	0.1%	20	0.3
8層	233,214	6.9%	22,095	9.5%	148	0.6
9層	34,950	1.0%	70	0.2%	8	0.2
10層	172,046	4.9%	2,080	1.2%	101	0.6
11層	182,126	5.1%	4,575	2.5%	68	0.4
12層	71,910	2.0%	15,825	22.0%	47	0.7
13層	62,250	1.7%	225	0.4%	18	0.3
14層	29,529	0.8%	70	0.2%	10	0.3
15層	108,680	3.0%	17,610	16.2%	86	0.8
16層	40,718	1.1%	70	0.2%	2	0.0
17層	104,160	2.9%	3,120	3.0%	39	0.4
18層	158,526	4.4%	780	0.5%	98	0.6
19層	130,237	3.6%	1,525	1.2%	40	0.3
20層	33,796	0.9%	1,560	4.6%	25	0.7
21層	111,767	3.1%	10,140	9.1%	87	0.8
22層	132,496	3.7%	21,720	16.4%	207	1.6
23層	69,792	1.9%	24,855	35.6%	231	3.3
24層	193,200	5.4%	7,020	3.6%	71	0.4
25層	294,138	8.2%	4,905	1.7%	199	0.7
26層	56,356	1.6%	4,350	7.7%	107	1.9
27層	298,391	8.3%	13,190	4.4%	674	2.3
28層	292,736	8.1%	5,460	1.9%	811	2.8
29層	21,285	0.6%	35	0.2%	37	1.7
30層	302,548	8.4%	468	0.2%	771	2.6
総計	3,593,598	100%	228,123	6.3%	4012	1.1

※ 体積は、25m グリッドの交点の厚さの総計を交点数で割り、平均厚さを求め、それに面積をかけて算出したもの。

※ 貝体積は、5mm サンプルから、貝を抽出し、その体積を測ったもの。 ※ 土器数は、5m 以上の土器片数 (同一個体は1)。



写真133 54T貝層検出状況（東から）混貝土層・土主体層が互層となって確認される。



写真134 54T貝層調査状況（東から）



写真135 54T貝層断面



写真136
54T貝層検出状況(西から)
斜面上位土層は土層・土主体層
が堆積している。



写真137
54T貝層調査状況(東から)
斜面下位土層は貝土層が堆
積している。



写真138
54T貝層断面(斜面上位)
土主体層の厚い堆積が認めら
れる。



写真139
54Tイノシシ下顎骨等出土
状況



写真140
54T土器出土状況



写真141
54T土器・鹿
角出土状況



写真142
54T土器出土
状況

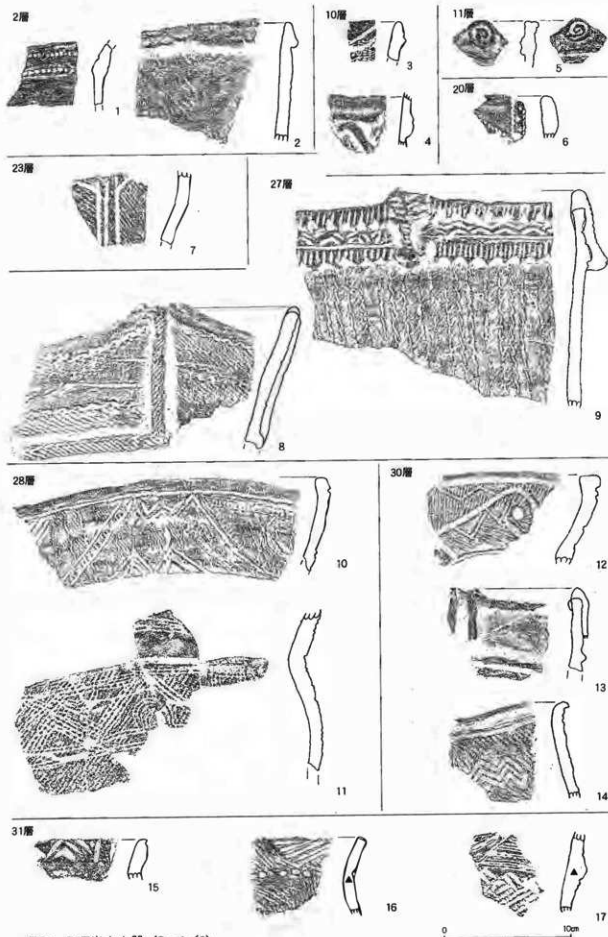
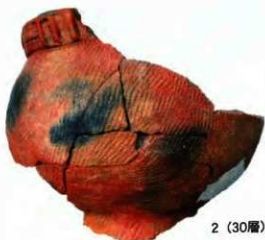


図79 54T出土土器 (S=1/3)



1 (30層)



2 (30層)



3 (8層)



4 (21上層)



5 (23層)



6 (28層)

写真143 54T出土土器

土主体層は褐色系統の色調であり、台ノ前南貝層(31T)の土主体層・土層と類似している。31T大別Ⅲ一層のように土層中心の層位は認められず、わずかながらも貝の混入が認められる。貝層下は黒色系統のシルト層が堆積している。

出土土器の一部を図69・79、写真143に示した。貝層下にあたる31層からは茅山上層式(図79-16・17)が出土している他、大木6式(同図15)が出土している。貝層最下層の30層には大木6式の完形に近い土器が出土しているが(写真143-1・2)、破片資料では大木7a式古段階の土器が含まれている。(図79-12・13)。この上位の27・28層では大木7a式古段階が主体となっている(図69-7、図79-8~11)。また、中層にあたる21上層で写真143-4が、斜面下位の22層で図69-6が出土しており、五領ヶ台Ⅱb式相当と考えられる。同じく中層にあたる20層で図79-6、斜面下位の23層で写真143-3・図79-7等が出土しており、27~30層の下層に比較すると大木7a式でも新しい段階の土器が出土している。上層にあたる10層では押圧縄文が施されるもの(図79-3)、Y字状隆

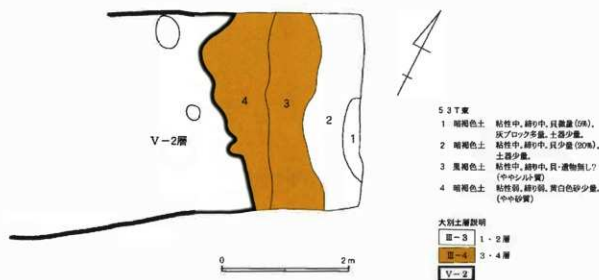


図80 53T東実測図(S=1/60)

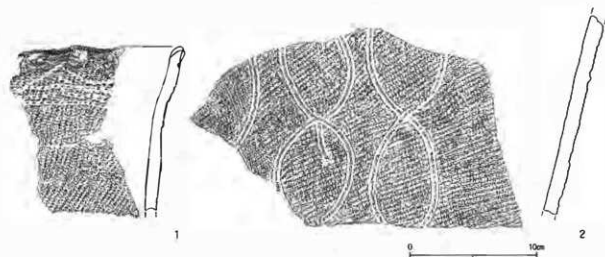


図81 53T東Ⅲ-3層出土土器(S=1/3)

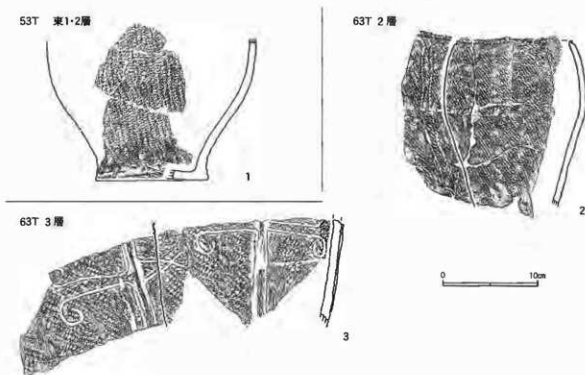


図82 53T東Ⅲ-3層・63T出土土器 (S=1/4)

線文の可能性もあるもの(同図-4)がある他、2層では有節沈線を施すもの(同図-1)が出土しており、これらは大木7b式まで下がる可能性がある。

各出土土器は、60cm幅のサブトレンチ内で得られた資料であり、各層の時期決定は難しいが、暫定的に28~30層を大木6~7a式古段階に、14~23層を大木7a式の新段階に、2~10層を大木7a新段階~7b式としておく。第4章の動物遺存体の分析では、28層以下を大木6~7a式古段階とし、27層以上を大木7式期として分析を進めているが、各層の詳細な時期決定は今後の検討事項とする。

なお、サンプル中の稲実の放射性炭素年代測定を行っている。いずれも¹⁴C年代で示すと、30層で4570±40BP、27層で4620±40BP、15層で4430±40BP、2層で4270±40BPの測定結果が得られている(附編参照)。

(2) 53T東の調査状況(図80)

台地上に位置する53T東端では、Ⅲ-3層(貝層)を幅約1.0mで確認した。上面だけ確認しただけで掘り下げて調査は実施していない。1層は灰ブロックが集中して認められ、2層では少量の貝が混入している。表土直下に確認されており、上層が削平されている可能性が高い。また、台地上で検出されたことから貝層の下層部にあたると推定される。Ⅲ-4層とした3・4層も貝の混入は確認できなかったが、Ⅲ-3層に含まれる可能性がある。

出土遺物は1・2層上面から少量認められ、図81-1・2・図82-1が該当する。図81-1は口縁部に指頭による交互押捺が施され、地文上に押圧縄文を山形に配し、下端を爪形文で区画している。口縁部の特徴から大木4式に相当すると考えられる。同図2は類例を知らないが、半截竹管による平行沈線文により木葉文状の文様を描くことから、諸磯a式の影響を受けた可能性がある。このことから、53TⅢ-3層は前期後半の大木3~4式期に形成されたものと考えられる。

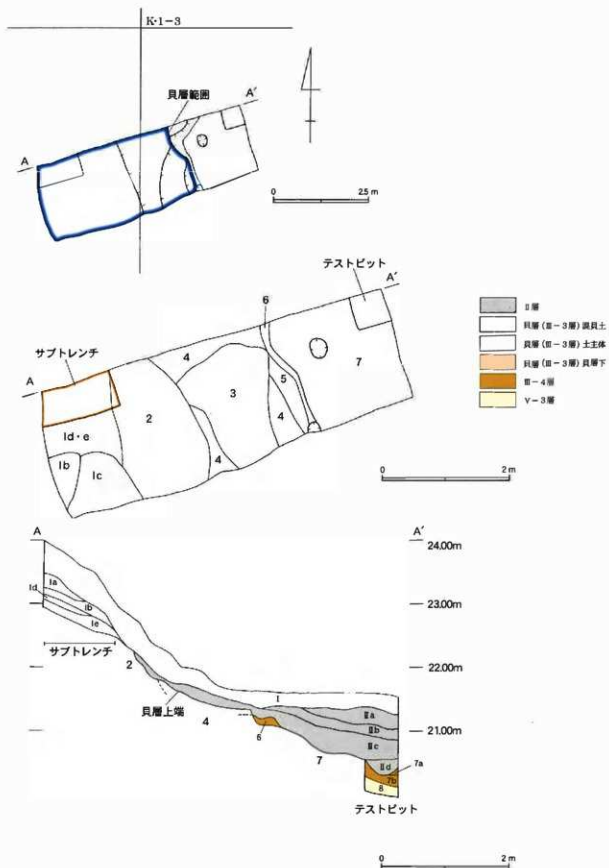


図83-1 63T実測図 (S=1/100・1/60)

大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	炭化物	混貝率	備考
I	I	黒灰褐色	土	弱	弱	—	—	—	—	黄土
II	II a	黒褐色	土	弱	弱	少量	—	—	—	ややシルト質
	II b	黒褐色	土	弱	弱	微量	—	—	—	ややシルト質
	II c	黒褐色	土	弱	中	少量	微量	微量	—	ややシルト質
	II d	明黒褐色	土	弱	中	少量	微量	微量	—	ややシルト質
III-3	1 a	暗褐色	土主体	弱	中	多量	多量	少量	—	腐植層
	1 b	にぶい褐色	土主体	強	中	少量	少量	少量	5%	
	1 c	にぶい褐色	土主体	中	中	少量	少量	少量	20%	
	1 d	にぶい褐色	土主体	中	中	少量	少量	微量	10%	
	1 e	にぶい褐色	土主体	強	中	多量	多量	多量	—	
	2	にぶい褐色	混貝土	中	中	多量	多量	多量	40%	粘土粒微量
	3	にぶい褐色	混貝土	中	中	少量	少量	多量	60%	粘土粒少量
	4	にぶい褐色	土主体	中	中	少量	少量	少量	—	
	5	にぶい褐色	混貝土	中	中	少量	少量	少量	30%	レキ少量
	6	黒褐色	シルト	強	強	微量	—	—	—	やや砂質
III-4	7 a	暗褐色	シルト	強	強	微量	—	—	—	やや砂質
	7 b	暗褐色	シルト	強	強	—	—	—	—	やや砂質
	8	黄褐色	シルト	強	強	—	—	—	—	

※ 混貝率は肉眼観察によるもの

図83-2 63T実測図

(3) 63Tの調査状況 (図83)

63Tでは、西側の段丘法面部分の約4mにわたって、Ⅲ-3層(貝層)が確認されている。東側は溝状に後世に掘り込まれており、Ⅲ-3層はより東に広がっていた可能性が高い。貝層確認時は、54Tと同様に平面的に混貝土層と土主体層が互層となっている状況が確認された。主に、斜面下位に混貝土層、斜面上位に土主体層が堆積することも共通している。土層の特徴も54Tとほぼ共通しており、土主体層は褐色基調を呈し、混貝土層の混貝率は38T(台ノ前南貝層斜面下位)ほど高いものではない。

北側壁際にサブトレンチを設定し、1層途中までの調査を実施している。サブトレンチ幅は60cmである。掘り下げて調査を行った分については、層毎に全土壌のサンプリングを行っている。

出土土器の一部を図82・84に示した。1層以外掘り下げておらず、上面で確認されたものを各層に相当するものとして示している。大木7b式(図82-2・3、図84-10・12)、大木8a式(図84-5・6)、大木8b式(図84-1・2)が出土しており、上層部分は大木7b~8b式期に形成されたと考えられる。この出土遺物から、大木7b式以降も貝層が形成されていたことが確認でき、また台ノ前北貝層の下限を大木8b式期に推定できよう。

(4) 67Tの調査状況 (図85)

台地上に位置する67Tは東側の斜面方向に向かって1.7mにわたり、土層を中心としたⅢ-3層(貝層)を確認した。掘り下げて調査は行っていないので、詳細は不明だが、約6m東に位置する54TⅢ-3層と一連のものと考えられる。Ⅲ-3層範囲の西側はV-2層が確認される。

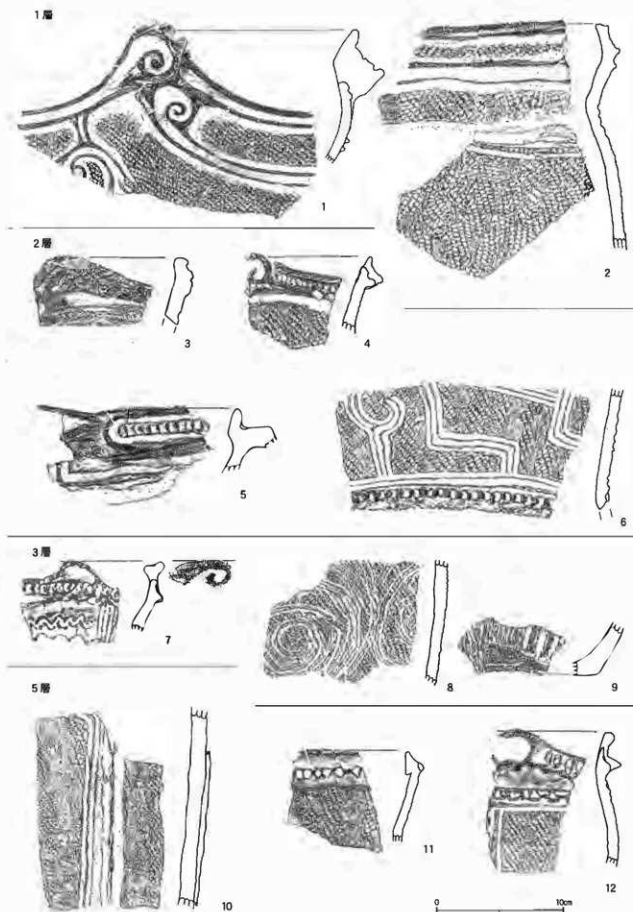


図84 63T出土土器 (S=1/3)



写真144 53T東貝層検出状況（西から）



写真145 63T貝層検出状況（東から）



写真146 63T貝層検出状況（東から）



写真147 63T貝層調査状況

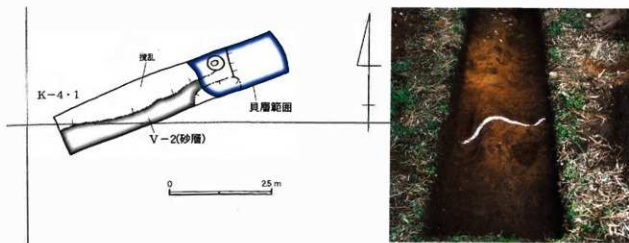


図85 67T実測図 (S=1/100)

写真148 67T貝層検出状況 (東から)

4. I区遺物包含層 (図86)

I区は平成12年度に調査された41・42Tを拡張して平成13年度に調査されたものである。台ノ前南貝層の斜面下にあたり、台ノ前地区から小迫北地区(西の谷)にかけて認められる埋没谷部に相当する。平成12年度調査時は縄文中期～晩期の土器が出土すること、湧水点を掘削して構築される木組遺構(SX01)を中～近世の所産として報告した(川田2001)。

調査区を拡張して実施した結果、谷部に傾斜して調査区全体を覆う暗褐色シルト層(Ⅲa・b層)を検出し、縄文土器を多く含むことが認められた。これを大別Ⅲ-5層(貝層以外の縄文遺物包含層)とした。

Ⅲ-5層は、サブトレンチを調査区北壁際に設定し、掘り下げて調査を実施した。5～10cm掘り下げた段階で多くの土器が出土したため、掘り下げを止め、サブトレンチ西端の斜面上位でテストピットを設け、層厚及び堆積状況を確認した。

Ⅲ-5層は2層に細別され、下層部分(Ⅲb層)より多くの土器が出土する。層厚は約20cmである。土器は大型土器片も含むが、復元率は低く、完形・半完形の土器はほとんど見られない。また被熱したレキを多く含む。出土土器は網取式が最も多く、中期の土器も含まれているが、貝層が位置する斜面下に検出されたため、流れ込みが多数あるものと予測される。

中近世の遺構とした木組遺構は、階段状にテラスを持ちながら掘り込まれた最下面に位置することが確認された。これを全体的に総称して水場遺構とした。詳細は本報告では見送るが、Ⅲ-5層を掘り込んで構築されており、中近世における湧水利用施設と考えることができる。

Ⅲ-5層は土器の出土量は多く、また埋没谷及び湧水部に堆積しているものであることから、縄文時代における谷部の積極的な利用を示していると言える。Ⅲ-5層の堆積の下限としては、後期前葉と考えられる。また、Ⅱ層中に含まれる破砕貝については、貝層の二次堆積と考えられる。

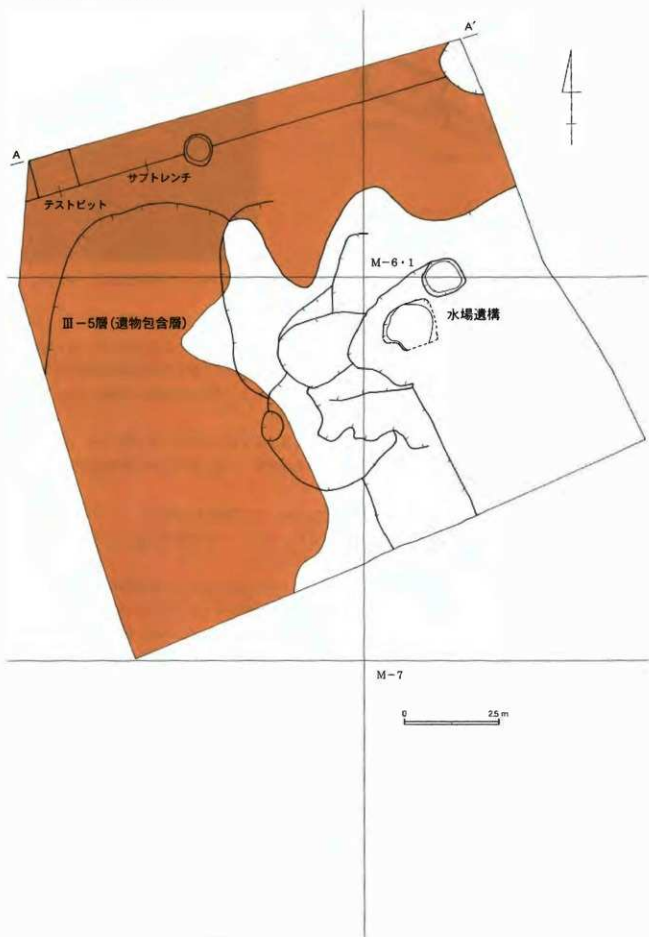


図86 I区実測図 (S=1/100)

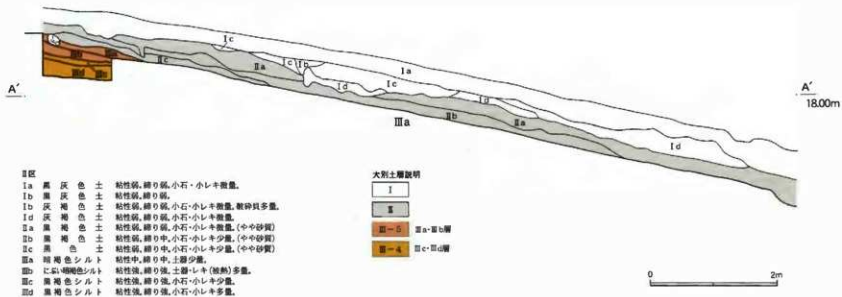


図87 I区断面図 (S=1/60)



写真149 I区遺物包含層確認状況
(西南から北東を望む。)



写真150 I区遺物包含層調査状況
(サブトレンチ)



写真151 I区水場遺構確認状況

第6節 西向地区の調査

1. 貝層・遺物包含層の概要

南台地区から西向地区にかけての西斜面（西向地区斜面上部）に、貝層が1箇所確認された。これまでに「西向貝塚」と称されてきたものである。今回のトレンチによる調査、検土杖によるボーリング調査、表面調査の結果、図11に示す範囲が推定され、「西向貝層」と称することとした。貝層の分類及び混貝率の基準は台ノ前地区と同様である。

西向貝層は、東西最大約20m、南北約49mを測る。64Tで上下端が確認されており、削平部分を挟んではいるが、上端の標高が約25.5m、下端で約20.0mを削り、上下端の比高差は約5.5mである。土主体層の上位及び斜面下位に混貝土層が堆積している状況が認められた。

また、52T西では貝層（Ⅲ-3層）上に壘穴住居が構築されている。53T西では、西端に破砕貝混じりの西ab層を確認したが、貝の混入状況もまだらであることから、後世の影響を受けているものと考えられ、Ⅱ層に含めた（図19参照）。過去に福島大学考古学研究会で調査したDトレンチは、53T西に隣接するものと推定され、約20cmの貝層が確認されている（福島大学考古学研究会1971）。しかし、今回のボーリング調査等では当該部分までの貝層の広がりには確認できなかった。調査後、耕作等の影響により破壊されている可能性もある。

また西向地区斜面下部は、表土上から多くの破砕貝が認められており、過去の表面調査でも貝層の分布が指摘されてきた（森1991等）。今回の65T等のトレンチによる調査及びボーリング調査により、破砕貝は表土中に含まれるもので二次堆積であることが確認され、現時点では斜面下部において貝層は認められない。これら二次堆積の破砕貝は、耕作等により西向貝層が破壊され、斜面下部まで崩落したのと考えられる。

斜面下部には遺物包含層（Ⅲ-5層）が確認され、①~③Tが位置する低地部まで広がるものと考えられる。68・69Tは急斜面にあたり、Ⅲ-5層（遺物包含層）を確認することができなかった。低地部にあたるⅢ区では深掘りを行い、標高約0.1mで基盤層である青灰色シルト岩を確認した。標高1.0m前後で平安時代の土師器を含む自然流路及び溝を確認した。縄文時代の堆積土は、谷からの流水により失われている可能性が高く、確認できなかった。

2. 西 向 貝 層（図88~90）

64Tで調査が実施されている。Ⅲ-3層（貝層）は、台地上から斜面下部に向かって約14m、削平部において約5mの範囲でⅠ・Ⅱ層下に確認されている。検出状況から上部は一部削られているものと判断される。Ⅲ-3層分布範囲の東側では、SD02がV-2層を掘り込んで構築されている。SD02東側はⅢ-1層（暗褐色系砂質土・縄文包含層）の堆積が認められる。

貝層確認時は、土主体層の上層及び斜面下位に混貝土層が堆積している状況が確認された。この貝層（Ⅲ-3層）を平面的な観察により、次のように大別した。

- a層 混貝土層を中心とし、黒褐色土を基調とするものである。混貝率が比較的高く、平面観察では最も上層にあたる。出土土器には網取式を含む。
- b層 混貝土層を中心とし、暗褐色土、褐色土を基調とするものである。混貝率はa層に比較的低いものである。a層下、c層上に堆積しており、斜面下に多く認められる。
- c層 土主体層を中心とし、褐色土を基調とするものである。台ノ前南・北貝層の土主体層・土層と類似する。a・b層の下層に堆積している。
- d層 貝層最下層にあたり、貝をほとんど含まない層である。

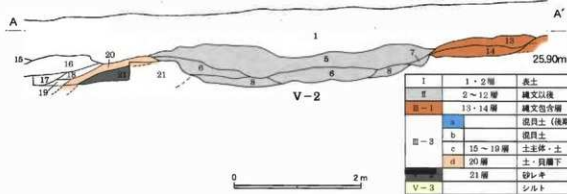
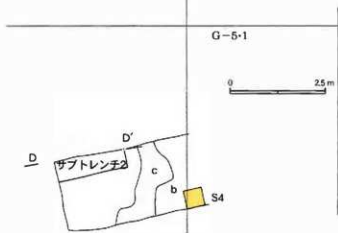
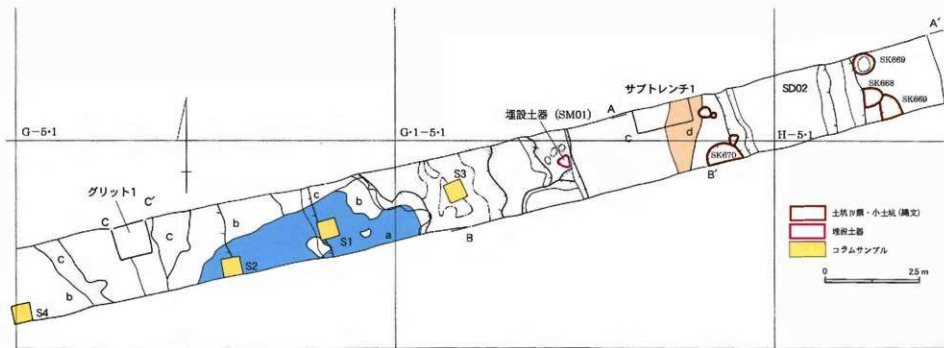
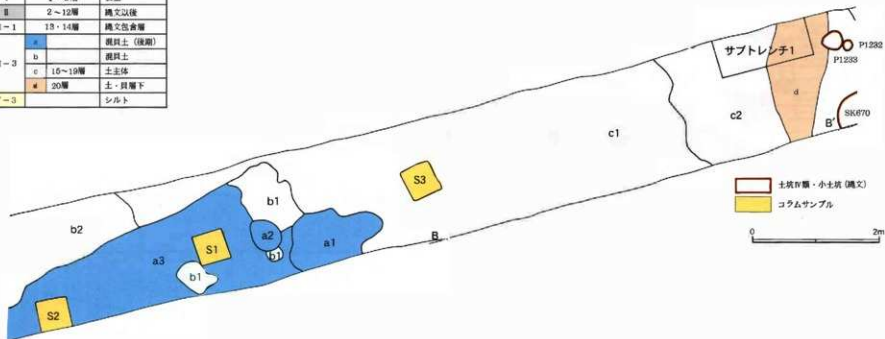


図88 64T実測図① (S=1/100・1/60)

I	1・2層	表土
II	2～12層	縄文以後
III-1	13・14層	縄文包合層
III-3	a	縄貝土 (埋溜)
	b	縄貝土
	c	15～19層 土主体
	d	20層 土・貝層下
V-3		シルト



平面分類 層名	土色	種別	ローム粒	ローム ブロック	焼土 粒	灰化 粒	炭貝 率	備考	AA'-BB'土層
a1	黒褐色	縄貝土	少量	少量	少量	少量	50%		
a2	黒褐色	縄貝土	痕跡	痕跡	—	少量	50%		
a3	黒褐色	縄貝土	少量	少量	少量	多量	80%		
b1	にぶい褐色	縄貝土	多量	少量	痕跡	少量	30%		
b2	にぶい褐色	縄貝土	少量	少量	多量	多量	40%	灰ブロック多量	
b3	暗褐色	縄貝土	微量	微量	痕跡	少量	30%		
b4	暗褐色	縄貝土	多量	多量	少量	多量	50%		
c1	にぶい褐色	土主体	少量	少量	少量	少量	5%		15層
c2	にぶい褐色	土主体	少量	多量	少量	痕跡	5%		16層
c3	にぶい褐色	土	多量	多量	少量	少量	—		
c4	暗褐色	土主体	少量	少量	—	少量	5%	やや砂質	
d	褐色	土	多量	多量	—	—	—	ややシルト質砂	20層

※炭貝率は肉眼観察によるもの

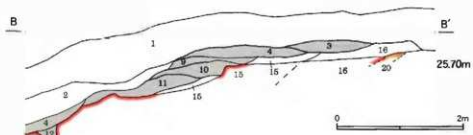
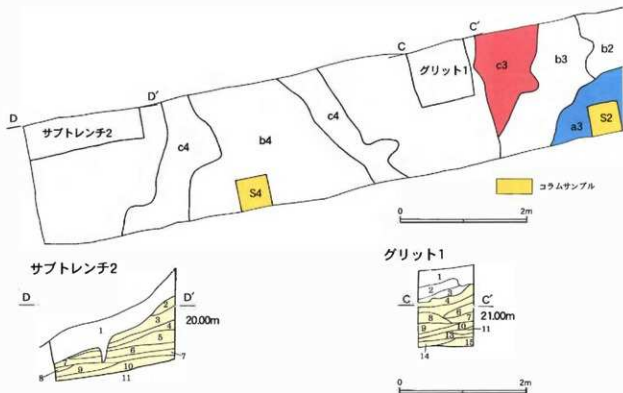


図89 64T実測図② (S=1/60)



AA'・BB'断面

- 1 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, ローム粒少量。
- 2 明黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・ローム粒少量。
- 3 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・土器多量, ローム粒少量。
- 4 明黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・ローム粒少量, 土器多量。
- 5 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・焼土粒少量, ローム粒少量。
- 6 にぶい暗褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・ローム粒少量。(やや砂質)
- 7 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ多量, ローム粒少量。(やや砂質)
- 8 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ多量, 黄灰色砂ブロック多量。
- 9 明黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・ローム粒・焼土粒少量。
- 10 明黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・ローム粒少量。
- 11 明黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石・小レキ・レキ・ローム粒少量, 土器多量。
- 12 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, ローム粒少量。
- 13 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石・黄灰色砂少量。
- 14 暗褐色砂質土 粘性弱, 締り中, 小石・黄灰色砂少量。
- 15 にぶい暗褐色土 粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量, ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量, 土器多量。
- 16 にぶい暗褐色土 粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量, ローム粒・ロームブロック少量, 焼土粒少量, 土器多量。
- 17 にぶい暗褐色土 粘性中, 締り中, 小石・小レキ・焼土粒少量, ローム粒・ロームブロック少量, 土器多量。
- 18 暗褐色土 粘性中, 締り中, 小石・小レキ・ロームブロック・焼土粒少量, ローム粒少量, 土器多量。
- 19 にぶい暗褐色土 粘性強, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量, 焼土粒少量, 土器多量。
- 20 褐色土 粘性強, 締り強, ローム粒・ロームブロック多量, 土器少量。(ややシルト質砂)
- 21 黄灰色砂レキ 粘性弱, 締り強。

グリット1

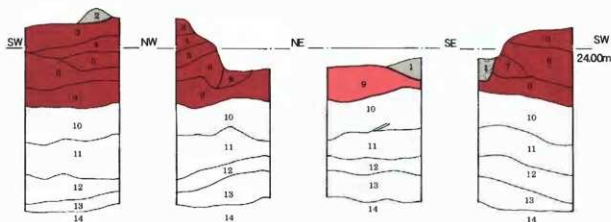
- 1 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石多量, 磁石多量。
- 2 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石少量, 磁石多量, 褐色土ブロック少量, 粘性弱, 締り弱, 小石少量, 褐色土ブロック多量。
- 3 黒褐色土 粘性強, 締り強, 小石・小レキ少量。
- 4 暗褐色シルト 粘性強, 締り強, 小石・小レキ少量。
- 5 褐色シルト 粘性中, 締り中, 小石・小レキ多量。
- 6 灰褐色砂質シルト 粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量。
- 7 黄灰色砂質シルト 粘性強, 締り強, 小石・小レキ少量。
- 8 褐色砂質シルト 粘性強, 締り強, 小石・小レキ少量。
- 9 黄褐色砂質シルト 粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量。
- 10 黄灰色砂質シルト 粘性中, 締り中, 小石・小レキ少量。

サブトレんチ2

- 1 黒褐色土 粘性弱, 締り弱, 小石多量, 磁石多量。
- 2 暗褐色シルト 粘性強, 締り強, 小石・小レキ少量。
- 3 褐色シルト 粘性強, 締り強, 小石・小レキ少量。
- 4 灰褐色砂質シルト 粘性中, 締り中, 小石少量。
- 5 暗褐色砂質シルト 粘性中, 締り中, 小石・小レキ多量。
- 6 黄灰色砂 粘性弱, 締り中, 小石・小レキ少量。
- 7 褐色砂 粘性弱, 締り中, 小石・小レキ多量。
- 8 黄灰色砂質シルト 粘性強, 締り強, 小石・小レキ少量。
- 9 黄灰色砂レキ 粘性弱, 締り強。
- 10 褐色砂レキ 粘性弱, 締り強。
- 11 黄灰色砂質シルト 粘性強, 締り強。

図90 64T実測図③ (S=1/60)

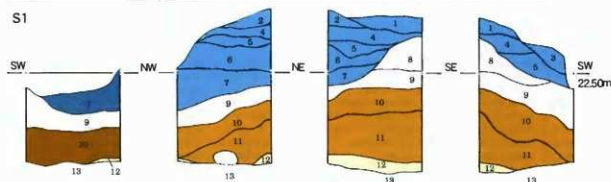
S3



大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	炭化粒	焼土粒	混貝率	備考
S3	1	黒褐色	土	弱	弱	微量	—	—	—		
	2	黒褐色	土	弱	弱	微量	—	—	微量		
	3	暗褐色	土	中	弱	少量	微量	少量	少量		
	4	にぶい暗褐色	土	中	弱	少量	—	少量	少量		
	5	にぶい暗褐色	土	中	弱	少量	—	少量	少量		
	6	暗褐色	土	中	中	多量	少量	少量	少量		
	7	暗褐色	土	強	強	少量	少量	少量	少量		
	8	暗褐色	土	中	弱	微量	—	—	微量		
	9	にぶい暗褐色	土	中	中	少量	微量	多量	少量		
	10	にぶい褐色	土主体	中	中	多量	少量	多量	少量	5%	
	11	黒褐色	土主体	中	弱	少量	微量	多量	微量	10%	
	12	にぶい褐色	土主体	弱	弱	多量	—	微量	微量	5%	
	13	褐色	土主体	弱	弱	少量	—	微量	微量	5%	
	14	明褐色	土主体	中	中	—	—	—	—	5%	養分層

※混貝率は内研観察によるもの

S1



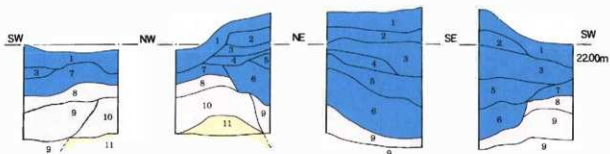
大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム粒	炭化粒	混貝率	備考
S1 (a)	1	黒褐色	混貝土	弱	弱	微量	—	20%	磁砂貝多量。
	2	黒褐色	混貝土	弱	中	微量	—	60%	マテガイ層中。
	3	暗褐色	混貝土	弱	中	微量	—	50%	アサリ主体。
	4	にぶい暗褐色	混貝土	弱	中	微量	—	20%	
	5	にぶい暗褐色	混貝土	弱	中	微量	—	40%	アサリ・イボキサゴ多量。
	6	にぶい暗褐色	混貝土	弱	弱	微量	—	80%	マテガイ層中。
	7	暗褐色	混貝土	弱	弱	微量	—	30%	磁砂貝主体。レキを含む。
S1 (c)	8	褐色	土主体	中	中	微量	微量	5%	
	9	にぶい暗褐色	土主体	中	中	微量	微量	5%	
S1 (b)	10	褐色	砂質土	強	強	—	—	—	
	11	黒褐色	砂質土	強	強	—	—	—	ややシルト質
V-3	12	にぶい褐色	砂質シルト	強	強	—	—	—	やや砂質
	13	褐色	シルト	強	強	—	—	—	

※混貝率は内研観察によるもの



図91 64TコラムサンプルS1・S3断面図 (S=1/20)

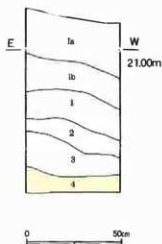
S2



大別層	層名	土色	層別	粘性	締り	ローム状	炭化粒	炭貝率	備考
Ⅱ-3 (a)	1	黒褐色	炭貝土	弱	弱	微量	微量	20%	破砕貝多量。
	2	黒褐色	炭貝土	弱	弱	微量	-	60%	アサリ・イボキサゴ多量。
	3	黒褐色	炭貝土	弱	弱	微量	-	60%	アサリ・イボキサゴ多量。
	4	黒褐色	炭貝土	弱	中	微量	-	20%	
	5	黒褐色	炭貝土	中	中	微量	-	80%	アサリ・マナガイ多量。
	6	黒褐色	炭貝土	中	中	微量	-	80%	ツメタガイ主体。
	7	黒褐色	炭貝土	中	中	微量	-	30%	破砕貝主体。レキを含む。
Ⅲ-3 (a)	8	暗褐色	土主体	強	中	微量	微量	20%	
	9	暗褐色	土主体	強	中	少量	少量	16%	ロームブロック少量。
	10	褐色	土	強	強	高粘	-	-	
V-3	11	明褐色	シルト	強	強	-	-	-	

※ 炭貝率は肉眼観察によるもの

S4



大別層	層名	土色	層別	粘性	締り	ローム状	炭化粒	炭貝率	備考
I	1a	黒褐色土	土	弱	弱	微量	-	-	小石・小レキ微量。
	1b	明黒褐色土	土	弱	弱	微量	-	-	小石・小レキ微量。
Ⅲ-3 (b)	1	にぶい暗褐色	炭貝土	中	弱	微量	多量	30%	破砕貝多量。
	2	にぶい褐色	炭貝土	中	中	微量	少量	30%	破砕貝多量。
	3	黒褐色	炭貝土	中	中	微量	少量	5%	レキ含む。 (ややシルト質)
V-3	4	褐色シルト	シルト	強	強	-	-	-	

※ 炭貝率は肉眼観察によるもの

図92 64TコラムサンプルS2・S4断面図 (S=1/20)



写真152 64T貝層検出状況（西から）



写真153 64T貝層調査状況（西から）
黒褐色土を基調とし、貝が多く含まれる土層がa層である。



写真154 64T貝層（a層）検出状況（西から）
a層はc層を型り込むように検出される。



写真155 64T貝層台地上調査状況（東から）
斜面上位は土層・土主体層が確認される。



写真156 64Tb層（斜面下位）検出状況



写真157
64Tコラムサンプル
S3調査状況
S3は土層が中心で、極少量の貝が含まれる土主体層が多く認められる。



写真158
64Tコラムサンプル
S1 調査状況
中層にマテガイの集中層が認められる。下層のc層を掘り込んで、a層が堆積している。



写真159
64Tコラムサンプル
S2調査状況
V-3層を掘り込んでいる状況が確認できる。



写真160 SM01出土土器



写真161 SM01検出状況



写真162 SM01調査状況
土器内部から骨片が確認された。

これらは、さらに細別される。また、台地上にサブトレンチ1を設定し、15～25cm 掘り下げて貝層上端の確認を行った。Ⅲ-3層の調査は、50cm 角のコラムサンプルを4箇所設定し、厚さ5cm 毎のサンプルを採取している。

c層はa・b層の下位にあたるものであり、コラムサンプルS3では、約90cmの堆積が認められた。S3の14層はV-3層にあたる褐色シルト（砂質シルト）と漸移的であることから、c層はほぼ1m前後の堆積と推定される。S3の上層は貝を含まない土層が中心であり、下層に至り少量の貝を含む土主体層となるが、上層部にも魚骨の出土は比較的多く認められる。

コラムサンプルS1・S2では、a層下に25～30cmのc層が確認されている。S2ではc層がV-3層を掘り込んでいる状況が確認され、貝層下に遺構が存在する可能性がある。

c層の計測混貝率はS1で0.2%、S2で3.1%、S3で0.2%といずれも低い数値を示す。

また、c層上面に完形土器が横倒しになった状態で出土している（写真161・162）。土器内部より骨片を確認したことにより、掘りこみを持たないが埋設土器と考えられる（SM01）。土器は大木8a式に相当する（写真160）。

c層内の出土遺物の一部として、S1から大木6式（図93-4～6）、S3から大木6～7a式（同図10～16）を掲載した。これらから、c層は大木6～7a式期の堆積であり、埋設土器の確認から大木8a式期にほぼ堆積を終了しているものと考えられる。S3の11層下部（c層）にあたるサンプル15内から出土した種実の放射性炭素年代測定を行っており、¹⁴C年代で4590±40BPの測定結果が得られている（附編参照）。

a層は斜面下部に約6mの範囲で確認されている。コラムサンプルS1・S2で調査がおこなわれている。

S1では最大厚40cmを測り、c層を掘り込むような堆積が認められる。全体的にはアサリを主体とするが、2・6層はマテガイの集中が見られ、3層がアサリ主体、5層はアサリ・イボキサゴが多いこ

S1大別a層



1(3A)



2(7A)



3(8A)

S1大別c層



4(7B)



5(7B)



6(7B)



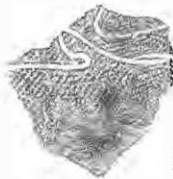
S2大別a層



7(12A)



8(A-括)



9(8A)

S3(大別c層)



10(3)



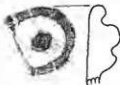
11(10)



12(11)



13(12)



14(13)



15(16)



16(18)



※ () 書きはサンプル番号を示す。

図93 64Tコラムサンプル出土土器① (S=1/4・1/3)

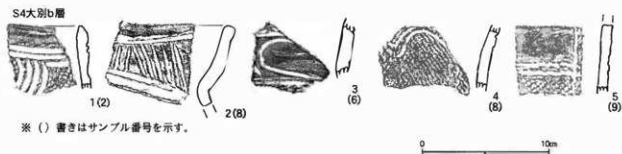


図94 64Tコラムサンプル出土土器② (S=1/3)

とが認められるなど、特定貝種の包含状況が層序の分類基準となる状況が認められた。計測混貝率は29.8%と高い数値を測る。

S2のa層は、最大厚70cmを測り、S1と同様、c層を掘り込むような堆積が認められる。2・3層はアサリ・イボキサゴ、5層でアサリ・マテガイが多く見られ、下層にあたる6層はツメタガイの集中層である。S1と同様、特定の貝種が集中して堆積する状況が認められた。計測混貝率は24.9%と高い数値を測る。S1・2の堆積状況からは、台ノ前北・南貝層の混貝土層と比較し、特定の貝種が集中すること、高い計測混貝率を図ること、土主体層・土層を含まないことなど大きな差が認められる。また、a層はc層を掘り込むような堆積状況を示していることから、遺構内貝層の可能性も指摘できる。

S1・S2のa層からは網取式の遺物が多く出土しており(図93-1~3、7~9)、a層は網取式期の形成と考えられる。S2の3・4層にあたるサンプル3内から認められた種実の放射性炭素年代測定を行っており、 ^{14}C 年代では $3740 \pm 40\text{BP}$ の測定結果が得られている(附編参照)。

b層は、斜面下部のa層下に認められたものと、削平部を挟んでさらに西側の斜面下に確認されたものがある。a層下のb1~3層はa層に比較し、褐色系統の色調を示し、混貝率も低いものである。西側の斜面下に確認したb4層も混貝率は低く、褐色系統を中心とし、c層上に堆積する。

コラムサンプルS4はb4層に相当し、約40cmの層厚を確認した。破碎貝が多く認められ、計測混貝率は7.8%と比較的低い数値を示す。上面は破壊されている部分が多いと考えられる。魚骨量は少ない。出土遺物は上層の1層相当のサンプル2から網取式(図94-1)が出土し、下層の3層相当のサンプル6~9で大木7a新段階~7b式(同図2~5)が出土している。これらは小破片であり、時期を確定するには至らないが、暫定的に上層を網取式期、下層を大木7a新段階~7b式期としておく。

全体的なb層の堆積時期は、a・c層との前後関係を踏まえ、大木7式期以降、網取式期以前と推定される。

また、貝層下の堆積状況を確認するため、コラムサンプルのほか、グリット・サブトレッチ2を設定して調査を実施している。最も下層にあたるサブトレッチ2では、シルト層の下層に砂層が確認され、以下砂質シルトと砂レキが互層となって堆積している。

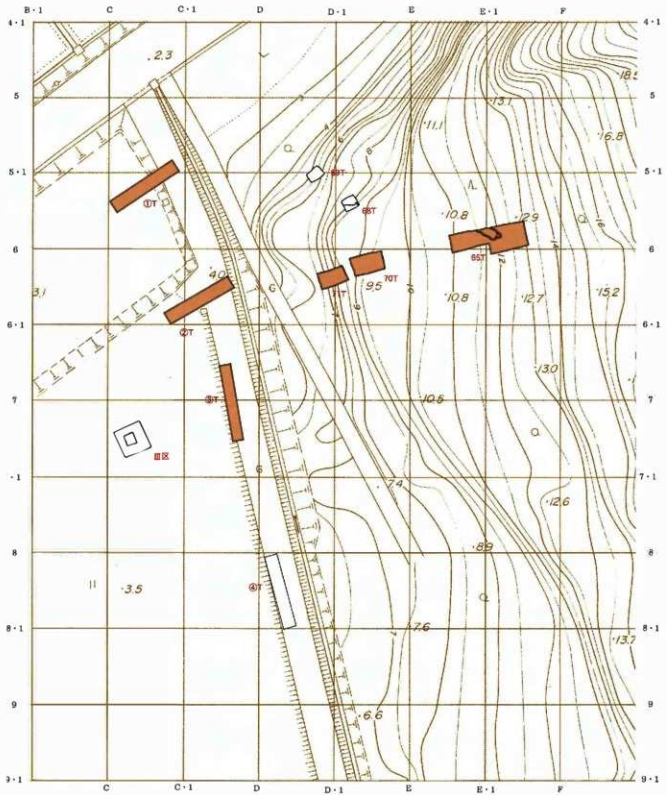
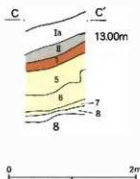
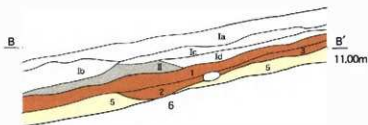
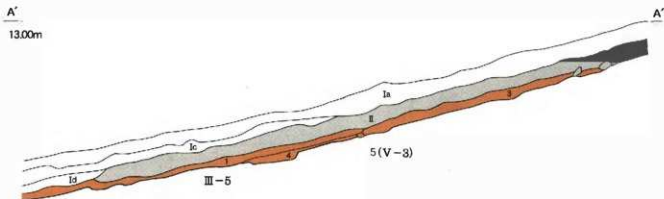
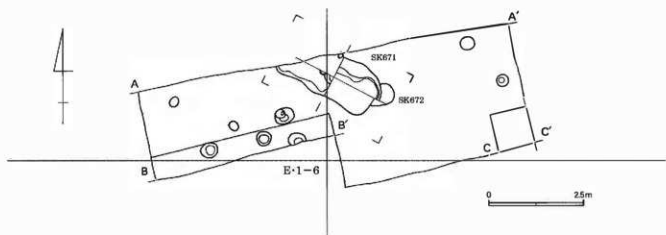


図95 西向地区斜面下部・低地部調査状況図 (S=1/500)



65T-1

- 1a 灰黒色土 粘性弱、締り弱、小石・レキ多量、炭砂貝少量。
- 1b 黒色土 粘性弱、締り弱、小石・レキ少量、炭砂貝多量。
- 1c 灰黒色土 粘性弱、締り弱、小石・レキ少量、炭砂貝少量。
- 1d 灰黒色土 粘性弱、締り弱、小石・レキ多量。
- Ⅰ 黒褐色土 粘性中、締り中、小石・レキ少量。
- 1 暗褐色土 粘性中、締り中、小石少量、土器少量。(中やシルト質)
- 2 暗褐色土 粘性中、締り中、小石微量、土器微量。(中やシルト質)
- 3 暗褐色シルト質土 粘性強、締り強、小石・レキ多量、土器極微量。
- 4 黒褐色土 粘性中、締り強、小石・レキ少量、炭化粒微量。(SK671遺上)
- 5 淡い黄褐色シルト 粘性中、締り中、小石・レキ多量。
- 6 褐色砂質シルト 粘性強、締り強、小石・レキ多量。
- 7 淡い褐色砂質シルト 粘性強、締り強、小石・レキ少量。
- 8 淡い褐色シルト 粘性強、締り強、小石微量。
- 9 褐色シルト 粘性極強、締り極強、凝灰質シルト。

大層土層説明

- Ⅰ Ia~d
- Ⅱ
- Ⅲ-5 1~4層
- V-3 5~8層
- Ⅵ 9層

図96 65T実測図 (S=1/100・1/60)

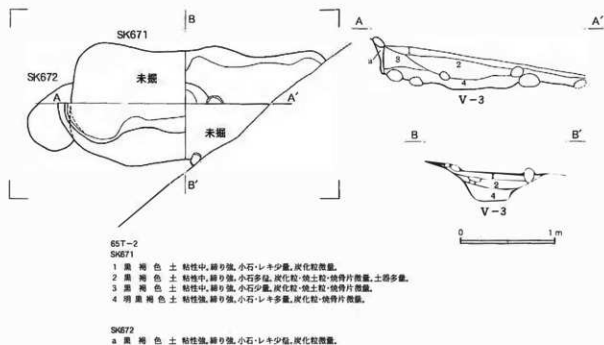


図97 65TSK671実測図 (S=1/40)



写真163 65TSK671調査状況



写真164 65T調査状況



写真165 65TSK671調査状況

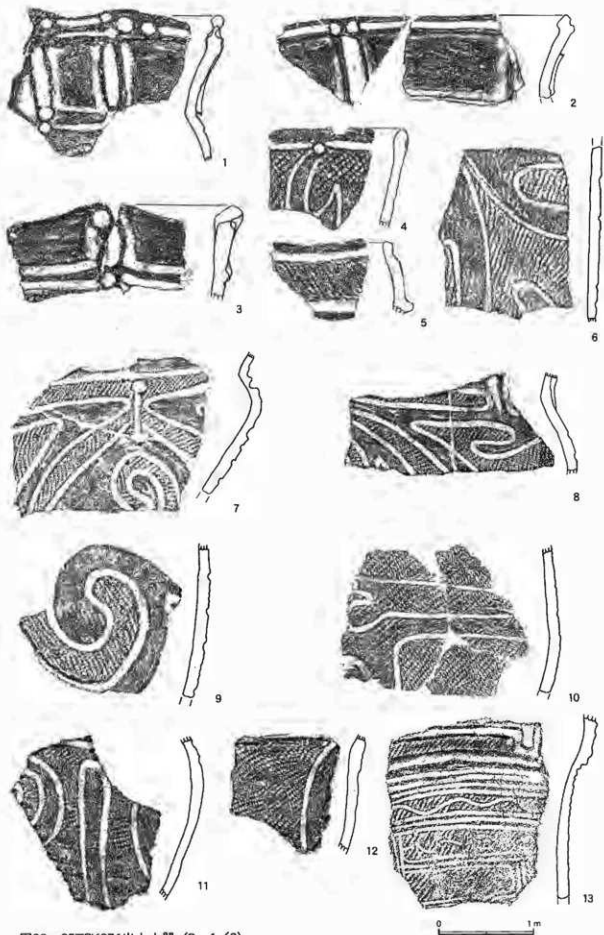


図98 65TSK671出土土器 (S=1/3)

3. 遺物包含層 (図96)

遺物包含層は65・70・71・①～③Tで確認されている。このうち65Tの調査状況について報告しておく。65Tでは、ほぼ全面的にⅢ-5層 (遺物包含層) が確認されている。Ⅲ-5層は暗褐色土を基調とし、少量の土器を含む。層厚は約20cm であり、斜面下位側に比較的に厚みをもって堆積している。表土中には破砕貝を多く含むが、Ⅲ-5層中にはまったく含まれない。65T中のⅢ-3層の標高は、斜面上位で12.7m、斜面下位で10.2mを測り、Ⅲ-5層は緩斜面上に堆積しているといえることができる。

Ⅲ-5層下は小石・レキが多く認められる黄褐色シルト層 (V-3層) が確認され、西向地区斜面下部の縄文時代の遺構確認面となっている。小石・レキが多く含まれることについては、65T付近が貝層が堆積する急斜面から緩斜面部に移る部分に相当し、上位からの崩落によるものと考えられる。

Ⅲ-5層下にSK671を確認し、半裁して調査を行っている。SK671は長軸270cm以上、短軸110cmの長方形の掘りこみを持ち、深さは約30cmを測る。覆土中にレキが多く含まれるが、地山であるV-3層からの流れ込みと考えられる。炭化粒・焼土粒・焼獣魚骨片が顕著に認められるほか、多くの土器片が出土した。図98にその一部を示した。13が大木8a式、5が大木9式に相当するが、その他は全て網取式である。このことからSK671は網取式の所産といえることができる。

SK671上に堆積するⅢ-5層も網取式の土器が主体であり、それ以前の土器も少量含まれている。このことからⅢ-5層は網取式期の堆積と考えられる。

SK671及びⅢ-5層の検出は、西向地区斜面下部における、後期前葉段階の積極的な利用を示すと言えよう。少量ながら出土している土器から、斜面下部での活動はそれ以前の段階にも行われていた可能性が指摘できる。

第7節 小迫北・南地区の調査

1. 調査区について（図6・99・100）

小迫北・南地区の調査は平成12・15・16年度に実施されたものである。一部南台地区の調査区を合むが、次のように整理される。

南台地区台地南……13～15、21、22T

小迫北地区台地……21～28、50、72、76、77、79、80T、IV区、1～7G

小迫北地区台地の東西二箇所の埋設谷を西の谷・東の谷と呼称する。

西の谷……26～28、80T、IV区

東の谷……72、76、1～7G

小迫北地区低地……73T

小迫南地区台地西……11、12、82T

小迫南地区台地東……83、84T

小迫南地区斜面……81T

小迫地区南谷……1～7、74、75、78T

この他に9・16～20、29、30Tが平成12年度に調査されたが、削平されており遺構・遺物は検出されていない。

2. 基本土層

第1節に加え、小迫地区の堆積土を確認しておく。調査区が分散し、調査区により層序が異なるので、調査区断面・サブトレンチ断面等により調査区ごとに土層を大別して柱状図に示した（図101）。Ⅲ層の分類のみ南台地区等と異なる。Ⅲ層以外は南台地区と同様である。

I層……表土。近代の耕作土と考えられる。

Ⅱ層……黒色土。谷堆積土でⅢ層上に堆積。

Ⅲ層……縄文時代の堆積層。小迫地区では次のように大別した。

Ⅲ-1層……黒褐色・暗褐色混貝土層。縄文時代晩期。

Ⅲ-2層……小迫北地区台地の西の谷に堆積する焼獣骨を含む包含層。

Ⅲ-2a層……黒褐色土。晩期前葉～中葉。

Ⅲ-2b層……暗褐色土。後期中葉～晩期前葉。

Ⅲ-3層……小迫北地区台地の東の谷に堆積する包含層。

Ⅲ-3a層……暗褐色・黒褐色土。晩期前葉～中葉。獣骨含む。

Ⅲ-3b層……暗褐色土・黒褐色土。後期中葉～晩期前葉。獣骨含まない。

Ⅲ-4層……Ⅲ-1～3層下に堆積する縄文時代の遺物を含まない層。

Ⅲ-4a層……暗褐色シルト。

Ⅲ-4b層……黒褐色土。

Ⅲ-5層……Ⅲ-1～4層以外の縄文包含層を一括した。柱状図には示していない。

Ⅳ層……ローム層

Ⅳ-2層……硬質ローム（ハードローム）。

Ⅳ-3層……軟質ローム（砂質ローム）。

Ⅴ層……第四紀の段丘堆積物。

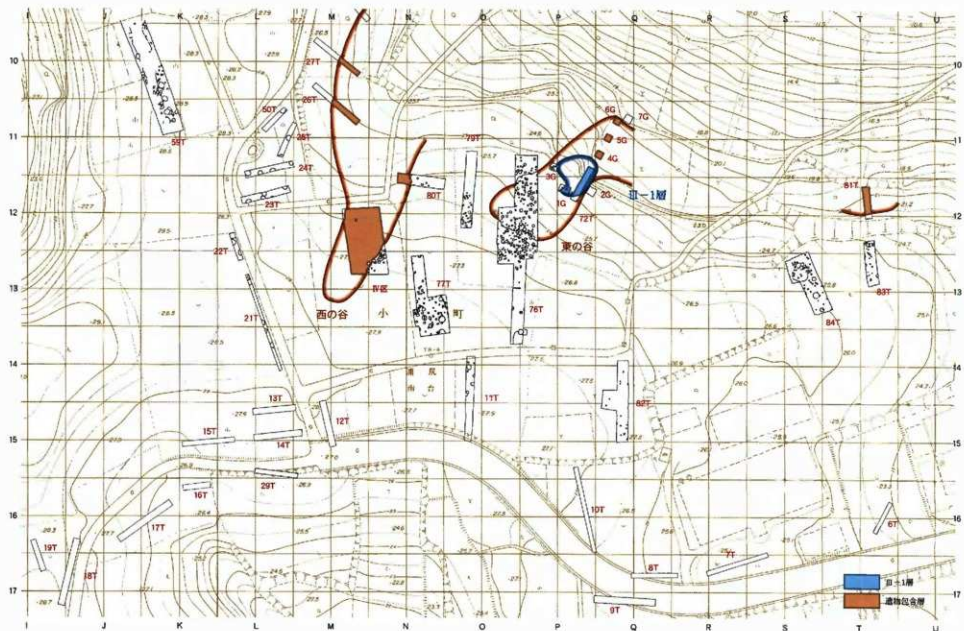


図99 小迫地区トレンチ配置図① (S=1/1000)

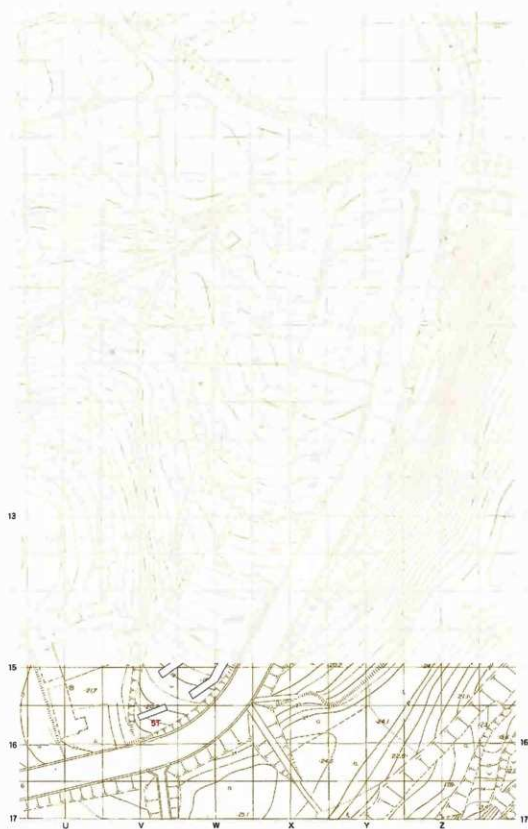


図100 小迫地区トレンチ配置図② (S=1/1,000)

V-3層……シルト及び砂質シルト。

VI層……凝灰岩質シルト

遺構確認面はIII層及びIV層である。

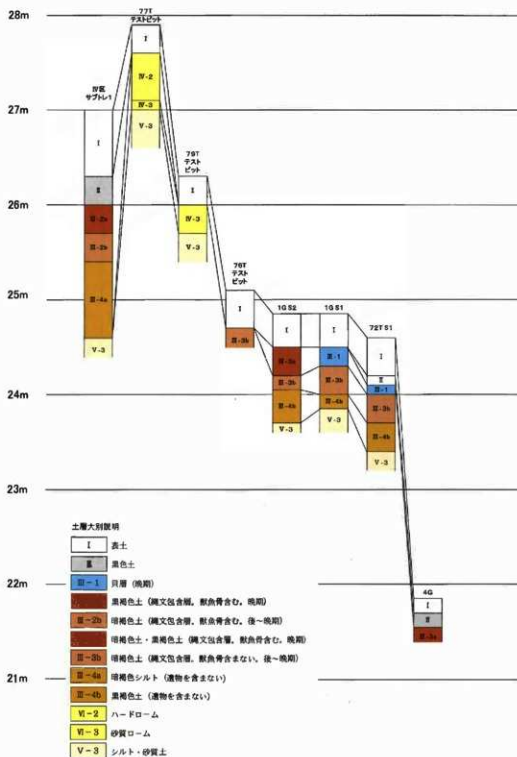


図101 小迫地区土層柱状図 (S=1/40)

3. 小迫北・南地区の調査成果

遺構の調査方法・種別分類方法は南台地区等と同様である。

(1) 小迫北・南地区の調査概略

南台地区台地南部・小迫北地区台地部（図102～109）

南台地区台地南部は、南台地区台地中央部の南側に位置する。標高25～29mを測る。小迫北地区台地部は、小迫北地区内の西側に位置する。標高約20～28mを測る。小迫北地区斜面部に向かって緩やかに傾斜している。東西二箇所の埋没谷（西の谷・東の谷）を確認している。東西の谷に挟まれて、舌状の台地が北に延びる。東西の谷の間隔は約25mである。

南台地区台地南部の東部分にある21・22T、小迫北地区の西の部分にある23～25・50Tでは、土坑Ⅱ・Ⅳ類を検出した（図102・103、写真166～171）。小迫北地区

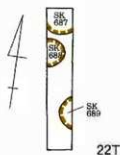


写真166
22T遺構検出状況。（北から）
Ⅱ類と推定される3基の土坑が確認された。



写真167
21T遺構検出状況。（北から）
Ⅱ類と推定される5基の土坑が確認された。

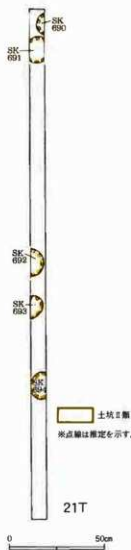


図102 21・22T実測図（S=1/200）

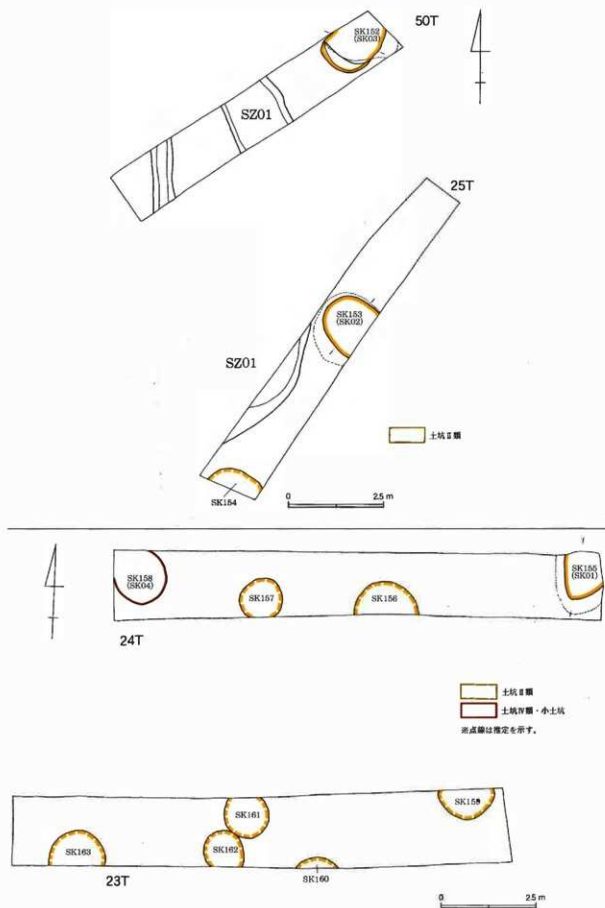


図103 23~25・50T実測図 (S=1/100)



写真168 50T遺構検出状況。(北東から)
土坑Ⅱ類を1基、浦尻古墳群1号墳の周溝と推定される溝1条、時期不明の溝を1条確認した。



写真169 25T遺構検出状況。(南西から)
Ⅱ類と推定される土坑を2基、浦尻古墳群1号墳の周溝と推定される溝を1条確認した。



写真170 23T遺構検出状況。(西から)
Ⅱ類と推定される土坑が6基確認された。



写真171 24T遺構検出状況。(西から)
Ⅱ・Ⅵ類と推定される土坑が4基確認された。

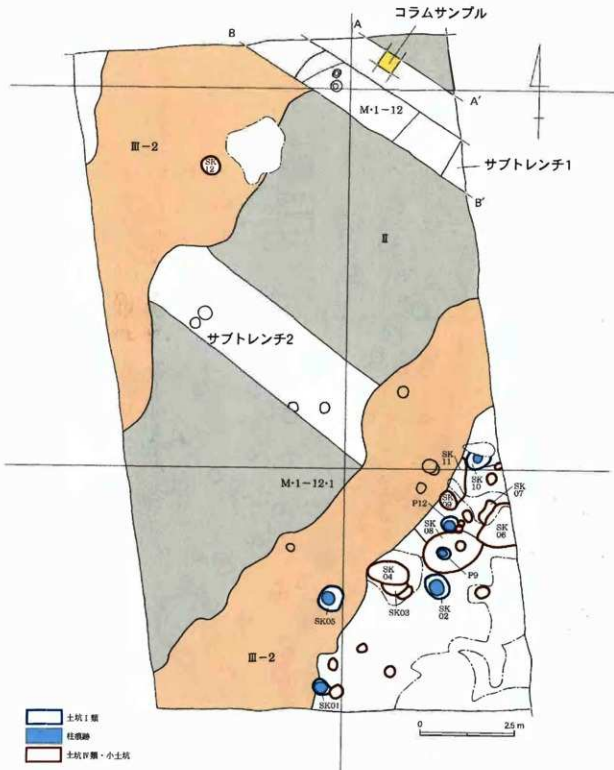


図104 IV区実測図 (S=1/100)

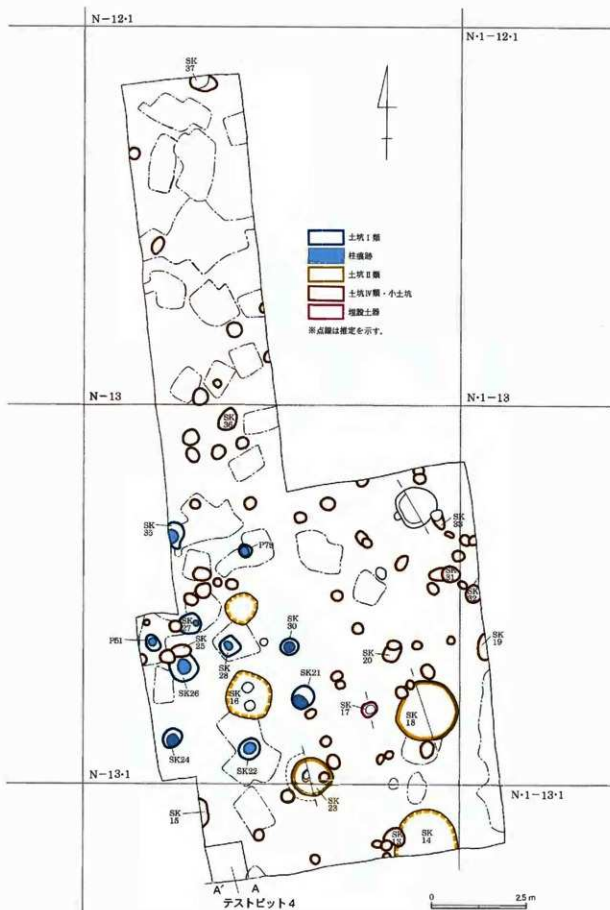


図105 77T実測図 (S=1/100)



写真172
IV区西の谷検出状況。(北から)
中央にⅡ層が、Ⅱ層の外側にⅢ-2層が確認された。



写真173
IV区遺構検出状況。(北から)
谷周辺から多数の土坑Ⅰ類・Ⅴ類が確認された。



写真174
77T遺構検出状況。(南から)
土坑Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅳ類が確認された。トレンチの北側では遺構数がやや減少する。



写真175
77T遺構検出状況。(北から)
土坑Ⅰ類・Ⅱ類はトレンチ南側で確認される。

西の谷に位置する26～28Tでは谷の堆積土であるⅡ層（黒色土）から縄文中～後期の遺物が多数出土した。80T、Ⅳ区ではⅡ層下に焼獣魚骨を含む縄文包含層のⅢ-2a・b層を確認し、Ⅳ区ではサブトレンチを設定して調査を実施した。76Tでは、縄文包含層であるⅢ-3b層を確認し、テストピットを設定して調査を行った。72T、1・3Gでは混貝土層であるⅢ-1層、縄文包含層のⅢ-3a・b層を確認した。4～6Gでは、Ⅱ層下にⅢ-3a層を確認した。76・77・79・80T、Ⅳ区では、土坑Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類を確認した。（図104～109、写真172～183）特に76Tでは、トレンチ中央から北側で土坑Ⅰ類が多数確認され、SB01～04の4棟が復元された。また、76Tの南側では、縄文時代の竪穴住居と推定される遺構が確認された。

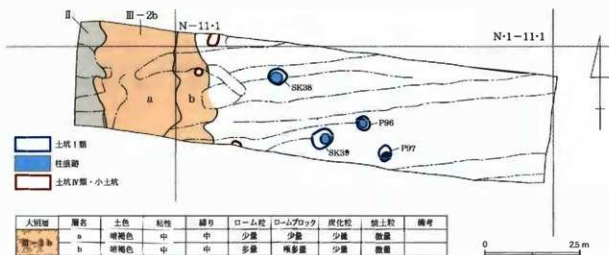


図106 80T実測図 (S=1/100)



写真176 80T遺構検出状況。(西から)
土坑Ⅰ類・Ⅳ類が確認された。



写真177 80T西の谷検出状況。(北から)
トレンチ西側でⅣ区から続くⅡ層(奥)、
Ⅲ-2b層(手前)が確認された。

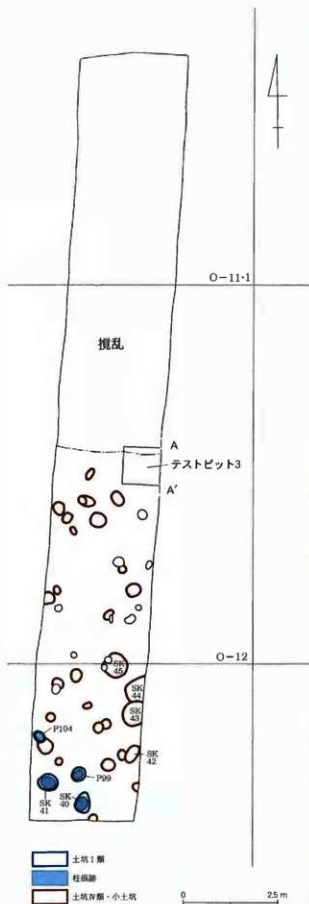


図107 79T実測図 (S=1/100)



写真178 79T遺構確認状況。(南から)
土坑I期・IV期を確認した。トレンチ北側では耕作等の影響を受けており、遺構は確認されなかった。



写真179 79T遺構確認状況。(北から)



写真180 79T遺構確認状況。(東から)
土坑I期はトレンチ南側で確認される。

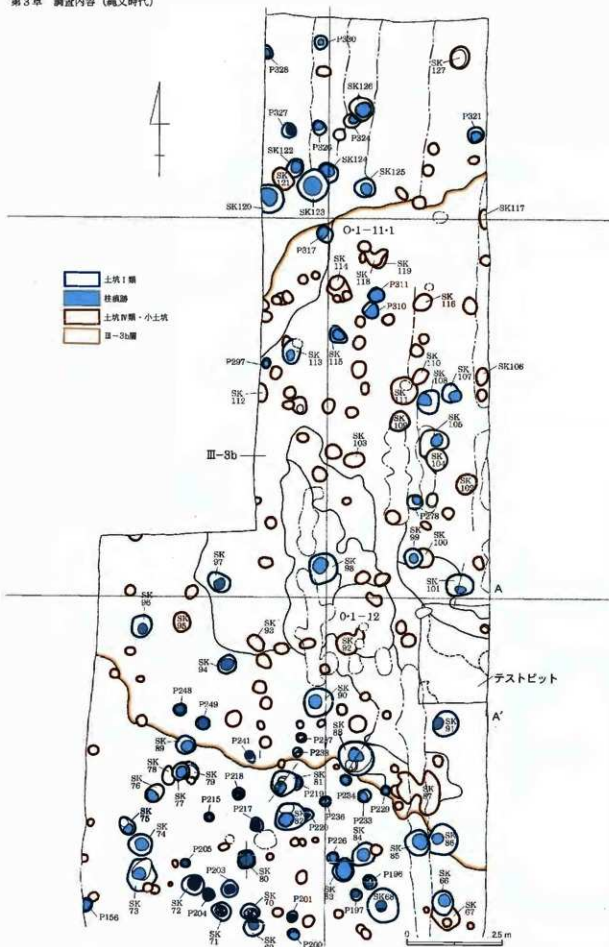


図108 76T実測図① (S=1/100)

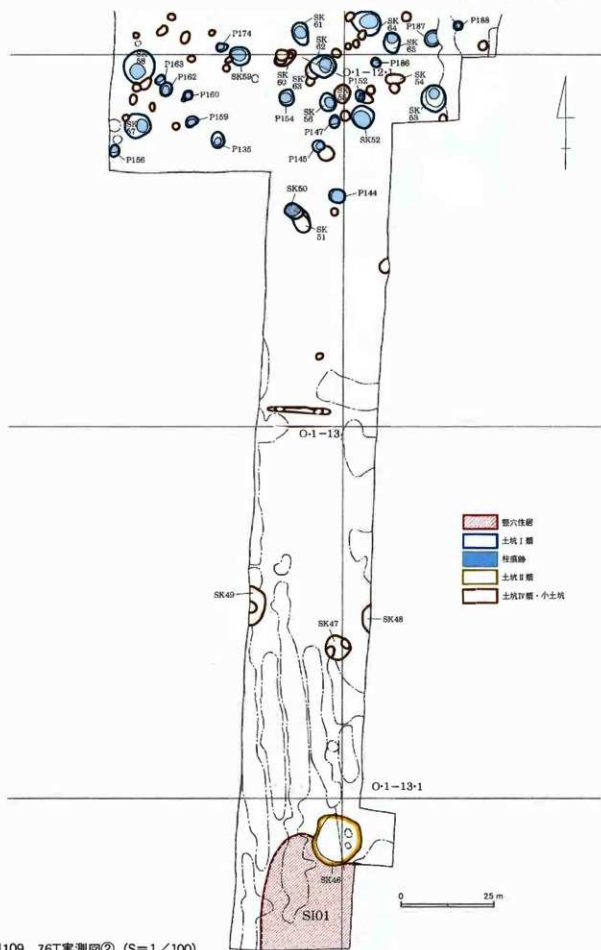


図109 76T実測図② (S=1/100)



写真181 76T遺構確認状況。(南から)土坑Ⅰ類・Ⅳ類が確認されている。
Ⅲ-3b層上面からも多数遺構が確認されている。



写真182
76T遺構確認状況。(南から)



写真183
76T遺構確認状況。(南から)
トレンチ南側では遺構数が減少する。手前はSI01とSK46。

小迫南地区台地部 (図110~113)

農道を挟んで、小迫北地区の南側に位置する。法面を境に西部・東部の二地区に分かれる。小迫南地区傾斜面・小迫地区南谷に向かって緩やかに傾斜している。標高23~28mである。

西部の11・82Tで土坑Ⅳ類が確認された。また、11Tでは平安時代の竪穴住居を、82Tでは古墳末の竪穴住居を検出した (図110・111、写真184~187)。東部の84Tで縄文時代の竪穴住居を1軒と土坑Ⅱ類・Ⅳ類を、83Tで土坑Ⅳ類を検出した (図112・113、写真188~191)。8~10・12Tでは、遺構は検出されなかった。



写真184

11T遺構確認状況。(南から)
土坑Ⅳ類・平安時代の竪穴住居 (SI04)
が確認されている。



写真185 11T遺構確認状況。(南から)

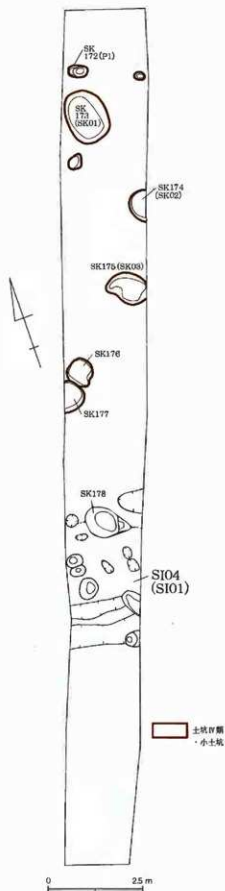


図110 11T実測図 (S=1/100)

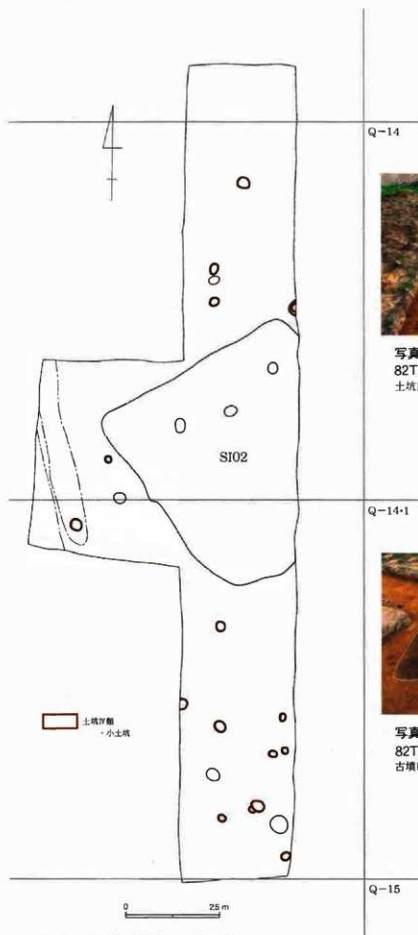


写真186
82T遺構確認状況。(北から)
土坑IV期が確認されている。



写真187
82T遺構確認状況。(西から)
古墳時代末の竪穴住居も確認されている。

図111 82T実測図 (S=1/100)

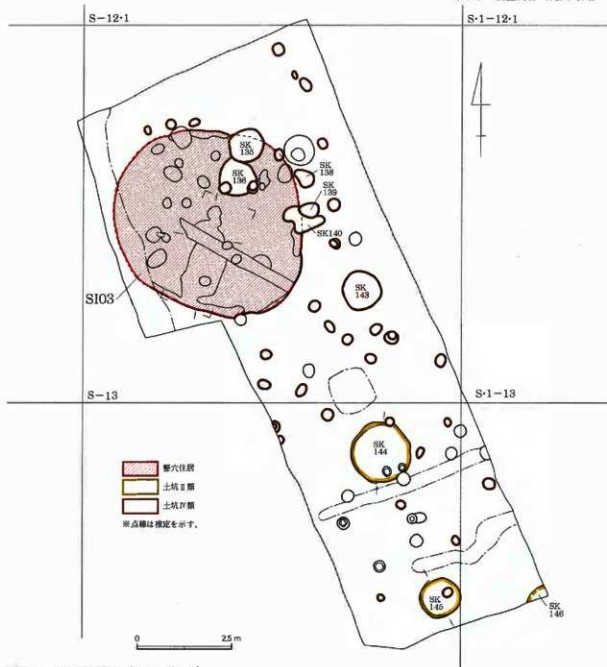


図112 84T実測図 (S=1/100)



写真188 84T遺構確認状況。(北から)
縄文時代の竪穴住居 (SI03)、土坑Ⅱ類・Ⅳ類が確認された。



写真189 84T遺構確認状況。(南から)
トレンチ南側で土坑Ⅱ類が確認された。

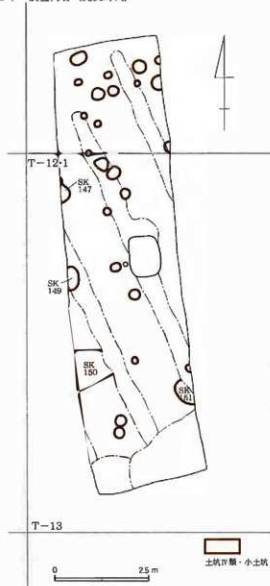


図113 83T実測図 (S=1/100)



写真190 83T遺構確認状況。(南から)
土坑IV類が確認された。



写真191 83T土坑IV類検出状況。(東から)

小迫地区斜面部 (81T)・小迫地区南谷部 (78T)

小迫地区南谷部は、遺跡の南東に位置する埋没谷である。小迫地区斜面部は農道を挟んで、北地区斜面部・南地区斜面部に分かれる。小迫地区斜面部・小迫地区南谷部ともに北東に傾斜している。

南地区斜面部の81Tで前期前葉の包含層を、南谷部の78Tで後期前葉と推定される包含層を確認した。1～7・74・75Tでは遺構は検出されなかった。

小迫北地区低地部 (73T)

小迫北地区区内の北側に位置する。標高4.5～10mである。北東に向かい緩やかに傾斜している。

73Tで後期中葉～晩期前葉の包含層を確認した。また、時期不明の溝4条が検出されている。

(2) 竪穴住居

76Tの南側で1軒 (SI01)、84Tで1軒 (SI03) 検出されている。

76TSI01 (図109)

上面が削平されている。やや硬化しており、ブロック状の埋土が確認できることから、住居構築時

の粗掘りと推定した(写真195)。大木9~10式期と推定したSK46に切られているので、縄文時代の所産と判断した。

84TS103 (図114・115)

上面は削平されており、北半分では掘り込みは確認できない。南半分で確認された掘り込みは3cm前後である。平面プランは楕円形と考えられる(写真192)。長軸は約3m60cmと推定され、短軸は3m30cmである。覆土は暗褐色土を基調としている。複式炉と周溝が重複して確認されたが、切り合い関係は不明である。複式炉は上面確認で留めているので詳細は明らかでないが、土器埋設部・石組部に分かれる(写真193)。土器埋設部と石組部の間には括れが認められる。土器埋設部には、1個体の土器の埋設が確認されている。前庭部の形状については不明である。周溝は壁面に沿って構築されている。床面はIV-3層である。硬化した部分は見られない。覆土の観察からSK133・134・141・142、

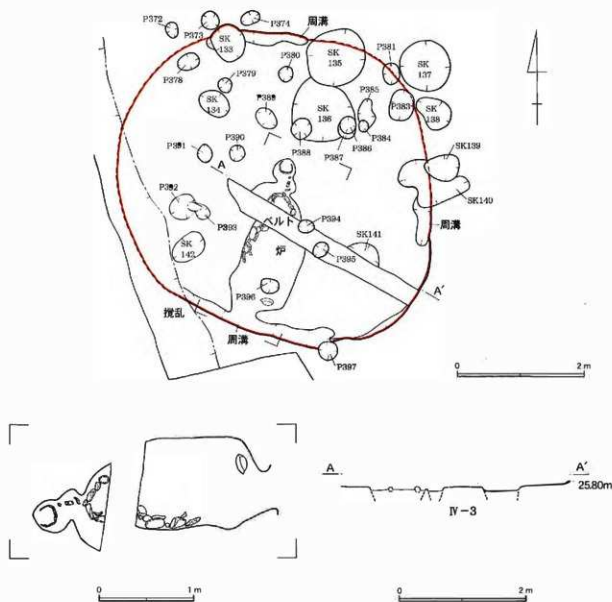


図114 S03実測図 (S=1/40, 1/60)

P378～380・383～385、389～393が伴うと考えられる。主柱穴配置は、SK134・141・142が主柱穴の3本柱あるいは5本柱と推定される。出土遺物(図115)から所属時期は大木10式期と考えている。

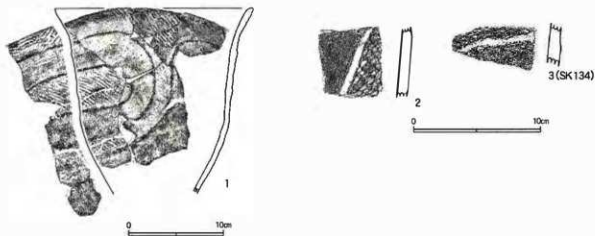


図115 S03出土遺物 (S=1/3、1/4)



写真192 84TS03検出状況。(北から)
床面はIV-3層である。上部は削平を受けており、確認できる掘り込みは浅い。



写真193 84T複式炉検出状況。(南から)
土器埋設部と石組部に分かれる。土器埋設部には1個体の土器が埋設されている。



写真194 84T遺物出土状況。
床面直上から出土。図115-1。



写真195 76TS01検出状況。(南から)
SK46(奥)に切られている。

(3) 土坑及び掘立柱建物

土坑Ⅰ類(図116・117)

土坑Ⅰ類は、76・77・79・80T、Ⅳ区で検出されている。東西の谷周辺およびⅢ-3b層上に多数検出されている。小泊南地区では確認されておらず、小泊北地区の南側では分布が希薄である。小泊北地区では、建物復元を考える基準の一つとして、掘り方の径を基に50cm未満を小型(P)、50cm以上を大型(SK)に分類し、それぞれの組み合わせを検討した。小型の掘り方は26~49cm、柱痕跡の径は16~43cm、大型の掘り方の径は50~100cm、柱痕跡の径は16~50cmである。大小合わせて196基の土坑Ⅰ類が確認されているが、後述するSB01~04で示した柱穴以外の組み合わせは明らかではない。掘り方の平面プランには76TSK80(図116)のような隅丸方形に近いものも見られるが、円形・楕円形のプランが多い。小型・大型の分布域の顕著な相違は認められない。柱痕跡は黒褐色~黒色が多く、掘り方の埋土は暗褐色~黒褐色が多い。Ⅲ-3b層を掘り込んでいるものが多い。一段掘り下げた段階での出土遺物は後期末~晩期後葉(新地~大洞A式期)にかけてのものであり、代表的なもののみ示した(図117)。また、晩期前葉(大洞BC式期)以降の土器が出土する遺構が多く、中でも大洞C2式が多い。本類は晩期前葉(大洞BC式期)以降、特に大洞C2式期に増加すると考えられる。

半截した76TSK80は掘り方の径は50cm、柱痕跡の径が38cm、深さが24cmである(図116、写真198)。図117-9から晩期前葉(大洞BC式期)と考えている。

SK113からは骨製の装飾品、SK123からは逆刺付刺突具が出土している。(図154-7・18)



写真196 77T土坑Ⅰ類検出状況。(東から)
トレンチ両側に確認される。



写真197 76T土坑Ⅰ類検出状況。(南から)
トレンチ中央より北側に多数確認される。



図116 76TSK80実測図(S=1/40)



写真198 76TSK80断面。
柱痕跡は黒色土で、埋土は暗褐色である。

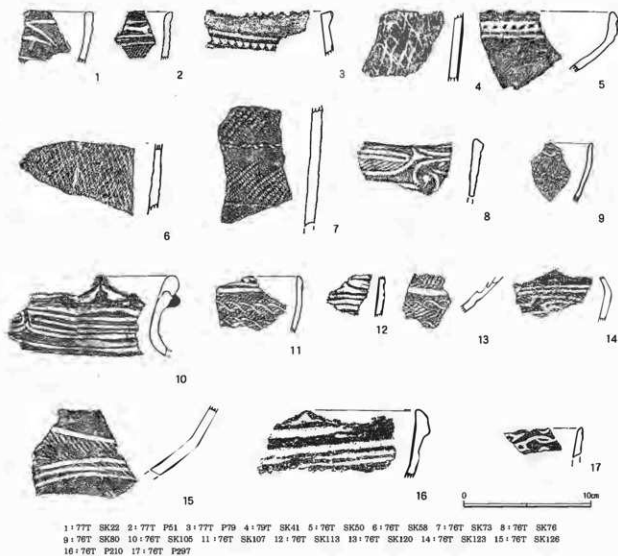


図117 土坑Ⅰ類出土遺物 (S=1/3)

掘立柱建物 (図118～123)

大型の柱穴を中心に、掘り方及び柱痕跡の径、柱配列、柱間距離を基に4本柱の建物を2軒、6本柱の建物を2軒復元した。SB01の主軸方向とSB04のSK91～SK101間の軸方向が北東～南西で一致し、SB02・03は主軸方向が北西～南東で一致する。各建物は柱穴を一つずつ半截して調査を行った。なお、各柱間の距離は柱痕跡の中心間の距離である。

SB01 (図118・119)

4本主柱で、2本の棟持柱を持つ建物跡である。平面プランは六角形を呈し、主軸は北東～南西である。全ての柱穴がⅣ～3層を掘り込んでいる。柱痕跡の平面プランはSK52・62が楕円形で、他はほぼ円形を呈する。掘り方の平面プランは不整の円形のものが多く、SK62のみ楕円形である。柱痕跡は暗褐色～黒色で、掘り方の埋土は暗褐色～黒褐色土である。掘り方の径は64～74cm、柱痕跡の径は30～50cmを測る。主軸のSK52～SK85間、5m74cm、短軸のSK53～SK62間は3m06cm、SK66～SK83間は2m84cmである。半截したSK62の深さは50cmを測る(図119、写真202)。SK85がSB02のSK86を切っている。出土遺物(図123-1～9)から所属時期は晩期中葉(大洞C2式期)と考えられている。

SB02 (図118・120)

4本支柱の建物跡である。平面プランは長方形を呈し、主軸は北西-南東である。SK68・82はIV-3層を掘り込んでおり、SK86・88はIII-3b層を掘り込んでいる。柱痕跡の平面プランはSK88のみ三角形に近く、他はほぼ円形を呈する。掘り方の平面プランはSK88が円形で、他は不整の円形か楕円形である。柱痕跡は黒褐色土〜黒色土で、掘り方の埋土は暗褐色土〜黒褐色土である。柱痕跡の

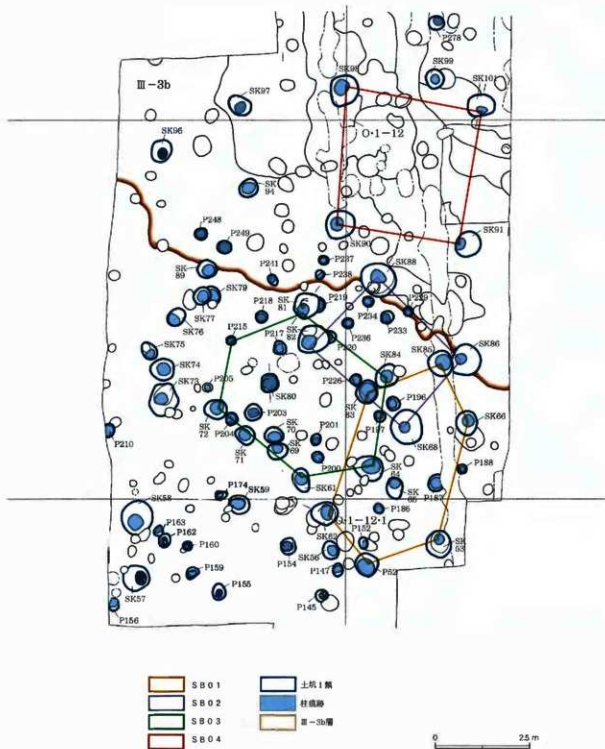


図118 SB01~04 (76T) 実測図 (S=1/100)



写真199 SB01～04復元状況。(南か6)

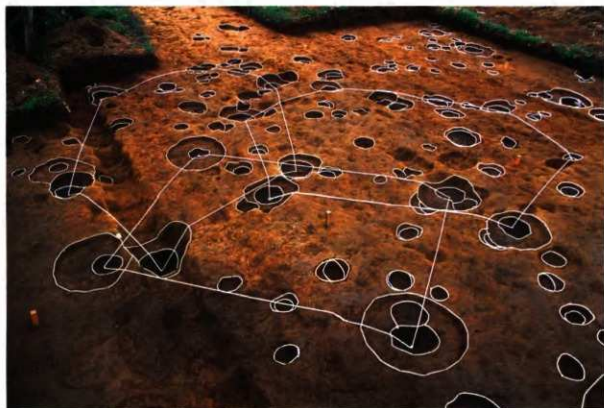


写真200 SB01～03復元状況。(北か6)

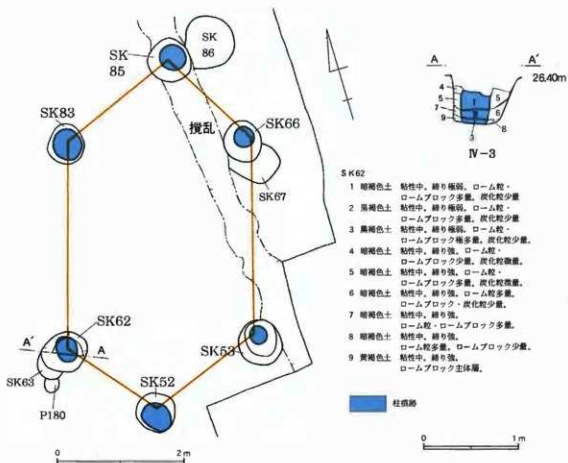


図119 SB01実測図 (S=1/40、1/60)



写真201 SB01復元状況。(南から)

写真202 SK62断面。
柱痕跡は暗褐色～黒褐色土で、埋土は暗褐色土を基調としている。

径は29~42cm、掘り方の径は85~100cmを測る。柱間距離はSK68-SK82間3m40cm、SK68-SK86間2m36cm、SK82-SK88間2m50cm、SK86-SK88間3m10cmである。半載したSK88の深さは45cmを測る(図120、写真202)。SK86が、SB01のSK85に切られている。出土遺物は図123-10~15である。所属時期はⅢ-3b層を掘り込み、SB01に切られているので晩期前葉~中葉(大洞BC~C2式期)と考えている。

SB03 (図118・121)

4本主柱で、2本の棟持柱を持つ建物跡である。平面プランは六角形を呈し、主軸は北西-南東である。P215は他の柱穴に比べると小型である。全ての柱穴がⅣ-3層を掘り込んでいる。柱痕跡の平

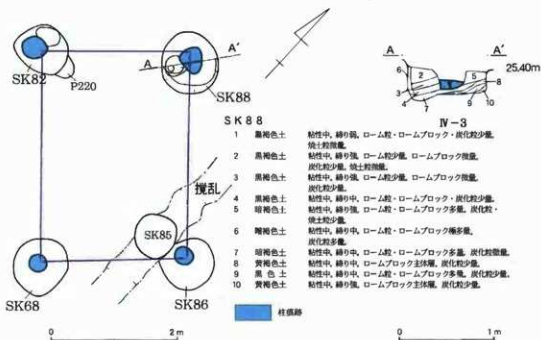


図120 SB02実測図 (S=1/40、1/60)

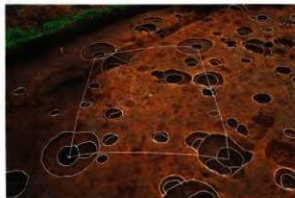


写真203 SB02復元状況。(西から)



写真204 SK88断面。

柱痕跡は黒褐色土で、埋土は黒褐色・暗褐色等が薄い堆積をしている。

面プランはSK84・P215が円形で、他は楕円形を呈する。掘り方の平面プランはP215のみが円形で、他は楕円形である。柱痕跡は黒褐色土～黒色土で、掘り方の埋土は暗褐色～黒褐色土である。掘り方の径は27～81cm、柱痕跡の径は19～50cmを測る。主軸のSK64～P215間は5m06cm、短軸SK69～SK84間は3m50cm、SK72～SK81間は3m50cmである。半載したSK81の深さは56cmを測る(図121、写真206)。重複関係はない。出土遺物(図123-16～19)から所属時期は晩期中葉(大洞C2式期)と考えている。

SB04(図118・122)

4本主柱の建物跡で、平面プランは方形を呈する。全ての柱穴がⅢ-3b層を掘り込んでいる。柱痕跡の平面プランはSK90・98がほぼ円形で、SK91・101が楕円形である。掘り方の平面プランは

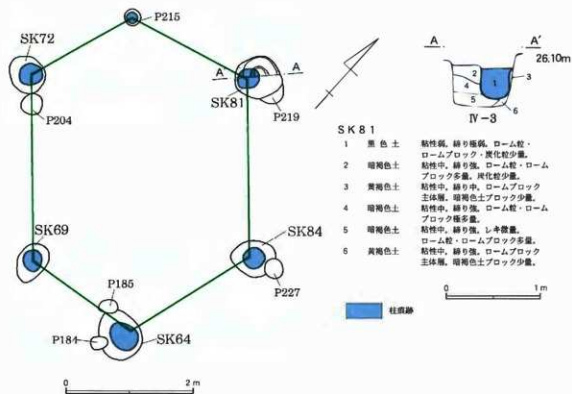


図121 SB03実測図(S=1/40、1/60)

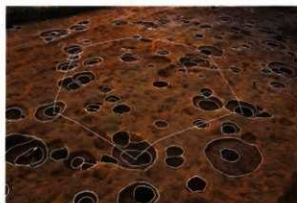


写真205 SB03復元状況。(東から)

写真206 SK81断面。
柱痕跡は黒色土で、埋土は暗褐色土を基調としている。

SK101が楕円形で、他は不整の円形である。柱痕跡は黒褐色～黒色土で、掘り方の土層は暗褐色～黒褐色土である。掘り方の径は73～89cm、柱痕跡の径は20～44cmを測る。柱間距離はSK90-SK91間3m30cm、SK90-SK98間3m64cm、SK91-SK101間3m55cm、SK98-SK101間3m80cmである。半裁したSK101の深さは47cmを測る(図122、写真208)。重複関係はない。出土遺物(図123-20～29)及び層位関係から所属時期は晩期中葉(大洞C2式期)と考えている。

土坑Ⅱ類 (図124～126)

21・25・50・76・77・84Tで、合わせて28基確認されている。南台地区台地南の東側及び小廻北地区台地の西側と南側に多く分布する(写真209)。平面プランは円形・楕円形・隅丸方形近いものなど様々である。8基については断ち割り調査を実施した。

77TSK18 (図124)

平面プランは不整の円形を呈する。Ⅳ-2層から掘り込んでいる。最大径は166cm、深さ60cmを測る。ほぼ直立に立ち上がり、断面形は円筒型である。覆土は褐色・暗褐色土を基調とし、最下層に黒

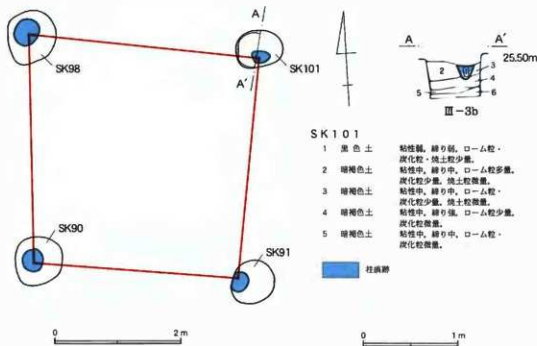


図122 SB04実測図 (S=1/40、1/60)

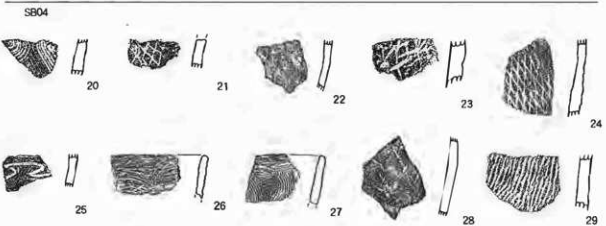
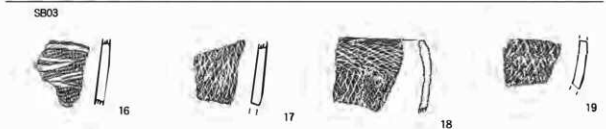
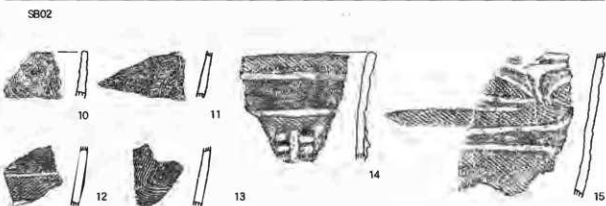
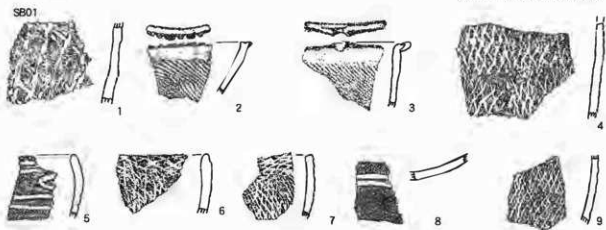


写真207 SB04復元状況。(南から)



写真208 SK101断面。

柱痕跡は黒色土で、埋土は暗褐色土である。



SB01 1:SK52 2-3:SK63 4-7:SK22
 SB02 10-11:SK68 12-13:SK82 14-15:SK88
 SB03 16-17:SK64 18-19:SK84
 SB04 20-21:SK90 22-24:SK91 25-29:SK101



図123 SB01~04出土遺物 (S=1/3)

褐色土が堆積する。小片のため図示していないが中期と考えられる土器片が出土している。

77TSK23（図124）

平面プランはほぼ円形である。Ⅳ-2層から掘り込んでいる。最大径は110cm、深さ96cmを測る。断面形はフラスコ状を呈する。覆土は暗褐色・黒褐色土を基調としている。底面付近に黒色土が堆積している。また、底面のほぼ中央には小穴を有する。図126-1より大木6式期と考えている。

76TSK46（図124）

平面プランは不整の円形である。Ⅳ-2層から掘り込んでいる。最大径は136cm、深さ44cmを測る。断面形は若干フラスコ状を呈する。覆土はにぶい褐色を基調とする。図126-2より大木9～10式期と考えている。

84TSK144（図124）

平面プランは円形である。Ⅳ-3層から掘り込んでいる。最大径は160cm、深さ48cmを測る。断面形は若干フラスコ状を呈する。覆土は暗褐色土を基調とする。時期を決定するような遺物は出土していないが、他の貯蔵穴の分布状況から中期の可能性が高い。

84TSK145（図125）

平面プランは円形である。Ⅳ-3層から掘り込んでいる。径は110cm、深さ30cmを測る。断面形は若干フラスコ上を呈する。覆土は暗褐色土を基調とする。時期を決定するような遺物は出土していないが、他の中期の貯蔵穴の分布状況から中期の可能性が高い。

50TSK152（図125）

『小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ』（2000）でSK03として報告された貯蔵穴である。平面プランは調査区外にまたがるため不明であるが、楕円形と考えられる。Ⅳ-2層から掘り込んでいる。最大径は174cm以上、深さは88cmを測る。断面形はフラスコ状を呈する。覆土は黒褐色土を基調とする。図126-3より大木9～10式期と考えている。

25TSK153（図125）

『小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ』でSK02として報告された貯蔵穴である。平面プランは調査区外にまたがるため不明であるが、楕円形と考えられる。Ⅳ-2層から掘り込んでいる。最大径は124cm以上、深さ108cmを測る。断面形はフラスコ状を呈する。覆土は褐色土を基調としている。図126-4・5より大木10式期と考えている。

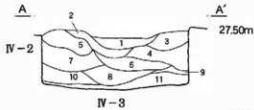
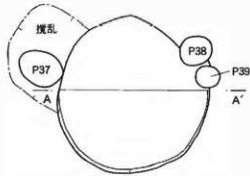
24TSK155（図125）

『小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ』でSK01として報告された貯蔵穴である。平面プランは調査区外にまたがるため不明であるが、楕円形と考えられる。Ⅳ-2層から掘り込んでいる。最大径は140cm以上、深さ60cmを測る。断面形はフラスコ状を呈する。覆土は黒褐色土を基調としている。図126-6より大木7b式期と考えている。



写真209 77T土坑Ⅱ類検出状況。（北から）
トレンチ南側で確認される。

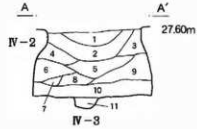
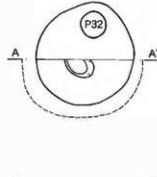
77T SK18



SK18

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量。 |
| 2 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 3 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒少量。 |
| 4 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 5 褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒微量。 |
| 6 褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 7 黄褐色土 | 粘性強, 締り強, ロームブロック主体層。 |
| 8 褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量。 |
| 9 暗褐色土 | 粘性弱, 締り弱, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 10 暗黄褐色土 | 粘性中, 締り中, ロームブロック主体層。 |
| 11 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |

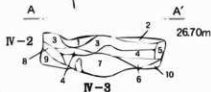
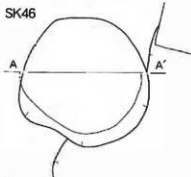
77T SK23



SK23

- | | |
|---------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック多量, 炭化粒少量。 |
| 2 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |
| 3 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック, 炭化粒微量。 |
| 4 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |
| 5 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック, 炭化粒微量。 |
| 6 黒色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック, 炭化粒微量。 |
| 7 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒微量。 |
| 8 黒褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック微量。 |
| 9 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒微量。 |
| 10 黒色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック微量。 |
| 11 暗褐色土 | 粘性弱, 締り弱, ローム粒-炭化粒微量。 |

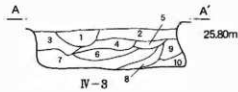
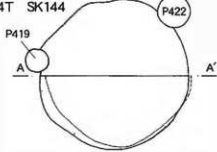
76T SK46



SK46

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1 褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 2 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量, 粘土粒微量。 |
| 3 にごい褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 4 褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック多量。 |
| 5 黄褐色土 | 粘性中, 締り中, ロームブロック主体層。 |
| 6 にごい褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 7 にごい褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック多量。 |
| 8 にごい褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量。 |
| 9 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量。 |
| 10 褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒少量, ロームブロック多量。 |

84T SK144



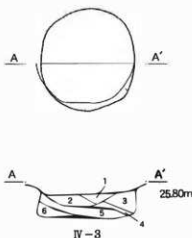
SK144

- | | |
|----------|-------------------------------------|
| 1 にごい褐色土 | 粘性中, 締り強, ローム粒-ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |
| 2 暗褐色土 | 粘性中, 締り強, ローム粒多量, ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |
| 3 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |
| 4 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |
| 5 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック多量, 炭化粒微量。 |
| 6 暗褐色土 | 粘性中, 締り強, ローム粒-ロームブロック多量, 炭化粒微量。 |
| 7 暗褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック多量, 炭化粒微量。 |
| 8 にごい褐色土 | 粘性中, 締り中, ローム粒-ロームブロック少量。 |
| 9 黒褐色土 | 粘性強, 締り強, ローム粒-ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |
| 10 暗褐色土 | 粘性強, 締り強, ローム粒-ロームブロック少量, 炭化粒微量。 |



図124 土坑Ⅱ類実測図① (S=1/40)

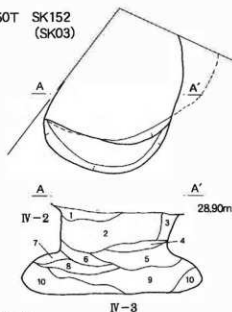
84T SK145



SK145

- 1 黒褐色土 粘性中, 締り強, ローム粒・ロームブロック少量, 炭化粒微量。
- 2 黒褐色土 粘性中, 締り強, ローム粒多量, ロームブロック少量, 炭化粒微量。
- 3 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒多量, ロームブロック少量。
- 4 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量, 粘性中, 締り強, ローム粒・ロームブロック多量, 炭化粒微量。
- 5 暗褐色土 粘性中, 締り強, ローム粒・ロームブロック多量, 炭化粒微量。
- 6 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。

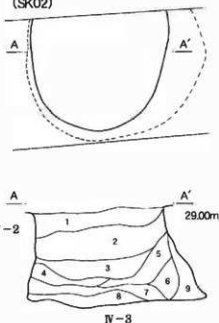
50T SK152 (SK03)



SK152

- 1 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量。
- 2 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量。
- 3 黄褐色土 粘性中, 締り中, ロームブロック主体。
- 4 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒少量。
- 5 黄褐色土 粘性中, 締り強, ロームブロック主体。
- 6 褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量。
- 7 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒少量。
- 8 暗褐色土 粘性中, 締り強, ロームブロック等多量。
- 9 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒微量。
- 10 黄褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒微量。

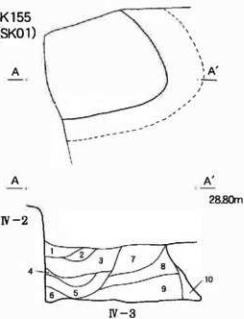
25T SK153 (SK02)



SK153

- 1 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒少量。
- 2 褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量。
- 3 褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
- 4 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒少量。
- 5 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
- 6 褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒多量。
- 7 明褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒多量。
- 8 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック多量。
- 9 明褐色土 粘性中, 締り弱, ローム粒少量。

24T SK155 (SK01)

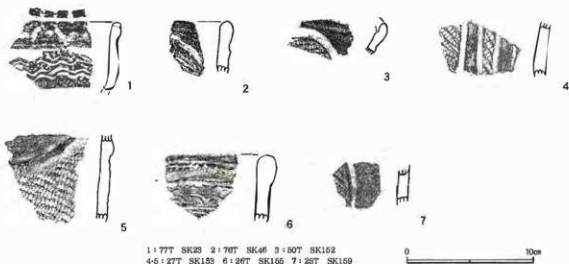


SK155

- 1 褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒多量。
- 2 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒微量。
- 3 暗褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
- 4 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒。
- 5 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
- 6 黒褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒微量。
- 7 褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒・ロームブロック少量。
- 8 明褐色土 粘性中, 締り中, ローム粒多量。
- 9 明褐色土 粘性強, 締り中, ローム粒多量。
- 10 褐色土 粘性強, 締り弱。

図125 土坑Ⅱ類実測図② (S=1/40)





1: 77T SK23 2: 70T SK46 3: 50T SK152
4: 5: 27T SK153 6: 26T SK155 7: 25T SK159

図126 土坑Ⅱ類出土遺物 (S=1/3)



写真210 77TSK18。
最下層に黒色土に近い黒褐色土が堆積している。



写真211 77TSK23。
最下層に黒色土が堆積している。底面のほぼ中央には
ビット状の掘り込みを有する。



写真212 76TSK46。
にぶい褐色土を基調とした覆土が堆積している。



写真213 84TSK144。
暗褐色土を基調とした覆土が堆積している。



写真214 84TSK145。
暗褐色土を基調とする覆土が堆積している。



写真215 50TSK152。
土坑中位にロームブロックを主体とする層が堆積する。



写真216 25TSK153。
褐色土を基調とする覆土が堆積している。



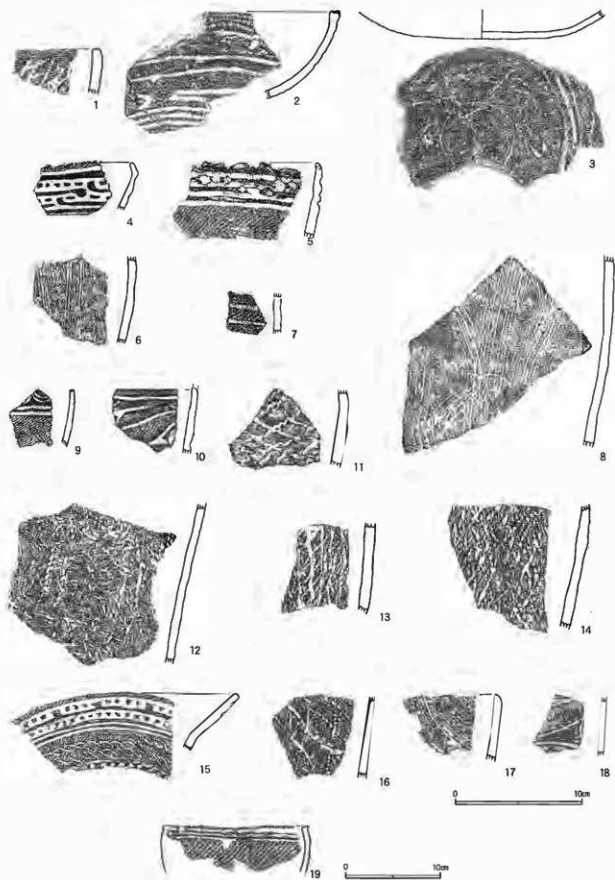
写真217 24TSK155。
黒褐色土を基調とする覆土が堆積している。

土坑Ⅳ類・小土坑(図127)

土坑Ⅳ類は、南台地区台地南部、小迫北・南地区台地の調査区で合わせて69基、小土坑322基確認されている。本類の中には、本来、柱穴であっても柱痕跡が確認されなかったものも含まれていると考えられる。Ⅲ-2・3層、Ⅳ層から掘り込んでいる。平面プランは円形・楕円形のものが多い。覆土は暗褐色～黒褐色土が多いが、褐色・黒色の覆土を持つものもある。一段掘り下げた段階での出土遺物の代表的なもののみ図示した。(図127)土坑Ⅰ類と同様にⅢ-3b層を掘り込んでいるものが多く、晩期前葉(大洞BC式期)以降の土器が出土する土坑が多いことから、晩期前葉(大洞BC式期)以降に増加していくと考えられる。

埋設土器(77TSK17 図128・129)

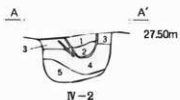
77Tで1基確認されている。平面プランは楕円形であり、Ⅳ-2層から掘り込んでいる。径が40～45cm、深さが26cmである。覆土は暗褐色土を基調とし、最下層に黒褐色土が堆積している。埋設土器内には褐色土が堆積している。無文土器の底部(図129-3)が正位に埋設されており、その下からは櫛描文の土器(図129-1)が出土している。土器に穿孔などは見られない。無文の底部は薄手で、内面は磨かれてやや光沢を帯びている。外側には若干の輪積みを残している。出土遺物(図129)より晩期中葉の所産と考えている。



1:Ⅱ区 SK04 2-3:Ⅱ区 P06 4:77T P27 5:77T P44 6-7:77T P66 8:76T SK103
 9:76T SK104 10-11:76T SK112 12:76T P261 13:76T P284 14:76T P292 15:76T P313
 16-17:1G P332 18-111T SK176 19:3Q SK128

図127 土坑Ⅳ類出土遺物 (S=1/3)

77T SK17



SK17

- 1 薄褐色土 粘性中、締り中、ローム粒微量。
- 2 褐色土 粘性中、締り中、ローム粒少量。
- 3 薄褐色土 粘性弱、締り強弱、ローム粒少量、ロームブロック微量。
- 4 薄褐色土 粘性弱、締り強弱、ローム粒多量、ロームブロック少量。
- 5 黒褐色土 粘性中、締り中、ローム粒・ロームブロック多量。



図128 77TSK17実測図 (S=1/20)

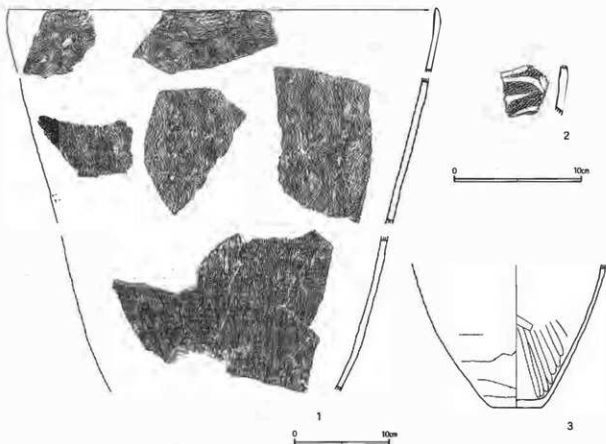


図129 77TSK17出土遺物 (S=1/3, 1/4)



写真218 77TSK17。
無文土器の底部分が正位に埋設されている。



写真219 77TSK17。
無文土器の下位から縹緋文土器が出土した。

(4) 貝層及び遺物包含層 (図130~149)

小泊北地区台地部で1箇所、貝層と2箇所の遺物包含層を、小泊北地区低地部・小泊南地区斜面部・小泊地区南谷部でそれぞれ1箇所の遺物包含層を確認した。

小泊北地区台地西の谷 (26~27・80T、IV区 図99)

IV区でサブトレンチ1を設定して調査を実施し、V-3層まで掘削した (図130、写真224~230)。1層は黒色土である。2~14層まではローム粒・炭化粒を含む黒褐色土 (粘性中) を基調とする。2~8層までは小石、レキ・焼土粒を含み、9~13層では小石・レキ・焼土粒をほとんど含まない。15~17層まではローム粒・炭化粒を含む暗褐色土 (粘性強) を基調とする。調査時には、2~5層までをⅢA層、6・7層をⅢB層、8~14層までをⅢC層、15層をⅢD層、16層をⅢE層、17層をⅢF層と分層して遺物を取上げた。焼獣魚骨が出土するため、北壁に接するかたちでコラムサンプルを設定してⅢA~F層の層位毎に調査した。ただし、焼獣魚骨の遺存状態は悪い。

ⅢA・B層……加曾利B~大洞C2式までの土器が出土するが、相対的に大洞C2式が多く見られる。加曾利B~大洞B式までは少量混じる程度である。他の層に比べると小片が多く復元率も高くない。完形土器も少ない。製塩土器が多量に出土する (図131-1~10、図133-2~4、図135-1~7、写真220-1)。焼獣魚骨を多量に含む。

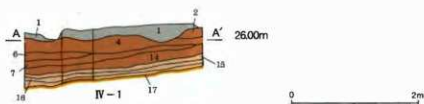
ⅢC層……加曾利B~大洞C2式までの土器が出土する。相対的に大洞C1式が多くなり加曾利B~大洞B式の土器の割合が若干高くなる。ⅢA・B層と比較すると、大型破片が多くなり復元率も高くなる。完形土器も増加する。製塩土器も多量に出土するが、ⅢA・B層と比較すると出土量は減少する (図131-11~17、図131-5・6、図135-8、写真220-2~4)。焼獣魚骨を多量に含む。

なお、ⅢC層とⅢD層については非常に多くの遺物が出たため一括して取上げた遺物がある (図132-1~7、図133-7、図135-9~11、写真220-5・6)。

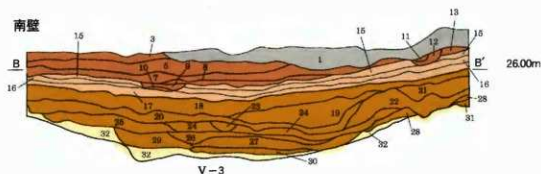
ⅢD・E層……加曾利B~大洞C2式までの土器が出土する。相対的に大洞BC式の土器が多くなり加曾利B~大洞B式の土器の出土量がⅢC層と比較すると増加する。復元率が高くなり、大洞BC式の完形土器や大型破片が多くなる。製塩土器・焼獣魚骨がⅢC層と比較すると減少する (図132-8~12、図134-1~10、図133-8~10、写真221~223)。

ⅢF層……大洞B式以降の土器および製塩土器は混じらず加曾利B~新地式の土器のみ出土する。獣魚

北壁



南壁



大別層	層名	土色	粘性	礫り	小石	レキ	ローム粒	ロームブロック	炭化粒	燻土粒	鯨骨	遺物	備考
B	1	黒褐色中	弱	弱	少量	微量	少量	-	微量	微量	-		
	2	黒褐色中	中	中	少量	微量	少量	微量	微量	少量	-	A層	黒色土ブロック少量
	3	黒褐色中	中	中	少量	微量	少量	-	少量	少量	多量		4・5層より暗い
	4	黒褐色中	中	中	多量	少量	少量	微量	少量	少量	多量		2層より明るい
	5	黒褐色中	中	中	少量	少量	少量	-	微量	微量	多量		3層より明るく4層より暗い
	6	黒褐色中	中	中	少量	微量	少量	微量	少量	微量	多量		4層よりやや暗い
	7	黒褐色中	中	中	少量	少量	少量	微量	微量	微量	多量		灰白色粘土ブロック微量
	8	黒褐色中	弱	弱	少量	微量	少量	微量	多量	少量	多量		
	9	黒褐色中	弱	-	-	少量	微量	-	多量	-	多量		8層より明るい
	10	黒褐色中	弱	-	-	微量	微量	-	少量	-	少量		16・17層より明るい
	11	黒褐色中	中	-	-	少量	-	-	微量	-	-		
	12	黒褐色中	中	-	-	少量	微量	-	少量	-	少量		
	13	黒褐色中	弱	-	-	-	微量	-	-	-	-		
	14	黒褐色中	弱	弱	少量	少量	少量	少量	少量	微量	多量		4層より暗い
B-2a	15	暗褐色中	弱	弱	少量	少量	少量	少量	少量	微量	多量	D層	
	16	暗褐色強	中	強	少量	微量	少量	微量	少量	微量	少量	E層	15層より明るく粘性が強い
	17	暗褐色強	中	強	少量	-	少量	-	少量	微量	微量	F層	16層より暗い
B-2b	18	暗褐色強	中	強	-	-	少量	-	微量	微量	微量		17層よりやや明るい。シルト質
	19	暗褐色シルト	強	弱	微量	-	少量	微量	少量	微量	-		18層より暗い
	20	暗褐色シルト	強	中	微量	-	少量	-	少量	-	-		
	21	暗褐色シルト	強	中	-	-	少量	微量	少量	-	-		19層よりやや明るい
	22	暗褐色シルト	強	強	微量	-	少量	-	微量	微量	-		暗褐色粘土ブロック多量
	23	暗褐色シルト	強	弱	-	-	少量	-	少量	微量	-		24層より暗い
	24	暗褐色シルト	強	中	微量	-	少量	-	少量	-	-		
	25	にがい褐色シルト	強	中	微量	-	少量	-	少量	-	-		
	26	暗褐色シルト	強	強	微量	-	微量	-	少量	-	-		24層より暗い
	27	暗褐色シルト	強	強	-	-	微量	-	少量	-	-		
B-2c	28	暗褐色シルト	強	強	-	-	少量	少量	微量	微量	-		22層より明るい
	29	にがい褐色シルト	強	弱	微量	-	微量	-	微量	-	-		25層より明るい
	30	暗褐色シルト	強	強	微量	-	微量	-	微量	-	-		黒褐色粘土ブロック少量
	31	暗褐色シルト	強	強	微量	-	少量	微量	少量	-	-		黒褐色粘土ブロック少量
V-3	32	黄褐色シルト	強	強	微量	-	-	-	-	-			ロームシルト

図130 IV区サブトレンチ1実測図 (S=1/60)

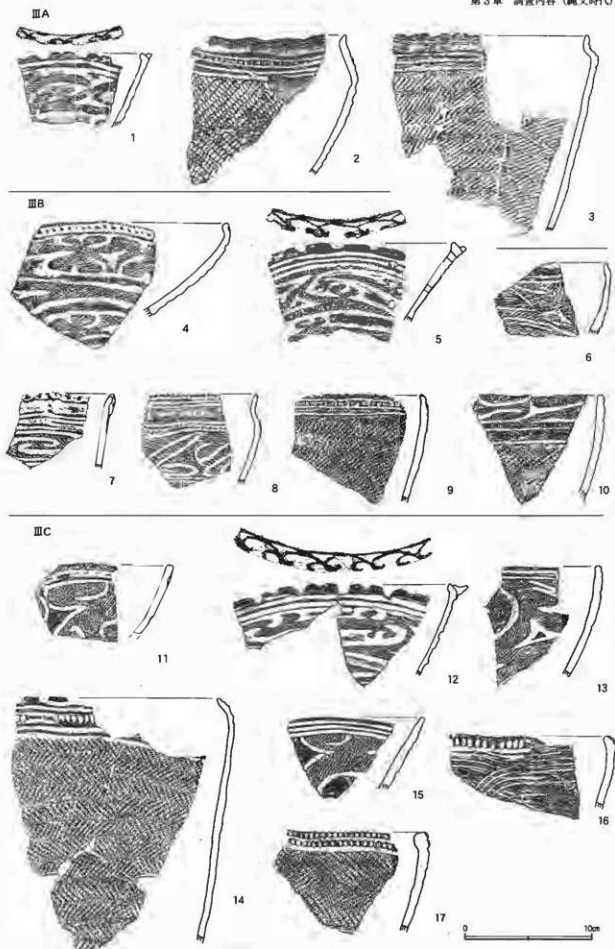
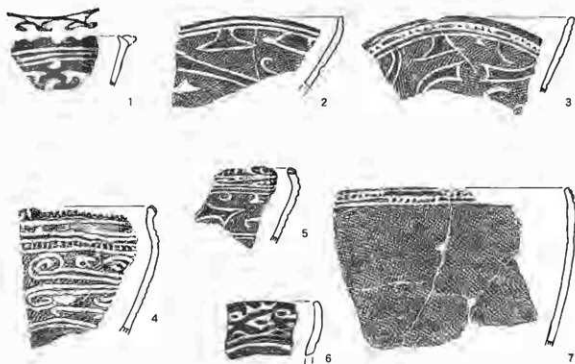


図131 IV区サブトレンチ1出土遺物① (S=1/3)

ⅢC-D



ⅢD

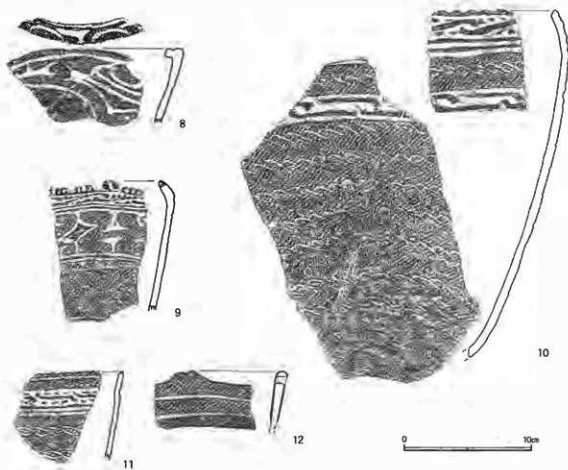


図132 IV区サブトレンチ1出土遺物② (S=1/3)

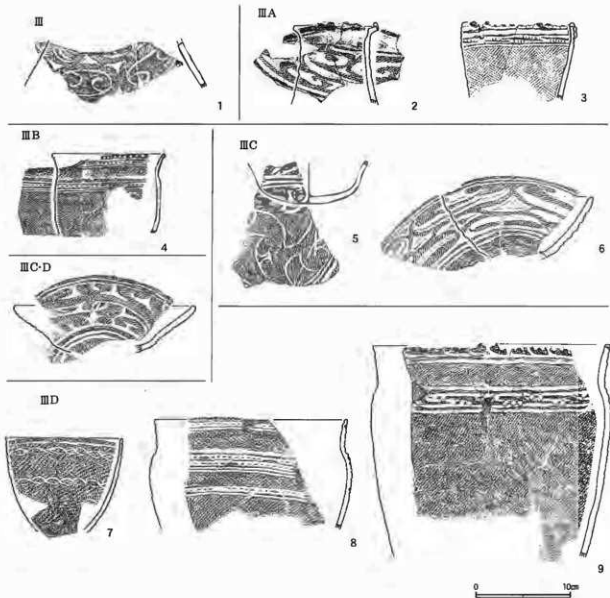


図133 IV区サブプロレンチ1出土遺物③ (S=1/4)

骨の出土量が減少する(図134-11~14)。

以上のように、ⅢA~E層までは多寡の差があるものの、加曾利B~大洞C2式までの土器が出土する。これは、土器量が非常に多いうえ、それぞれの層位の堆積が厚くないため混在して出土したものと思われる。完形土器・大型破片の出土量、相対的な出土量から考えて、ⅢA~C層までは大洞BC式期以後、ⅢD~F層までは大洞BC式期以前に堆積したと推定している。

ⅢA~F層まで磨石・叩石等が多量に出土している。また、ⅢC・D層からは面? (図151-3) が出土している。

18~31層までは粘性が強く、ローム粒・炭化粒を含む暗褐色を基調とするシルトが堆積している。遺物はほとんど出土しない。32層は黄褐色シルトで基盤層である。

柱状図(図101)では、1層をⅡ層、2~14層までをⅢ-2a層、15~17層までをⅢ-2b層、18~31層までをⅢ-4a層、32層をV-3層に大別した。

ⅢB



ⅢC



ⅢC・D



写真220 IV区サブトレンチ1出土遺物①

ⅢD



1



2



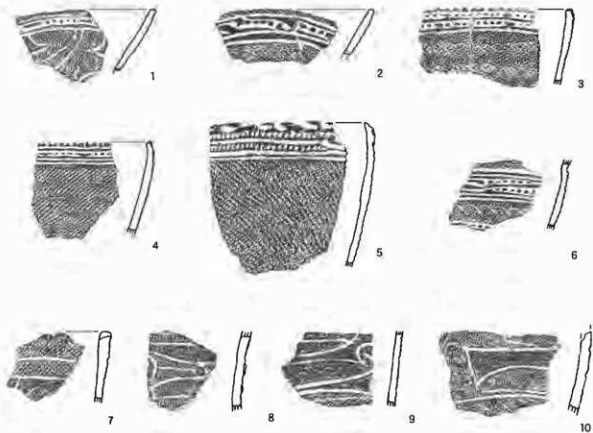
3



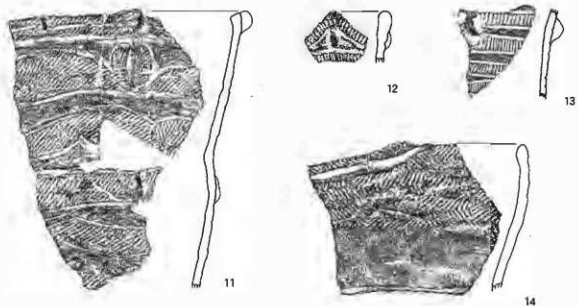
4

写真221 IV区サブトレンチ1 出土遺物②

III E



III F



0 10cm

図134 IV区サブトレンチ1出土遺物④ (S=1/3)

ⅢE



1



2



写真222 IV区サブトレンチ1出土遺物③

ⅢE

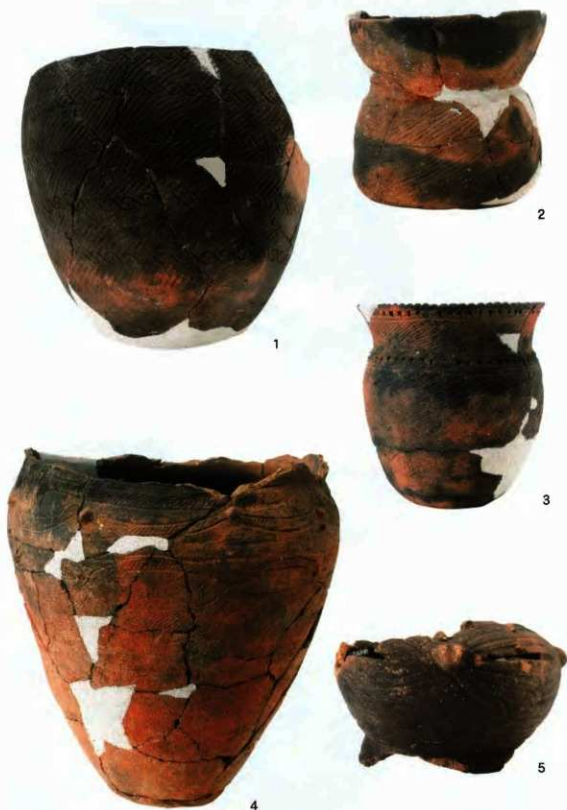


写真223 Ⅳ区サブトレンチ1出土遺物④



写真224
IV区サブトレンチ1 遺物出土状況①。(東から)
サブトレンチ1内一面に土器が大量に出土する。



写真225
IV区サブトレンチ1 遺物出土状況②。(北から)
大型破片も多量に出土し、復元率も高い。



写真226
IV区サブトレンチ1 遺物出土状況③。(北から)
数個体の完形土器の廃棄状況が確認できる。



写真227
IV区サブトレンチ1 遺物出土状況④。(西から)
サブトレンチ1東壁ⅢE層から出土。写真223-5。



写真228
IV区サブトレンチ1 遺物出土状況⑤。(東から)
サブトレンチ1内からは焼酎魚骨も多量に出土するが、遺存状態は悪い。



写真229
IV区サブトレンチ1 断面。(北から)



写真230
IV区サブトレンチ1 完掘状況。(東から)

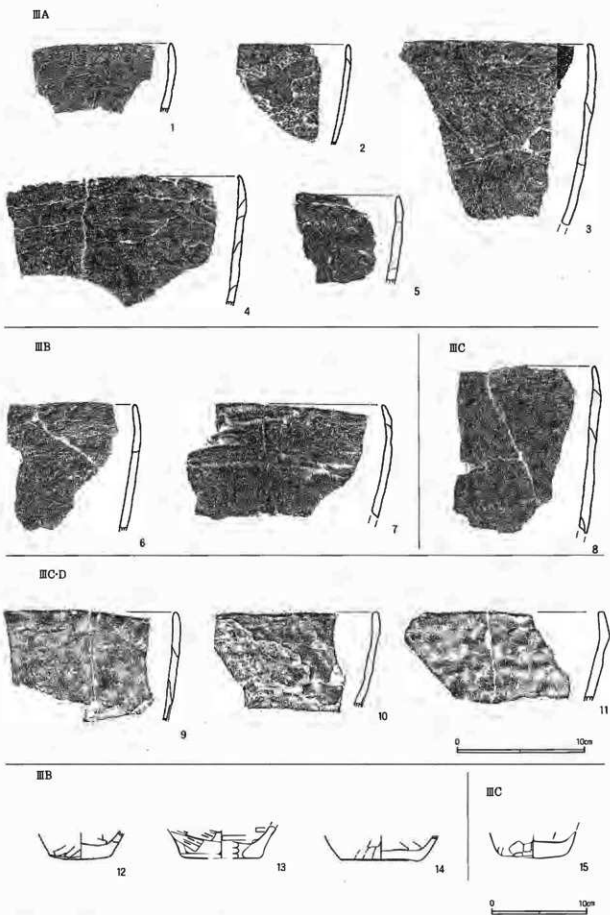


図135 IV区サブトレンチ1出土遺物⑤ (S=1/3)

小畑北地区台地東の谷 (72・76T、1・3・4～6G 図99)

小畑貝層 (図136～143)

獣魚骨を含むⅢ-3a層が混泥土層であるⅢ-1層の上に堆積していることが考えられ、一連の堆積土の可能性があるため、Ⅲ-1層・Ⅲ-3a層合わせて小畑貝層と呼称することにする。Ⅲ-1層は72T、1・3Gで確認されており(写真231～235)、トレンチ等による確認・ボーリング調査の結果から約12×10mの範囲で広がると推定される。概ねヤマトシジミ・イソシジミが多く、ハマグリ・ウバガイ・アサリ等が混じる(写真236)。台ノ前・西向貝層と比較すると骨角器の出土量が増加する。Ⅲ-3a層は72T、1・3・4～6Gで確認されている。72Tでは、Ⅲ-1・Ⅲ-3a層がブロック状に重複して堆積している。貝種・土層の違いが認められる。各細別層をブロックと称した(図137-1・2、写真237～240)。斜面部ではⅣ-3層を掘り込むようなかたちで堆積した貝ブロックも認められる(写真238)。なお、図137-1の各ブロックの番号は、Ⅲ-1・Ⅲ-3a・Ⅲ-3b・Ⅲ-4b

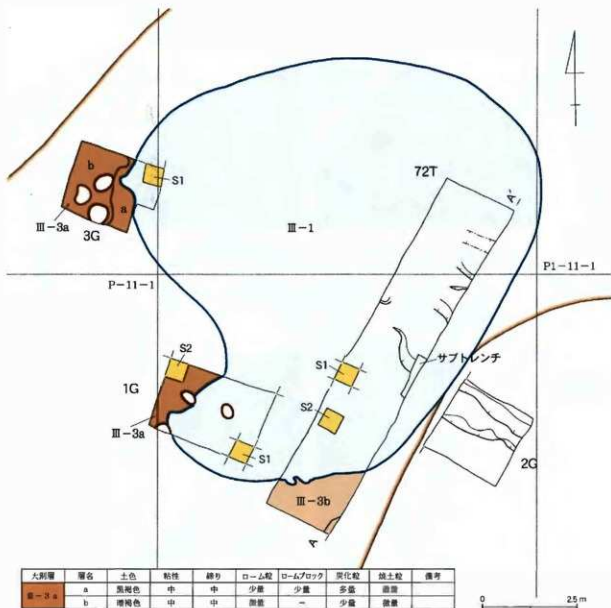


図136 72T、1～3G実測図 (S=1/100)



写真231
72T、1GIII-1・3a層検出状況。（東から）



写真232
72TIII-1・3a層検出状況。（南から）
台地上から北の斜面に向かって堆積する斜面貝層である。



写真233
1GIII-1・3a層検出状況。（西から）



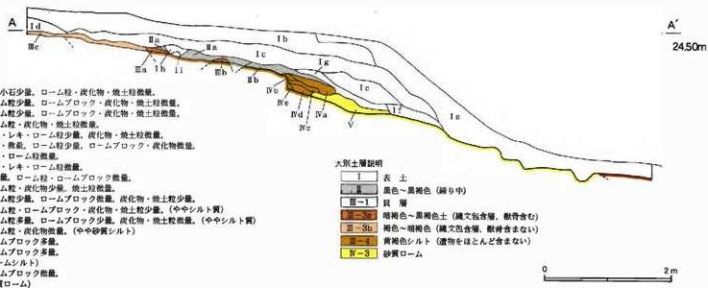
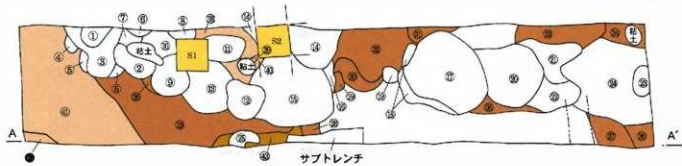
写真234
3GIII-1・3a層検出状況。（西から）



写真235
3GIII-1・3a層検出状況。（西から）



写真236
72TIII-1層検出状況。
ヤマトシジミ・イソシジミ等が確認できる。



- I a 黒褐色土
- I b 灰褐色土
- I c 暗灰褐色土
- I d 黒褐色土
- I e 暗褐色土
- I f 黒褐色土
- I h 黒褐色土
- I i 黒褐色土
- II a 黒褐色土
- II b 黒色土
- III a 暗褐色土
- III b 黄褐色土
- III c 褐色土
- IV a 黄褐色シルト
- IV b 黄褐色砂質シルト
- IV c 黄褐色シルト
- IV d 黒褐色シルト
- V 黄褐色砂質土

- 粘性極弱。締り極弱。小石少量。ローム粒・炭化物・焼土粒微量。
- 粘性弱。締り弱。ローム粒少量。ロームブロック・炭化物・焼土粒微量。
- 粘性弱。締り弱。ローム粒少量。ロームブロック・炭化物・焼土粒微量。
- 粘性弱。締り弱。ローム粒・炭化物・焼土粒微量。
- 粘性弱。締り弱。小石・レキ・ローム粒少量。炭化物・焼土粒微量。
- 粘性弱。締り弱。小石・焼土。ローム粒少量。ロームブロック・炭化物微量。
- 粘性弱。締り中。小石・ローム粒微量。
- 粘性弱。締り弱。小石・レキ・ローム粒微量。
- 粘性弱。締り弱。頁少量。ローム粒・ロームブロック微量。
- 粘性弱。締り中。ローム粒・炭化物少量。焼土粒微量。
- 粘性弱。締り中。ローム粒少量。ロームブロック微量。炭化物・焼土粒少量。
- 粘性強。締り強。ローム粒・ロームブロック・炭化物・焼土粒少量。(中やシルト質)
- 粘性強。締り強。ローム粒少量。ロームブロック少量。炭化物・焼土粒微量。(中やシルト質)
- 粘性中。締り中。ローム粒・炭化物微量。(中や砂質シルト)
- 粘性強。締り強。ロームブロック多量。
- 粘性強。締り強。ロームブロック多量。
- 粘性強。締り強。(ロームシルト)
- 粘性強。締り強。ロームブロック微量。
- 粘性中。締り強。(砂質ローム)

大別土層説明

- I 表土
- II-III 黒色～黒褐色(締り中)
- III 頁層
- III-a III-b 暗褐色～黒褐色(縄文包含層、獣骨含む)
- III-c III-d 褐色～暗褐色(縄文包含層、獣骨含まない)
- III-e III-f 黄褐色シルト(遺物をほとんど含まない)
- IV-S 砂質ローム



図137-1 72T実測図 (S=1/60)

第3章 調査内容 (縄文時代)

大別層	層名	土色	粘性	締り	ローム状	ロームブロック	炭化粒	焼土	混貝率	備考	
Ⅲ-1	①	黒褐色	弱	弱	少量	微量	少量	少量	20%	アサリ等、破砕貝多い。	
	②	暗褐色	中	中	少量	微量	少量	少量	10%	ウバガイ等、灰ブロック含む。	
	③	暗褐色	中	中	多量	少量	多量	多量	10%	アサリ等、破砕貝多い、灰ブロック含む。	
	④	暗褐色	中	中	少量	微量	多量	少量	5%		
	⑤	黒褐色	中	中	少量	-	多量	多量	5%		
	⑥	黒褐色	弱	弱	少量	-	少量	少量	10%	破砕貝多い、ヤマトシジミ等。	
	⑦	暗褐色	中	中	少量	微量	多量	微量	5%		
	⑧	暗褐色	中	中	微量	-	少量	微量	30%	定形貝多い、ヤマトシジミ・ハマグリ等、粘土ブロック含む。	
	⑨	暗褐色	中	中	微量	-	多量	少量	20%	破砕貝多い、アサリ・ウバガイ・オオノガイ等。	
	⑩	暗褐色	中	中	少量	-	少量	微量	5%		
	⑪	暗褐色	中	中	少量	微量	微量	微量	10%	破砕貝多い。	
	⑫	暗褐色	中	中	微量	-	少量	微量	20%	破砕貝多い、アサリ・ヤマトシジミ・ハマグリ・ウバガイ等。	
	⑬	暗褐色	中	中	少量	少量	多量	微量	30%	定形貝多い、アサリ・ヤマトシジミ・ハマグリ等。	
	⑭	黒褐色	弱	弱	微量	-	少量	少量	80%	定形貝多い、ヤマトシジミ・イソシジミ・ハマグリ等。図138-5層	
	⑮	黒褐色	中	中	多量	少量	少量	少量	10%	ウバガイ等。図138-6層	
	⑯	暗褐色	中	中	多量	-	少量	-	5%		
	⑰	暗褐色	中	中	少量	-	微量	微量	80%	定形貝多い、イソシジミ・ハマグリ・ヤマトシジミ・シオフキ等	
	⑱	暗褐色	中	中	少量	-	少量	微量	20%	破砕貝多い。	
	Ⅲ-2 a	⑲	暗褐色	中	中	少量	少量	少量	微量	10%	
	⑳	暗褐色	中	中	少量	微量	少量	少量	70%	定形貝多い、イソシジミ・ハマグリ等	
㉑	暗褐色	中	中	少量	微量	少量	少量	10%			
㉒	暗褐色	中	中	少量	微量	少量	少量	30%	破砕貝多い、粘土ブロック含む。		
㉓	黒褐色	中	中	-	-	多量	多量	30%	破砕貝多い、ヤマトシジミ等。		
㉔	暗褐色	中	中	少量	少量	少量	微量	10%			
㉕	黒褐色	中	中	多量	-	微量	-	5%			
㉖	暗褐色	強	強	少量	-	少量	-	-			
㉗	暗褐色	強	強	少量	少量	少量	少量	-	ややシルト質。		
㉘	黒褐色	中	中	少量	少量	少量	-	-			
㉙	暗褐色	中	中	多量	微量	多量	-	-			
㉚	黒褐色	強	強	少量	少量	微量	-	-			
㉛	暗褐色	中	中	少量	微量	多量	微量	-			
㉜	暗褐色	中	中	微量	-	-	-	-			
㉝	暗褐色	中	中	微量	-	微量	微量	-	レキ多量。		
㉞	暗褐色	弱	中	微量	-	少量	微量	-	砂質土		
㉟	黒褐色	中	中	微量	微量	多量	多量	-			
㊱	黒褐色	中	中	微量	-	少量	少量	-			
㊲	暗褐色	弱	中	微量	-	微量	微量	-	砂質土		
Ⅲ-3 b	㊳	暗褐色	中	中	微量	微量	少量	微量	-	図138-7層	
㊴	暗褐色	中	中	少量	少量	-	-	-	図138-8層		
㊵	褐色	弱	弱	多量	極多量	-	-	-	ロームブロック主体層。図138-11層		
㊶	褐色	中	中	微量	-	微量	-	-	やや砂質シルト。		
㊷	暗褐色	中	中	微量	-	微量	微量	-			
Ⅲ-4 c	㊸	黄褐色シルト	強	強	-	多量	-	-	-		

図137-2 72TⅢ-1層・Ⅲ-3a層ブロック説明

層の順でつけた。堆積順序を示すものではない。各ブロックの代表的な出土遺物を図示した。(図139-6~11、写真244) 大洞BC~C2式、製塩土器の底部が出土している。1Gでは、Ⅲ-3a層から遮光器土偶が出土している。(図151-1)

72Tで2箇所(S1・S2)、1Gで2箇所(S1・S2)、3Gで1箇所(S1)に50×50cmのコラムサンプルを設定し、厚さ5cm毎にサンプリングを実施した。

72T (図138・139)

S1はⅢ-1層の最大厚12cmである(図138)。混貝率の高い5層の下位に混貝率の低い6層が堆積する。Ⅲ-1層下にはⅢ-3b層、Ⅲ-4b層、V-3層が堆積する。時期を決定するような遺物は認められない。S2はⅢ-1層の最大厚5cmである。S2はⅢ-1層のみのサンプリングに留めた。出土遺物は図139-1~5である。2・3は製塩土器の口縁部である。



写真237 72TⅢ-1・3a検出状況。(東から)
平面観察で貝層・土層ブロックが確認できる。



写真239 72TⅢ-1・3a検出状況。(北から)



写真238 72TⅢ-1・2a検出状況。(北から)
Ⅲ-1層がⅣ-3層を掘り込むように堆積している。



写真240 72TⅢ-1・3a検出状況。(北から)



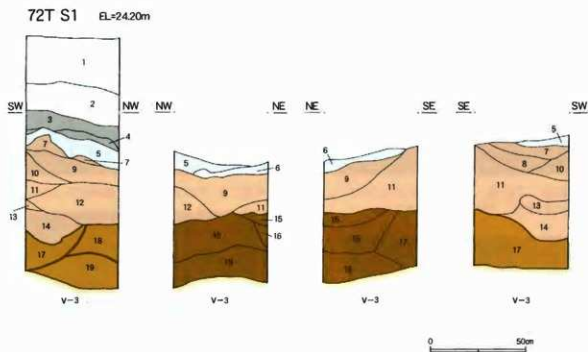
写真241 72TⅢ-1層遺物出土状況。
浅鉢・クジラの肋骨等が出土している。



写真242 1G遺物出土状況。



写真243 72T東壁断面。(西から)
表土下にⅡ層の薄い堆積が確認できる。Ⅱ層下にⅢ-1・3a・4層が堆積している。

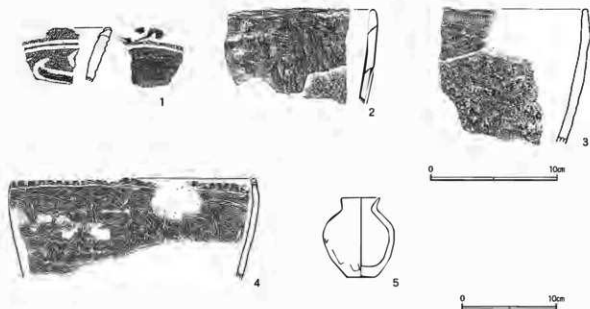


大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム腔	ロームブロック	炭化粒	鉄土粒	選貝率	備考
I	1	褐色色	土	弱	弱	少量	微量	微量	少量		表土。
	2	黒褐色	土	弱	弱	少量	微量	微量	少量		表土。
II	3	黒色	土	弱	弱	少量	—	微量	微量		
	4	黒色	土	弱	弱	微量	—	少量	少量		
III-1	5	黒褐色	選土質層	弱	弱	微量	—	少量	少量	80%	
	6	黒褐色	選土質層	中	中	多量	少量	少量	少量	10%	
III-2 a	7	緑褐色	土	中	中	微量	微量	少量	微量		
	8	緑褐色	土	中	中	少量	少量	—	—		
	9	緑褐色	土	中	中	少量	少量	微量	微量		
	10	黒褐色	土	中	中	微量	—	—	—		
	11	褐色	土	中	中	多量	極多量	—	—		
	12	黒褐色	土	中	中	微量	—	少量	—		ややシルト質
	13	黄褐色砂質	土	中	中	—	—	極多量	—	—	ロームブロック主体層。
III-4 b	14	黒褐色	土	中	中	少量	—	微量	—		
	15	黒褐色	土	中	中	—	—	—	—		
	16	黒褐色	土	中	中	少量	少量	—	—		ロームをブロック状に含む
	17	黄褐色砂質シルト	土	強	強	—	極多量	—	—		ロームシルトブロック主体層。小石・レンガ少量。
	18	黒褐色	土	中	中	微量	—	微量	—		砂層より中や細かい
	19	黒褐色	土	中	中	微量	—	微量	—		シルト質

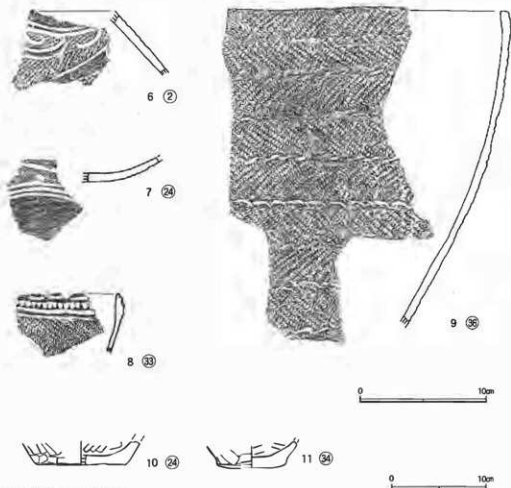
※ 選貝率は肉眼観察によるもの

図138 72TコラムサンプルS1 実測図 (S=1/20)

S2



貝層・土層ブロック



丸数字は図137の貝層・土層ブロックを示す。

図139 72TコラムサンプルS2、Ⅲ-1層・Ⅲ-3a層出土遺物 (S=1/3、1/4)



1



2

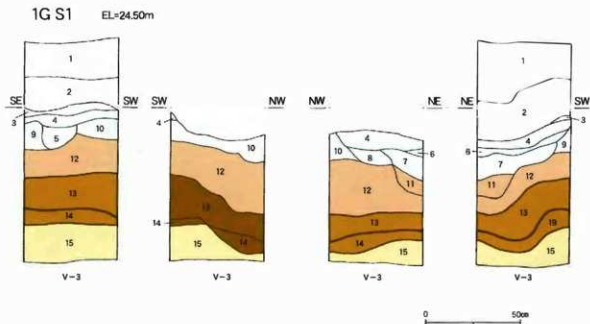
写真244 72T出土遺物

1G (図140~142)

S1はⅢ-1層の最大厚は22cmである(図140)。混貝率がやや高い3層が薄く堆積する。3層下には、混貝率の低い4~7層が確認される。5層はアサリ・ハマグリが多く、7層はアサリ・ハマグリが薄く層状に堆積する。S2はⅢ-3aの最大厚33cmである(図141)。4層は炭化物をブロック状に含む。Ⅲ-1・3a層下には72Tと同様にⅢ-3b層、Ⅲ-4b層、V-3層が堆積する。S1・2の出土遺物は図142-1~17、写真251-1である。S2からは大洞BC式の小型の深鉢が出土している(写真251-1)。

3G (図141・142)

S1はⅢ-1層の最大厚は24cmである(図141)。7・8層はヤマトシジミが主体である。9層もヤマトシジミを多く含む。6・10層は混貝率が低い。Ⅲ-1層下にはⅢ-3b層、Ⅲ-4b層、V-3層

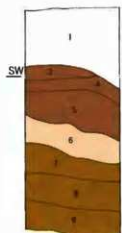


大別層	層名	土色	堆別	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	炭化粒	焼土粒	混貝率	備考	
I	1	暗褐色	土	弱	弱	少量	微量	微量	少量		表土。	
	2	黒褐色	土	弱	弱	少量	微量	微量	少量		表土。	
Ⅲ-1	3	黒褐色	混貝土層	弱	中	微量	—	少量	—	30%		
	4	黒褐色	混貝土層	弱	中	—	—	少量	—	30%		
	5	黒褐色	混貝土層	弱	中	微量	—	少量	—	10%	アサリ・ハマグリ多い。	
	6	暗褐色	混貝土層	弱	中	微量	—	少量	微量	5%		
	7	黒褐色	混貝土層	弱	弱	微量	—	少量	微量	20%	アサリ・ハマグリ層状に堆積。	
	8	黒褐色	混貝土層	中	中	多量	少量	少量	少量	5%		
	9	褐色	混貝土層	弱	中	微量	—	少量	微量	5%		
	10	黒褐色	混貝土層	弱	中	少量	—	多量	少量	10%		
	Ⅲ-3b	11	褐色	土	中	中	少量	少量	微量	微量		
		12	褐色	土	強	強	少量	微量	微量	微量		
Ⅲ-4b	13	黒褐色 シルト質	土	中	中	—	—	—	—			
	14	暗褐色 シルト	土	中	中	微量	—	微量	—			
V-3	15	黄褐色 シルト	土	強	強	—	—	—	—		ロームシルト	

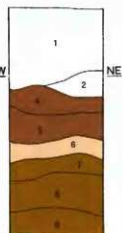
※ 混貝率は肉眼観察によるもの

図140 1GコラムサンプルS1実測図 (S=1/20)

1G S2 EL=24.50m

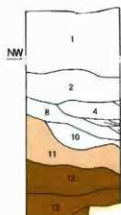


V-3

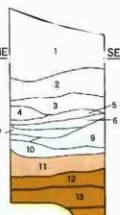


V-3

3G S1 EL=24.50m



V-3



V-3

0 50m

1GS2

大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	炭化粒	焼土粒	炭灰率	備考
I	1	暗褐色	土	弱	弱	少量	微量	微量	少量		赤土。
	2	暗褐色	土	弱	弱	微量	微量	微量	微量		赤土。
	3	黒褐色	土	中	中	少量	—	微量	少量		
II-3 a	4	黒褐色	土	弱	弱	少量	—	少量	少量		ブロック状に炭化物を含む
	5	黒褐色	土	中	中	微量	微量	少量	微量		
II-3 b	6	褐色	土	強	強	微量	微量	少量	微量		
	7	黒褐色	土	中	中	少量	—	少量	微量		ややシルト質。
III-4 b	8	黒褐色シルト質	土	中	中	微量	—	少量	微量		
	9	暗褐色シルト	土	中	中	微量	—	微量	—		

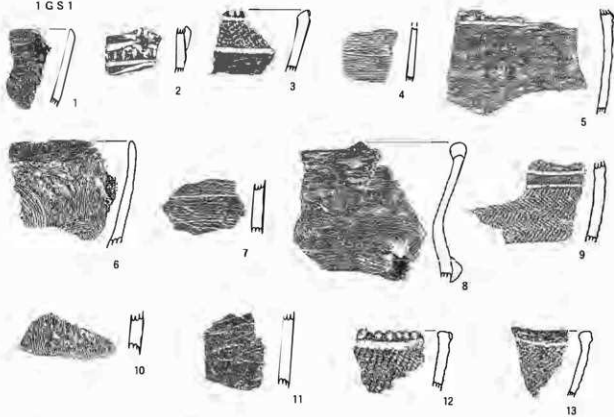
3GS1

大別層	層名	土色	種別	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	炭化粒	焼土粒	炭灰率	備考
I	1	暗褐色	土	弱	弱	少量	—	—	微量		赤土。
	2	暗褐色	土	弱	弱	微量	—	—	微量		赤土。
	3	黒褐色	土	弱	弱	微量	—	微量	微量	5%	赤土。
	4	黒褐色	土	弱	弱	微量	—	少量	少量	5%	赤土。
II-1	5	黒褐色	炭土 炭層	弱	弱	少量	—	少量	少量	60%	硬砕貝多い。
	6	黒褐色	炭土 炭層	弱	弱	微量	—	少量	少量	5%	
	7	黒褐色	炭土 炭層	弱	弱	—	—	少量	少量	80%	ヤマトシジミ主体。 硬砕貝多い。
	8	黒褐色	炭土 炭層	弱	弱	—	—	少量	少量	80%	ヤマトシジミ主体。 アサリ混じる。
	9	黒褐色	炭土 炭層	弱	弱	—	—	少量	少量	80%	ヤマトシジミ多い。 アサリ・ハマグリ混じる。
	10	黒褐色	炭土 炭層	中	中	少量	少量	少量	微量	5%	
III-3 b	11	黒褐色シルト質	土	中	中	微量	—	微量	微量		
III-4 b	12	黒褐色シルト質	土	中	中	—	—	—	—		
	13	暗褐色シルト質	土	中	中	—	—	—	—		
	14	黒褐色シルト質	土	中	中	—	—	—	—		割水痕

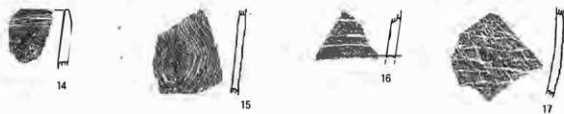
※ 炭灰率は肉眼観察によるもの

図141 1GコラムサンプルS2、3GコラムサンプルS1実測図 (S=1/20)

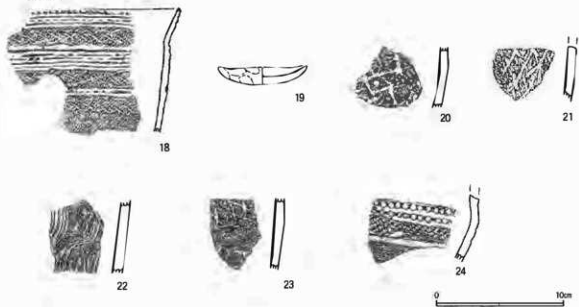
1GS1



1GS2



3GS1



0 10cm

図142 1G・3Gコラムサンプル出土遺物 (S=1/3)

が堆積する。出土遺物は図142-18~24、写真251-2である。S1からは大洞BC式の深鉢が出土している（写真251-2）。

4~6G（図143）

黒色土下に暗褐色土を基調とした獣魚骨を含むⅢ-3a層が堆積している。4Gから6Gに向かって緩やかに傾斜しながら堆積している。5cm前後の掘り下げを実施したのみであるため詳細は不明だが、5Gから大洞C2式の浅鉢が出土している（写真251-3）。6Gでは湧水が認められる。

72T、1・3~6Gの出土遺物から、Ⅲ-1層、Ⅲ-3a層は大洞BC~大洞C2式期にかけて堆積したと考えている。



写真245 72TS1断面。

Ⅱ層下にヤマトシジミ・イソシジミ等を含み混貝率の高いⅢ-1層が堆積している。



写真246 1GS1断面。

Ⅲ-1層は混貝率・主要貝種により8層に分けることができる。72TS1・S2、3GS1と比較すると混貝率は低い。



写真247 1GS2断面。

黒褐色を基調としたⅢ-3a層が堆積している。堆積土のなかには炭化物をブロック状に含む層もある。



写真248 3GS1断面。

Ⅲ-1層は混貝率・主要貝種により6層に分けることができる。ヤマトシジミを多く含む層が多い。



写真249 4GⅢ-3a層検出状況。（北から）

Ⅱ層下にⅢ-3a層が堆積している。土器の出土量は多い。



写真250 5GⅢ-3a層検出状況。（北から）

4G同様にⅡ層下にⅢ-3a層が堆積している。4Gと比較すると土器の出土量は若干減少する。

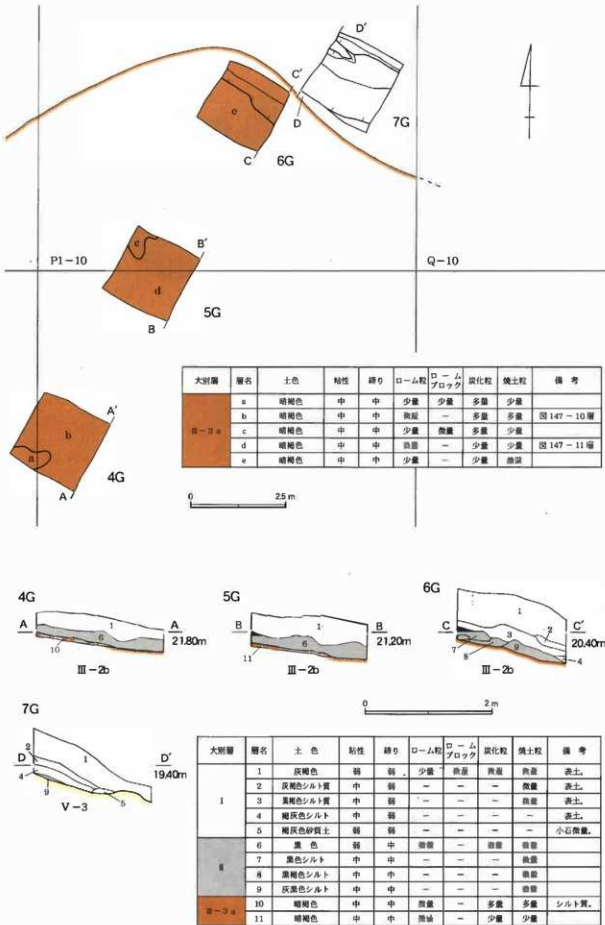


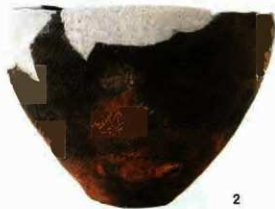
図143 4~7G実測図 (S=1/60, 1/100)

1GS2



1

3GS1



2

5G



3

76T



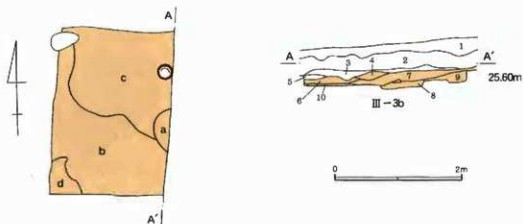
4



写真251 76T、1・3・5G出土遺物

76T (図144・145)

Ⅲ-1層・Ⅲ-3a層下に堆積する縄文包含層のⅢ-3b層が確認された。暗褐色土を基調として獣魚骨を含まない。ローム粒や炭化物などの混入が多く、平面的な観察から谷部中央に向かってくぼむ自然堆積ではなく、層位がブロック状に分かれることが認められた。Ⅲ-3b層中に2×3mのテストピットを設定し、層位的に調査を実施した。平面的な観察からa~d層に細別できる。また、断面からもレンズ状の堆積を示す自然堆積でないことが認められ、整地及び遺構等の構築による堆積と考えられる。遺構の破壊の恐れがあることなどから約20cmまで調査にとどめた。テストピットからの出土土器は加曾利B~新地式であり、Ⅲ-3b層は後期中葉~後期末の所産と考えられる。



大別層	層名	土色	粘性	締り	ローム粒	ロームブロック	炭化粒	焼土粒	備考
I	1	暗褐色	中	弱	少量	—	微量	微量	表土
	2	暗褐色	中	中	多量	—	少量	微量	表土
	3	暗褐色	中	中	少量	—	少量	少量	表土
	4	暗褐色	中	中	少量	微量	多量	微量	
Ⅲ-3b	5	暗褐色	中	強	多量	少量	少量	微量	暗褐色土ブロック多量
	6	暗褐色	中	中	少量	微量	多量	微量	
	7	暗褐色	強	強	多量	—	少量	微量	
	8	暗褐色	中	中	少量	—	少量	微量	
	9	暗褐色	中	中	少量	少量	少量	微量	
	10	暗褐色	中	中	微量	—	微量	—	
	a	暗褐色	中	中	少量	—	微量	—	断面図a層
	b	暗褐色	中	中	少量	少量	少量	微量	断面図b層
	c	暗褐色	中	中	多量	多量	少量	微量	
	d	暗褐色	中	中	多量	—	少量	—	暗褐色土ブロック少量

図144 76Tテストピット実測図 (S=1/60)

写真252
76Tテスト
ピットⅢ-
3b層検出
状況。(北から)写真253
76Tテスト
ピット断面。
(西から)

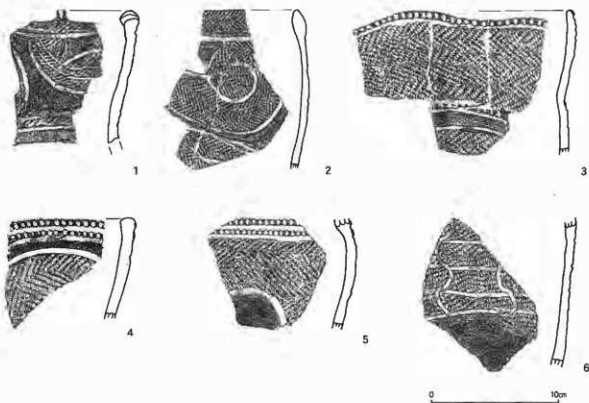


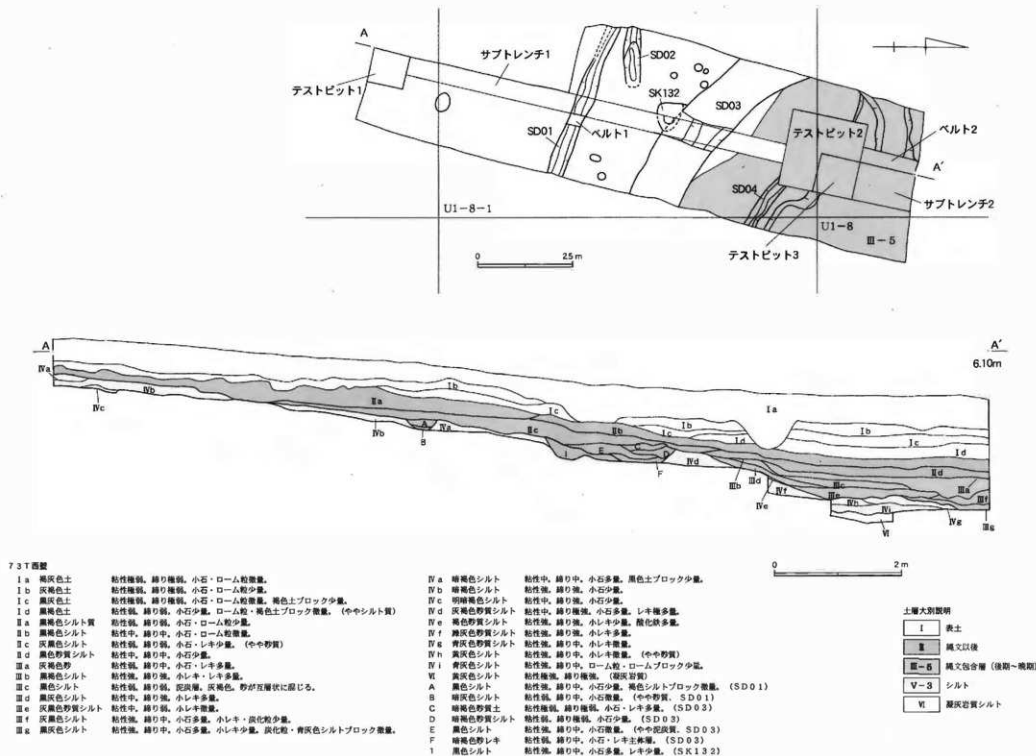
図145 76Tテストピット出土遺物 (S=1/3)

小迫北地区低地部 (73T 図146・149-1~4)

低地部における遺構の有無を確認するため調査区を設定した。黒色シルトを基調としたⅡ層(縄文以後)の厚い堆積が認められる。Ⅱ層中からは湧水が認められた。Ⅱ層下に縄文包含層(Ⅲ層)を確認したため、サブトレンチを設定して調査を実施した。また、グリットを設定して深掘りを行った。灰褐色砂のⅢa層下に、灰黒色～黒灰色シルトのⅢb層～Ⅲg層が堆積する。Ⅲa層はⅢb～Ⅲg層に比べ、土器の出土量が多い。Ⅲc層は泥炭質で灰褐色砂を互層状に含んでいる。Ⅲa層層まで小石・小レキを多く含む。Ⅲa層上面の標高は約4.5mである。堆積状況からは遺構構築などに伴う人為的な堆積は認められず、自然堆積と考えられる。出土遺物は後期中葉～晩期のものである。これらの縄文包含層下に砂・レキを多く含む灰色基調のシルトが堆積し、その下は基盤層の凝灰岩シルトである。基盤層上面の標高は約3.6mである。

小迫地区南谷 (78T 図147・149-5~8)

谷部における遺構の有無を確認するため調査区を設定した。Ⅱ層下に縄文包含層(Ⅲ層)を確認したため、サブトレンチを設定して調査を実施した。包含層は大きく、灰黒色～黒灰色シルト(Ⅲa~g層)と暗褐色土(Ⅲh・i層)の二種類に分けることができる。Ⅲa~g層は焼土粒、焼土ブロックを多く含む。Ⅲc~g層に比べ、Ⅲa・Ⅲb層は土器を多く含む。Ⅲh層の上層からは比較的多くの土器が出土するが、Ⅲh下層・Ⅲi層は土器量が少ない。Ⅲ層上面の標高は約8.0mである。Ⅱ層中からは、湧水が認められた。堆積状況からは遺構構築などに伴う人為的な堆積は認められず、自然堆積と考えられる。セイヤを含む前期の土器が若干混じるが、出土土器は摩滅しているため時期決定が困難なものが多い。包含層直上面からは後期前半の土器が多数出土している。堆積の時期については後期前半かそれ以前と考えている。



73T西壁

- I a 褐色土 粘性強。締り強。小石・ローム粒多量。
- I b 灰褐色土 粘性強。締り強。小石・ローム粒少量。
- I c 黒灰色土 粘性強。締り強。小石・ローム粒少量。褐色土ブロック少量。
- I d 黒灰色土 粘性強。締り強。小石少量。ローム粒・褐色土ブロック少量。(やや砂質)
- II a 黒色シルト質 粘性中。締り中。小石・ローム粒少量。
- II b 黒色シルト 粘性中。締り中。小石・ローム粒少量。
- II c 灰黒色シルト 粘性強。締り中。小石・レキ少量。(やや砂質)
- II d 黒色砂質シルト 粘性中。締り中。小石少量。
- III a 灰褐色砂 粘性強。締り中。小石・レキ多量。
- III b 黒褐色シルト 粘性強。締り中。小石・レキ多量。
- III c 黒色シルト 粘性強。締り中。泥多量。灰褐色・灰白色・砂が互層状に混じる。
- III d 黒灰色シルト 粘性中。締り強。小石少量。
- III e 灰黒色砂質シルト 粘性中。締り強。小石少量。
- III f 灰黒色シルト 粘性強。締り中。小石多量。小レキ・炭化粒少量。
- III g 黒灰色シルト 粘性強。締り中。小石少量。炭化粒・青灰色シルトブロック少量。

- IV a 暗褐色シルト 粘性中。締り中。小石多量。褐色土ブロック少量。
- IV b 暗褐色シルト 粘性強。締り強。小石少量。
- IV c 暗褐色シルト 粘性中。締り強。小石少量。
- IV d 灰褐色砂質シルト 粘性中。締り強。小石多量。レキ多量。
- IV e 褐色砂質シルト 粘性強。締り強。小石少量。炭化粒多量。
- IV f 灰褐色砂質シルト 粘性強。締り中。小石多量。
- IV g 灰褐色砂質シルト 粘性強。締り中。小石多量。
- IV h 黄灰色シルト 粘性強。締り中。小石少量。(やや砂質)
- IV i 黄灰色シルト 粘性強。締り中。小石少量。褐色シルトブロック少量。(SD01)
- A 黒色シルト 粘性強。締り中。小石少量。(やや砂質。SD01)
- B 暗灰色シルト 粘性強。締り中。小石少量。(SD03)
- C 暗褐色砂質土 粘性強。締り強。小石・レキ多量。(SD03)
- D 暗褐色砂質シルト 粘性強。締り強。小石少量。(SD03)
- E 黒色シルト 粘性強。締り中。小石少量。(やや泥質。SD03)
- F 暗褐色砂レキ 粘性強。締り中。小石・レキ多量。(SD03)
- I 黒色シルト 粘性強。締り中。小石少量。レキ少量。(SK1.3.2)

土層大別説明

- I 黄土
- II 縄文以後
- III-V 縄文包含層 (後期～前期)
- V-3 シルト
- VI 縄後砂質シルト

図 146 73T 実測図 (S = 1 / 60, 1 / 100)

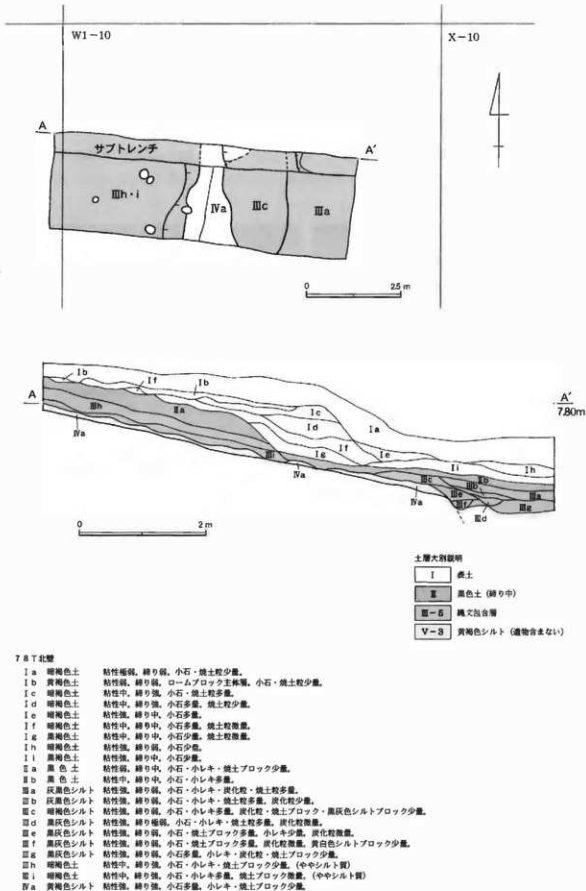


図147 78T実測図 (S=1/60, 1/100)

小泊南地区斜面部（81T 図148・149-9～13）

斜面部における遺構の有無を確認するために調査区を設定した。表土下に縄文包含層を確認したため、サブトレンチを設定して調査を実施した。トレンチ北側では、黒色土が薄く堆積している。包含層は大きく黒灰色～灰黒色シルト（Ⅲa～k層）と褐色砂質土（Ⅲm・n層）の二種類に分けることができる。Ⅲa～k層からは多くの土器が出土する。Ⅲm・n層は土器量が少ない。Ⅲa～n層ともにローム粒・ロームブロックが多く混入する。Ⅲ層上面の標高は約21.1mである。また、Ⅲ層中からは、湧水が認められた。堆積状況からは遺構構築などに伴う人為的な堆積は認められず、自然堆積と考えられる。出土土器は前期前葉のものである。前期前葉の土器は小泊地区全体に認められるが、遺構は検出されていない。



写真254 72T遺構検出状況。（北から）
縄文包含層の他に時期不明の溝が4条検出されている。



写真255 72Tベルト2断面。（東から）
灰褐色砂（Ⅲa層）下に黒灰色～黒灰色シルト（Ⅲb～g層）が堆積する。



写真256 78T縄文包含層検出状況。（東から）



写真257 78T断面。（北から）



写真258 81T縄文包含層検出状況。（南から）



写真259 81T断面。（南から）

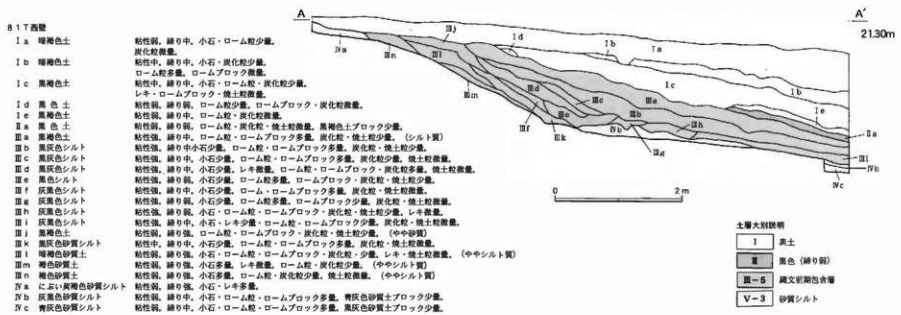
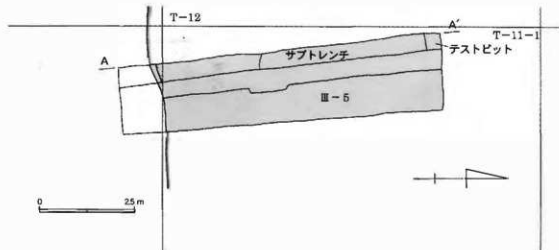
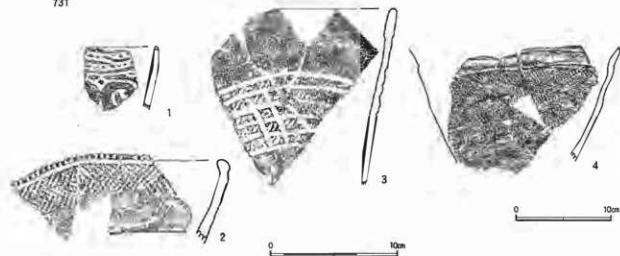


図148 81T実測図 (S=1/60, 1/100)

73T



78T



81T

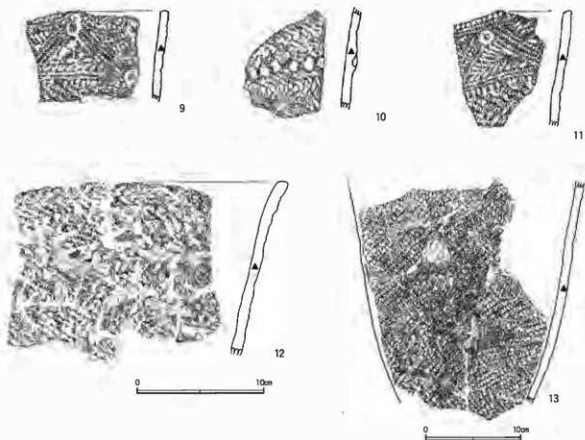


図149 73・78・81T出土遺物 (S=1/3、1/4)

第8節 出土遺物

出土遺物は現在整理調査中であるが、これまでに示した土器以外の主なものを実測図・写真で掲載し、概略を示しておく。

1. 土製品

土偶は現在18点を確認している。前期末～中期前葉の資料としては板状土偶の図151-2がある。この他にも1点、前期後半の板状土偶がある。その他の写真掲載資料は小迫北地区からの資料であり、後期中葉～晩期に相当するものと考えられる。図151-1 (写真260-1) は透光器土偶の頭部であり、小迫貝層 (Ⅲ-3a層) からの出土である。

土製のけつ状耳飾りは台ノ前南・西向貝層から出土しており、写真260-4は、31TV層 (大木4～6式期) からの出土である。耳飾りは、西向貝層 (写真260-6)、小迫北地区Ⅲ層 (写真260-5) 等から出土している。

土器片鏝は台ノ前・南台地区から4点のみ確認された (写真260-7)。福島大学考古学研究会の調査では10点の土器片鏝が出土している (福島大学考古学研究会1971)。有溝土鏝も小迫北地区を中心に出土しているが (写真260-8)、量的には少ない。小迫北地区では、後期中葉～晩期中葉と考えられるスタンプ型土製品 (写真260-9) や土面? (図151-3 (写真260-10)) 等、南台地区等と比較し、多くの土製品が出土している。南台・西向地区等では、中期後葉から後期前葉と考えられる土製円盤が多く出土している。また、図152-1は大木10式の土器破片であり、動物意匠文である可能性がある。

2. 石器・石製品

石器・石製品は浦尻貝塚全体で多数出土している。本報告では、比較的多くの石器を出土した54T貝層 (Ⅲ-3層) サブトレンチ内 (前期末～中期前葉) とⅣ区サブトレンチ1内 (後期中葉～晩期中葉) の概略を述べるに留める。54Tサブトレンチ内は、全ての土壌サンプルを水洗洗浄している。Ⅳ区もコラムサンプル中の土壌は水洗洗浄し、その他の土壌も現地地で5mmメッシュの乾フルイにかけていることから、サンプリングエラーが少ないものと考えられる。これらの組成は図150のとおりである。

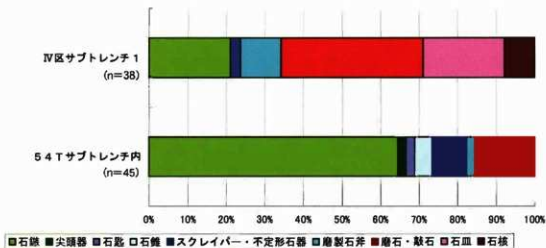
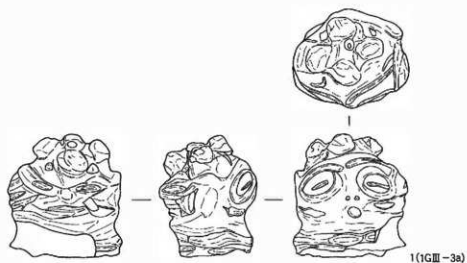
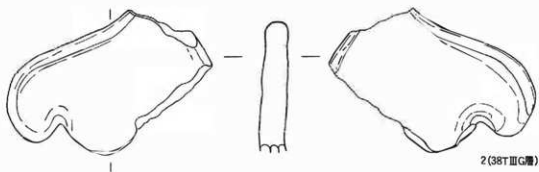


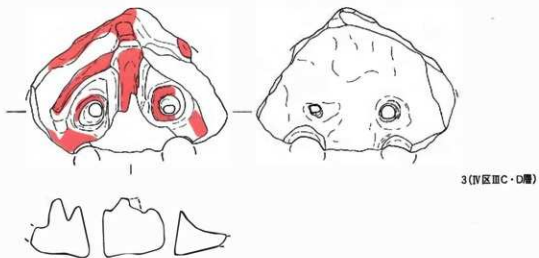
図150 Ⅳ区サブトレンチ1・54Tサブトレンチ石器組成



1(1GⅢ-3a)



2(38TⅢG層)



3(Ⅳ区ⅢC・D層)

※ () 書きは出土場所を示す。



図151 土製品 (S=1/2)



写真260 土製品

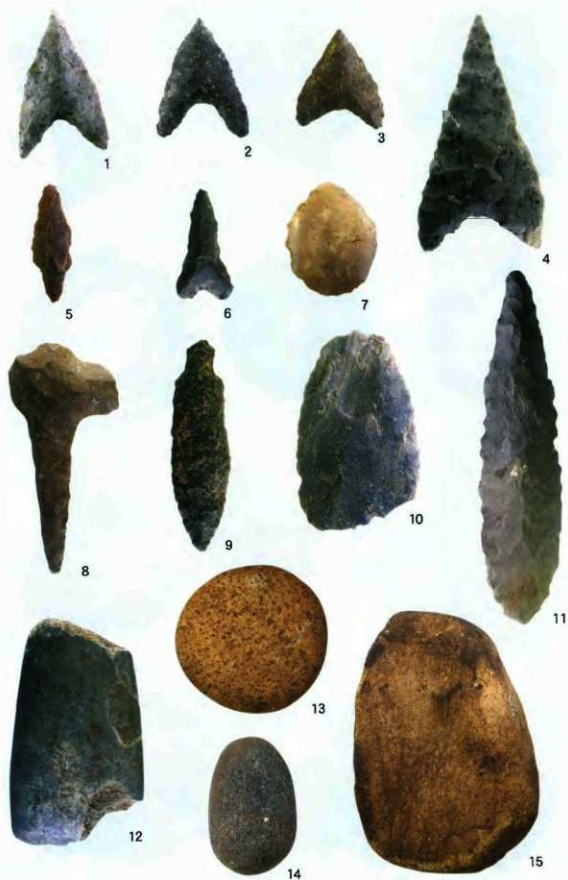


写真261 石製品

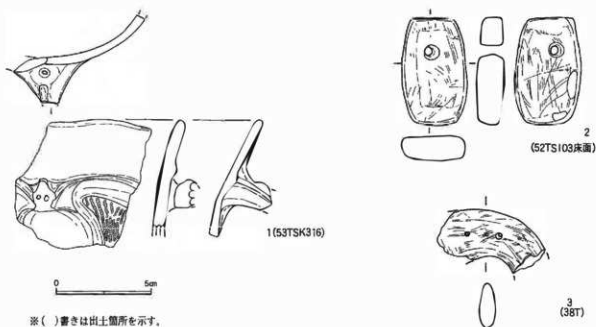


図152 土製品・石製品 (S=1/2)

表3 土製品・石製品一覧表

挿図番号	写真番号	地区名	貝層名	トレンチ名	層名	採取	種別	備考
151:1	260:1	小船北	小船	1 G	Ⅲ-3 a	現地	土偶	
151:2	-	台ノ前	台ノ前南	31	S15	現地	土偶	
151:3	260:10	小船北		IV区サブトレ1	Ⅲ-2	現地	土甕?	
152:1	-	南台		53	SK316	現地	土器(動物意匠文?)	SI09上
152:2	-	南台		52	SI03床面	現地	石製垂飾	
152:3	-	台ノ前	台ノ前南	38	一括	現地	石製けつ状耳飾り	
-	260:2	小船北		IV区	I	現地	土偶	
-	260:3	小船北	小船	72	I	現地	土偶	
-	260:4	台ノ前	台ノ前南	31	IV a	現地	土製けつ状耳飾り	
-	260:5	小船北		IV区サブトレ1	Ⅲ	現地	耳飾り	
-	260:6	西向		65	I	現地	耳飾り	
-	260:7	台ノ前	台ノ前北?	58	Ⅱ	現地	土器片鏢	
-	260:8	小船北		IV区	I	現地	有溝土鏢	
-	260:9	小船北		76	I	現地	スタンピング土製品	
-	261:1	台ノ前	台ノ前北	54	30	現地	石鏢	
-	261:2	台ノ前	台ノ前北	54	27	5mm	石鏢	
-	261:3	台ノ前	台ノ前北	54	25	5mm	石鏢	
-	261:4	台ノ前	台ノ前北	54	25	現地	石鏢	
-	261:5	小船北		IV区サブトレ1	Ⅲ-2 a	現地	石鏢	
-	261:6	小船北		IV区サブトレ1	Ⅲ-2 a	現地	石鏢	
-	261:7	小船北		IV区サブトレ1	Ⅲ-2 b	現地	石鏢	
-	261:8	台ノ前	台ノ前北	54	24	現地5mm	石鏢	
-	261:9	台ノ前	台ノ前北	54	20	現地5mm	石鏢	
-	261:10	台ノ前	台ノ前北	54	31	現地	スクレイパー	
-	261:11	台ノ前	台ノ前北	54	19	現地	尖頭器	
-	261:12	小船北		IV区サブトレ1	Ⅲ-2 b	現地	磨製石斧	
-	261:13	台ノ前	台ノ前北	54	20	現地	磨石	
-	261:14	台ノ前	台ノ前北	54	30	現地	磨石	
-	261:15	小船北		IV区サブトレ1	Ⅲ-2 a	現地	石鏢	

54Tでは石鏃が最も多く、29点の出土がある。これらは土壌サンプルを水洗洗浄して採取されたものが多く、現地で採集されたのはこのうち3点のみであり、現地採集率は約10%である。次に多いのが、磨石で7点の出土があり、スクレイパー・不定形石器が4点、石錐が2点の他、石匙、尖頭器、磨製石斧がそれぞれ1点出土している。

IV区では磨石・敲石の出土が最も多く、14点の出土がある。石皿も8点あり、製粉具の出土が顕著である。石鏃は9点あり、現地採集されたのはこのうち6点である。この他、磨製石斧が4点、不定形石器が1点、石核が3点ある。

この石器組成及び器種は、概ねそれぞれ時期の石器保有状況を反映しているものと考えられる。この他、SI03(大木9式期)では緑色凝灰岩製の垂飾(図152-2)が、台ノ前南貝層からかけつ状耳飾り(図152-3)が出土している。

3. 骨角器・貝製品

浦尻貝塚の貝層は大きく分けると、前期後半～後期前半の台ノ前北(南)・西向貝層、晩期の小迫貝層に分けられるので、以下では骨角器・貝製品(貝加工品)をこの2つに分けて報告する。なお、器種・材質の同定については樋泉岳二氏に指導を頂いた。

(1) 台ノ前北(南)・西向貝層(図153)

調査面積は小迫貝層に比較し広いが、貝層に伴う骨角器の量は少ない。釣針は2点出土しており(1・2)、1は大木6～7a式期、2は後期前葉以前と考えられる。

刺突具はエイの尾棘を利用したものが比較的多く見られるほか(4～6)、シカ・イノシシの長骨や鹿角を素材として、先端を尖らせただけの不定形のもの少数認められる(3)。他に刺突具類として、基部と思われるもの(7・8)、シカ中手・中足骨製のもの(12)がある。10は西向貝層から出土したもので、銚頭の二次加工品の可能性がある。また、牙斧(イノシシ犬歯製)が台ノ前北、西向貝層でそれぞれ1点出土している(19・20)。

垂飾品はサメ歯製(13～15)、タヌキ犬歯製(16)がある。11はスズキ主總蓋骨で穿孔が行われているものである。17は丁寧な研磨がなされ、線状の装飾が施されている。この他、鯨骨の加工品が西向貝層(18)及び台ノ前北貝層で出土している。

貝製品としては、台ノ前南貝層からハマグリ製とウバガイ製の貝刃が見られ(写真262-11・12)、西向貝層でもハマグリ製の貝刃が1点出土している。貝輪はサトウガイ(またはサルボウ)製のものが、台ノ前南(北)貝層で出土しており(写真262-14・15)、前期末～中期前葉に伴う可能性が高い。イタボガキの穿孔品も台ノ前北貝層、特に54T貝層から多数出土しており(写真262-17)、同じく前期末～中期前葉の所産と考えられる。イタボガキ製貝輪は台ノ前北(南)・西向貝層で数点出土している(写真262-13)。穿孔品としては他に、ウバガイ・アカニシ(写真262-16)・マガキ製のものが少量認められる。

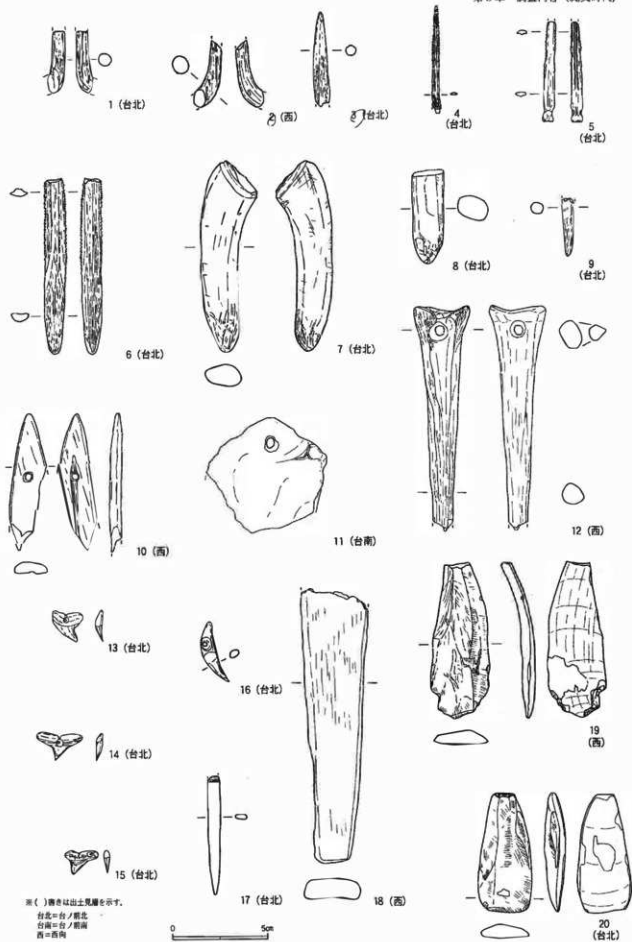
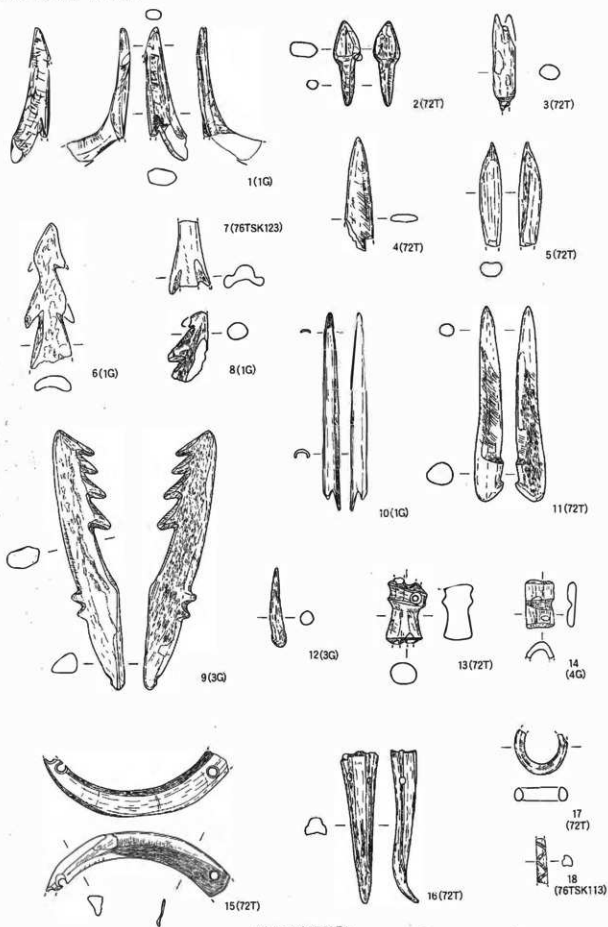


図153 台ノ北(南)・西向貝層出土骨角器(S=1/2)



※()内は出土層を示す。

0 5cm

図154 小泊貝層出土骨角器 (S=1/2)

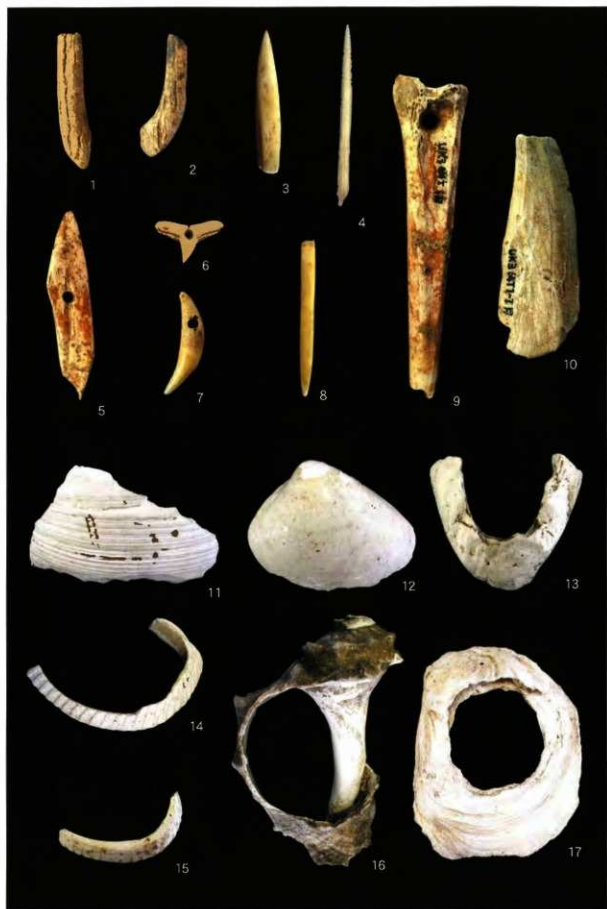


写真262 骨角器・貝製品 (貝加工品) [台ノ前北(南)・西向貝層出土]



写真263 骨角器 [小迫貝層出土]

表4 骨角器・貝製品(貝加工品)一覧表

棟図番号	写真番号	貝層	トレンチ名	層名	採集	種別	材質
153; 1	262; 1	台ノ前北	54	27	5mm	釣針	鹿角
153; 2	262; 2	西向	64	Ⅲ層上面	5mm	釣針	鹿角
153; 3	262; 3	台ノ前北	54	11	現地	刺突具	骨製
153; 4	262; 4	台ノ前北	54	19	現地	加工品(嫩)?	エイ尾棘
153; 5	-	台ノ前北	54	27	現地	加工品(嫩または装飾品)	エイ尾棘
153; 6	-	台ノ前北	54	25	現地	加工品	エイ尾棘
153; 7	-	台ノ前北	63	Ⅲ	現地	加工品	鹿角
153; 8	-	台ノ前北	58	Ⅱ	現地	棒状製品(鋸基部?)	鹿角
153; 9	-	台ノ前北	56	Ⅱ	5mm	棒状製品	鹿角?
153; 10	262; 5	西向	64	I	現地	鋸頭の二次加工品?	?
153; 11	-	台ノ前南	31	Ⅲ	現地	加工有(穿孔品)	スズキ木匙蓋骨
153; 12	262; 9	西向	64	I	現地	刺突具	シカ中足骨(左・近)
153; 13	-	台ノ前北	54	25	現地	装飾品(垂飾)	サメ歯(サメ類)
153; 14	-	台ノ前北	54	10	現地	装飾品(垂飾)	サメ歯(メジロザメ科?)
153; 15	262; 6	台ノ前北	54	10	現地	装飾品(垂飾)	サメ歯(メジロザメ科)
153; 16	262; 7	台ノ前北	54	25	現地	装飾品(垂飾)	タヌキ犬歯
153; 17	262; 8	台ノ前北	54	4	現地	装飾品?	?
153; 18	-	西向	64	I	現地	加工品	クジラ骨
153; 19	262; 10	西向	64	I	現地	牙斧	イノシシ(オス)下顎犬歯
153; 20	-	台ノ前北	58	Ⅱ	現地	牙斧	イノシシ(オス)下顎犬歯
-	262; 11	台ノ前南	38	ⅢD	現地	貝刃	ウバガイ(左)
-	262; 12	台ノ前南	38	ⅢC・D	現地	貝刃	ハマグリ(左)
-	262; 13	台ノ前南	38	Ⅲ	現地	貝輪	イタボガキ(右)
-	262; 14	台ノ前南	38	ⅢE・F	現地	貝輪	サトウガイ(左)
-	262; 15	台ノ前南	39	ⅢD	現地	貝輪	サトウガイまたはサルボウ(右)
-	262; 16	台ノ前北	54	23	現地	穿孔品	アカニジ
-	262; 17	台ノ前北	54	27	現地	穿孔品	イタボガキ(右)
154; 1	263; 1	小船	1 G	I	現地	釣針	鹿角
154; 2	263; 2	小船	72	I	現地	鏃	鹿角
154; 3	263; 3	小船	72	Ⅲ層直上	現地	鏃	?
154; 4	263; 4	小船	72	I	現地	鏃	鹿角
154; 5	-	小船	72	I	5mm	鏃	鹿角
154; 6	263; 5	小船	1 G	I	現地	逆刺付刺突具	鹿角
154; 7	263; 6	小船	76	SK123	現地	逆刺付刺突具	鹿角
154; 8	-	小船	1 G	I	現地	逆刺付刺突具	鹿角
154; 9	263; 7	小船	3 G	I	現地	逆刺付刺突具	鹿角
154; 10	263; 8	小船	1 G	I	現地	刺突具	鳥長骨
154; 11	263; 9	小船	72	I	現地	刺突具	鹿角
154; 12	-	小船	3 G	一括	現地	ヤス先端返しまたは釣針?	鹿角?
154; 13	-	小船	72	Ⅲ層直上	現地	環形製品	鹿角
154; 14	263; 14	小船	4 G	Ⅱ層	現地	装飾品(管状垂飾)?	シカ/イノシシ長骨
154; 15	263; 13	小船	72	I	現地	装飾品(垂飾)	イノシシ(オス)下顎犬歯
154; 16	263; 11	小船	72	I	現地	装飾品(垂飾)	ウナギちばし
154; 17	263; 15	小船	72	I	5mm	垂飾?	シカ中手・中足骨?
154; 18	263; 16	小船	76	SK113	現地	装飾品	鹿角
-	263; 12	小船	72	Ⅲ層直上	現地	骨刀	クジラ肋骨

(2) 小迫貝層・小迫北地区 (図154)

小迫貝層は貝層を掘り下げて調査を実施していないが、貝層上面や遺構内から多くの骨角器が出土している。釣針、刺突具、装飾品等の種類も増え、形態も定型化しており、台ノ前南貝層等古い段階の貝層と大きな変化を認めることができる。

釣針は1点のみであるが大型のものが出土している(1)。鱗は基体と茎の区別が明瞭なもの(2)や無茎のもの(4・5)、先端にスリットをもつもの(3)など多様な形態が見られる。刺突具は逆刺付刺突具が見られるようになり(6・7)、組み合わせ式の逆刺付刺突具も出土している(8・9)。11・12も同様の刺突具と考えられ、大小の形態差を認めることができる。他に大型鳥類長骨製刺突具(10)もみられる。13は鹿角製の頸形製品である。

装飾品としてはイノシシ犬歯製(15)、ウレチバシ製(16)の他、環状のもの(17)や中央に溝をもつ管状のもの(14)がある。18は山形の文様が刻まれる装飾品である。この他、鯨骨製骨刀破片が出土しており(写真263-12)、鯨骨の加工品は前段階に比較し増加している。また、小迫貝層・小迫北地区では貝製品や貝穿孔品はほとんど確認されていない。

第4章 浦尻貝塚における動物遺体群の概要

はじめに

浦尻貝塚では、今回の一連の発掘調査によって台ノ前北貝層、同南貝層、西向貝層、小迫貝層の4ヶ所の貝層が良好な保存状態で確認され、各貝層から貝類・魚類・鳥獣類を主体とする多数の動物遺体が採集された。これらの貝層の形成年代は、台ノ前（北・南）貝層が縄文時代前期後葉～中期後葉、西向貝層が中期前葉～後期前葉、小迫貝層が晩期前葉～中葉であり、後期中葉～後葉に貝層形成の断絶期間を挟むものの、全体としては縄文前期後葉から晩期中葉にわたっている。さらに隣接する北原貝塚遺跡群（西貝塚）では前期前葉における動物遺体群の詳細が報告されており（植月・植泉2004）、両遺跡のデータを合わせれば前期前葉から晩期中葉にいたる長期的な動物遺体群の変遷を把握できることになる。

本貝塚の動物遺体群については現在も分析を継続中であり、分析未了の資料やさらに分析を要する項目も若干残されているが、本報では現時点までに明らかとなった動物遺体群の概要およびそれから推定される周辺の古環境や本遺跡における動物資源利用の様相について予察を述べる。

なお、本貝塚の動物遺体に関するこれまでの報告としては、昭和26年・同46年の福島大学考古学研究会による西向貝層の発掘資料に関する金子浩昌の報告（金子1971）および台ノ前貝層の貝類に関する石川隆司の報告（石川1983）がある。

1. 資料の採集方法

分析資料には、貝層の水洗選別によって回収された資料（以下「水洗選別資料」）および発掘時に現地において手で拾い上げられた資料（以下「現地採集資料」）の2種類がある。

水洗選別資料：台ノ前北貝層54Tでは貝層全体を細別層に分けながら発掘が行われており、各細別層からブロックサンプルが採取されている。台ノ前南貝層31T・38T、西向貝層64T、小迫貝層1G・3G・72Tでは、それぞれ50cm角（38Tのみ50cm×40cm）のコラムが設定され、層序に沿って貝層サンプルが採取されている。これらの貝層サンプルは自然乾燥（および体積・重量の測定：31T・38T・54Tを除く）の後、5mm・2.5mm・1mm目のフルイを用いて水洗されている。また上記のサンプル以外の貝層についても、すべて5mmメッシュで水洗され、貝殻・骨類が回収されている。

現地採集資料：発掘現場で目に付きやすい大型の骨が大半である。上記の通り発掘された貝層はすべて5mmメッシュで水洗され遺体が回収されていることから、集計に際しては現地採集資料と水洗選別資料のうち5mmメッシュで回収されたもの（以下「5mm資料」）を一括して扱うこととした。

2. 分析対象資料と分析方法

貝類では、水洗選別5mmメッシュ資料を分析対象資料とした。同定・計数部位は、二枚貝では殻頂とし、巻貝では種類ごとに殻口・殻輪など特定部位を適宜設定した。

骨類では、現地採集資料と水洗5mm資料の全てとコラム/ブロックサンプルの2.5mm・1mm資料を分析対象資料とした。ただし後者については魚骨を中心に大量の骨が検出されており、現時点では一部のサンプルの分析を終えたのみである。これらの資料の中から、魚骨では主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、主鰓蓋骨、椎骨の全資料およびその他同定可能な資料を抽出し、同定用資料とした。爬

虫類・鳥類・哺乳類では部位の判定可能な資料を同定用資料とした。

同定方法は現生標本との比較を基本とした。比較標本には筆者の所蔵標本のほか、西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）の所蔵標本も参照させていただいた。貝類の同定に際しては黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）のご教示を蒙った。

なお、38T貝層上部、54T貝層および64T貝層下部の年代については、出上土器および放射性炭素年代の検討において未確定の部分が残されている。今回は暫定的に54T貝層最下部（28層以下）を大木6式～7a式（古段階）、54Tの27層以上および64T貝層下部を大木7式期、38T貝層上部（ⅢD層以上）を大木9式期として扱ったが、これらについては今後若干の修正がなされる可能性がある。このため魚類・鳥獣類の集計については、今回は最小個体数（MNI）の算定は行わず同定標本数（NISP）のみを示すにとどめたが、遺体群の基本的な特徴は示されているものと思われる。なお分析結果（図155～図159、表5）には、隣接する北原貝塚遺跡群（西貝塚、縄文前期前葉）のデータ（植月・榎泉2004）もあわせて示した。

3. 動物遺体の概要

(1) 貝類（図155・図156）

前期後葉～後期前葉（大木5式～網取式期）は、アサリを主体とし、イボキサゴ・ハマグリなどがしばしば多産する点で一貫している。大木5式～7式期にはヤマトシジミもやや多く、54Tでは少数ながらイタボガキがみられる点も特徴である。これに対し、晩期（大洞式期）にはアサリが激減し、イソシジミ・ヤマトシジミが主体となって組成が一変する。ハマグリも増加し、ウバガイも少数ながら増加する。いっぽうマガキ・オオノガイ・ツメタガイ・スガイなど多くの種が減少または消滅し、組成が特定の種に集中する傾向が認められる。

(2) 魚類

現地採集資料と水洗5mm資料で示される比較的大型の魚類と、水洗2.5mm・1mmで示される小型魚類とで内容が大きく異なるため、ここでは両者に分けて記載する。

現地採集資料・水洗5mm資料（図157）：前期後葉～中期初頭（大木5式～7a式古段階期）では地点によって組成にばらつきがあるが、31Tではカツオ・ウナギ属が主体をなし、38T・54Tではスズキが圧倒的多数を占める。中期前葉（大木7式期）にはブリ属・カレイ科が増加し、カツオが減少する。中期後葉～後期前葉（大木9式～網取式期）にはカツオが消滅し、ブリ属も減少傾向を示す一方、ウナギ属・フサカサゴ科などが増加して、組成がやや多様化する。晩期前葉～中葉（大洞BC～C2式期）にはスズキ・カレイ科が激減する一方で、大型のネスミザメ科を含むエイ・サメ類、フナを主とするコイ科、ボラ科が増加して、組成が一変する。マダイ・フサカサゴ科・アイナメ属・フグ科なども普遍にみられ、組成が著しく多様化する。

水洗2.5mm・1mm資料（図158）：各時期の貝層サンプルからは微小魚骨がきわめて高密度で検出されており、こうした小魚類が一貫して本遺跡における魚類の主体をなしていたことを示す。現時点では31T-LIV 1（大木5式期）、54T-15層（大木7式期）、3G-2B（大洞C2式期）の各サンプルについて分析を終えたのみだが、他の資料の予備的な観察所見も含め、その特徴について予見を述べる。

各期のサンプルはウナギ属を主体とし、ハゼ科を多く含む点で一貫しているが、その他の種類については時期ごとに大きな変化が見られる。前期後葉（大木5式期）ではドジョウ科、フナを含むコイ科、ギギ科が多いのに対し、中期前葉（大木7式期）にはこれらが激減し、マイワシを含むニシン科

が急増する。少数ながらブリ属が出現する点は現地採集・水洗5mm資料と連動した特徴といえる。

中期後葉～後期前葉（大木9式期～網取式期）のサンプルについては分析未了だが、予備的な観察所見によれば、ウナギ属とニシン科を主体として、ハゼ科・カタクチイワシも普通にみられるなど、基本的な特徴は大木7式期と変わらない。ただし大木9式期以降は、きわめて微小な魚骨（おそらくハゼ・イワシ類など）が増加するなど、若干の変化も認められるようである。

晩期（大洞C2式期）にはニシン科が減少し、フナなどのコイ科、ワカサギ科が増加するほか、アINAメ属、カレイ科、フグ科なども微増し、組成が多様化する。この点は現地採集資料・水洗5mm資料と類似した傾向といえる。ただし別地点のサンプルの予備的な観察ではニシン科も多くみられるなど内容にバラツキがあり、その特徴については今後さらに検討を要する。

(3) 鳥 獣 類 (図159)

陸獣類では全体にシカ・イノシシが主体をなす。前期後葉～後期前葉（大木5式～網取式期）にはタヌキもやや多く、網取式期にはノウサギが増加する。晩期（大洞式期）にはシカがやや増加傾向を示し、タヌキが激減する。

鳥類は、前期後葉（大木4～6式期）には少ないが、中期前葉（大木7式期）以降に増加する。全体的にカモ類が多く、他にカイツブリ、ウなどの水鳥が主体をなす。後期前葉（網取式期）以降はキジ類も微増する。晩期（大洞式期）にはミズナギドリ類が特徴的にみられる。鳥類の多産は本遺跡の鳥獣類相の最大の特徴であり、この点は金子（1971）もすでに指摘している。

海獣類は、前期後葉～中期前葉（大木4～7式期）には少数ながらクジラ類、アシカ類、アザラシ類、ウミガメ類がみられるが、中期後葉～後期前葉（大木9式～網取式期）にはいったん消滅し、晩期（大洞式期）には再びクジラ類、アシカ類が見られるようになる。

4. 考 察

以上の結果を表5に要約した。ただしこれは現時点での暫定結果であり、今後の貝層の詳細な年代決定、微小魚骨（水洗2.5mm・1mm資料）の分析の進捗、最小個体数の検討などに伴って修正が必要になるものと予測されるが、動物相の基本的な特徴は示されているとみてよいであろう。ここでは、まず上記の結果に北原貝塚のデータを加えて縄文前期前葉から晩期中葉に至る動物遺体群の変遷の特徴を概観し、次いでその背景について古環境および動物資源利用の両面から簡単に予察する。

(1) 動物遺体群の変遷

北原貝塚および本貝塚における各期貝層の遺体群の変遷を概観すると、とくに魚貝類に関して下記のような明確な時代変化が確認できる。

前期前葉（北原貝塚）：イボキサゴ・フグ科・カタクチイワシの多産によって明確に特徴付けられる。魚類ではスズキ属・ニシン科も多く、カツオも普通である。

前期後葉～中期前葉（大木5～7式期）：イボキサゴ・フグ科が激減し、アサリ・ウナギ属が増加して、様相が大きく変化する。ヤマトシジミも微増する。大木7式期ではカツオが減少し、ブリ属が増加する。なお大木5式期における水洗2.5mm・1mm資料の魚類は、ウナギ属のほかドジョウ科、コイ科、ギギ科といった淡水魚が卓越する点で特異的である。

中期後葉～後期前葉（大木9式～網取式期）：基本的には大木7式期の様相が継続するが、ブリ属は減少し、カツオは網取式期に消滅する。そのほかにもヤマトシジミの減少、カレイ科・ウナギ属の増加（現地採集・水洗5mm資料）など、若干の変化が認められる。

表5 浦尻・北原貝塚における動物遺体群の変遷(予察) 太字:主体種, 細字:他の主要種, ():少数種だが特徴的にみられるもの

年代	遺跡	水域				陸域		
		貝類	魚類(現地採集・水洗5mm)	魚類(水洗2.5mm・1mm)	海獣類	鳥類	陸獣類	
晩期	中葉	<u>イソシジミ</u> ・ <u>ヤマトシジミ</u> ハマグリ・アサリ (ウバガイ)	多様性が強い: サズキ類・エイ類・フナ・ ボラ科・スズキ属 など	<u>ウナギ属</u> ニシ科・コイ科・ハゼ科・カレイ科 (ワサギ科・フサカサゴ科・アイナメ属)	少ない: クジラ類, アシカ科	<u>カモ</u> カイツブリ・ ミズナキトラ・キジ	<u>シカ</u> ・ <u>イノシシ</u> ノウサギ	
	前葉			分析中				
後期	後葉	貝層形成なし						
	中葉							
中期	前葉	<u>アサリ</u> イボキサゴ・ハマグリ	多様性が強い: スズキ属・カレイ科・ ブリ属・ウナギ属 など	分析中	なし	<u>カモ</u> ウ・キジ	<u>シカ</u> ・ <u>イノシシ</u> タヌキ・ノウサギ	
	後葉					<u>カモ</u> ウ	<u>シカ</u> ・ <u>イノシシ</u> タヌキ	
前期	中葉	貝層小規模、資料少量(分析中)						
	前葉	<u>アサリ</u> イボキサゴ・ハマグリ (イボキサゴ・ヤマトシジミ)	<u>スズキ属</u> ・ <u>ブリ属</u> カレイ科	<u>ウナギ属</u> ・ <u>マウシ</u> ・ <u>ニシ科</u> ハゼ科・カタクチイワシ (ブリ属・フサカサゴ科)	少ない: クジラ類, アシカ科・ アザラシ科, ウミガメ類	<u>カモ</u> カイツブリ・ウ	<u>シカ</u> ・ <u>イノシシ</u> タヌキ	
前期	後葉		<u>スズキ属</u> ・ <u>カツオ</u> ウナギ属・ブリ属	<u>ウナギ属</u> ・ <u>ドジョウ科</u> フナ科・ハゼ科・カタクチイワシ (ギギ科)		少ない: ウ・カモ・ カイツブリ		
	中葉							
前期	前葉	北原 貝塚	<u>イボキサゴ</u> アサリ	<u>スズキ属</u> ・ <u>フグ科</u> カツオ	<u>マウシ</u> ・ <u>ニシ科</u> ・ <u>カタクチイワシ</u> ハゼ科・フサカサゴ科・フグ科	なし	<u>カモ</u> キジ	<u>シカ</u> ・ <u>イノシシ</u> タヌキ・ノウサギ

晩期前葉～中葉（大洞BC～C2式期）：スズキ属が減少し、ヤマトシジミ、イソシジミ類、エイ・サメ類、フナなどが増加して、様相が再び大きく変化する。

鳥獣類についてはシカ・イノシシ主体の陸獣類相およびカモを主とする鳥類の多産が全期間を通じて継続しており、明確な時代変化は認められない。ただし、前期後葉における鳥類の一時的減少、前期前葉と後期前葉～晩期においてキジ類・ノウサギがやや多くみられる点など、若干の変化も認められる。海獣類は少数ながら前期後葉～中期前葉と晩期でのみ出現が認められる点で特徴的である。

全体として、動物遺体群の変遷には前期前葉と後葉の間、および後期前葉と晩期の間に明確な変化が認められ、これらの時期に資源環境あるいは動物資源利用の様相に大きな変化が生じたことが推測される（上記の通り前期後葉～後期前葉の間にもいくつかの変化が認められるが、それらはさほど顕著なものではなく、またその変化は連続的である）。またこれらの画期は北原貝塚遺跡群→浦尻貝塚台ノ前・西向貝層→浦尻貝塚小畑貝層という貝層形成の場の移動にも対応しており、両者の間に何らかの関連性があった可能性も考えられる。

(2) 動物遺体群の変遷の背景

上記のような動物遺体群の変遷の背景について、古環境変遷および生業（動物資源利用）の両面から予察する。

a. 古環境変遷

浦尻・北原両貝塚から出土した主要魚貝類の生息環境をみると、前期～後期前葉には、貝類ではアサリやイボキサゴなどの内湾性種が大半を占める。魚類でも内湾性のスズキや外洋沿岸性の表層回遊魚だが内湾にも多く来遊するマイワシ・カタクチイワシなどが多い。これらの特徴から、すでに石川（1983）が指摘しているとおり、この時期の宮田川谷は砂質干潟を伴う内湾（以下「古宮田湾」と仮称）であったと推定される。また魚類では、前期後葉以降に淡水～汽水性のウナギ属の急増がみられることから、古宮田湾の奥部や縁辺部ではこの頃から淡水化が進行し始めたと推測される。さらに晩期にはヤマトシジミやフナなどの淡水～汽水性種が急増することから、古宮田湾口における砂洲の発達による湾の閉鎖と澗湖化が急速に進み、井田川浦の原形が形成されたと推定される（イソシジミ類については同定や生態に関してさらに検討を要するため、ここでは触れない）。

なお前期後葉には、水洗2.5mm・1mmの魚類においてドジョウ科、フナを含むコイ科、ギギ科といった淡水魚の一時的増加が認められ、現地採集資料・水洗5mm資料でもウナギ属の増加があり、前後の時期に比べて淡水魚が卓越する傾向を示す。またヤマトシジミが前期後葉～中期前葉に微増するもの、これと連動した現象と思われる。これらの変化は上記のような内湾から澗湖への一方的な変化という図式とは整合していないことから、この時期に短期的な淡水域の拡大が生じた可能性も考えられるが、詳細は今後の課題である。

そのほか、上記のようなローカルな環境変遷とは別に、海流系・古水温変動との関連で注目されるのはカツオ、ブリ属の動向である。兩種は典型的な暖流系種で、本貝塚では前者は前期前葉～中期前葉、後者は中期前葉～後葉に多くみられ、ともに晩期には消滅している。石川（1983）が暖流系種として注目したイタボガキも前期末～中期前葉にやや多くみられるが、後期～晩期には減少・消滅しており、同様の動向といえる。これらの特徴から、本貝塚周辺海域における暖流の影響は前期～中期に強く、後期～晩期には衰退した可能性も考えられる。寒流系の貝であるウバガイ（現在の分布南限は鹿島灘）が上記の暖流系種とは逆に晩期に微増するもの、これと関連するものかもしれない。今後、現生種の分布・生態の検討、他遺跡のデータや古環境資料との比較などを進める必要がある。

b. 動物資源利用

前期前葉～中期前葉：漁労・採貝活動に関しては、古宮田湾でのアサリなどの内湾生貝類の採取およびスズキやイワシ類などの内湾性魚類の漁が中心であり、前期後葉以降は淡水域の拡大に伴ってウナギなどの淡水魚漁も活発化する。またカツオやブリ属は内湾にはあまり侵入しないことから、外海域での漁も行われていたと推定される。ただし本貝塚の貝層は貧弱であり、貝類利用は比較的低調である。タイ類やカツオなどの大型魚も少なく、スズキも若魚が主体で大型成魚は少ない。これに対し、各貝層サンプルからはイワシ類やウナギなどの小型魚骨がきわめて高密度で検出されており、この時期の漁獲物の主力がこうした小型魚類であったことを示す。狩猟に関しては、シカ・イノシシ猟とカモを主とする水鳥猟が中心であり、アシカ類・イルカなどの海獣猟も行われていた可能性がある。

中期後葉～後期前葉：基本的には前時期の様相が継続するが、魚類ではカツオ・ブリ属などの外洋性種が減少し、海獣類も消滅することから、活動領域が古宮田湾内に収束する傾向が読みとれる。また、現地採集資料・水洗5mm資料の魚類にみられる組成の多様化（とくに網取式期はその傾向が顕著）も漁労様式の変化を反映している可能性がある。

晩期前葉～中葉：古宮田湾の潟湖化に伴って、ヤマトシジミやフナなどの汽水～淡水性魚貝類の利用が増大する。その反面で大型サメ類の漁が始まり、アシカ類などの海獣類も復活して、外洋域での活動が再び活発化する。刺突貝（鈎・ヤス）の増加は、明らかにこうした大型の魚類・海獣類の増加と関連したものである。また魚類におけるマダイ、フサカサゴ科（メバル・カサゴ類）、アイナメ類などの増加、鳥類におけるミズナギドリ類の増加も外海域での活動の活発化と連動したものであると思われる。このように、晩期には活動が淡水～汽水域（潟湖）と外海域に二極化する傾向がみられる。このうち前者については環境変化（潟湖化の進行）への対応であり、後者については仙台湾～三陸方面ないはいわき方面からの影響が明らかである。

5. まとめ—動物遺体からみた浦尻貝塚の重要性

以上のように、今回の浦尻貝塚の調査では、縄文前期後葉から晩期中葉に至る各期の貝層が丹念に調査され、多数の動物遺体を得ることができた。今回得られた資料は精密なサンプリングと詳細な年代決定に裏付けられており、質的にも充実している。単一遺跡においてこのような長期間にわたる動物遺体群が産することは、縄文遺跡としては希有の事例といえる。さらに隣接の北原貝塚遺跡群と合わせれば、ほぼ同一の立地条件を持つ一連の貝塚群を通して、縄文海進最盛期以降の各種動物遺体群の長期的な変遷を「定点観測」することが可能である。動物遺体からみた場合の本貝塚の意義のひとつはこの点にある。

また本遺跡の周辺地形をみると、小規模な内湾である古宮田湾が太平洋に向けて直接開口し、これを取り巻いて台地が広がっている。本地域では、これら内湾・外洋・台地といった多様な地理的要素がコンパクトにまとまって箱庭的な構成をなしている点の特徴であり、古地理変遷を復原していくうえで好条件が整っている。さらに、古宮田湾岸には他にも多くの縄文貝塚が分布しており、それらが全体として良好な状態で保存されている点も特筆される。

このように、古宮田湾周辺地域は縄文海進最盛期以降の自然環境と人間活動がどのような関係をもちながら変遷したかを長期的なスケールで検証するうえで格好の条件を備えたフィールドであり、なかでも浦尻貝塚は、北原貝塚遺跡群と合わせ地域の中核的遺跡としてきわめて重要な位置を占めている。

さらに本地域は、三陸～仙台湾地域といわき地域というふたつの縄文貝塚密集域の中間地点にあり、東北地方太平洋岸における縄文社会の広域的な関係を検討する上でも重要な位置にある。これまで本地域の動物遺体に関する知見はごく限られたものであったが、今回浦尻貝塚において長期的かつ高精度のデータが得られたことにより、上記の諸地域との通時的な比較研究が一気に可能となった。詳細な検討はこれからの課題だが、今後は動物資源利用の様相を通じて、これら諸地域間の関係性の解明が大きく進展するものと期待される。

このように浦尻貝塚は、縄文時代における人と自然の関わりあいの歴史を解明し、また東北地方太平洋岸における縄文社会のあり方を理解する上で不可欠の意義をもつ遺跡であり、今後充分な保全がなされることを強く要望するものである。

謝辞：末筆ながら、調査分析に際して多大なる援助とご教示を賜った川田強氏・佐川久氏（小高町教育委員会）、現生標本を閲覧させていただいた西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）、貝類同定に際してご協力いただいた黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）に厚く御礼申し上げる。

第4章参考文献

- 石川隆司（1983）「福島県浦尻台の前貝塚における貝類採集活動の復原」法政考古学 8
植月 学・樋泉岳二（2004）「北原西貝塚の動物遺体」『北原貝塚遺跡群』小高町教育委員会
金子浩昌（1971）「遺物Ⅱ—浦尻貝塚出土の動物遺存体概報—」『浦尻貝塚』福島大学考古学研究会

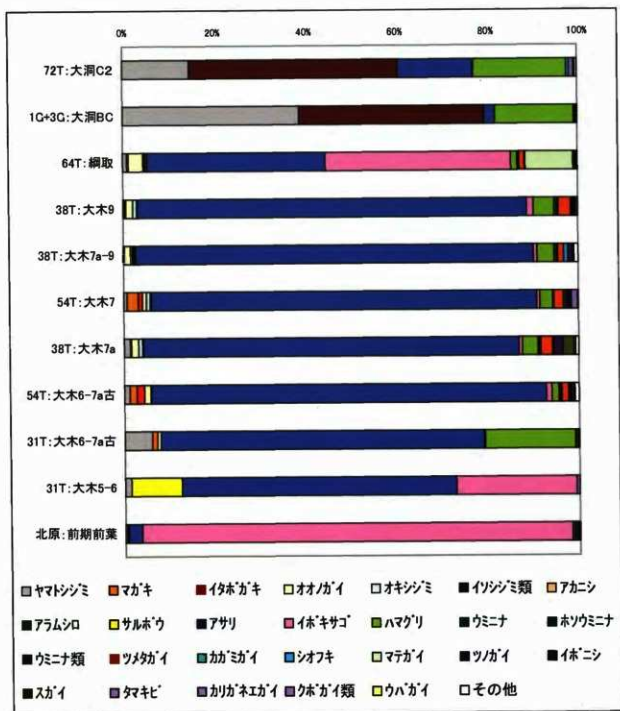


図155 浦尻貝塚における貝類遺体の変遷

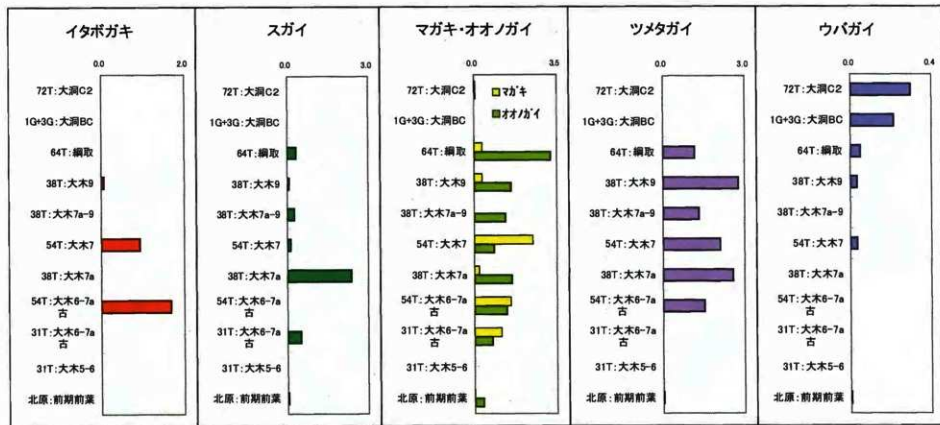


図156 少数要素の中で特徴的な変遷を示す貝類の例 (数値: %)

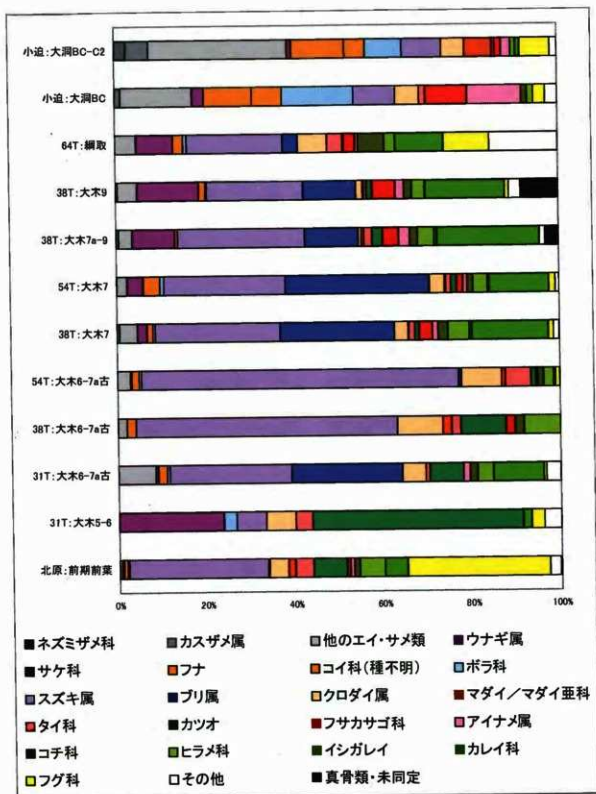


図157 浦尻貝塚における魚類遺体の変遷(1)－現地採集資料および水洗5mm資料

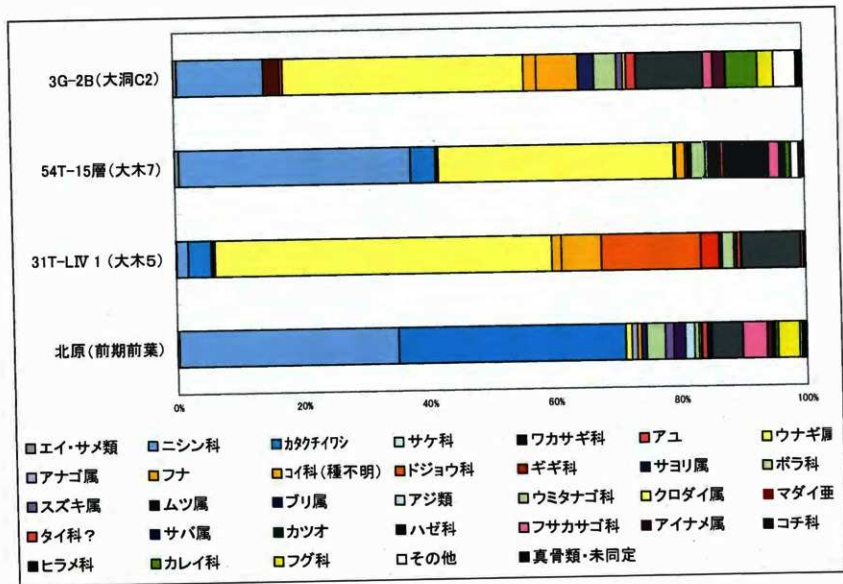


図 158 浦尻貝塚における魚類遺体の変遷(2) - 水洗2.5mm・1mm資料

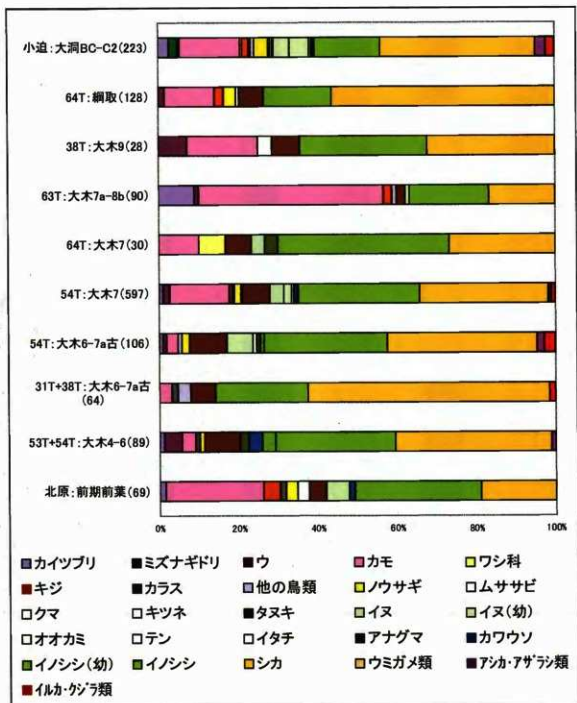


図159 浦尻貝塚における鳥獣類遺体の変遷（現地採集資料および水洗5mm資料）



写真264 貝類 1スガイ、2イボキサゴ、3ツメタガイ、4アサリ、5ヤマトシジミ、6イソシジミ、7ハマグリ、
8オオノガイ、9ウバガイ、10イタボガキ、11 マガキ (縮尺1/1)



写真265 魚類 1ネズミガメ科椎骨、2トビエイ科歯、3フナ主総蓋骨R、4ボラ科主総蓋骨L、5～7スズキ属（6はスズキ）[5歯骨L、6主総蓋骨L、7主上顎骨R]、8ブリ属椎骨、9～11クロダイ属 [9前上顎骨R、10歯骨L、11主上顎骨L]、12マダイ前頭骨、13・14マダイ亜科 [13前上顎骨L、14歯骨L]、15コチ科歯骨L、16フグ科歯骨R、17カツオ椎骨、18ヒラメ科椎骨。（縮尺1/1）



写真266 哺乳類(1) 1オオカミ下顎骨L、2クマ踵骨L、3・4イヌ [3上腕骨R、4尺骨L]、5・6カワウソ
 [5大腸骨R、6上顎骨R]、7・8タヌキ下顎骨R、9アナグマ下顎骨L、10ノウサギ下顎骨L、
 11テン下顎骨L、12キジまたはヤマドリ中手骨L、13アビ科鳥口骨L、14カモ類上腕骨L、
 15カイツブリ属上腕骨R。(縮尺2/3)



写真267 哺乳類(2) 1・2 イノシシ下顎骨、3 シカ角座骨+角、4 シカ下顎骨R、5 同L、6 クジラ椎骨
(縮尺 3・6 : 1/5、その他 : 1/3)

第5章 縄文時代の調査成果について

はじめに

平成12年度の試掘調査及び平成13～16年度の範囲内容確認調査で得られた資料は多量にのぼり、整理調査も終了していない。また、範囲確認調査という性格上、掘り下げて調査を行っていない部分も多く、所属時期など不明確な点も残されている。詳細な検討は将来的な課題ではあるが、ここでは、これまで本報告で述べてきた調査成果を基に、浦尻貝塚の集落構成と変遷について現在の見解を述べることとする(注1)。また、動物遺存体の調査成果については第4章にまとめてあるので、ここでは詳細は触れないこととする。

第1節 南台・台ノ前・西向地区の調査について

1. 遺構について

遺構の種別については、第3章第2節にその分類基準を示している。この基準に基づき、図160に南台地区の種別の分布状況を示した。遺構はⅢ-1層(暗褐色系砂質土・縄文包含層)分布範囲を中心に多く確認されており、南側の南台地区台地中央部では遺構数は減少している。以下では、遺構種別毎に分布状況と形成時期を概観する。

(1) 竪穴住居

竪穴住居は推定も含めて19軒確認している。通時的な分布状況を見ると、台地北部のⅢ-1層分布範囲縁辺部に多く確認され、弧状に分布していることが指摘できる。東側の状況は明らかではなく、土坑Ⅰ類(柱穴)が竪穴住居である可能性もあるので、環状集落であるかどうか即断できないが、大木9式期以降はその可能性が高いと予測している。

出土遺物等から推定した時期は次のとおりである(推定して竪穴住居としたものも含む)。

- ・大木5式期 SI06・SI07
- ・大木7a式期 SI04
- ・大木8～大木10式期 SI02
- ・大木9式期 SI03
- ・大木10式期 SI01・SI08・SI09・SH13・SI15
- ・大木9～10式期 SI16
- ・大木9～綱取式期 SI11・SI12・SI14・SI24・SI25
- ・綱取式期 SI10・SI17
- ・不明 SI18

大木9式期以前の住居は断片的に過ぎないが、52T西に重複して確認されており、居住施設構築場所が踏襲されていることが指摘できる。大木9式期以降増加しており、特に大木10式期の複式炉を伴う住居が明瞭に確認できる。綱取式期までは確実に存在している。

(2) 土坑Ⅰ類(柱穴)

土坑Ⅰ類は推定も含めて58基検出している。通時的な分布状況はⅢ-1層分布範囲を中心として多く分布しており、竪穴住居が弧状に分布する内側に多く認められる。竪穴住居に伴う床面等が削られ、

柱穴だけ残存したのも多数あると考えられ、掘立柱建物であるかどうかは定かではない。

南台地区台地中央部にも12基集中して確認されており、これらは竪穴住居とは異なり、掘立柱建物(平地式建物)を構成するものと考えられる。

半裁を行うなど調査を実施したもので、出土遺物等から推定されている時期は次のとおりである。

- ・大木9式期? SK170
- ・大木10式期 SK520
- ・網取式期 SK93・SK229・SK235・SK264
- ・加曽利B式期 SK15

その他の上坑Ⅰ類は大木9～網取式期に推定され、大木8b式以前は現在のところ確認できない。

南台地区台地中央部の土坑Ⅰ類群(SK520等)は大木10式期と考えられるが、南台地区台地北部のものには網取式期の所産が明確であり、網取式期に増加することが推定される。

(3) 土坑Ⅱ類(貯蔵穴)

土坑Ⅱ類は南台地区だけで推定を含め合計35基検出されている。小迫北地区では28基確認されており、浦尻貝塚全体では、合計63基となる。通時的な分布状況を見ると、南台地区台地北部ではⅢ-1層分布範囲の外周に多く認められる。

南側の台地中央部では広い範囲に全体的に分布しており、台地中央部の主体的な遺構となっている。特に一定地区に集中度をもって分布しない状況は、南台地区台地南部及び小迫北・南地区まで確認されている。これらは南台地区台地北部及び小迫北・南地区の中期以前の居住地に伴う貯蔵穴群と理解することができる。

半裁を行うなど調査を実施したものを中心に、出土遺物や重複関係から推定されている時期は次のとおりである。

- ・前期後葉～中期前葉 SK507
- ・大木7a式期 SK290
- ・大木7b式期? SK546・SK548
- ・大木8a式期 SK545・SK630
- ・大木8a式期以後 SK649
- ・大木8式期 SK04
- ・大木9式期 SK03・SK643
- ・大木9式期以後 SK506
- ・不明 SK620

土坑Ⅰ類に比較し、古い段階のものが多く、大木9式期以前の構築が多い。南台地区台地南部、小迫北地区では、大木6式、大木7b式、大木9～10式、大木10式期のものが確認されており、前期末以降中期末まで継続的に構築されていたことが確認できる。南台地区台地北部の土坑Ⅱ類と南台地区台地中央部～南部、小迫北地区の土坑Ⅱ類の構築時期は大きな差はないと考えられるが、南台地区台地北部の土坑Ⅱ類は、重複関係や出土遺物から大木10式期以降構築されていないものと推定される。

(4) 土坑Ⅲ類(大型土坑)

土坑Ⅲ類は推定を含め合計41基検出されている。土坑Ⅲ類はさらに細別を行った。Ⅲa類とⅢb類は検出箇所、形成時期、基調となる覆土は異なるが、一方向の壁際に傾斜した堆積状況、大形のレキを含むものが多いこと、土器の出土状況等は類似点が多い。これらの機能としては、墓塚の可能性が高

いと考えている。土坑Ⅲc・d類もその可能性があるが、竪穴住居に伴うものなどが含まれていると考えられる。図160では墓塚の可能性が高い土坑Ⅲa類とⅢb類のみ分けて示した。

土坑Ⅲa類は覆土が黒色基調のものである。SK20・54・61・92・119の5基が該当し、うち3基(SK54・92・119)が加曽利B式期に形成されたものである。いずれも51TⅢ-1層分布範囲で確認され、SK119はⅢ-1層上から構築されている。その他のものも時期は不明であるが、覆土の特徴から加曽利B式期に形成されたものの可能性が高い。

土坑Ⅲb類は52T西で集中して分布するもので、10基が該当する。しかし、これらは同一遺構を別遺構としている可能性があり、これを統合して整理すると7基となる。

半裁を行うなど調査を実施したもので、出土遺物等から推定されている土坑Ⅲb類の時期は次のとおりである。

- ・大木8a式期 SK173 (171)
- ・大木8式期? SK169 (163・164)
- ・大木9式期 SK178
- ・大木9～10式期 SK160 (161)

これらは土坑Ⅰ類に比較し、古い段階が多く、大木9式期以前の形成が多いものと考えられる。

(5) 土坑Ⅳ類・小土坑

土坑Ⅳ類は南台地区台地北部・中央部では437基確認されており、小土坑は498基確認されている。Ⅲ-1層分布範囲に多く分布し、特に大木9～網取式期の所産が多いものと推定される。

(6) 埋設土器

埋設土器は、掘り込みを伴って埋設されているものが8基確認されている。他にSK03(土坑Ⅱ類・貯蔵穴)を転用したものと西向貝層上に1基存在する(SM01)。このうち、SK138、SK320、SK399、SK480は竪穴住居と重複またはこれに伴うものと考えられる。その他、SK197も複式炉の埋設部の可能性がある。分布状況に大きな特徴は見出せないが、他遺構と同じくⅢ-1層分布範囲周辺に多く認められる。

出土遺物等から推定されている時期は次のとおりである。

- ・大木8a式期 SM01
- ・大木9式期 SK03・SK138
- ・大木10式期以後 SK320
- ・網取式期 SK217・SK399・SK424
- ・中～後期 P938・SK197・SK480

(7) 道路状遺構

道路状遺構は南台地区台地中央部に存在し、大木10式に埋没したものである。

(8) 遺構の変遷

この遺構分布状況及び変遷を次のようにまとめた。

- ① 前期後葉から遺構は構築されていると考えられ、前期末に南台地区台地北部では竪穴住居が存在する。
- ② 前期末～中期中葉に貯蔵穴(土坑Ⅱ類)が多く構築されるようになり、南台地区台地中央部～小迫北地区にかけて貯蔵穴群が形成され、中期未まで営まれる。また、中期中葉に南台地区台地北部において断片的ながら竪穴住居が確認される。

- ③ 中期中葉から中期後葉にかけて、南台地区台地北部の一角に、墓塚と推定される土坑（土坑Ⅲb類）が構築される。
- ④ 中期後葉は、確認される遺構数が増加し、中期末～後期前葉に遺構数の最盛期を迎える。特に南台地区台地北部を中心に遺構が構築されている。中期末の複式炉をもつ竪穴住居が多く存在し、見かけの分布状況は弧状を呈するようになる。
- ⑤ 柱穴は中期後葉以降に構築されており、後期前葉に最も多く認められる。南台地区台地中央部の竪穴住居と離れた位置に確認される柱穴群は中期末に構築される。
- ⑥ 南台地区台地中央部の貯蔵穴分布範囲内に、竪穴住居がある南台地区台地北部と西向地区から入り込む谷の谷頭を結ぶ道路状遺構が存在する。道路状遺構は中期末に埋没する。
- ⑦ 埋設土器は中期中葉～後期前葉のものがある。
- ⑧ 後期中葉は、墓塚と推定される土坑（土坑Ⅲa類）が南台地区台地北部に少数存在する。柱穴はわずかに確認できるが、明確な居住施設は不明である。

2. 台ノ前北貝層・台ノ前南貝層・西向貝層について

貝層は段丘の東西斜面に3箇所確認することができた。いずれも東西幅15～20m、南北30～40mを測る。標高25～26mの台地上から斜面に向かって堆積しており、貝層下の標高は20m前後である。各層の分類基準を改めて示しておく。

混貝土層 貝の混入率が比較的高いもの。

土主体層 貝の混入率が低いもの。褐色系統の明るい色調のものが多く、また、貝層最下層にあたり、比較的獣骨土器の出土の多い層も含めた。

土層 肉眼で貝の混入が認められなかったが、混貝土層・土主体層と一連のものと考えられるものである。土主体層と同様に褐色を基調とするものが多く。

各層は、これらが上下に重なるか、互層となって確認されている。堆積状況等を踏まえ、これら検出された貝層を次のように整理・類型化した。

Aタイプ 混貝土層を中心としたもの。さらに次のように細別される。

A1：大木7a～9の所産で、主にBタイプの上位（斜面下位）に、明確な広がり、層厚をもって堆積しているもの。一部土主体層が含まれるが、土主体層の層厚は薄い。台ノ前北貝層では54T大別b層、台ノ前南貝層では38T（ⅢA～G層）、西向貝層では、64Tの大別b層が含まれる。63T2・3・5層も含めておく。

A2：綱取期の所産で、貝の混入率が極めて高いもの。64Tの大別a層が相当する。

Bタイプ 土層・土主体層が中心となるもの。一部貝層最下層にあたり廃棄開始段階のもの、または54Tの土主体層に挟まれ、厚さの無い混貝土層も含めた。台ノ前北貝層では54T大別c～1層、台ノ前南貝層では31TⅢA～E層、西向貝層では64T大別c-d層が相当する。63T1・4層も含めておく。

Cタイプ ブロック状に確認される小規模な貝層であり、前期段階のものである。台ノ前北貝層では、53T東Ⅲ-3層、台ノ前南貝層では31TLⅣ1・2貝層が相当する。

浦尻貝塚を特徴づける貝層はこのうちBタイプである。台ノ前北・南、西向貝層のいずれの貝層でも層厚をもって堆積している。また、BタイプやA1タイプに見られる土層・土主体層は、貝層中のいわゆる「間層」ではなく、多量の獣骨及び土器が含まれている。これは廃棄行為が停滞するなど自

然堆積として形成されたものではなく、むしろ積極的な人の関わりを認めることができる。このことからBタイプは貝の廃棄以上に土の廃棄が多く行われていたものとするができる。Cタイプは部分的に台ノ前北・南貝層で確認され、Aタイプは概ねBタイプの上位（斜面下位）に存在している。

これらの堆積状況から、それぞれの形成状況は次のように推定される。

- ① Cタイプは貝・獣骨の廃棄が小規模であったものと考えられる。
- ② Bタイプは貝・獣骨の廃棄とともに、土の大量廃棄が行われたものと考えられる。
- ③ A1タイプは土の廃棄も行っているが、むしろ貝の廃棄が多く行われたものと考えられる。
- ④ A2タイプは土の廃棄は行われず、貝の廃棄が積極的に行われたものと考えられる。

以下では貝層ごとに形成過程を整理しておく。

(1) 台ノ前北貝層

台ノ前北貝層では、詳細は不明であるが、大木3～4式期にCタイプが53T東で確認され、浦尻貝塚の貝層で最も古いものと考えられる。

本格的な形成は大木6式期からであり、54TでBタイプが形成される。54Tでは大木6～7a式期にかけてBタイプが1.8mの厚みをもって確認されている。さらに、Bタイプ上に比較的厚みをもったA1タイプ（大別b層）が形成されている。この54TのA1・Bタイプの下限は確実ではないが、出土遺物から見る限り、ほぼ大木7a式段階で収束するものと考えられる。ただし、調査面積が狭いことと上位が削平されていることもあり、より新しい段階まで形成されていた可能性もある。

63Tでは混貝土層と土主体層が互層となった状況が平面的に確認されており、A1タイプとBタイプの両者が存在するものと考えられる。上面から出土する遺物から見ると、大木7b～8b式期までに形成されたものと考えられる。よって、台ノ前北貝層では、部分的で小規模ではあるが、大木8b式期まで継続して貝層の形成があったことが推定される。A1・Bタイプいずれも主体となる貝種はアサリであり、獣魚骨の出土量は多い。

また、調査を行った台ノ前北貝層の貝層Bタイプは、台ノ前南貝層のように土層が中心の部分は認められず、一定量の貝が層中に含まれる土主体層が中心である。この相違点はBタイプを確認したが、斜面下位に当たることによると考えられる。斜面上位にあたる67Tで確認した貝層は土層中心のBタイプに相当する。

(2) 台ノ前南貝層

台ノ前南貝層では、大木5式期にCタイプの形成がある（31TIVa層）。斜面上位では、Cタイプと同層をもって大木6～7a式のBタイプ（31TIII A～E）が形成されている。斜面下位では大木7a～9式にかけて、混貝土層と土主体層が互層となったA1タイプ（38TIII A～G層）が形成される。このA1タイプには大木8式の土器が極めて少ないが、明瞭な間層は確認できなかった。いずれも主体となる貝種はアサリであり、獣魚骨の出土量は多い。ただし、斜面上位のBタイプには動物遺存体があまり含まれない土層（31TIII A・B層）が上層に存在する。

(3) 西向貝層

西向貝層では、貝層形成開始段階は不明で、Cタイプは確認していないが、台ノ前北・南貝層と同様、大木6～7a古段階にはBタイプが形成される。Bタイプは大木7a式を中心とし、大木8a式期にはほぼ堆積を終えている。Bタイプ上層は土層が中心で動物遺存体があまり含まれない（64TSS-3～9層）。斜面下位には、大木7式期中心のA1タイプの形成があり、下限は定かではないが、大木9式期までは下がらないものと推定される。いずれも主体となる貝種はアサリである。Bタイプ上層を

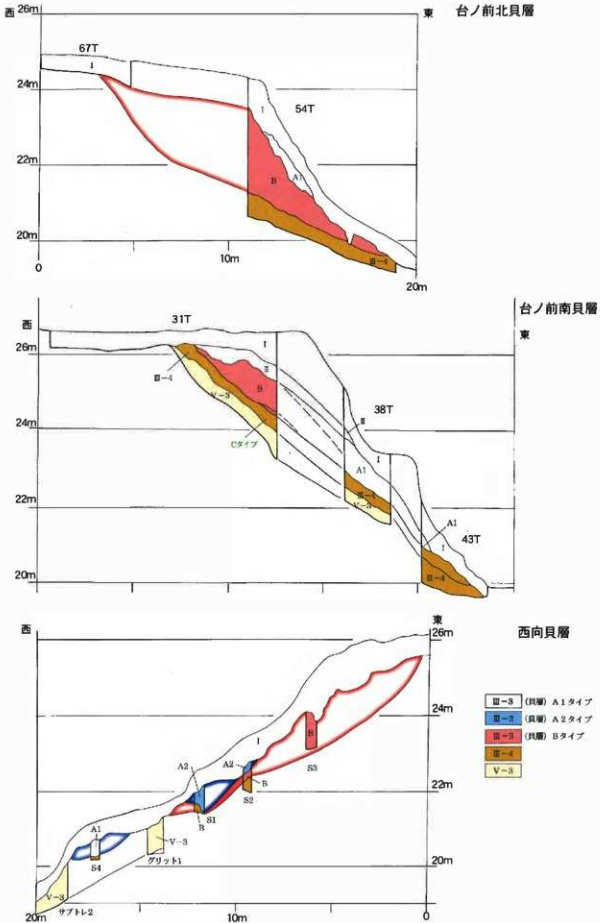


図161 貝層断面模式図 (S=1/200・1/100)

除き、獣魚骨の出土量は多い。

西向貝層では、A1・Bタイプの上層にA2タイプが網取式期に形成される。A2タイプは土主体層を全く含まず、混貝率が高い。また特定の貝種（マテガイ・ツメタガイ等）が集中している層が確認できるなど、堆積状況にも大きな違いが認められる。ただし、主体となる貝種はA2タイプもアサリである。

(4) 貝層の形成過程

この貝層形成過程を次のようにまとめた。

- ① 前期後葉から台ノ前北・南貝層で、小規模ながら形成が認められる（Cタイプ）。
- ② 前期末～中期前葉にかけて、いずれの貝層でも、斜面への貝・獣魚骨及び土の大規模廃棄が開始される（Bタイプ）。特に中期初頭（大木7a式期）に活発に行われ、斜面上位の上層部分では土廃棄のみ積極的に行われた時期が認められる（31T・64T）。また、斜面下位は貝の廃棄が比較的多く認められる（A1タイプ）。
- ③ 前段階で行われた斜面への貝・獣魚骨及び土の廃棄（Bタイプ）は中期中葉には縮小する。部分的には中期中葉（台ノ前北・63T）、中期後葉（台ノ前南・38T）も行われているが、土の廃棄よりも貝の廃棄が比較的多い（A1タイプ）。
- ④ 中期末（大木10式期）には、貝層の形成が確認できない。
- ⑤ 後期前葉には、西向貝層において、土の廃棄はないが、部分的に貝の廃棄が行われる（A2タイプ・64T）。

3. 遺物包含層について

台ノ前地区斜面部（I区）と西向地区斜面下部（65T等）で遺物包含層（Ⅲ-5層）が確認された。いずれも、層厚はなく、貝層（Ⅲ-3層）のように大型土器片や獣魚骨は認められない。西向地区（65T）では、遺物包含層下に網取式期の土坑を確認している。段丘上のように遺構は集中しないが、遺物包含層の存在は斜面下部及び低地付近まで、縄文時代の活動が行われていたことを示していると考えられる。

下限は網取式期と考えられるが、それ以前の土器も含まれており、これらの分布範囲では、より古い時期の活動が行われていた可能性が指摘できる。

4. 縄文時代の掘削行為について

(1) ローム層の欠落について

これまで報告してきたように南台地区台地北部の広い範囲では、通常段丘上に堆積し、縄文遺構の基盤層となるローム層（Ⅳ層）が欠落していた。この範囲で縄文時代の遺構は段丘堆積層（Ⅴ-2層）を掘り込んで構築されている。ローム層の欠落については、貝層の形成、遺跡の変遷と関係することであるので、検討を加えることにする。

南台地区の堆積土を改めて記すと次のようになる。

- I層 表土
- II層 黒色～黒褐色土。（砂質土を含む。）
- III層 縄文時代の堆積層。これらの各層を、南台・西向・台ノ前地区では次のように大別した。
 - III-1層 暗褐色系統の砂質土。粘質がない堆積土である。

- Ⅲ-2層 台地上に堆積するもので、暗褐色・褐色を基調とする。
- Ⅲ-3層 貝層。
- Ⅲ-4層 斜面部の無遺物層。
- Ⅲ-5層 斜面部の貝層以外の縄文遺物包含層。
- Ⅲ-6層 褐色系統の砂質土で、遺構覆土として確認できる層である。

IV層 (ローム層)

- IV-1層 軟質ローム (ソフトローム)
- IV-2層 硬質ローム (ハードローム)
- IV-3層 砂質ローム。

V層 (ローム層下の段丘堆積層)

- V-1層 褐色砂質土。IV-3層とV-2層の漸移層。
- V-2層 砂・レキ・砂レキ。

堆積状況を改めて確認するため、調査区土層断面図等の調査成果から、模式図(図162)を作成した。

まず、IV層(ローム層)の基盤となるV層の堆積を確認しておく。南台地区台地北部・中央部では砂層、砂レキ層等からなるV-2層及び漸移層であるV-1層が堆積している。V層は南から緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦な堆積をしている。

IV層は南台地区台地中央部では明瞭に確認できるのに対し、南台地区台地北部では北端及び台地縁辺部のみ確認でき、その中央部分において欠落している。特にIV-2層(硬質ローム)については北端と南側の台地中央部側しか確認されない。

IV層は基盤が平坦であればほぼ同様の層厚をもって堆積すると考えられるのに対し、南台地区台地北部の中央部のみ欠落しているこの堆積は不自然な状況と言える。また、IV層は南側の台地中央部では1m以上の堆積があり、自然に失われたとは考えにくい。この堆積状況から、IV層は本来、段丘上に堆積していたが、後世の人為的な掘削ならびに土の移動(廃棄)によって失われたものと考えられる。

では次にどの段階でIV層が失われたのかを検討する。これについては、IV層が欠落している部分においてV層直上に堆積するⅢ-1層の時期決定が重要となる。

Ⅲ-1層は大木9～網取式が多く出土する。また、大別するとⅢ-1層に相当する覆土を持つ大木

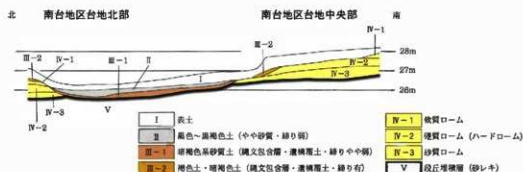


図162 南台地区土層断面模式図 (S=1/1,000・1/200)

9～綱取式の遺構が多く確認されている。今回報告している中でも、南台地区台地北部の土坑Ⅰ類の大部分及び大木10式期の竪穴住居（SI09）覆土もⅢ-1層である。また、平安時代の竪穴住居や時期不明の溝の他、加曾利B式期の土坑（SK119）など黒色系統の遺構が、Ⅲ-1層上面から構築されている。

このことにより、Ⅲ-1層は大木9～綱取式期の所産であり、加曾利B式期にはほぼ堆積を終えていると考えられる。よって、本来Ⅴ層上に堆積していたⅣ層は、Ⅲ-1層が堆積する以前（大木9式期以前）に掘削が行われ、無くなっていったと考えられる。そして、この掘削行為に伴う土の廃棄により、先に述べた東西斜面に存在し、土層・土主体層を含む貝層Bタイプ・A1タイプが形成されたと考えられるだろう。

また、Ⅳ-3層（砂質ローム）はⅤ層と漸移的な部分も認められるので、確実に失われたといえるⅣ-2層（硬質ローム）以上が掘削されたとすると、南台地区台地中央部のⅣ層の堆積状況からみて、その深さは約70cm以上であると推定される。さらに、Ⅳ-3層までの掘削とすると約1.0m以上の深さと考えられる。

(2) 掘削範囲について

次に、掘削が行われた範囲を検討することとする。まず、Ⅴ層上にⅢ-1層が確認できる範囲は、確実に縄文時代に掘削が行われていたものと考えることができる。Ⅲ-1層は約54×35mの範囲で確認される。問題となるのは表土直下にⅤ層が確認された部分である。この部分については、縄文時代に掘削されたか、より新しい時期に耕作等で失われたのか定かではない。これを推定するために遺構覆土に注目することとする。ここでは埋没時の遺構周辺の堆積土が遺構覆土を形成すると仮定している。

南台地区台地北部・中央部において確認された縄文時代の遺構覆土を次のように大別した。

覆土A類 粘性のある締りの強い覆土。(褐色・暗褐色を基調とする。Ⅲ-2層相当。)

覆土B類 砂質で、締りがやや弱い覆土。さらに次の2類に細別できる。

1類 褐色を基調とする。(基本土層Ⅲ-6層と大別している。)

2類 暗褐色を基調とする。(Ⅲ-1層相当。)

覆土C類 黒色、黒褐色を基調とする覆土(砂質土も含む。Ⅱ層相当)

遺構覆土は当然のことながら、上層と下層で異なることがあり、ここで類型化した遺構にも、上層で覆土A類、下層で覆土B類に含められるものなどが認められる。また遺構種別によっては、人為的な埋め戻しが行われる等の堆積環境が異なることが予測される。さらに、別遺構の覆土を統合することについては、多分に主観的な認識が左右すると考えられる。しかし、この4類は比較的分別しやすいことや失われた堆積環境を検討する方法としてあえて分類を試みた。半載したもので、両者が混じる場合はB・C類の堆積土を優先した他、最下層等は外し、主体となるもので分類した。また、半載していないものは上面確認のみで分類している。

ここで分類した覆土種別の分布状況を確認するため、図163を作成した。この分布状況から次のことが指摘できる。

覆土B・C類はⅢ-1層分布範囲を中心とし、ほぼⅣ-2層（硬質ローム）が確認できない部分においてのみ分布する。ただし、C類については、小迫北地区（Ⅳ-2層）の後晩期の遺構では多数確認されている（砂質土は除く。）。逆に、覆土A類はⅣ-2層確認範囲ではほぼ全ての遺構が該当し、Ⅳ-2層が確認できない部分においても少数認められる。

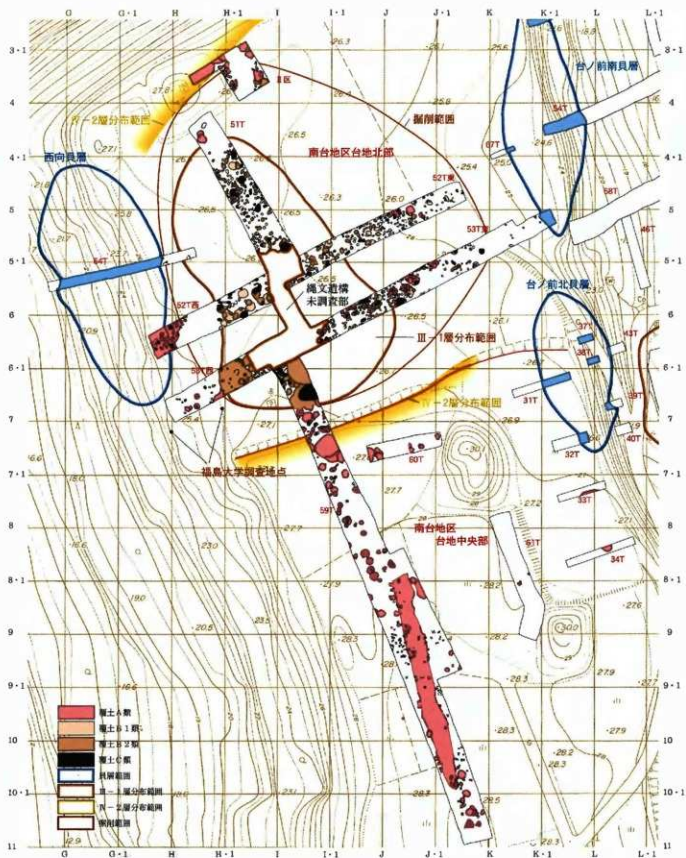


図163 南台・台ノ前・西向地区縄文遺構覆土種別分布図 (S=1/700)

このことから、覆土A類の遺構はIV-2層が存在した箇所（段階）で、埋没したものが多くと考えられる。よって、覆土A類の遺構が存在していた箇所は、現在IV-2層が確認できなくても、遺構埋没時にはIV-2層が存在していた可能性が高いと考えられる。

また、覆土B類は、砂質という特徴も考慮すると、IV-3層（砂質ローム）、V層（砂・砂レキ・レキ）が混入して形成されたものと考えられる。このことと分布状況を考えあわせると、覆土B類の遺構はIV-2層が欠落した箇所（段階）で埋没したとできよう。よって、覆土B類の遺構分布範囲は、IV-2層が掘削された範囲を示すと推定される。その範囲は約64×60mに及ぶ。これを掘削範囲（くぼ地）と表現することとする。

(3) 掘削過程の復元

次に、掘削行為の過程を検討する。先に検討した貝層Bタイプ・A1タイプは、掘削行為に伴う土の廃棄により形成されたと考えられるので、その形成段階は掘削時期を示すものと言える。貝層Bタイプは前期末～中期前葉（大木6～7a式期）に大部分が形成されており、この段階で活発な掘削が行われたと考えられる。また、中期後葉まで断続的にBタイプ・A1タイプが認められることから、縮小しながらも、中期後葉まで掘削が継続していたことが認められる。後期前葉には土の廃棄のないA2タイプが形成されているので、掘削は終了していると推定されよう。

さらに、IV層がどの段階で失われていたのかどうかを検討する。先に分類した覆土種別を、掘削範囲にあり、時期がほぼ確定しているものについて分類すると、次のようになる。

覆土A類（Ⅲ-2層）

- ・大木7a式期 SK290（土坑Ⅱ類）
- ・大木8式期 SK04（土坑Ⅱ類）
- ・大木9式期 SK03・SK643（土坑Ⅱ類）
- ・網取式期 SK404（竪穴住居⁹）

覆土B1類（Ⅲ-6層）

- ・大木8a式期 SK173（土坑Ⅲb類）
- ・大木8式期？ SK169（土坑Ⅲb類）
- ・大木9式期 SK178（土坑Ⅲb類）
- ・網取式期 SK229（土坑Ⅰ類）

覆土B2類（Ⅲ-1層）

- ・大木9式期？ SK170（土坑Ⅰ類）
- ・大木10式期 SI09（竪穴住居）
- ・網取式期 SK93・SK235・SK264（土坑Ⅰ類）、SK217・SK424（埋設土器）
- ・加曾利B式期 SK15（土坑Ⅰ類）

覆土C類（Ⅱ層）

- ・大木9～10式期 SK161（土坑Ⅲb類）
- ・加曾利B式期 SK54・SK92・SK119（土坑Ⅲa類）

このことから次のような傾向が見出せる。

覆土A類・B1類は大木9式期以前のものが多くに対し、覆土B2類は大木9式以後、特に網取式期までが顕著である。覆土C類は加曾利B式期に主体となっている。このことは、覆土A・B1類⇒B2類⇒C類というおおまかな順番を示していると考えられる。掘削範囲内における各遺構の重複関係

でも、この傾向を多く認められる。

このことから掘削範囲の堆積土は、掘削以前のⅢ-2層（暗褐色土等・覆土A類）から、掘削が進むにつれ砂質系統のⅢ-6層（褐色砂質土・覆土B1類）、さらにⅢ-2層（暗褐色系統砂質土・覆土B2類）が堆積し、その後Ⅱ層（黒色基調、覆土C類）が堆積する過程が推定される。時間的には、Ⅲ-6層の堆積は大木8式期以降、Ⅲ-1層の堆積は大木9式以降網取式期、Ⅱ層の堆積は加曾利B式期以降主体になると考えられる。ただし、覆土の種類が各遺構の時期を確実に示すものではないことは、網取式期の覆土A類・B1類の存在や加曾利B式期の覆土B2類の存在によっても明らかである。

また、このことから、Ⅳ-2層の掘削過程を推定すると、覆土A類の存在から大木9式期までは掘削範囲一部でⅣ-2層が存在していた可能性が指摘でき、逆に覆土B1類の存在から大木8式期には既にⅣ-2層が失われ、Ⅴ層上面まで掘削が及んだ箇所があると考えられる。また、覆土B2類の全体的な分布状況から大木10～網取式期にはⅣ-2層はほぼ削り取られているとすることができる。この過程は、土の廃棄場所（貝層）からみた掘削行為の過程と概ね一致するものと言える。

(4) 掘削行為に伴う遺構の破壊

掘削範囲は大木8b式期以前の遺構が極めて少なく、遺構と貝層の形成のピークは一致しない。この原因の一つとして、掘削行為により前段階の遺構が破壊されていることが想定される。

掘削範囲における土坑Ⅱ類（貯蔵穴）は、極めて浅く、底部付近のみ残っているような状況である（SK290・SK643）。特にSK643では、上面にⅢ-1層が堆積しており、後世の耕作等により上部が削られたわけではなく、Ⅲ-1層堆積以前に既に上部が削られていることが確認される。このように掘削行為は前段階の遺構を破壊しながら行われたものと考えられる。

また、大木9式期の遺構は、大木10～網取式期の遺構が多数検出されているにも関わらず、多く確認されている。このことから、少なくとも大木10式期以降、遺構の構築が多くとも、前段階の遺構の大部分を破壊する行為、あるいは掘削範囲（くぼ地）底面の低下を伴う掘削行為は行われていないと考えられる。この見解は、先にみた掘削行為の過程からも推察される。

5. 縄文時代の南台・台ノ前・西向地区の変遷について

これまで述べてきた遺構、貝層、及び掘削行為の変遷について、表6に整理し、図164・165にその変遷過程を示した。また、時期別の状況を図166～170に示した。時間的な概略は次のとおりである。

I期 前期初頭～中葉

土器の散布のみ認められる時期である。

Ⅱ期 大木3～5式期

小規模な貝層の形成が始まり、台地北部を中心に、竪穴住居など遺構が構築される時期である。

Ⅲ期 大木6～7a式期

台地北部を中心にローム層の掘削行為が開始され、斜面への土および貝の大量廃棄が活発に行われる。また、遺構数の増加が伺えるが、明確な遺構は断片的な竪穴住居と貯蔵穴が存在するのみである。本期の遺構の多くは後世に破壊されていると推定される。

Ⅳ期 大木7b～8b式期

南台地区台地中央部～小畑北地区にかけての貯蔵穴群が明確になってくる。掘削範囲を中心とした集落構成は、墓塚と考えられる土坑Ⅲb類や貯蔵穴群が明確であることから、断続期や縮小期がありながらも継続していたと考えられる。ただし、竪穴住居は推定されるだけである。貝層の形成

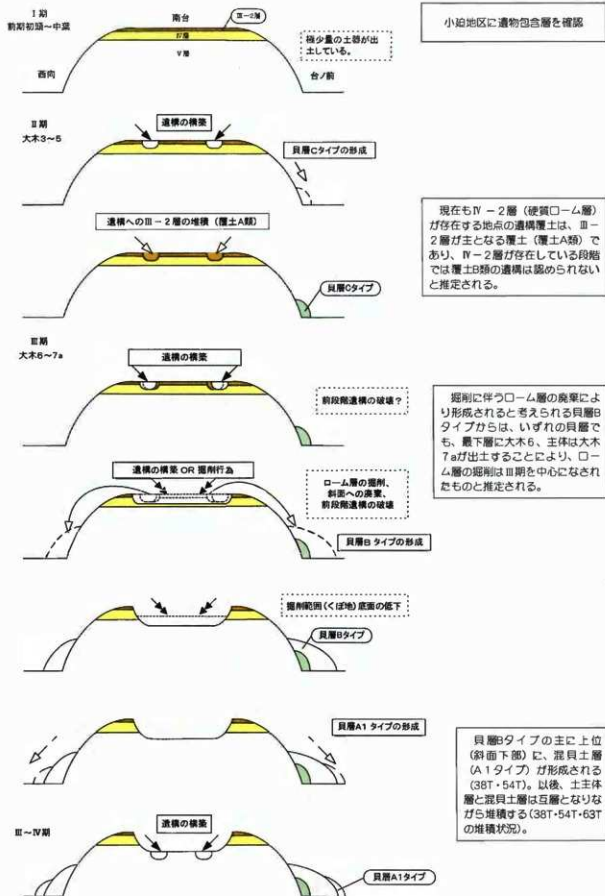


図164 南台・台ノ前・西向地区縄文時代台地利用変遷図①

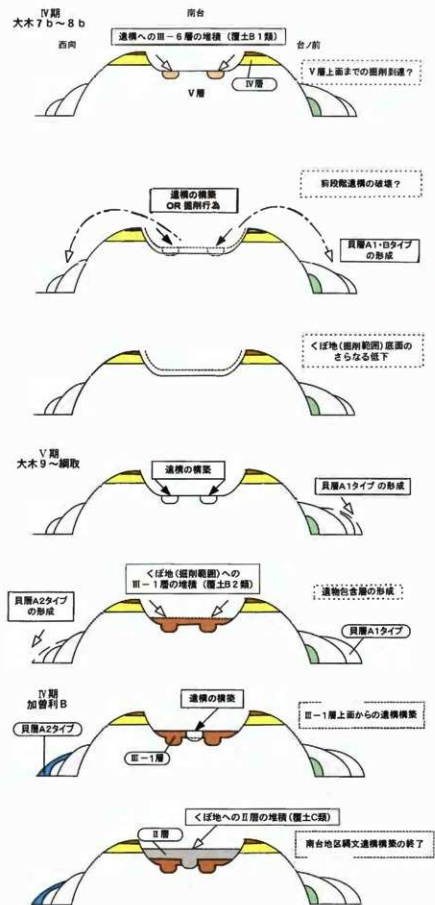


図165 南台・台/前・西向地区縄文時代台地利用変遷図②

V期以前に、覆土B1類(Ⅲ-6層(褐色砂質土))の遺構が存在する。Ⅲ-6層は、Ⅳ-3層(砂質ローム)及びV層(砂・レキ層)が混じった掘削範囲(くぼ地)特有の土層と考えられる。このため、掘削はV期以前の段階でV層上面まで、一部到達していたものと推定した。

Ⅲ~V期において、掘削範囲(くぼ地)外縁で野鼠穴を確認していることや断片的ながら掘削範囲(くぼ地)においても遺構の構築を推定していることから、掘削範囲(くぼ地)を中心とした集落構成は、断続期や縮小がありながらも、ほぼ継続していたと考えられる。

Ⅳ期の掘削行為については、僅かに63Tのみ貝層Bタイプの形成が確認できる程度であり、Ⅲ期ほど大規模ではないと考えられる。しかし、Ⅳ期においても、集落が縮小されていることから、前段階の遺構が少ないことから、遺構の構築及び掘削行為による前段階遺構の破壊及び掘削範囲(くぼ地)底面の低下がなされていたと考えられる。

大木9の遺構は、大木10及び綱取期の遺構が多数検出されているにも関わらず、多く確認されている。よって、少なくとも大木10以降は、遺構の構築が多くとも、前段階の遺構の大部分を破壊する行為、あるいは掘削範囲(くぼ地)底面の低下を伴う掘削行為はなされていないと考えられる。

Ⅲ-1層の掘削範囲(くぼ地)への堆積は、これまでの掘削行為が縮小されたことによると考えられる。

表6 南台・台ノ前・西向地区変遷表

調査年度	土器型式	ローム層前期の主な土器の種類		ローム層前期の主な埋定堆積土		遺構の形成						貝層の形成				遺物包含層の形成		
		壱六世層	壱七世層	壱八世層	壱九世層	壱十世層	壱十一世層	壱十二世層	壱十三世層	壱十四世層	壱十五世層	壱十六世層	壱十七世層	壱十八世層	壱十九世層	壱二十世層	壱二十一世層	
Ⅴ	1加曾利0	壱土0層																
Ⅵ	3織物	壱土02層	壱-1層		○	○												
	2大木10	壱土02層	壱-1層		○	○		△	△									△
Ⅶ	1大木9	壱土02層	壱-1層		○	△	○	○	○									
	3大木8b	壱土02層	壱-2層	壱-0層	△	△	△	△	△									
Ⅷ	2大木8a	壱土02層	壱-2層	壱-0層	△	○	○	○	△									
	1大木7b	壱土02層																
Ⅸ	2大木7a	壱土02層			○	○	○	△	△									
	1大木6	壱土02層						△	△									
Ⅹ	2大木5	壱土02層			○	○	△	△	△									
	1大木3-4	壱土02層						△	△									
Ⅺ	1前期台垣一中央																	

◎=多く確認している、○=確認している、△=確認のみ
 壱土A層 動物の骨片の多い壱土(基本土層 壱-2層に増したものを)
 壱土B層 砂質で、締りや強い壱土
 壱土C層 砂質で、締りや強い壱土
 1層 堆積物を表す。(基本土層 壱-0層が埋積したものを)
 2層 埋積物を表す。(基本土層 壱-1層が埋積したものを)
 壱土0層 褐色、腐植物を基調とする壱土

◎=遺構の形成時期、○=形成時期、△=可能性のある時期
 Aタイプ 貝層土層としたもの(貝の計測導入率が90%以上で、貝の比率が高いもの)
 A1 土層への埋積で、土層の上部に(断面下部)に、明確な区切り、境界をもって確認しているもの。
 A2 遺構の形成で、貝の導入率が低いもの。
 ◎タイプ 土層・土層を基調としたもの。(貝の計測導入率が90%以上で、土の比率が極めて高く、褐色基調のもの。)
 ○タイプ フラットに確認される小規模な貝層

○=形成時期
 △=可能性のある時期

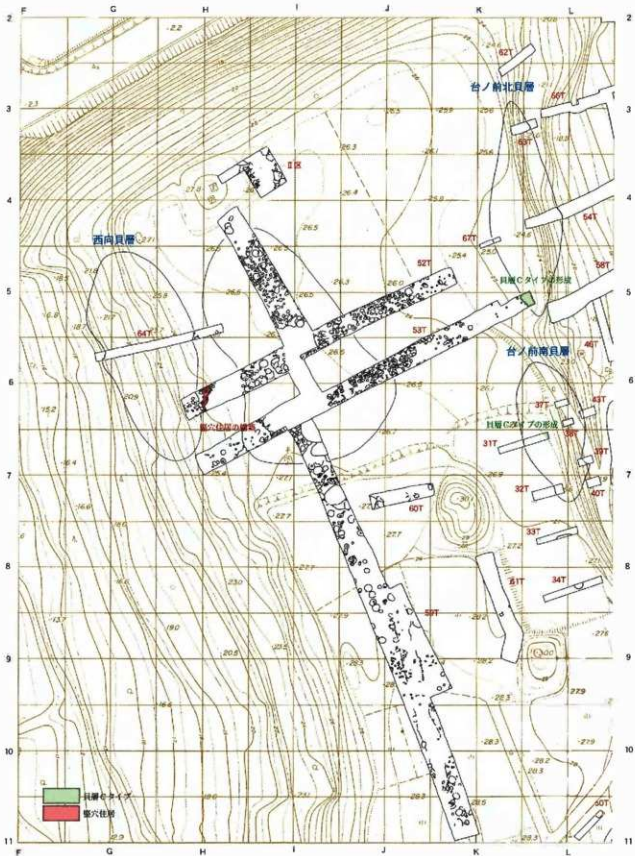


図166 南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図①〔Ⅱ期・前期後葉〕(S=1/800)

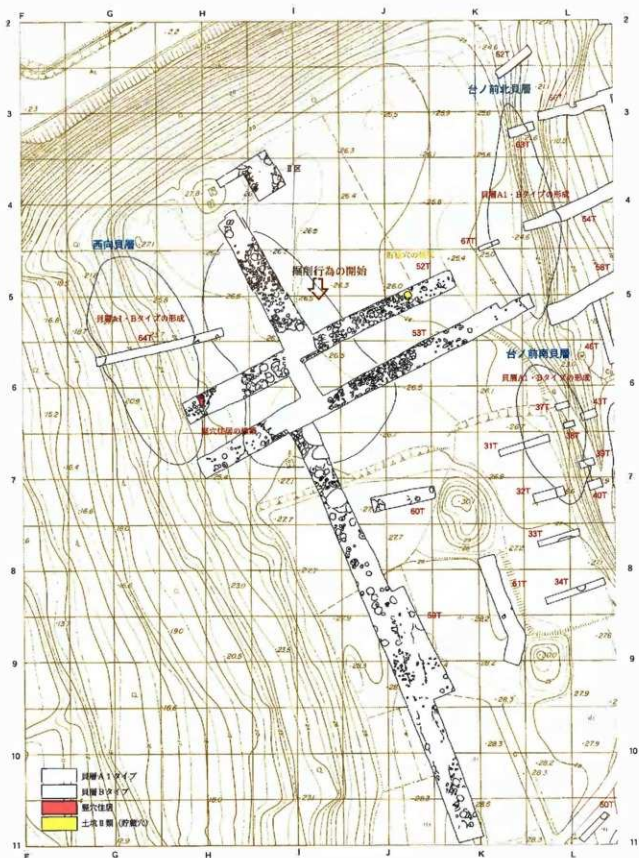


図167 南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図②〔Ⅲ期・前期末葉～中期初頭〕(S=1/800)

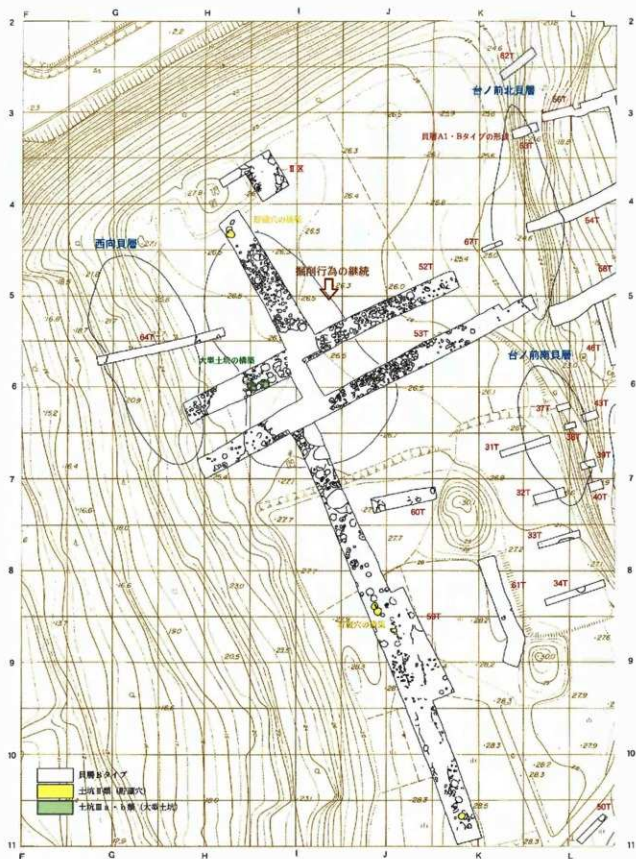


図168 南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図③〔IV期・中期前葉(大木7b時期)～中期中葉〕
(S=1/800)

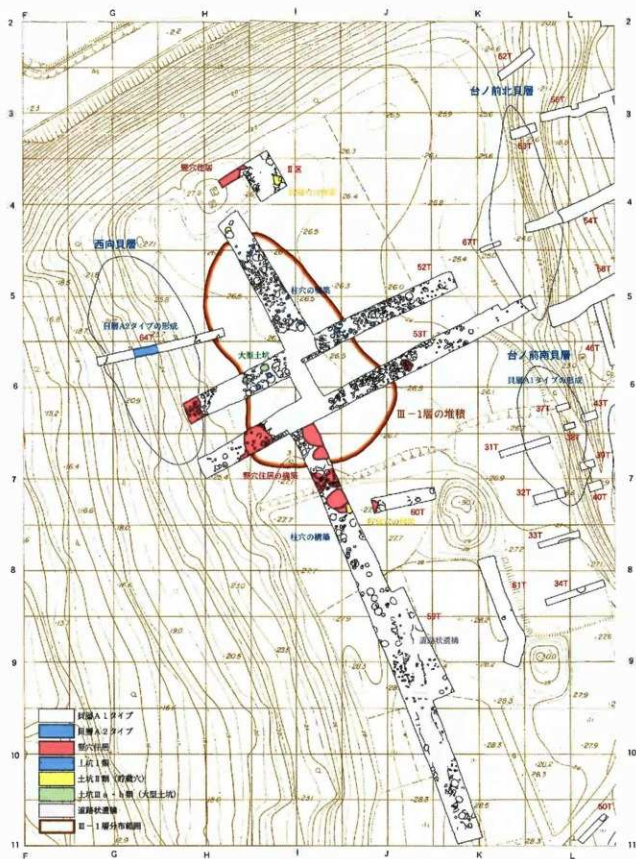


図169 南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図④〔V期・中期後葉～後期前葉〕(S=1/800)



図170 南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図⑤〔Ⅵ期・後期中葉〕(S=1/800)

及び掘削行為も縮小ながらも継続している。この段階でローム層（Ⅳ-2層）の一部は既に失われており、Ⅴ層上面まで掘削が及んでいたと考えられる。

V期 大木9～綱取式期

遺構数が激増し、複式炉をもつ住居が最も明瞭に検出される他、柱穴の多くはこの段階に伴い、多くの施設が作られた事が認められる。小竈北地区において貯蔵穴群が継続するが、本期の最終段階では消滅するものと考えられる。貯蔵穴群の終了と同時に、南側にあった道路状遺構が埋没する。同様に墓塚と考えられる土坑Ⅲb類も最終段階では確認できない。

貝層は部分的に形成されるが、これまで継続されていた土の廃棄がほとんど行われなくなる。Ⅳ-2層は大部分が失われているが、くぼ地（掘削範囲）底面の低下や前段階の遺構の大部分の破壊を伴う掘削行為は終了するものと考えられる。この段階で、くぼ地（掘削範囲）にはⅢ-1層が堆積していく。

VI期 加曾利B式期

遺構数は激減し、墓塚と考えられる土坑Ⅲa類が掘削範囲で構築される。柱穴も極少数であり、竪穴住居も確認できず、施設の構築はほぼ終了している。掘削行為や貝層の形成はなく、掘削範囲にはⅢ-1層の堆積がほぼ終了している。

6. 縄文時代の掘削行為の評価

縄文時代の掘削行為及び土の廃棄行為については、いわゆる「盛土遺構」と呼ばれるものを中心に、多くの縄文遺跡で確認されている〔千葉県流山市三輪野山貝塚（小川・小栗2003）等〕。しかし、これらは結果的に類似した状況であっても、その形成過程や内容については、地域・時期・各遺跡によって大きく異なっていると考えられ、いわゆる「盛土遺構」と浦尻貝塚例を同一視することには慎重であるべきである。まず始めに、各遺跡の形成過程・内容等を相互検討する作業が必要であろう。

浦尻貝塚では、前期末から中期前葉にかけて掘削行為及び土の廃棄の大部分が行われ、中期後葉まで継続している。また、廃棄場所（貝層）の上層から下層まで、ほぼ途切れることなく極めて多量の動物遺存体が得られており、短期間に形成されたものではないと推察される。よって、現在確認されるくぼ地と貝層の状況は、大規模な目的物を構築する作業（くぼ地の形成や斜面の造成、大規模構造物の構築等）によるものではなく、長期間にわたる継続的な掘削及び土の廃棄行為の結果と考えられる。このことは、長期間に及んで、一定の区域で継続的な同様の行為が行われたとも評価することができる。

この継続的に行われた掘削行為は、その行為自体が目的である場合と小規模な遺構の構築が目的であること（部分的な整地等も含む。）が想定されるが、浦尻貝塚のケースがどちらに該当するかは今後の課題である。また、各時期の掘削行為が異なった目的や意識から為された可能性もある。しかし、いずれの場合であったとしても、掘削範囲が長期間にわたり特徴的な使われ方をしていることが指摘できる。

掘削範囲は中期中葉以後、その一角に墓塚と推定される土坑が確認される他、中期末～後期前葉段階は竪穴住居が掘削範囲を取り囲むように構築されている。また、中期後葉～後期前葉には遺構の構築は、掘削範囲に集中して行われており、後期前葉には柱穴が増加している。後期中葉に至り明確な居住施設が確認できなくとも、墓塚と推定される土坑が存在する。この通時的な「場」の利用は、貯蔵穴群が存在する南台地区台地中央部の利用状況と対照的である。そして、このように長期間にわたつ

て特徴的な利用が行われる「場」において、集落の開始段階に掘削行為及び土の廃棄行為が行われ、それが継続していると指摘できる。

浦尻貝塚は、小迫北・南地区を除いた範囲においても前期末～後期前葉までの居住地であり、周辺遺跡に比して継続期間が長い遺跡である。また、浦尻貝塚は、前段階の北原貝塚遺跡群と並び、旧井田川浦周辺（古宮田湾）の貝塚群では、貝塚の規模が大きい。このような拠点的なあり方をみせる集落に、長期間の掘削行為及び土の廃棄という特徴的な行為が認められることも、今後、縄文時代の集落研究を進める上で重要な事柄とすることができるだろう。

このような状況は、岩手県宮古市崎山貝塚（高橋・三浦1995）との類似点が認められる。崎山貝塚は前期前葉～後期前葉まで長期間にわたって集落が営まれており、集落の中心部が「非居住空間」として中期前葉から区別されている。大木8b式期には、「中央広場」・掘削及び盛土を伴う「環状遺構帯」・「居住域」からなる「同心円状の重層構造」が認められ、この構造は後期前葉まで変容しながらも継続している。

浦尻貝塚南台地区等では、「重層構造」、中心部の「非居住空間」といった点は明確ではないが、周辺遺跡に比して長期間営まれていること、集落の中心部を意識した集落変遷、中心部への掘削行為が行われている点は共通する。この事は、大木式土器分布圏の拠点集落の一類型として認めることができよう。

これまで見てきたように、南台地区等では、ローム層の掘削及び斜面への土・貝・獣骨の廃棄という段丘上の集落の動向と貝塚の形成に有機的な関連性が認められた。この検討は、「貝塚」と「集落」がセットで確認できる浦尻貝塚において可能であったことであり、浦尻貝塚の大きな特徴として改めて評価されることと言えよう。

第2節 小迫北・南地区、南台地区台地南部の調査について

小迫北・南地区、南台地区台地南部からは、前期前葉～晩期後葉の遺構・遺物包含層が確認された。以下に、大きな変化が認められる後期前葉以前と後期中葉以後に分けて、調査成果を整理しておく。

1. 前期～後期前葉

(1) 竪穴住居

小迫北地区台地部で縄文時代所産と推定される竪穴住居（SI01）、小迫南地区台地東部で大木10式期の竪穴住居（SI03）の2軒が確認されている（図171）。SI01は住居構築時の粗掘りであり、詳細は不明である。SI03は褥式炬を持つ大木10式期の竪穴住居である。このことにより大木10式期には、小迫南地区台地東部で、南台地区と谷を挟んで同時期の居住地が形成されていたことが確認された。

(2) 土坑Ⅱ類（貯蔵穴）

南台地区台地南部及び小迫北・南地区台地で、合計28基確認されている。重複せずに検出されており、広範囲にわたる分布状況が認められる（図171）。南台地区台地南部・小迫北地区台地の西側では主体的な遺構となっている。半蔵するなどの調査を行った土坑Ⅱ類の推定時期は次の通りである。

大木6式 SK23

大木7b式 SK155

大木9～10式 SK46・152

大木10式 SK153

これら小迫北・南地区台地部等で確認された貯蔵穴は、南台台地中央部から続く一連の貯蔵穴群であり、南台地区台地北部及び小迫南地区台地部の中期以前の居住地に伴うものと推定される。

(3) 遺物包含層

小迫南地区斜面部（81T）では、前期前葉の遺物包含層が確認されている。大形破片が少なく、復元率も悪いことから台地部からの流れ込みと推定している。小迫地区南谷部（75T）では、後期前葉の可能性が高い遺物包含層が確認されている。出土土器も小破片が多く、摩滅も激しいことから、谷上部からの流れ込みと推定している。これらの遺物包含層が検出されたことから、縄文時代に斜面部・南谷部を利用していた可能性が考えられる。

2. 後期中葉～晩期後葉

(1) 土坑Ⅰ類（柱穴）・土坑Ⅳ類・小土坑・掘立柱建物

土坑Ⅰ類は、小迫北地区台地部で196基確認されている。北から入り込む埋没谷（東の谷・西の谷）周辺に多く分布し、76Tの南側・77Tの北側で分布が希薄になっている。分布域は、約50×45mを測る。

柱穴の構築は新地式期から認められ、柱穴に伴う東西の谷の遺物包含層が加曾利B式期から形成されることから、加曾利B式期まで遡る可能性もある。しかし、新地式～大洞B式期までは、大洞BC式期以降と比較すると数は少ない。大洞BC式期以降になると、東の谷周辺を中心に柱穴の構築は活発化する（図171）。大洞C2式期の柱穴が最も多く確認され、大洞A式期になると柱穴数は減少し、大洞A'式期以降は認められない。

土坑Ⅳ類は69基、小土坑は322基確認されている。土坑Ⅳ類・小土坑は、土坑Ⅰ類（柱穴）と分布

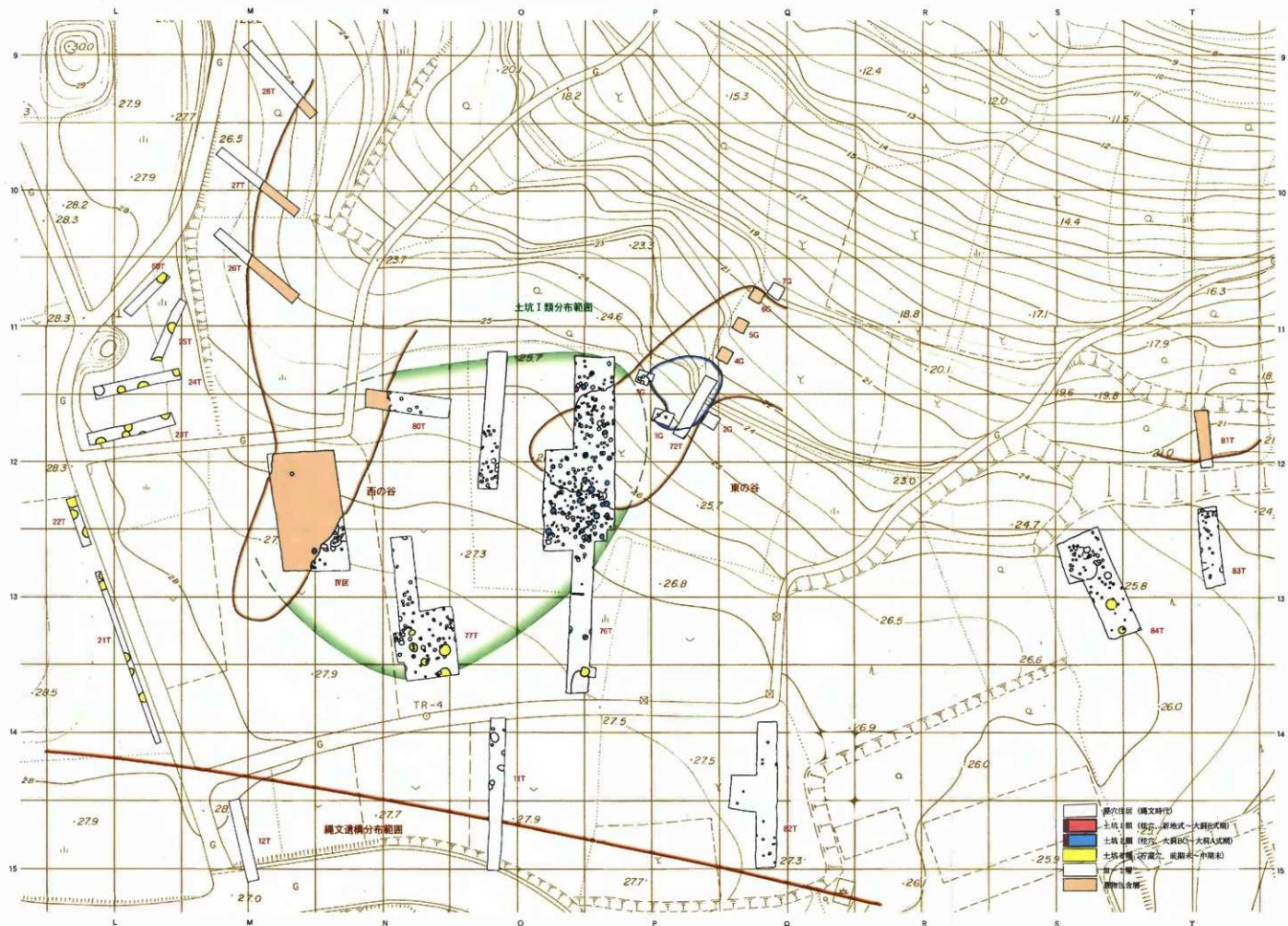


图 171 小北北·南地区、南台地区台地南部縄文遺構分布图 (S = 1/500)

域が類似しているものも多く、柱痕跡の確認はできないが、柱穴である可能性も考えられる。

確認した柱穴のうち大型のものを選別し、柱配列・柱間距離を基に4種の組み合わせを考えている。

SB01 6本柱。平面プランは六角形。大洞C2式期。

SB02 4本柱。平面プランは長方形。大洞BC以降大洞C2式期以前。

SB03 6本柱。平面プランは六角形。大洞C2式期。

SB04 4本柱。平面プランは方形。大洞C2式期。

SB01～04の柱間距離は3.0m～3.5m前後、掘り方の径は70cm～80cm前後が主体である。SB02はSB01に切られており、時期差があることが確認できる。SB01・03・04は、大洞C2式期の所産であるが、重複して検出していることから、同一の場所で建て替えられたことが認められる。また、SB01の主軸方向とSB04のSK91-SK101間の方向が北東-南西で一致し、SB02・03の主軸方向が北西-南東で一致する。軸方向を意識して建物を構築していた可能性も指摘できる。

今回、これら復元した建物を掘立柱建物として報告したが、小迫北-南地区全体で上面が削平されている可能性が高く、本来は竪穴住居であった可能性がある。この課題について、近隣の遺跡と比較し、若干の検討を加えておく。

近隣の後期末～晩期後葉の竪穴住居は、飯館村山辺沢遺跡(玉川1984)・羽白C遺跡(山内ほか1988・鈴鹿ほか1989)、福島市南諏訪原遺跡(武田ほか1991)、郡山市北向遺跡(本間ほか1990)等で確認されている。山辺沢遺跡では主柱穴がなく、円形・楕円形に壁柱穴が回り、地床炉・石囲炉を持つ構造が確認されている。南諏訪原遺跡では4本主柱の方形プランを呈し、壁柱穴を伴う周溝が円形に回り、地床炉を持つ構造が確認されている。主柱穴の径は17～65cm、柱間距離は1.4～3.1mを測るが、主柱穴の径が40cmを超えるもの、柱間距離が2.5mを超えるものは少ない。北向遺跡では、4本あるいは5本主柱で方形、多角形プランを呈し、石囲炉を持つ構造が確認されている。主柱穴の径は13～32cm、柱間距離は0.9～2.0mを測る。飯館村羽白C遺跡では、主柱穴数は不明であるが、地床炉を持つ大型のもの・不規則な柱配列で石囲炉を持つ構造が確認されている。

これらと小迫北地区台地部の柱穴群を比較すると、平面プランについては4本主柱、5本主柱の構造を呈するものについては類似性が認められるが、小迫北地区では柱穴の周囲に円形にめぐる壁柱穴・周溝のほか、炉跡も確認できないことが指摘できる。小迫北地区では炉跡等は既に削平されている可能性があるが、近隣遺跡の竪穴住居主柱穴の径は40cm以下であることが多く、70～80cmを測る小迫北地区の大型柱穴とは差が認められる。柱間距離も2.5m以下が多く、3.0m以上を測る小迫北地区SB01～04とは規模の点で明確な差が認められる。

しかし、羽白C遺跡のSI42(東側半分は切られているため主柱穴数は不明)のように主柱穴の径が54～64cm、柱間距離は3.7mを測る大型の竪穴住居も確認されており、小迫北地区SB01～04と規模が共通するものも認められる。

大洞C2式期前後の掘立柱建物は、福島市宮畑遺跡(斉藤ほか2004)・南諏訪原遺跡等から確認されている。宮畑遺跡では、4本柱で平面プランは方形～長方形を呈し、柱間距離2.7～5.4mを測る。南諏訪原遺跡では6本柱で平面プランが六角形、4本柱で平面プランが長方形を呈し、柱間距離2.9～5.7mである。これらは柱数・平面プラン・柱間距離において、小迫北地区のSB01～04と共通する部分が多い。

この比較から、小迫北地区のSB01～04などの大型柱穴群は、掘立柱建物あるいは大型竪穴住居を構成する可能性が高いと推定している。また、小型の柱穴・土坑Ⅳ類・小土坑は、竪穴住居・掘立柱

建物どちらの遺構に伴うかは判断できない。段丘上に立地する南諏訪原遺跡・羽白C遺跡等の遺跡では、竪穴住居と掘立柱建物の両者が確認されており、小泊北・南地区でも竪穴住居と掘立柱建物が並存した可能性も考えられる。

(2) 埋設土器

小泊北地区台地部で、掘り込みを伴って埋設されているものが1基確認されている。出土遺物から晩期中葉と推定される。

(3) 西の谷

加曾利B式期から土器・焼獣魚骨等が廃棄され始める。加曾利B～大洞B式期までは、大洞BC式期以降と比較すると遺物量が少なく、廃棄行為は停滞している。大洞BC式期以降になると廃棄行為が活発化し、遺物量は急激に増加し、大洞C2式期まで継続的に行われている。西の谷は、東の谷と比較すると土器の出土量が多く、長期間かけて形成されており、谷の堆積土中を掘り込む遺構が少ない。このことから、西の谷は後期中葉～晩期中葉まで廃棄場として利用されていたと考えられる。

(4) 東の谷

斜面上位に加曾利B～新地式期にかけて暗褐色土を基調としたⅢ-3b層（獣骨を含まない）が認められる。Ⅲ-3b層は、谷中央に向かってぼむような堆積状況ではなく、層位がブロック状に分かれ、掘削及び埋め戻しが重複して行われたような状況を呈している。また、ローム粒や炭化物などの混入が多く、人為的な影響が大きいことも確認できる。この堆積状況から、Ⅲ-3b層は整地または重複した遺構の構築により、形成されたと考えられる。

大洞BC式期には、主に斜面下位のⅢ-3b層上に貝・獣魚骨が廃棄され、混貝土層であるⅢ-1層、獣魚骨を含む土主体層であるⅢ-3a層が堆積する（小泊貝層の形成）。Ⅲ-1層・Ⅲ-3a層の堆積は、大洞C2式期で終了している。この貝層の形成は、Ⅲ-3b層上における遺構の構築時期と一致することから、土坑1類（柱穴）を中心とした遺構構築に伴うものと考えられる。

混貝土層であるⅢ-1層は、約12×10mの範囲で確認された。Ⅲ-3a層は、検土杖によるボーリング調査ではⅢ-3b層との区別が難しいため明確な分布範囲は示せないが、76Tでは確認されず、76Tより東側の72T、1・3～6Gで確認される。Ⅲ-3a層は、Ⅲ-1層と互層となって堆積している可能性もあり、Ⅲ-1層と一連のものと考えられる。

72T、1・3Gのコラムサンプルの調査結果では、Ⅲ-1層の最大厚は24cm、Ⅲ-3a層の最大厚は33cmであった。これを台ノ前北（南）貝層及び西向貝層と比較すると、小泊貝層の堆積は極めて薄いことが認められる。

また、各コラムサンプルのⅢ-1層の計測混貝率は、72TS1で24.7%、S2で14.5%、1GS1で2.3%、3GS1で13.9%である。1GS1は、他のコラムサンプルと比較すると極端に低く、Ⅲ-3a層に近いものと言える。小泊貝層の計測混貝率は、概ね台ノ前北貝層等の土主体層（貝層Bタイプ）よりは高いが、西向貝層の綱取式期（64T大別a層）より低いことが指摘できる。

このように、小泊貝層は、台ノ前貝層・西向貝層と比較すると、分布範囲が狭い上、堆積は極めて薄く、混貝率も高いものではないことが認められる。後期中葉～晩期中葉にかけて西の谷など明確な土器等の廃棄場が形成されているにもかかわらず、貝層形成の時期及び場所が限定的であることが指摘されよう。また、土主体層であるⅢ-3a層も薄い堆積をしていることから、台ノ前北貝層等とは異なり大規模な土の廃棄によるものではないと推定される。

(5) 柱穴の性格

後期末～晩期後葉における柱穴で構成される施設の用途について考えてみたい。

- ①西の谷で、土器（製塩土器を含む）、石皿・磨石等の石器類等の道具、焼獣骨等の多量の廃棄が確認される。
- ②東の谷でも、土器（製塩土器を含む）等の道具、貝・獣骨等の多量の廃棄が確認される。
- ③埋設土器群等の明確な祭祀遺構の検出が少なく、土偶等の祭祀遺物も集中して出土するなどの状況が確認されない。

以上の点から、後期中葉～晩期後葉にかけて、小迫地区台地部は居住地であったと推定できる。居住地である以上居住施設が存在するはずだが、今回の調査で確認された建物と考えられる遺構は柱穴だけである。したがって、柱穴が構成する施設は、掘立柱建物・竪穴住居のいずれであっても居住施設の可能性が高く、分布範囲は居住域を示していると推定している（図171）。

(6) 製塩土器について

小迫北地区では、Ⅲ-1層・Ⅲ-2a層・Ⅲ-3a層から多量の製塩土器が出土している。以下に特徴をまとめる。

口縁部

- ・直口気味のものもあるが、緩く内湾するものが多く、厚さは1cm前後である。
- ・内面は丁寧に調整されて光沢がある。
- ・外面は粗い調整のものが多く、輪積み痕をそのまま残すものもある。
- ・表面がピンクかかった赤褐色・橙色を呈するものが多く、剥離しているものも見受けられる。

底部

- ・径は7～10cm前後、厚さは1～2cm前後に集中する
- ・内面は丁寧に調整されて光沢があるものが多い。
- ・外面はヘラケズリ、ヘラナデのような調整が施される。

今回の調査では、製塩土器が出現する時期を明確にできなかったが、IV区の包含層の調査では、大洞C2式が多く出土するⅢA・B層から多量の出土が認められることから、大洞C2式期には出現していたと推定される。また、ⅢA・B層と比較すると出土量は劣るものの、大洞C1式を多く含むⅢC層からも一定量に出土しており、製塩土器の出現が大洞C1式期まで遡る可能性も考えられる。

段丘上に製塩土器が多量に出土していることから、小迫北地区低地部に製塩遺構の検出を主目的の一つとして調査区を設定したが（73T）、製塩炉等の遺構は確認できなかった。

また、低地部（73T）において、製塩土器の出現が推定される大洞C2式期の遺物包含層は確認されなかったが、後期中葉～晩期前葉の遺物包含層が確認された。このことから、製塩を行う以前にも低地部を利用していた可能性が考えられる。遺物包含層下の地山の標高は約3.6～4.5mを測り、製塩炉等の検出には、さらに北側にあたる標高がより低い汀線付近の調査が必要と考えられる。

4. 小迫北・南地区、南台地区台地南部の変遷

小迫北・南地区及び南台地区台地南部の変遷を時期別に表7にまとめた。时期的な概略は次の通りである。

I期 前期初頭～中葉

遺構は確認されていないが、小迫南地区斜面において遺物包含層（Ⅲ-5層）を確認している。

表7 小泊北・南地区、南台地区台地南部変遷表

調査区分	調査時期	土器型式	主な遺構層土	遺構の形成					内容	段階・遺物組合せの形成			遺物組合せの形成				
				竪穴住居 (土坑IV層) (土坑I層) (土坑II層) (土坑III層) (土坑IV層)	竪穴住居 (土坑IV層) (土坑I層) (土坑II層) (土坑III層)	竪穴住居 (土坑IV層) (土坑I層) (土坑II層) (土坑III層)	竪穴住居 (土坑IV層) (土坑I層) (土坑II層) (土坑III層)	竪穴住居 (土坑IV層) (土坑I層) (土坑II層) (土坑III層)		竪穴住居 (土坑IV層) (土坑I層) (土坑II層) (土坑III層)	西の谷	東の谷		前遺部	南谷	低地部	
Ⅵ	4 大洞A	埴土A類 埴土C類		○				○	遺構数の減少。								
	3 大洞C2	埴土A類 埴土C類		◎				◎	柱穴は前段階同様多い。	IV区II-2a層	土器、焼酎魚骨の遺棄。	◎	Ⅱ-1層 (727 III-1層)	Ⅱ-3a層 (50 III-3a層)	貝・土器・獣骨等の遺棄。		
	2 大洞C1	埴土A類 埴土C類		◎		○		◎	柱穴は前段階同様多い。	IV区II-2a層	土器、焼酎魚骨の遺棄。	△	Ⅱ-1層?	Ⅱ-3a層?	貝・土器・獣骨等の断片的な遺棄?		
	1 大洞C0	埴土A類 埴土C類		◎				◎	柱穴の増加。	IV区II-2a層 IV区II-2b層	土器、焼酎魚骨の遺棄。	◎	Ⅱ-1層 (30 III-1層)	Ⅱ-2a層 (10 III-3a層)	貝・土器・獣骨等の遺棄開始。		○
	3 大洞D	埴土A類 埴土C類		○				○	柱穴の構築。	IV区II-2b層	土器、焼酎魚骨の遺棄。						○
Ⅶ	2 新地	埴土A類 埴土C類		○				○	柱穴の構築。	IV区II-2b層	土器、焼酎魚骨の遺棄。	◎	767 III-3b層		竪穴or遺構層削?		○
	1 加曾利跡	埴土C類		△				△	柱穴の構築開始?	IV区II-2b層	土器、焼酎魚骨の遺棄の開始。	◎	767 III-3b層		竪穴or遺構層削?		○
	3 網取																△
Ⅷ	2 大木1D	埴土A類 埴土C類			○				竪穴住居・貯蔵穴の構築。								△
	1 大木C	埴土A類 埴土C類		○		△			貯蔵穴の構築?								△
Ⅸ	3 大木Eb																△
	2 大木Ea																△
Ⅹ	1 大木2b	埴土C類			○				南台地区台地南部で貯蔵穴の構築。								△
	2 大木7a																△
	1 大木6	埴土A類			○				小泊北地区で貯蔵穴の構築開始。								△
Ⅺ	1 大木3-5																△
Ⅻ	2 前期近頃 →中頃								土器数布のみ。								○ △

◎=多く確認している、○=確認している、△=確認のみ
 埴土A類 粘性のある輝がりのある埴土、褐色、暗褐色を基調とする
 埴土C類 黄色、黒褐色を基調とする埴土。

◎=通常な形成時期、○=形成時期、△=可能性のある時期

Ⅱ-1 黒質土層(暗褐色・黒褐色土)
 Ⅱ-2a 黒褐色土(焼酎魚骨を含む)
 Ⅱ-2b 暗褐色土(焼酎魚骨を含む)
 Ⅱ-3a 暗褐色・黒褐色土(獣骨を含む)
 Ⅱ-3b 暗褐色土(獣骨を含む)

○=形成時期
 △=可能性のある時期

また、小泊北・南地区の広範囲で1期の土器の散布が認められる。

II期 大木3～5式期

小泊北・南地区及び南台地区台地南部においては遺構・包含層等は確認されていない。

III期～IV期大木6～8b式期

小泊北地区台地・南台地区台地南部で貯蔵穴が構築され、小泊北地区台地における遺構構築が開始される。

V期 大木9～網取式期

小泊南地区台地東部で、竪穴住居が確認されているほか、小泊北地区台地及び南台地区台地南部では、前段階に引き続き貯蔵穴が確認されている。

本時期の最終段階である網取式期の遺構は確認されておらず、遺構の構築は一時収束するが、南谷部で遺物包含層(III-5層)が確認されている。

VI期 加曾利B～大洞B式期

柱穴が構築され始め、再び小泊北・南地区の利用が始まる。西の谷では、土器・焼獣骨等の廃棄が開始され(III-2b層の堆積)、東の谷では整地あるいは遺構の構築が行われる(III-3b層の堆積)。低地部でも遺物包含層(III-5層)が形成される。

VII期 大洞BC～A式期

小泊地区の利用が最も活発になる時期である。引き続き柱穴が構築される。東の谷では、VI期に堆積したIII-3b層を掘り込む柱穴も多く、VI期と比較すると数は増加する。SB01～04の構築も認められる。西の谷では、引き続き土器・焼獣骨等の廃棄が行われる。VI期と比較する土器・焼獣骨の数は急激に増加する。東の谷では、III-3b層上に貝層III-1層・III-3a層が堆積する(小泊貝層の形成)。VI期に続き低地部では、遺物包含層(III-5層)が確認される。大洞A式期になると遺構数は減少し、小泊地区及び浦尻貝塚における遺構構築は収束する。

5. 小泊地区のまとめ

小泊南地区斜面部では、前期前葉の遺物包含層が確認され、浦尻貝塚では確認されていない前期前葉の遺構が検出される可能性が指摘できる。南台地区台地南部及び小泊北・南地区では、前期末～中期末の貯蔵穴が確認されることから、それぞれの時期の竪穴住居が小泊北地区等で存在することも予測される。

中期末には、南台地区の同時期の居住地から約300m南東に離れた地点(小泊南地区台地東部)に、居住地が形成されている。南台地区の居住地とは一連のものとは考え難く、隣接して別の居住地が形成されていたと言える。南台地区では、前段階から続く継続的で集中的な遺構形成が認められるが、小泊北・南地区では断続的であると考えられ、大きな差異が認められる。この2箇所の居住地がどのような関係にあったのか今後の大きな課題になろう。

小泊北地区では網取式期の遺構が確認されず、台地における遺構の構築は、大木10式期で一時収束すると推定される。しかし、小泊地区南谷部では後期前葉と推定される遺物包含層が確認されており、遺構を構築している可能性も考えられる。

後期中葉の明確な遺構は小泊北・南地区では確認されていないが、後期中葉～後期末には、東の谷では整地または遺構構築等の掘削行為が行われる。柱穴の検出が少ない時期であり、この掘削行為による掘り込みが竪穴住居等の居住施設である可能性も考えられる。一方、西の谷では、土器・焼獣骨

骨等の廃棄が開始される。

後期末には、柱穴が確実に構築されることが認められ、晩期前葉～中葉にかけて増加する。晩期前葉以後は、東の谷において、前段階の掘削等により形成されたⅢ-3b層を掘り込む多数の遺構が集中して構築される。柱穴等遺構の構築は大洞C2式期が最盛期であり、大洞A式期で縮小し、大洞A'式以降は認められない。このように東西の埋没谷を中心とした居住域が後期末～晩期後葉まで営まれている。

この居住地の形成に伴い、東の谷斜面下位には、貝・獣魚骨が廃棄され、小畑貝層が形成される。西の谷でも、前段階以上に廃棄行為が活発化し、土器・焼獣魚骨等が多量に廃棄される。これら廃棄行為も大洞A式期以降は明確ではなく、居住地の変遷過程と一致した状況が認められる。

このように、小畑地区では、南台地区で遺構の構築が収束する後期中葉以降の活動の痕跡が確認でき、断続期をはさむ可能性はあるが、浦尻貝塚全体を通してみると、ほぼ連続して活動していたことが確認できる。

東の谷では、後期中葉以降、整地または遺構の構築等が行われたと予測され、晩期中葉には近接した場所でSB01～04の建て替えが認められるほどの遺構の集中が認められる。このように東の谷では、継続的で集中的な遺構の構築等の土地利用及び斜面下への貝・獣魚骨の廃棄による小畑貝層の形成が認められる。東の谷は、後期中葉以降の集落の中心部分にあたると考えられよう。

西の谷では、後期中葉～晩期中葉までの長期間にわたる継続的な土器・焼獣魚骨の廃棄行為が行われ、東の谷との利用のされ方が異なることが認められる。

このように小畑北地区を中心とした後期末～晩期後葉の集落は、東の谷を継続的に利用した居住地と貝塚を伴った明確な廃棄場を持つ集落として位置づけられよう。

第3節 ま と め

最後にこれまで述べてきた浦尻貝塚の縄文時代の調査成果について、遺構、貝層、遺物包含層の分布状況及び形成時期を全体的に整理しておくことにする（図172）。

南北に延びる舌状段丘（南台地区）上では前期後葉以降の遺構が確認され、その段丘の東西に斜面貝層が分布している。遺構は中期後葉以降に増加し、後期前葉までが多く認められるが、後期中葉で断片的となり、それ以降の形成は認められない。前期後葉から後期前葉の居住地は舌状台地の北側が一環として中心となっている。その中央部は掘削行為により、縄文時代中期後葉段階では既にローム層が失われている。掘削行為による土の廃棄場所は東西の斜面貝層と推定している。また、居住地の南側には広い範囲で前期末以降の貯蔵穴群が認められる。

貝層は前期末から中期前葉を中心として形成され、部分的に前期後葉、中期中葉、中期後葉、後期前葉の貝層が存在する。東西の貝層のさらに斜面下では、後期前葉の遺物包含層が認められ、低地付近まで活動が及んでいたことを伺わせる。

一方、南側の東西に伸びる段丘上（小迫北・南地区）では、規模は小さいながらも東端に中期後葉の居住地があり、全体的に前～中期の貯蔵穴が広がっている。

南台地区等で遺構の形成が収束する後期中葉以降、北側から入り込む埋没谷を中心として、多くの活動が行われるようになり、後期末～後期中葉にかけて居住地が営まれる。埋没谷は廃棄場及び居住地として利用されており、東の谷には、晩期前葉～中葉にかけて斜面貝層の形成が認められる。北側に広がる低地部には後期中葉～晩期、東南の谷には後期前葉の遺物包含層があり、段丘周囲の低地部、谷部も活動の痕跡を確認することができる。また、前期前葉の遺物包含層も認められ、より古い段階の遺構の存在も予測される。

このように、南北（南台地区）、東西（小迫北・南地区）の段丘は、縄文時代前期後葉～後期中葉以後の長期間にわたり居住地として利用されており、斜面には各時期の貝層が形成されている。遺物包含層の存在から、縄文時代の活動のエリアはより広がることが考えられるので、遺跡の範囲としては、図172に示すように段丘を中心とし、低地・谷部まで含んだ部分と考えることができる。

注1：浦尻貝塚については、これまでに報告を行ったことがあるが（川田2002等）、今回の報告では、その後の発掘調査成果や調査指導委員会での審議を踏まえて変更している点がある。

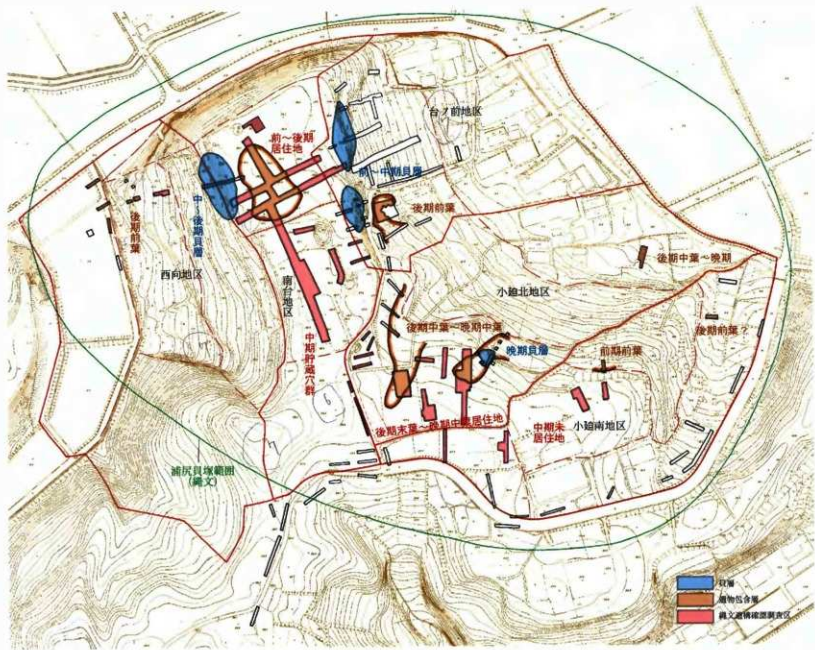


図172 浦尻貝塚縄文時代全体図 (S=1/2,500)

第6章 浦尻貝塚の歴史的意義

第1節 浦尻貝塚と福島県内の貝塚

1. 福島県内の貝塚調査の歴史

福島県における貝塚の発見1877年(明治10)、モースによる東京都大森貝塚の発掘調査は、我が国における科学的考古学調査の最初の事例として学史に記録される。この調査によって、大森貝塚が石器時代の遺跡であることが明らかにされ、後の縄文時代研究の先駆けとなったことは広く世に知られるところである。

福島県内の貝塚の調査は、大森貝塚の発掘調査から13年後の1890年(明治23)、若林勝邦らによって行われた、相馬郡新地町に所在する新地貝塚(国指定史跡、小川貝塚と称したこともある)の調査が最初の事例とされる(若林1890)。この調査を契機に、当時東京人類学会に籍を置く福島県在住の会員らによって、福島県内での貝塚の確認調査が行われた。後に東京大学や日本考古学協会によって調査され、多くの人骨が出土したことで知られるようになった新地町三貫地貝塚は、若林を新地貝塚に案内した、当時中村(現在の相馬市)に在住した館岡虎三が発見し、明治27年に『東京人類学会雑誌』に報告した貝塚である。

小高町における貝塚の発見 しかし、館岡の浜通り地方の石器時代遺跡の確認調査に先行し、早くも新地貝塚の調査が行われた同じ年の8月、小高町片草に所在する片草貝塚を発見し、『東京人類学会雑誌』に報告したが、当時福島県尋常中学校の教員であった犬塚又兵衛であった。記録で見ると、小高町内の遺跡では学会に報告された最初の貝塚である(犬塚1890)。

1901年(明治34)、東京帝国大学人類学教室の大野延太郎は、磐城線(現在のJR常磐線)の全線開通を契機に福島県浜通り地方の遺跡調査を行った。大野はこの調査で小高町浦尻にある台ノ前貝塚を調査し、その成果は『磐城線十日の旅』(大野1901)で報告した。この報告にある台ノ前貝塚が今回報告する浦尻貝塚にあたることは、前に触れたとおりである。

小高町内の貝塚は、犬塚や大野の報告により考古学会に知られるようになったが、その後の調査状況には不明な点が多い。しかし、1959年(昭和34)の酒詰伸男による『日本貝塚地名表』には、小高町内の貝塚として、片草貝塚・角部内貝塚(現角部内南台貝塚)・台ノ前貝塚(現浦尻貝塚)・西向貝塚(現浦尻貝塚)・上浦貝塚(現宮田貝塚)の5遺跡が収録されているので、この間に町内の貝塚に対する所在確認調査が、識者によってある程度行われたものと考えられる。

小高町内の貝塚の調査 県内の貝塚の調査は、大正末期に行われた新地貝塚や三貫地貝塚の調査が学史的には著名なものであるが、戦後はいわき地区で大学や地元研究者によって行われた積極的な調査がある。しかし、小高町内の貝塚は、古くは明治期に知られた貝塚があり、またその数も決して少ないものではないにもかかわらず、研究者によって大きく取り上げられることもなかったことに大きな特色がある。

町史編纂事業による宮田貝塚の発掘調査(竹島國基1975)、福島県学生考古学会や福島大学考古学研究会による西向貝塚の発掘調査(福島大学考古学研究会1971)、崖面崩落に伴う角部内南台東貝塚(玉川・吉田1988)の発掘調査などが過去の調査としてあげられるが、これらは小規模な調査であって、小高町内の貝塚の詳細を明らかにするものではなかった。このような背景に加え、町内の貝塚は

幸いにも大きな開発の波にさらされることなく近年に至った。浦尻貝塚を含め、小高町内の貝塚が、その多くが掘り散らかされることなく、いずれも良好に保存されている理由はここにある。

2. 福島県内の貝塚の分布と小高町内の貝塚

福島県内の貝塚については、『福島県の貝塚—県内貝塚詳細分布調査報告—』（福島県教育委員会 1991）が最新のデータを提供している。ここには貝層を確認できない遺跡も含まれるが、全県で55遺跡が収録されている。このうち会津盆地内に所在する淡水産貝塚3遺跡以外は、南からいわき市・双葉町・浪江町・小高町・相馬市・新地町の2市4町の太平洋沿岸部に分布が確認できるが、その分布には空白地域があって、いわき地区の貝塚群（30遺跡）・双葉北部から相馬南部の貝塚群（16遺跡）・相馬北部の貝塚群（6遺跡）の3つのブロックに分けることが可能である。

いわき地区の貝塚 蛭田川・藤原川・小名川・滑津川・夏井川・仁井田川・浜川流域の段丘面を中心に分布するが、分布の中心は小名浜湾に流入する藤原川流域にある。この地区の貝塚の特色は、夏井川流域の弘源寺貝塚が縄文前期初頭の貝層をもつ以外は中期以降の貝塚であること、外洋に面した丘陵や段丘に立地する貝塚が貝層の厚い堆積層を形成し、外洋性漁労活動を示す優れた骨角器が出土することなどをあげることができる。

双葉北部から相馬南部の貝塚群 相馬郡北部は小高町の貝塚群を含んだブロックである。前田川・譜戸川・宮田川・小高川の流域の段丘面を中心に分布する。貝塚の形成が縄文海進期の前期に始まる貝塚が多いこと、また自然遺物や漁労具が内湾性漁労活動を示している点が特色である。分布の中心は小高町の宮田川と小高川の流域にある。

相馬郡北部の貝塚 松川浦に流入する宇田川・日下石川流域と、旧新沼浦に流入する立田川、濁川の流域に分布するが、松川浦流域の貝塚は小規模で、また古墳時代から奈良・平安時代の貝塚がほとんど考えられている。立田川流域の三貫地貝塚と濁川流域の新地貝塚は、いずれも低位の段丘面に立地すること、貝層が縄文後・晩期に形成された内湾性の漁労活動を示す貝塚であるという共通した特色がある。

福島県内の貝塚は、縄文時代の貝塚文化の大きな拠点であった東京湾・霞ヶ浦周辺地域と松島湾周辺地域との、中間地帯に分布する貝塚として重要な位置関係にある。この地域の貝塚研究は、県内の貝塚文化の形成における関東地方や東北地方の文化的関連を明らかにする大きな可能性を秘めていることは明白であり、今後の調査・研究に期待される。

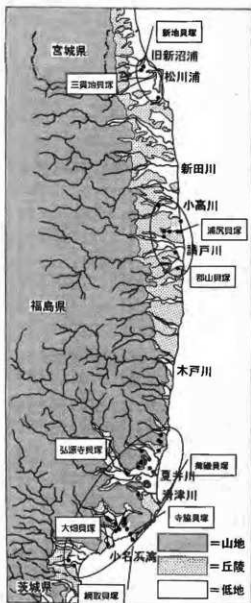


図173 福島県浜通り地方の貝塚の分布

3. 小高町の貝塚

『福島県の貝塚—県内貝塚詳細分布調査報告—』には、小高町内の貝塚遺跡として13遺跡が収録されている。しかし、これらの遺跡は貝層が確認されない遺跡を含んでいることや、集落遺跡内の地点貝塚を単独に取り上げているなど、遺跡として貝塚をとらえるには課題がある。立地する遺跡の地形などを考慮すれば、次の2つの水系にある7遺跡として考えるのが現状では最も理解しやすい。

宮田川流域の貝塚 旧井田川浦を含んだ宮田川下流域の南側丘陵地にある貝塚で、4カ所の貝塚遺跡としてとらえることが可能である。

- ①北原貝塚（仮称）：浦尻字北原地区の貝塚で、北原貝塚群・北原西貝塚が台地の東と西の斜面に形成されている。台地部を居住域とした一つの遺跡と考えるべきであり、北原貝塚と仮称する。西貝塚にはイボキサゴを主体とする縄文前期前葉の貝層があり、台地の東側の斜面の貝塚では、詳細は不明だが、前期を中心に中期まで断続的に貝層の形成が行われたと推定される。
- ②浦尻貝塚：今回調査した貝塚で、浦尻字南台・台ノ前・西向・小迫地区に分布する4カ所の貝塚で構成される。縄文前期後葉から中期・後期・晩期の各時期に貝層が形成され、小高町内の貝塚では貝塚の形成時期が最も長期にわたる。
- ③加賀後貝塚：上浦字加賀後地区の低位段丘面の北側斜面に形成された貝塚で、貝層の下方は現在の水田面下に埋没している。小高町内の貝塚では、最低位のレベルに形成された貝塚である。貝層はイボキサゴを主体としていて、縄文前期前葉の比較的短期間に形成されたものと考えられる。
- ④宮田貝塚：上浦字宮田地区の段丘面の東端にある貝塚で、東・北・西の3カ所の斜面に遺物包含層があり、東側の遺物包含層にイボキサゴを主体とする貝が含まれているのでこの地点を宮田東貝塚と称している。縄文早期末葉から前期末葉の土器が出土しているが、貝層の形成時期は前期前葉の短期間と考えられる。宮田川流域の貝塚では最も内陸に位置する貝塚で、現在の海岸線からは約4.2kmある。

小高川流域の貝塚 小高川の下流域にある貝塚で、南側の丘陵地に2カ所、北側の段丘端に1カ所の貝塚が知られている。小高川下流の村上地区には、旧前川浦の名残りの潟湖がある。

- ①角部内南台貝塚（仮称）：角部内字南台地区の貝塚で、段丘面東側斜面の東貝塚と南側斜面の南貝塚に分けられているが、これらは中央の段丘面を集落の中心として斜面に形成された貝塚であり、遺跡としては1つに数えるべきである。角部内南台貝塚と仮称する。出土する土器には、縄文前期前葉から中期末葉の各型式が含まれるが、アサリを主体とする貝層は中期に形成されたと推定されている。
- ②小谷津貝塚：泉沢字小谷津地区にある貝塚とされる。小高川の支流である泉沢川の開析谷の南端の段丘面に立地するが、竹島園基の表面調査の結果以外に、貝層に関する詳しい情報がない。現在は貝層の存在も含めて不明といわざるを得ない。
- ③片草貝塚：片草字金場台にある貝塚である。小高川の北岸の段丘面の東端に集落遺跡があり、その東斜面に貝層が形成されている。貝層はアサリを主とし、縄文前期中葉の大木2式の短期に形成されたとみられている。現在の海岸線からは西に約4.3km 内陸にあり、小高川水系の貝塚としては最も内陸に残る貝塚である。

小高町内の貝塚遺跡については、以上のように2水系の7カ所の遺跡群として整理することができる。発掘調査が実施されていない貝塚が多く、貝層の広がりや内容、また貝層形成の時期などに不明な点があるが、現在の限られた情報だけでも、縄文海進を含めた縄文時代の自然環境の復元などが可

能である。前述したように、小高町内の貝塚は、その大半が未調査の状況にあり、このことは将来における貝塚の考古学的研究に大きな可能性を残している点も高く評価されるべきである。

小高町内の貝塚は、北原貝塚（仮称）・加賀後貝塚・宮田貝塚・片草貝塚などのように、縄文前期前葉に貝層が形成される。これは双葉町郡山貝塚や浪江町植畑貝塚などとともに、双葉北部から相馬南部の貝塚群に共通する特徴であって、貝塚の形成が遅れるいわき地区や相馬北部の貝塚とは大きな違いをみせている。

第2節 浦尻貝塚の調査の成果

1. 浦尻貝塚の貝層とその特色

平成12年度から実施された浦尻貝塚の5ケ年にわたる発掘調査は、その契機が遺跡内に計画された道路建設による確認調査であったが、初年度の成果を受けて、13年度以降は国史跡指定をめざした範囲確認調査として実施された。このため、調査はトレンチによる部分調査が選択され、特に貝層はその分布範囲を確認することに主眼が置かれ、貝層そのものの調査は最小規模で実施した。したがって、遺跡全体の中での遺構の分布や数、貝層の詳細な堆積状況などは、大まかな情報しか得られなかった。制限された調査であったが、その成果から主な点をまとめてみたい。

貝塚の形成時期 浦尻貝塚には、台ノ前北貝層・台ノ前南貝層・西向貝層・小迫貝層の4カ所の貝層が所在することが明らかになった。これらの貝層はいずれも段丘の斜面に形成された貝層であり、いわゆる斜面貝塚に含めることが可能である。上位部の段丘平坦面が集落の居住域であったことは、検出された竪穴住居跡などの遺構のあり方から明白である。

貝層の形成年代は、台ノ前（北・南）貝層が縄文時代前期後葉から中期後葉、西向貝層が中期前葉から後期前葉、小迫貝層が晩期前葉から中葉にかけての時期と考えられた。中期末葉と後期中・後葉の貝層が欠落しているが、一つの集落遺跡の全体としては前期末葉から晩期中葉までの長期間にわたる貝層の形成が行われていて浦尻貝塚の大きな特色となった。このことは、福島県内の他の貝塚にみられない特色であり、また浦尻貝塚が縄文時代におけるこの地域の拠点的な集落であったことを考えさせる理由でもある。県内の縄文遺跡の中で、これほど長期間にわたり集落として土地利用された遺跡は、浦尻貝塚の他に類例をあげることができないのである。

台ノ前北貝層は、最下層が大木3・4式期から貝層の形成が始まること明らかになった。福島県内の貝塚では、いわき市弘蓮寺貝塚や小高町北原貝塚（北原西貝層）・上浦加賀後貝塚・上浦宮田貝塚・片草貝塚で前期前～中葉の貝層が確認されているが、前期後葉の貝層は、台ノ前北貝層が県内の貝塚では最初の発見例であり、年代的にも重要な意義がある。また、前期末～中期初頭の貝塚も県内ではほとんど類例がない。

貝層の特色 4カ所の貝層のうち、台ノ前（北・南）貝層と西向貝層の前期後葉から後期前葉の貝層はアサリが主体となった貝層であるが、晩期の小迫貝層はアサリが減少してイソシジミ・ヤマトシジミが卓越する貝層であることが明らかにされた。大きな動向として、バックランドとしての旧井田川浦の環境が、縄文海進期の砂質干潟を伴う内湾から徐々に潟湖化した状況を示す所見である。詳しい動向は、魚類の組成の変化とあわせて第4章に概要がまとめられているが、宮田川流域の他の貝塚調査が進展し、自然遺物の詳細な比較が行われれば、さらに具体的に旧井田川浦の古環境の変遷が記述可能になるであろう。

浦尻貝塚の貝層のもうひとつの特色は、貝の混入密度が比較的小さく、いわゆる純貝層が形成されずに、土を多量に含んだ混貝土層や混土貝層が分厚く堆積していること、また動物遺存体の中でも魚骨が大量に出土したことである。この特色は台ノ前（北・南）貝層と西向貝層に特に顕著であり、Bタイプとした多量の土を含んだ堆積層の形成は、後述するように居住地区と想定される台地部の地山掘削の行為との関連が想定される。魚骨の豊富さも県内の他の貝塚に類をみないあり方であり、動物遺存体全体を含めて浦尻貝塚人の生業や周辺環境の変化を考える格好の資料となった。浦尻貝塚の遺跡としての価値の高さを示す特色ともいえる。

縄文時代の地山掘削 集落遺跡としての浦尻貝塚の構造を知るために南台地区の台地上に設定したトレンチ調査では、南台地区台地北部に地山のローム層が欠落し、地山面がくぼ地を呈する地形の変化を確認したことも大きな成果であった。このくぼ地は縄文前期後葉のⅡ期から始まった竪穴住居などの遺構の掘削や、前期末葉から中期初頭のⅢ期に特に盛んに行われたと考えられる遺構掘削などによって形成された地形の変化であって、掘削に伴う土の廃棄は台地の東・西斜面に行われたものと理解された。台ノ前貝層と西向貝層に、多量の土を含んだ混貝土層・混土貝層が厚く堆積しているのは、これらの地山掘削行為が直接の原因であったと考えざるを得ない。

縄文時代の集落遺跡では、集落の中央部を掘削しくぼ地を形成する事例や、中央のくぼ地を掘削し排出土を周辺に盛土した事例が増えている。栃木県寺野東遺跡や千葉県三輪野山貝塚など、関東地方の縄文後期の集落遺跡に類例が多いが、宮崎県本野原遺跡も後期の同種の集落遺跡である。これらは縄文時代における大規模な土木工事が行われた集落として位置づけられているが、浦尻貝塚はこれらに新しい事例として加わることになった。

出土した遺物 浦尻貝塚の確認調査では、貝層や遺構の部分的な調査であったにもかかわらず、多種多量の人工遺物・自然遺物が出土した。その内容や詳細な観察と分析は今後の課題として残されているが、特色をまとめれば以下になるよう。

まず、縄文土器では早期後葉から晩期大洞A式までの多くの型式の土器が大量に出土した。量的なまとまりをもつものは、台ノ前（北・南）貝層の大木6・7a・7b・8a・9・10式、綱取式の前期末葉から後期前葉の土器群と、小泊地区の貝層や遺物包含層から出土した晩期大洞BC・C1・C2式土器群である。特に大木6・7式土器は、福島県内では最もまとまった土器資料になったものと考えられる。これらの土器は、文様構成などに松島湾を中心とした東南部地域に共通する特徴が認められ、この地域が大木系土器文化圏の決して外縁地域ではないことを確認することができた。分層された貝層ごとの詳細な検討が行われれば、体系的な型式変遷が明らかになるものと期待される。

小泊北地区では、西の谷の遺物包含層と東の谷の小泊貝層から多量の亀ヶ岡式土器が出土している。中心となる大洞BC・C1・C2式土器では、BC式の精製土器に縄文帯が付加されたり、地文に横回転の結節縄文が施されるなど、福島県地域の特色が色濃く表れている。詳細な文様の検討、組成の検討が進めば、亀ヶ岡式土器の地域的特色がより鮮明になるものと思われる。

小泊地区の貝層・遺物包含層には大洞各型式の土器に混じって、多量の製塩土器が出土していて、浦尻貝塚人の生業の一端を明らかにする成果もあった。小泊貝層から製塩土器が出土すること、その年代が大洞C2式期と推定されることは既に報告されたことではあった（玉川1986）が、今回の調査で、共存する土器から大洞C2式期は確実で、大洞C1式期に遡る可能性があることが明らかになった。小泊北地区の低地には、土器製塩の場との関連を解明する目的でトレンチを設定したが、今回はその関連を明らかにすることはできなかった。旧井田川浦周辺の縄文時代の製塩遺跡としては、浦尻貝塚の東約

800mの地点に位置する磯坂遺跡が知られており、表面採集での所見ながら、ここでの土器製塩は晩期後葉の時期が推定されている。小泊地区の製塩土器は、この地域での土器製塩がより早い晩期中葉に始まることを確実にした。

なお、小泊地区の西の谷・東の谷の遺物包含層の下層には、後期中葉から後葉にかけての加曾利B式・新地式が多く包含されることが明らかになっている。小泊地区の集落の在り方や、この地域における後期中葉・後葉の土器変遷を考える上で重要な情報が眠る包含層である。

貝塚の調査であったので、骨角器などの人工遺物の出土にも大きな期待が寄せられていたが、この成果は必ずしも大きなものにはならなかった。貝層の調査が極めて限定された範囲の中で実施されたことが最大の理由であるが、骨角器が大量に出土しないのは、むしろこの貝塚の特色の一つともいえるのではなからうか。それでも、漁具としての釣り針・刺突具や装身具など、貝塚ならではの人工遺物が出土し、動物遺存体などとの関連から浦尻貝塚人の狩猟・漁労活動を考える若干の手懸かりになった。この貝塚での漁労活動については、今後の魚骨などの詳細な分析によって具体的な内容が明らかになるものと期待される。

2. 浦尻貝塚の変遷

浦尻貝塚の調査の成果をもとに、本文では集落の変遷を7期に分けてまとめたが、遺跡全体の変遷と土地利用の関連を、主だった時代・時期に分け簡単にまとめれば、以下のような特徴をあげることができよう。

縄文前期前葉 浦尻貝塚において集落が形成される可能性が指摘される時期である。具体的な遺構は検出されていないが、小泊地区の北斜面に遺物包含層が形成されているので、この地区の台地平坦面に居住区域が残されている可能性がある。

縄文前期後葉 南台地区の北側台地部が集落遺跡の中心地に選ばれ、東側斜面の台ノ前北貝層に最初の小規模な貝層が形成される。浦尻貝塚の集落遺跡としての本格的な土地利用が開始された時期といえることができる。大木3～4式期にあたる。

縄文前期末葉 南台地区の台地北側が集落の中心にあり、大木5式期から竪穴住居が構築される他、大木6式期から東側斜面の台ノ前北貝層に、貝・獣骨の投棄とローム層の掘削土の廃棄が行われる。居住区域は台地北側平坦面にあったと推定されるが、この後に活発化した中央部の地山掘削行為により、遺構の多くが消滅したものと考えられる。

縄文中期前葉～中葉 集落の中心は南台地区の台地北側部分にあり、東側斜面の台ノ前北貝層と南貝層の形成が継続する一方、西側斜面に西向貝層の形成が開始される。また、台地中央部には貯蔵穴が群をなす貯蔵区域が成立する。居住区域は台地北側のくぼ地部分にあったと考えられるが、継続された地山掘削行為により住居遺構などは破壊され、明確ではないものの、居住区域・捨て場・貯蔵区域が集落内に分化するのがこの時期である。

貝層には大量の貝・獣骨・魚骨の投棄が行われる他、特徴的な土の大量廃棄も継続され、浦尻貝塚人の生業活動が最も活発に展開された時期と評価できる。大量の土の廃棄は、台地中央部西寄りの地点にくぼ地を形成するほど大規模なものであり、この事実は集落内で長期継続的に実施された土木工事があったことを明らかにし、浦尻貝塚の重要性を大きなものとした。

大木7式期が最も活発であった貝層の形成は、西向貝層では大木8a式期、台ノ前北貝層は大木8b式期で終了する。

縄文中期後葉 台ノ前南貝層の形成も大木9式期で終了する。この時期は南台地区の北側で続けられた地山の掘削行為も行われなくなり、くぼ地を中心とした複式炉をもつ竪穴住居による居住区域が明確に認められる。台地の中央部には引き続き貯蔵穴群が配置されるが、台地の東端の小迫南地区に共存したと考えられる居住区域が成立することが大きな特徴である。

南台地区北側のこの時期の竪穴住居は、長期の掘削により形成されたくぼ地の周縁に分布していて、窪地を中心とした環状の住居配置があった可能性の高いことが指摘されている。浦尻貝塚の遺構では、この時期の住居跡などに保存状態の良いものが多い。

縄文後期前葉～中葉 中断していた西向貝層で貝の廃棄が再開されるが、網取式期の短期間で終了する。以後、南台地区の貝層（台ノ前北・南貝層・西向貝層）では、貝層の形成が復活されることはなかった。網取式期では竪穴住居が検出されていて、この段階までは前代までの居住区域が踏襲されていたものと考えられるが、柱穴が増えていて、掘立柱建物が併存した可能性もある。

加曾利B式期になると、南台地区ではくぼ地部に墓と見られる墓壇が少数みられるが、住居遺構や貝層の形成もなく、この地区では集落の居住地域を形成する状況になかったものと推測される。

しかし、南台地区のこのような状況に対し、小迫北地区では東の谷と西の谷の下層に、加曾利B式と後期後葉の新地式土器を含んだ遺物包含層が形成されること、また台地中央部の平坦面から掘立柱建物跡とみられる遺構が検出されることなどから、後期中葉以降は、この遺跡の集落の中心が小迫北地区に移動したのと考えられる。南台地区のくぼ地部の墓壇は、この時期に小迫地区集落の墓域として土地利用されることになったものとも理解できよう。

縄文後期後葉 南台地区では土器片がわずかに採集されるだけで、生活の直接的な痕跡が消滅する。

小迫北地区の遺物包含層や柱穴の一部が新地式期の遺構と考えられ、この時期は加曾利B式期に継続して小迫北地区に集落が形成されていたとみられる。

縄文晩期前葉～中葉 南台地区には生活の痕跡がなく、小迫北地区に集落が継続して営まれ、小迫貝層が形成される時期である。居住区域は小迫北地区台地の中で、東側・西側に北側斜面から入り込んだ狭い谷を控えた平坦部が中心になった区域で、大洞BC・C1・C2式期の掘立柱建物が主体となった遺構群がある。平坦面は後世の削平があって、竪穴住居は残存しない可能性がある。

小迫貝層は、大洞BC～C2式期に形成され、C2式期には確実に製塩土器が供伴している。この時期には、台地の下方の旧井田川浦周辺で土器製塩が行われたことが確実であるが、製塩場の特定はできなかった。

縄文晩期後葉 小迫地区を含めた浦尻貝塚では、晩期後葉の大洞A'式期以降の土器資料は急激に減少することから、この台地における縄文時代の人々の生活は大洞A'式期をもって終わりを告げ、新たな拠点での営みが行われたものと考えられる。

縄文時代以降 浦尻貝塚のある南台・小迫地区の台地部からは、弥生土器もわずかに採集されるが、生活の痕跡となる遺構は確認できない。しかし、南台地区の台地部には、古墳時代後期になって古墳が築造され、新たな墓域としての土地利用が行われる。3基の円墳からなる浦尻古墳群として遺跡地図に登録されているが、今回の確認調査によって、墳丘を失った周溝だけが残る2基の円墳が新たに確認された他、台地の北端の高まり（4号墳）も方墳である可能性が指摘されている。1965年（昭和40）、1号墳が農道建設により破壊され、凝灰岩製の刳抜石棺が発見されているが、今回の調査で確認した5号墳は、墳丘のほぼ中心に土坑があり、内部に凝灰岩の腐食部が見えており、これも刳抜石棺を埋葬している可能性が強い。未調査のまま埋め戻したが、周溝からは6世紀中頃の上器器が出土



図174 浦尻古墳群の分布 (S=1/2,000)

して、この古墳群が後期群集墳であることは明確である。地域の古墳時代を考える上で貴重な古墳である。

南台地区の台地部のトレンチからは、平安時代の竪穴住居も検出されている。この時期に集落が営まれたことを確認したのも今回の大きな成果であった。また、遺跡がある南台地区は、中世は標葉氏の支配地であり、『奥相誌』「浦尻村」の項に、「古館址 南台にあり。土人相伝う、佐藤越前の居址なり。」と記された中世城館跡とも考えられている。今回の調査では、確実な中世遺構・遺物は検出されなかったが、今後の調査においては、遺跡の全域を館跡として検証することも重要な課題である。

第3節 浦尻貝塚と周辺遺跡との関連

浦尻貝塚は、宮田川下流域の、旧井田川浦の南岸の台地に立地する縄文時代の貝塚であるが、調査の成果で触れられているように、流域の縄文時代の遺跡の中では、長期間にわたり集落が営まれた遺跡として重要性が指摘されている。

しかし、この流域には、隣接する請戸川や小高川流域を含め、同時代の貝塚遺跡や貝層をもたない集落遺跡が点在していて、浦尻貝塚の歴史的重要性は、これらの遺跡との関連の中で評価されなければならないものでもある。同時に、浦尻貝塚の評価は、宮田川流域の縄文時代の環境、とりわけ内湾（古宮田湾）や潟湖（旧井田川浦）などの環境変化との関連の中でまとめられなければならない。調査された遺跡が少数であるという制約があるが、現時点で考えられる遺跡の関連を簡単にまとめてみたい。

宮田川流域での縄文文化の始まり 宮田川流域が内湾化する時期については、縄文海進との関連で説明しなければならないが、現段階ではその具体的動向は不明である。しかし、北原貝塚では縄文早期初頭に位置づけられる押型土器が採集されたり（志賀1985）、早期後半の条痕文系土器は各型式が採集されるなど、流域では早期から人々の活動があったことは否定できない。

縄文海進と貝塚の形成 前期前半の大木1・2式期になると宮田川流域では北原貝塚西貝層・加賀後貝塚・宮田貝塚で貝層が形成される。同様な動きは、南に請戸川流域の植畑貝塚、北の小高川流域の片草貝塚にも認められ、双葉北部から相馬南部地域の貝塚の特色であることは前述したとおりである。これらの貝層はイボキサゴ・アサリを主体とした貝層であり、流域に砂泥底の内湾が形成されたことが明らかである。こうした環境の変化は、明らかに縄文海進が直接の原因であったものと推定され、類似した地形で構成されるこの地域の河川部に共通した環境変化であったと思われる。

前期後半の大木3・4式期には、浦尻貝塚で最初の貝層が形成されるが、この時期から大木5・6式期は、むしろ北原貝塚に同期の資料が多いことから、貝層の形成が北原貝塚にあり、流域の遺跡では北原貝塚に活動の拠点があったように推定される。上流域の宮田貝塚や加賀後貝塚では貝層の形成が終了し、生活の痕跡が縮小されることが確認されるが、これは浦尻貝塚台ノ前南貝層で判明した魚骨や貝にみられる淡水化の動向を反映したものであろう。

浦尻貝塚の拠点的役割 浦尻貝塚が宮田川流域の遺跡で拠点的な役割を果たしたのは、前期末から中期にかけての時期と考えられ、この時期は南台地区の北側でローム層の掘削が継続され、くぼ地が形成された。

この時期は、基本的には古宮田湾が砂質干潟を伴った内湾環境にあり、砂泥底に生息するアサリを主体とした採貝活動と内湾に來遊するスズキ・マイワシ・カタクチイワシなどを対象とした内湾性の漁労活動が展開された。北原貝塚ではこの時期の土器資料が少なく、上流の宮田貝塚や加賀後貝塚では集落の形成が認められないなどの点は、この時期の古宮田湾の経済活動の拠点が浦尻貝塚にあったことを物語る。

一方、小高川流域の南岸部には、角部内南台貝塚があり、この貝塚は浦尻貝塚が最も活発であった前期末から中期中葉にかけての時期の土器資料が多く、貝層の形成もこの時期と推定されている。小高川下流域も内湾から潟湖へ環境の変化をした流域と思われるが、角部内南台貝塚は、浦尻貝塚と同時に小高川南岸での拠点的な役割を果たした貝塚かもしれない。

表8 浦尻貝塚周辺の貝塚一覧表

遺跡名	前期	中期	後期	晚期
浦尻貝塚 (台ノ前・西向・南台地区)	—	S S S S S	—	—
浦尻貝塚 (小迫北・南地区)	—	—	—	S S
北原貝塚遺跡群	—	—	—	—
磯坂遺跡	—	—	—	—
宮田貝塚	S	—	—	—
加賀後貝塚	S	—	—	—
片草貝塚	S	—	—	—
角部内南台貝塚	—	S	—	—
楯畑貝塚	S	—	—	—

- 遺構・遺物包含層・貝塚の積極的な形成時期
 ——— 遺構・遺物包含層・貝塚形成時期
 - - - 土器の出土あり。
 S 貝塚形成時期

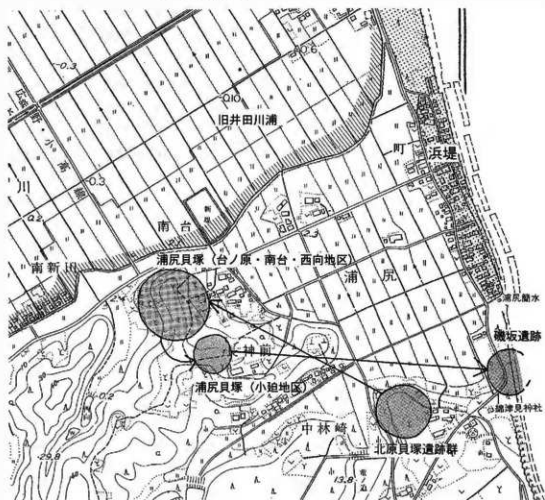


図175 浦尻貝塚周辺での拠点の移動 (S=1/10,000)

中期後葉の拠点の分化 中期後葉の大木9・10式期には、浦尻貝塚に複式炉をもった住居が居住域を形成していて、引き続き古宮田湾南岸の拠点の集落を維持していたと考えられる。しかし、この時期になると、北原貝塚の台地で同型式の大型土器破片が採集されるので、再び北原貝塚にも集落が形成され、拠点的な集落が分化したかと思われる。中期後葉の集落は、県内各地でも遺跡数や住居数の著しい増加があったことが明らかであるが、浦尻貝塚でも小迫南地区に居住区域が成立し、北原貝塚にも集落が復活するのは、この時期の社会全体の動きの中でとらえる必要がある。

このような動きは、内陸の大富西畑遺跡の大規模集落遺跡の出現とも関連したものであり、その背景に一時的な人口増とそれを支えた食料資源確保の問題があるが、浦尻貝塚ではこの時期に貝層の形成が中断するなど、むしろ水産資源の確保の面では、逆行する動きを認めざるを得ない。

小迫地区への拠点の移動 縄文後期になると、浦尻貝塚では南台地区で引き続き集落が営まれ、西向貝層には網取式期の貝層も形成され、古宮田湾を舞台とした内湾性漁労活動が展開される。しかし、加曾利B式期には南台地区での土地利用が墓域などに転換され、居住区域は、同じ台地でも小迫北地区の平坦部に移動する。そして、小迫北地区を中心とした集落の営みは、後期後葉から晩期中葉まで継続される。一方、これまでの拠点であった南台地区は、後期後葉以降は、遺物も散在する状況になり、生活の痕跡を認めることが不可能になる。

そして、この時期の特色としてもう一つ指摘しなければならないことは、後期後葉以降の遺跡が、宮田川流域のみならず、小高川流域も含めて急減することであろう。少なくとも古宮田湾周辺の遺跡では、後期後半から晩期の遺跡は、浦尻貝塚の小迫北地区と、磯坂遺跡をあげるのみである。この点からみると、浦尻貝塚小迫北地区の該期集落は、規模は小さいものの、この地域における後期後葉以降の拠点的な役割を果たした遺跡と考えられる。

小迫北地区の縄文後期中葉から晩期中葉にかけての集落は、少なくとも掘立柱建物をもつ集落であったことは間違いないが、晩期大洞BC式期からは貝層が形成される。しかし、貝層にはヤマトシジミやフナなどの淡水ないし汽水性種の遺存体が多く含まれていて、この時期には、かつての内湾であった古宮田湾が砂州により閉鎖され、潟湖化が進行し、旧井田川浦の原型が形成される環境の変化があったことを物語る。ただし、小迫貝層には大型サメ類・アシカ類・マダイなどの外洋域での漁労活動を推定させる動物遺存体と鈎・ヤス類の刺突具があり、潟湖化する内湾での漁労活動に加え外洋への活発な活動が営まれたことは樞軸らが別章でまとめているとおりである。また、大洞C2式期を中心に、古宮田湾周辺では土器製塩が開始され、生業の多様性がみられるのもこの時期の特色である。

浦尻貝塚の終焉 小迫北地区での晩期集落は、大洞A式期までは遺構・遺物が認められ、この時期までは集落が機能していたかと思われる。しかし、後続型式の大洞A'式は、南台地区も含めて確認できておらず、遺構も検出されなかった。断続的ではあれ、長期にわたり古宮田湾周辺の拠点の集落として重要な役割を果たしてきた浦尻貝塚は、大洞A式期をもって集落の営みを終えたものと評価されるが、その背景にあったものは何であろうか。古宮田湾の急激な潟湖化に伴う環境の変化や、稲作農耕社会への胎動など、複雑な背景があったものと推察される。

小迫北地区の晩期集落が廃棄された後、東に離れた磯坂遺跡では大洞A'式期の製塩土器を多量に含んだ遺物包含層が確認されている。この地域での縄文時代最終期の重要な遺跡であるが、浦尻貝塚の集落が姿を消した後、土器製塩場として新たな役割を担った遺跡ということができる。

引用・参考文献

- 新井達哉 2004 『和台遺跡2』飯野町埋蔵文化財報告書第6集 飯野町教育委員会
- 石川隆司 1983 『福島県浦尻台ノ前貝塚における貝類採集活動の復元』『法政考古学』第8集 法政考古学会
- 石川隆司 1984 『縄文時代前期未葉における土器文化接触に関する予察』『法政大学大学院紀要』第12号
- 石川隆司 1988 『浦尻貝塚群の縄文土器(1)―浦尻台ノ前貝塚採集資料―』『法政考古学』第13集 法政考古学会
- 大塚又兵衛 1890 『磐城国行方郡小高村の貝塚』『東京人類学会雑誌』6-55
- 今村啓爾 1985 『五領ヶ台式土器の編年』『考古学研究室紀要』第4号 東京大学文学部考古学研究室
- 植月学・樋原岳二 2004 『北原貝塚の動物遺存体』『北原貝塚遺跡群』小高町文化財調査報告第5集小高町教育委員会
- 大竹憲治・山崎京美ほか 1988 『薄磯貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊 いわき市教育委員会
- 大竹憲治ほか 1990 『双葉・郡山貝塚の研究』双葉町埋蔵文化財調査報告第7冊 双葉町教育委員会
- 大竹憲治ほか 1998 『七社宮』浪江町埋蔵文化財調査報告第12冊 浪江町教育委員会
- 大野延太郎 1901 『磐城線十日の旅』『東京人類学雑誌』16-181
- 小川勝和・小栗信一郎 2003 『三輪野山貝塚』『考古学ジャーナル』509 ニューサイエンス社
- 金子浩昌・沢沢成規 1986 『骨角器の研究縄文編Ⅰ』慶友社
- 川田強・山崎京美 2001 『小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ』小高町文化財調査報告第2集 小高町教育委員会
- 川田強 2001 『角部内南台遺跡』小高町文化財調査報告書第3集 小高町教育委員会
- 川田強 2002 『福島県小高町浦尻貝塚』『考古学ジャーナル』486 ニューサイエンス社
- 川田強・植月学・樋原岳二 2004 『北原貝塚遺跡群』小高町文化財調査報告第5集 小高町教育委員会
- 木元元治・根本信孝 1977 『順礼堂遺跡』浪江町教育委員会
- 福島大学考古学研究会 1971 『浦尻貝塚』福島大学考古学研究会発掘調査報告書第1冊
- 木幡成雄・山崎京美ほか 1997 『相子島貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告第47冊 いわき市教育委員会
- 齋藤義弘 2004 『宮畑遺跡(岡島)』福島市埋蔵文化財報告書第173集 福島市教育委員会
- 酒誌伸男 1959 『日本貝塚地名表』
- 佐藤典邦ほか 1986 『弘源寺貝塚』いわき市埋蔵文化財調査報告13冊 いわき市教育委員会
- 佐藤憲幸・三好秀樹 2003 『藁倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集 宮城県教育委員会
- 相良淳一ほか 1986 『小梁川遺跡―遺物包含層土器編―』宮城県教育委員会 建設省セックダム工事建設事務所
- 志賀敏行 1985 『浦尻貝塚採集の押型土器について』『Shell Mound』第3号
- 鈴鹿良一ほか 1989 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XⅢ』福島県文化財調査報告書第210集 福島県教育委員会
- 高橋憲太郎・三浦千秋 1995 『崎山貝塚』宮古市埋蔵文化財調査報告書44 宮古市教育委員会
- 高橋信一ほか 1994 『舘戸川地区発掘調査報告書Ⅱ』福島県文化財調査報告書第299集福島県教育委員会
- 竹島国基 1971 『福島県埋蔵文化財包蔵地台帳(小高)』
- 竹島国基 1975a 『宮田貝塚』小高町教育委員会
- 竹島国基 1975b 『第一編第一章郷土文化のよけ』『小高町史』小高町教育委員会
- 竹島国基 渡辺誠ほか 1975 『宮田貝塚』前掲
- 武田耕平ほか 1991 『南沢訪原遺跡』福島市埋蔵文化財報告書第44集 福島市教育委員会
- 古内弘 1979 『福島県(小高町)埋蔵文化財包蔵地台帳』
- 玉川一郎 1984 『山辺沢』飯館村文化財調査報告書第5集 飯館村教育委員会
- 玉川一郎 1986 『福島の縄文期製塩土器』『福島の研究1 地質考古編』清文堂
- 玉川一郎・吉田秀亨 1987 『浦尻磯坂遺跡の縄文晩期土器と製塩土器』『福島考古』28号
- 玉川一郎・吉田秀亨 1988 『角部内南台東貝塚』小高町教育委員会
- 玉川一郎 1993 『萩原遺跡』小高町文化財調査報告第5集 小高町教育委員会
- 西戸純一ほか 2003 『和台遺跡』飯野町埋蔵文化財報告書第5集 飯野町教育委員会ほか

- 芳賀英一ほか 1984 『冨宮西遺跡』 会津高田町教育委員会
- 芳賀英一・植村泰徳 1997 『福島県の様相』 『第10回縄文セミナー前期中華の様相』 縄文セミナーの会
- 橋本博幸 1991 『泉沢小谷津貝塚』 『福島県の貝塚』 福島県文化財調査報告書第260集 福島県教育委員会
- 藤谷誠 1995 『請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』 福島県文化財調査報告書第323集 福島県教育委員会
- 本間宏ほか 1990 『東北横断自動車道遺跡調査報告7』 福島県文化財調査報告書第232集 福島県教育委員会
- ほか
- 松本茂ほか 1991 『東北横断自動車道遺跡調査報告11』 福島県文化財調査報告書第243集 福島県教育委員会
- ほか
- 森幸彦 1988 『三貫地貝塚』 福島県立博物館調査報告第17集 福島県立博物館
- 森幸彦 1991 『浦尻北原貝塚群』『浦尻北原西貝塚群（竜ヶ追貝塚）』等 『福島県の貝塚』 福島県文化財調査報告書第260集 福島県教育委員会
- 森田浩一ほか 2002 『縄文集落 本野原遺跡』 田野町文化財調査報告書第44集 田野町教育委員会
- 山内清男 1923 『磐城国新地村小川貝塚発掘略記』 『東京人類学雑誌』 39巻
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会
- 山内幹夫ほか 1984 『母畑地区遺跡発掘調査報告16』 福島県文化財調査報告書第132集 福島県教育委員会
- 山内幹夫ほか 1984 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XⅡ』 福島県文化財調査報告書第194集 福島県教育委員会
- 山内幹夫 1989 『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告』 福島県教育委員会
- 吉田功ほか 1991 『請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅰ』 福島県文化財調査報告書第252集 福島県教育委員会
- 吉田秀亨ほか 1983 『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅲ』 福島県文化財調査報告書第312集 福島県教育委員会ほか
- 吉田秀亨ほか 1990 『原町市火力発電所関連遺跡調査報告Ⅰ』 福島県文化財調査報告書第236集 福島県教育委員会ほか
- ほか
- 吉野高光 1989 『福島県小高町浦尻・竜ヶ追貝塚出土の貝刃について』 『史峰』 第14号
- 吉野高光 1991 『植畑貝塚』『大平山貝塚』 『福島県の貝塚』 福島県文化財調査報告書第260集 福島県教育委員会
- 若林勝邦 1890a 『磐城国新地村貝塚発掘記』 『東洋学芸雑誌』 7巻110号
- 若林勝邦 1890b 『磐城国宇多郡新地村貝塚発掘ノ話』 『東洋人類学会雑誌』 6巻

附編 浦尻貝塚出土資料自然科学分析

はじめに

浦尻貝塚は、現在の海岸線より約700m離れた標高25～28m前後舌状の台地上およびその周縁部に立地する。遺跡は旧井田川浦（潟湖）に面しており、この地域には多くの貝塚が集中している。本遺跡は、縄文時代前期～晩期、古墳時代、平安時代の遺構・遺物が検出されている。とくに、縄文時代では前期～晩期にいたるほぼ連続した時期の貝塚が形成されていること、集落と貝塚がセットで良い状態で保存されていること、拠点的な性格を備えたムラであることなどが確認されている。

今回の自然科学分析調査では、縄文時代貝層の中から検出された種実遺体の種類同定および放射性炭素年代測定を行い、各貝層の年代と当時の植物利用に関する情報を得る。

1. 試 料

分析試料は、合計12点である。このうち、種実同定用試料は2点（サンプル1、2）である。サンプル1（38TA2）はコラムサンプルから水洗選別して得られた試料、サンプル2（76TSK118）は、土坑内覆土を水洗選別して得られた試料で、共に200粒程度の炭化種実が入っている。これらについて種実同定を行う。

年代測定用試料は、10点（サンプル3～12）である。各試料には数粒の炭化種実が含まれているが、1試料の中に複数種類が混在しているものもある。そこで、まず種類の同定を行ってから同種のを必要量集め、年代測定試料とする。これらの同定結果については、表3に示す。

2. 分析 方 法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。放射性炭素の半減期はLI BBYの半減期5568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いている。また、北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与え、計算させる。

(2) 種 実 同 定

形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較し、種類を同定し個数を求めた。分析後の植物遺体の一部は、年代測定対象試料とした。分析後の残渣は、常温で乾燥後、種類毎にビンに詰め、乾燥剤を入れて保存する。

3. 結 果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1、2に示す。サンプル3～11では、縄文時代を示す年代値が得られている。しかし、サンプル12では極端に新しく、中近世の年代値が得られている。これらの中で、縄文時代の年代値を示す9点について、それぞれの確率分布曲線を簡易的にあらわしたものが、図1である。暦年較正後の値でみると、大部分が3000～3500cal. BC（約5000～5500BP）の範囲内に収まっているが、サンプル5

表 1. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	種類	方法	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code. No.	推定時期
3 38TA4	コナラ属	AMS法	4,400±40	-23.95±0.62	4,380±30	IAAA-41058	大木 9
4 38TA11	コナラ属	AMS法	4,490±40	-23.82±0.55	4,470±40	IAAA-41059	大木 7 a ~ 9
5 31TS17	コナラ属	AMS法	4,960±40	-27.82±0.65	5,000±30	IAAA-41060	大木 5 ~ 6
6 54T2層	オニグルミ	AMS法	4,270±40	-25.81±0.59	4,290±30	IAAA-41061	大木 7 a
7 54T15層	オニグルミ	AMS法	4,430±40	-22.45±0.73	4,390±30	IAAA-41062	大木 5 ~ 6
8 54T27層	オニグルミ	AMS法	4,620±40	-26.91±0.66	4,650±40	IAAA-41063	大木 6 ~ 7 a
9 54T30層	オニグルミ	AMS法	4,570±40	-24.71±0.59	4,570±40	IAAA-41064	大木 6
10 64TS1-3	不明	AMS法	3,740±40	-25.54±0.77	3,750±30	IAAA-41065	竊取
11 64TS3-15	コナラ属	AMS法	4,590±40	-23.26±0.68	4,560±30	IAAA-41066	大木 7 a
12 31T II層	不明	AMS法	300±30	-23.77±0.59	280±30	IAAA-41067	貝層外資料

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) 推定時期は出土遺物等から判断されたもの

表 2. 暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	Code No.	推定時期
3 38TA4	4,399±34	cal BC 3,083 - cal BC 3,065	cal BP 5,033 - 5,015	0.156	IAAA-41058	大木 9
		cal BC 3,032 - cal BC 3,005	cal BP 4,982 - 4,955	0.222		
		cal BC 2,995 - cal BC 2,923	cal BP 4,945 - 4,873	0.622		
4 38TA11	4,494±37	cal BC 3,334 - cal BC 3,259	cal BP 5,284 - 5,209	0.440	IAAA-41059	大木 7 a ~ 9
		cal BC 3,243 - cal BC 3,211	cal BP 5,193 - 5,161	0.187		
		cal BC 3,190 - cal BC 3,154	cal BP 5,140 - 5,104	0.196		
		cal BC 3,135 - cal BC 3,128	cal BP 5,085 - 5,078	0.035		
		cal BC 3,125 - cal BC 3,100	cal BP 5,075 - 5,050	0.142		
5 31TS17	4,952±35	cal BC 3,768 - cal BC 3,697	cal BP 5,718 - 5,647	0.919	IAAA-41060	大木 5 ~ 6
		cal BC 3,677 - cal BC 3,669	cal BP 5,627 - 5,619	0.081		
6 54T2層	4,274±36	cal BC 2,909 - cal BC 2,880	cal BP 4,859 - 4,830	1.000	IAAA-41061	大木 7 a
7 54T15層	4,433±35	cal BC 3,306 - cal BC 3,300	cal BP 5,256 - 5,250	0.017	IAAA-41062	大木 7 a
		cal BC 3,277 - cal BC 3,274	cal BP 5,227 - 5,224	0.010		
		cal BC 3,264 - cal BC 3,238	cal BP 5,214 - 5,188	0.133		
		cal BC 3,168 - cal BC 3,163	cal BP 5,118 - 5,113	0.020		
		cal BC 3,202 - cal BC 3,014	cal BP 5,052 - 4,964	0.647		
		cal BC 2,981 - cal BC 2,961	cal BP 4,931 - 4,911	0.080		
8 54T27層	4,618±36	cal BC 2,952 - cal BC 2,928	cal BP 4,902 - 4,878	0.093	IAAA-41063	大木 6 ~ 7 a
		cal BC 3,499 - cal BC 3,457	cal BP 5,449 - 5,407	0.643		
		cal BC 3,377 - cal BC 3,353	cal BP 5,327 - 5,303	0.357		
9 54T30層	4,572±36	cal BC 3,485 - cal BC 3,473	cal BP 5,435 - 5,423	0.065	IAAA-41064	大木 6 ~ 7 a
		cal BC 3,370 - cal BC 3,333	cal BP 5,320 - 5,283	0.474		
		cal BC 3,213 - cal BC 3,188	cal BP 5,163 - 5,138	0.210		
10 64TS1-3	3742±36	cal BC 3,155 - cal BC 3,124	cal BP 5,105 - 5,074	0.251	IAAA-41065	竊取
		cal BC 1,877 - cal BC 1,841	cal BP 3,527 - 3,791	0.018		
		cal BC 1,826 - cal BC 1,796	cal BP 3,776 - 3,746	0.018		
11 64TS3-15	4588±35	cal BC 1,780 - cal BC 1,740	cal BP 3,730 - 3,690	0.982	IAAA-41066	大木 6 ~ 7 a
		cal BC 3,494 - cal BC 3,468	cal BP 5,444 - 5,418	0.289		
		cal BC 3,374 - cal BC 3,339	cal BP 5,324 - 5,289	0.553		
12 31T II層	304±29	cal BC 3,207 - cal BC 3,194	cal BP 5,157 - 5,144	0.081	IAAA-41067	貝層外資料
		cal BC 3,150 - cal BC 3,140	cal BP 5,100 - 5,090	0.077		
		cal AD 1,521 - cal AD 1,582	cal BP 429 - 368	0.768		
		cal AD 1,626 - cal AD 1,643	cal BP 324 - 307	0.232		

計算には、RADIO CARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

計算には表に示した丸める前の値を使用している。

付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

推定時期は出土遺物等から判断されたもの

(31TS17)はこれよりやや古く約3700calBC (約5700BP) 前後である。一方、サンプル10 (64TS1-3) はこれらより新しく、約1800calBC (約3700-3800BP) 前後の値である。

(2) 種 実 同 定

結果を表3に示す。年代測定用試料も含めて検出された種類は、コナラ属、クリ、オニグルミの3種類である。いずれの試料も完全に炭化した破片であり、遺存状態は不良である。多量にみられる数ミリ以下の炭化物片は、コナラ属やクリ等の子葉の破片と思われるが、明確な特徴が認められないため、不明炭化物と表示している。また、年代値が極端に新しくったサンプル12の不明炭化物は、大型で内部が発泡していることから、上記のものとは形状が明らかに異なる。以下に、本分析によって得

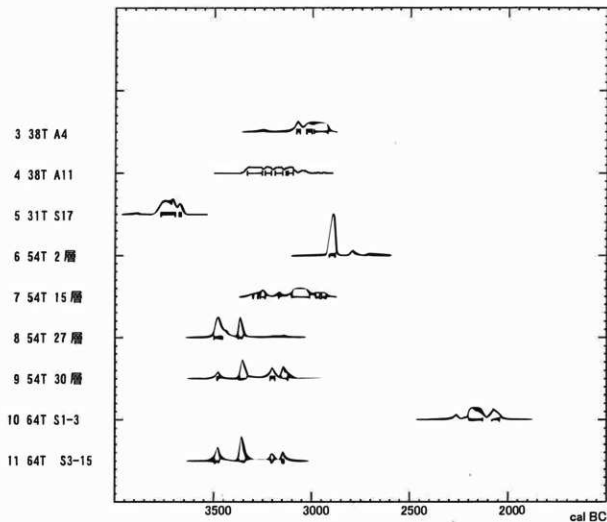


図1. 層年の確率分布曲線

られた種実の形態的特徴などを記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属
核の破片が検出された。炭化しており黒色を呈する。完形ならば広卵形で頂部がやや尖る。径20～30mm程度。破片の大きさ12mm程度。1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

子葉が検出された。炭化しており黒色を呈する。完形のものではなく、全て破片である。推定される大きさは径1.5cm程度。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔(主根)がある。クヌギやカシワのような球状を呈するものや、コナラやミズナラのような楕円形と思われるものがあることから、複数種が含まれていると思われる。全体的に楕円形のものが多かったので、コナラ、ミズナラなどが多いかも知れない。ただし、炭化子葉のみでは、詳細な種類の特定は難しい。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

子葉が検出された。炭化しており黒色を呈する。一側面は偏平で反対面はわずかに丸みがある。子

葉は硬く緻密で、表面には内果皮(渋皮)の圧痕の縦筋が走る。コナラ属とクリの違いは、表面の模様や曲面の形状等で区別可能だが、数mm以下の細片となったものは区別が付きにくい、不明炭化物とした。

4. 考 察

年代測定の結果をみると、1点(サンプル12)を除いて縄文時代の年代値を示す。サンプル12(31T II層)は、貝層外からの出土であることから、後代のものと考えられる。

縄文時代の試料をみると、サンプル5(31TS17)は他に比べて古い年代値が得られている。この試料は大木5～6式期と考えられており、試料は上位貝層から連続して採取されたわけではなく、最下層中にブロック状に検出したものであることから、層位的にも矛盾しない。

大部分の試料は大木6～7a式の範囲に入るが(サンプル4、7、8、9、11)、これらはいずれも3000～3500cal.BCの範囲内に取まっている。近年、国立歴史民族博物館を中心に行われている土器付着炭化物の年代測定結果をみると(小林, 2004など)、大木6式と7a式土器の境界は、3500cal.BC程度であるとされており、今回の結果と比べてみてもほぼ調和的である。

大木9式とされるサンプル3(38TA4)は3000cal.BCであるが、大木6～7a式とされる試料と比較してやや新しい年代値が得られていることから、調和的といえる。また、大木7a式とされるサンプル6(54T2層)は、2900cal.BCであり、近年国立歴史民族博物館を中心に行われている土器付着炭化物の年代測定結果からみると(小林, 2004など)、大木9式の年代に近い。発掘所見ではサンプル6は大木7a式期と考えられていたが、供伴土器が少なく時期決定は難しいともされており、大木9式期にあたる可能性もある。

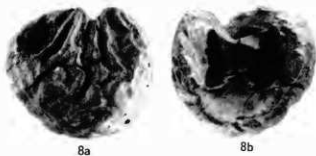
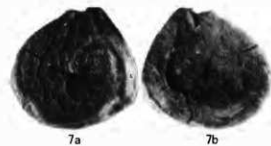
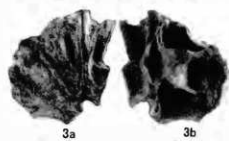
サンプル10(64TS1-3)は綱取式期とされ、年代測定値は1800cal.BC前後の値が得られている。縄文時代後期前葉の年代としては調和的である。

近年AMS法の発達や暦年較正値の普及によって、縄文時代の年代観に関して新知見が得られている。今回は、1桁目を丸めない測定値等も掲載することによって、将来的に暦年較正の再計算等が可能なよう、再現性を高めている。今後暦年較正プログラムの更新等もあると思われるが、年代測定に関する結果が蓄積された時点で再計算を行い比較することによって、より詳細な年代観に関する情報が得られるものと期待される。

引用文献

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
 粉川昭平, 1994, 縄文人の主な植物食糧, 縄文文化の研究2生業(第2版), 加藤晋平, 小林達雄・藤本強編, 雄山閣, 42-49.
 小林謙一, 2004, 縄文社会研究の新視点-炭素14年代測定の利用, 六一書房, 276p.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.
 辻秀子, 1994, 可食植物の概観, 縄文文化の研究2生業(第2版), 加藤晋平, 小林達雄・藤本強編, 雄山閣, 18-41.
 内山隆, 1987, 中間温帯林域における花粉分析学的研究その1東北地方南東部, 日本花粉学会会誌, 33, 111-117.
 内山隆, 1990, 中間温帯林域における花粉分析学的研究その2東北地方北東部, 日本花粉学会会誌, 36, 17-32.
 渡辺誠, 1984, 縄文時代の植物食(増補), 雄山閣, 187p.

図版1 炭化種実



1. コナラ属 子葉(76T;SK118)
3. オニグルミ 核(54T;2層)
5. コナラ属 子葉(76T;SK118)
7. クリ 子葉(76T;SK118)

2. クリ 子葉(76T;SK118)
4. コナラ属 子葉(38T;A2)
6. コナラ属 子葉(76T;SK118)
8. クリ 子葉(76T;SK118)

報告書抄録

ふりがな	うらじりかみづか1						
書名	浦尻貝塚1						
シリーズ名	小高町文化財調査報告						
シリーズ番号	第6集						
編著者名	川田強 佐川久 玉川一郎 樋泉岳二 植月学						
編集機関	福島県相馬郡小高町教育委員会教育総務課						
所在地	〒979-2111 福島県相馬郡小高町仲町二丁目82番地						
発行年月日	2005. 3. 30						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡				
浦尻貝塚	小高町浦尻字南台ほか	07563	52 53 54 114	37° 31' 00"	141° 01' 40"	5,140	道路・ 保存目的範囲 内容確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
浦尻貝塚	貝塚・集落跡・ 古墳・館跡	縄文～近世		貝塚・竪穴住居・ 柱穴・貯蔵穴等	縄文土器・石 器・土偶・骨角 器・貝製品	縄文時代前期～晩期貝塚・ 集落跡	

小高町文化財調査報告書第6集

浦尻貝塚 1

2005年3月 発行

発行 福島県相馬郡小高町教育委員会
福島県相馬郡小高町仲町二丁目82
☎ (0244) 44 - 4114 代

印刷 株式会社 まつざき印刷
福島県双葉郡浪江町高瀬根木内100
☎ (0240) 34 - 6655 代